

# 真景累ヶ淵

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂

青空文庫



今日こんにちより怪談のお話を申し上げますが、怪談ばなしと申すは  
近来大きにすた廃りまして、余り寄席せきで致す者もございません、と申  
すものは、幽霊と云うものは無い、全く神経病だと云うことにな  
りましたから、怪談は開化先生方はお嫌いなさる事でございます。  
それ故に久しく廃つて居りましたが、今日になつて見ると、却かえつ  
て古めかしい方が、耳新しい様に思われます。これはもとより信  
じてお聞き遊ばす事ではございませんから、或あるは流いり違ゆういの怪談ば  
なしがよかろうと云うお勧めにつきまして、名題を真景累ヶ淵と

申し、しもぶさのくにはにゆうむら下総国羽生村と申す処の、累かさねの後日のお話でござい

まするが、これは幽霊が引続いて出まする、気味のわるいお話で  
ございます。なれども是はその昔、幽霊というものが有るとわたくしども私

共も存じておりましたから、何か不意に怪しい物を見ると、おゝ

怖い、変な物、ありやア幽霊じゃアないかと驚きましたが、只今

では幽霊がないものと諦めましたから、頓とんと怖い事はございませ

ん。狐にばかされるといふ事は有る訳のものでないから、神経病、

又天狗に攫さらわれるといふ事も無いからやっぱり神経病と申して、

何なんでも怖いものは皆神経病におっつけてしまいますが、現在開ひらけ

たえらい方で、幽霊は必ず無いものと定めても、鼻の先へ怪しい

ものが出ればアツと云つて腎餅しりもちをつくのは、やっぱり神経が些ち

と怪しいのでございましょう。ところが或る物識ものしりの方は、「イヤ／＼西洋にも幽霊がある、決して無いとは云われぬ、必ず有るに違いない」と仰しやるから、私共は「へエ然そうでございませうか、幽霊は矢張やつぱり有りますかな」と云うと、又外の物識の方は、「ナニ決して無い、幽霊なんというは有る訳のものではない」と仰しやるから、「へエ左様でございませうか、無いという方が本當ででしょう」と何方どちらへも寄らず障らず、只云うなり次第に、無いといえは無い、有るといえは有る、と云つて居れば済みますが、極ごく大昔に断だんけん見けんの論というが有つて、是は今申す哲学という様なもので、此の派の論師の論には、眼に見え無い物は無いに違いない、何んな物でも眼の前に有る物で無ければ有るとは云わせぬ、仮令たとえ

何んな理論が有つても、眼に見えぬ物は無いに違いないという事を説きました。すると其<sup>そこ</sup>処へ釈迦が出て、お前の云うのは間違っている、それに一体無いという方が迷っているのだ、と云い出したから、益々分らなくなりまして、「へエ、それでは有るのが無いので、無いのが有るのですか」と云うと、「イヤ然<sup>そ</sup>うでも無い」と云うので、詰り何方<sup>どちら</sup>か慥<sup>たし</sup>かに分りません。釈迦と云ういたずら者が世<sup>いで</sup>に出て多くの人を迷わする哉<sup>かな</sup>、と申す狂歌も有りまする事で、私共は何方へでも智慧のある方<sup>かた</sup>が仰<sup>ほう</sup>しやる方へ附いて参りまするが、詰り悪い事をせぬ方<sup>かた</sup>には幽霊という物は決してございませんが、人を殺して物を取るといふような悪事をする者には必ず幽霊が有りまする。是が即ち神経病と云つて、自分の幽霊を脊<sup>しよ</sup>負

っいて居るような事を致します。例えば彼奴あいつを殺した時に斯ういう  
 顔付にらをして睨んだが、若しもや己おれを怨うらんで居やアしないか、と云う  
 事が一つ胸むねに有つて胸むねに幽霊をこしらえたら、何を見ても絶えず  
 怪しい姿に見えます。又その執念の深い人は、生きて居ながら幽  
 霊になる事がございます。勿論死んでから出ると定きまつているが、  
 私わたくしは見た事もございませませんが、随分生きながら出る幽霊がござい  
 ます。彼かの執念深いと申すのは恐しいもので、よく婦人が、嫉妬  
 のために、散ちらし髪で仲人の処へ駈けて行く途中ちゆうちゆうで、巡査おまわりに出でつく  
 会わしても、少しも巡査が目に入りませんから、突当るはずみに、  
 巡査の顔にかぶり付くような事もございます。又金を溜めて大事  
 にすると念が残るといふ事もあり、金を取る者へ念が取付いたな

んという事も、よくある話でございませう。

只今の事ではありませんが、昔根津ねづの七軒町しちけんちように皆川宗

悦つと申す針医がございまして、この皆川宗悦が、ポツ／＼と鼠

が巢を造るように蓄めた金で、高利貸を初めたのが病みつきで、

段々少しずつ溜るに従つていよ／＼面白くなりますから、大たいした

金ではありませんが、諸方へ高い利息で貸し付けてございませう。

ところが宗悦は五十の坂を越してから女房に別れ、娘が二人有つ

て、姉は志賀と申して十九歳、妹は園と申して十七歳でございま

すから、其の二人をたのしみに、夜中やちゆうの寒いのもいと厭わず療治をして

はわず僅かの金を取つて参り、其の中から半分は除けて置いて、少し

溜ると是を五両一分で貸そうというのが楽しみでございませう。安あんえ



永二年十二月二十日の事で、空は雪催しで一体に曇り、日光おろしの風は身に染みて寒い日、すると宗悦は何か考えて居りました、

宗 「姉えや、姉えや」

志 「あい……もつと火を入れて上げようかえ」

宗 「ナニ火はもういゝが、追々押詰るから、小日向の方へ催促に行こうと思うのだが、又出て行くのはおつくうだから、牛込の方へ行つて由兵衛さんの処へも顔を出したいし、それから小日向のお屋敷へ行つたり四ツ谷へも廻つたりするから、泊り掛で五六軒遣つて来ようと思う、牛込は少し面倒で、今から行つちやア遅いから明日行く事にしようと思うが、小日向のはずるいから早

く行かないとなあ」

志「でもお父さん<sup>とつ</sup>本当に寒いよ、若し<sup>も</sup>降つて来るといけないから明日早くお出でなさいな」

宗「いや然<sup>そ</sup>うでない、雪は催して居てもなか／＼降らぬから、雪催し<sup>ちつ</sup>で些と寒い<sup>うち</sup>が、降らぬ中に早く行つて来よう、何を出してくん<sup>ん</sup>な、綿の沢山はいつた半<sup>はんてん</sup>纏<sup>ん</sup>を、あれを引掛<sup>ひっか</sup>けて然<sup>ん</sup>うして奴<sup>やつこ</sup>蛇の目の傘を持つて、傘は紐を付けて斜<sup>はす</sup>に脊<sup>しよ</sup>負<sup>ふ</sup>つて行くようにしてくんな、ひよつと降ると困るから、なに頭巾をかぶれば寒くないよ」

志「だけれども今日は大層遅いから」

宗「いゝえそうでは無い」

と云うと妹のお園が、

園「お父さんとつ早く帰っておくれ、本当に寒いから、遅いと心配だから」

宗「なに心配はない、お土産みやげを買つて来る」

と云つて出ますと、所謂いわゆる虫が知らせると云うのか、宗悦の

後影うしろかげを見送ります。宗悦は前鼻緒まえばなおのゆるんだ下駄はを穿いて

ガラ／＼出て参りまして、牛込の懇意の家うちへ一二軒寄つて、すこ

し遅くはなりましたが、小日向服部坂上はつとりさかうえの深見新左衛門ふかみしんざえもんと申

すお屋敷へ廻つて参ります。この深見新左衛門こぶしというのは、小普

請組んぐみで、奉公人も少ない、至つて貧乏なお屋敷で、殿様は毎日御

酒ばかりあがつて居るから、畳などは縁へりがズタ／＼になつて居り、

畳はたゞみばかりでたは無いような訳でございます。

宗「お頼み申します〜」

新「おい誰たれか取次が有りますぜ、奥方、取次がありますよ」

奥「どうれ」

と云うので、奉公人が少ないから奥様が取次をなさる。

二

奥「おや、よくお出でだ、さア上あがんな、久しくお出でなかつたねえ」

宗「へエこれは奥様お出向いで恐れ入ります」

奥「さアお上り、丁度殿様もお在宅いでで、今御酒をあがつてる、

さア通りな、燈光あかりを出しても無駄だから手を取ろう、さア」

宗「これは恐入ります、何か足に引掛ひっかりましたから一寸ちよつと」

奥「なにね畳がズタ／＼になつてるから足に引掛ひっかるのだよ……

殿様宗悦が」

新「いや是は何どうも珍らしい、よく来た、誠に久しく逢わなか

つたな、この寒いのによく尋ねてくれた」

宗「へエ殿様御機嫌好よう、誠に其のちの後は御無沙汰を致しまして

ございます、何うも追々げっぱく月迫致しまして、お寒さが強うござい

ますが何もお変りもございませんで、宗悦身に取りまして恐悦に

存じます」

新「先頃は折角尋ねてくれた処が生憎不在で逢わなかつたが何うも遠いからのう、なか／＼尋ねるたつて容易でない、よくそれでも心に掛けて尋ねてくれた、余り寒いから今一人で一杯始めて相手欲しやと思つて居た処、遠慮は入らぬ、別懇の間ださア」

宗「へエ有難い事で、家内のお兼が御奉公を致した縁合で、盲人が上りましても、直々殿様がお逢い遊ばして下さると云うのは、誠に有難いことでございますが、へエ、なに何う致しまして」

奥「宗悦やお茶を此処に置くよ」

宗「へエ是は何うも恐れ入ります」

新「奥方宗悦が久振で来たから何でも有合で一つ、随分

飲めるから飲まして遣りましよう、エ、奥方勘藏は居らぬかえ、  
 エ、ナニ何か一寸、少しは有ろう、まあ、宗悦此方へ来な、却  
 つてするめ鯛ぐらいの方が好い、随分酔うものだよ、さアずっと側へ来  
 な、奥方頼みます」

奥「宗悦ゆるりと」

と云うので、別に奉公人が有りませんから、奥様が台所で拵え  
 るのでございます。

新「宗悦よく来た、さア一つ」

宗「へエ是は恐れ入ります、頂戴致します、へエもう…おツと  
 溢れこぼます」

新「これは感心、何うもその猪口の中へ指を突込んで加減をは

かると云うのは其<sup>そこ</sup>処は盲人でも感服なもの、まア宗悦よく来たな、何<sup>なん</sup>と心得て来た」

宗「へエ何と云つて殿様申し上げるのはお気の毒ですが、先年御用達<sup>ごようだ</sup>つて置いたあの金子の事でございます、外<sup>ほか</sup>とは違ひまして、兼が御奉公を致しましたお屋敷の事でございますから、外よりは利分<sup>りぶん</sup>をお廉<sup>やす</sup>く致しまして、十五両一分で御用達つたのは僅<sup>わず</sup>か三十金でございますが、あれ切り何<sup>ぎ</sup>とも御沙汰がございませんから、再度参りました所が、何<sup>なにぶん</sup>分御不都合の御様子でございますから遠慮致して居<sup>お</sup>るうちに、もう丁度足掛け三年になります、誠に今年は不手廻<sup>ふてまわ</sup>りで融通が悪うございます、へエ余り延引になりますから、へエ何<sup>ど</sup>うか今<sup>こんにち</sup>日は御返金を願いたく出ましてござ



います、へエ何うか今日は是非半金でも戴きませんでは誠に困りますから」

新「そりやア何うもいかん、誠に不都合だがのう、当家も続いて不如意でのう、何うも返したくは心得て居るが、種々その何うも入用が有つて何分差支えるからもうちつと待てえ」

宗「殿様え、貴方はいつ上つても都合が悪いから待てと仰しやいますかね、何時上れば御返金になるという事を確かり伺いませんでは困ります、へエ慥かに何時幾日と仰しやいませんでは、私は斯ういう不自由な身体で根津から小日向まで、杖を引張つて山坂を越して来るのですから、只出来ぬとばかり仰しやつては困ります。三年越しになつてもまだ出来ぬと云うのは、余り馬鹿々

々しい、今日きょうは是非半分でも頂戴して帰らんければ帰られません、  
何なんぼ何なんでも余あんなり我儘あんなでげすからなア」

新「我儘と云つても返せぬから致し方がない、エ、いくら振ろうとしても無い袖は振れぬという譬たとえの通りで、返せぬというものを無理に取ろうという道理はあるまい、返せなければ如何いかいたした」

宗「返せぬと仰しやるが、人の物を借りて返さぬという事はありません、天下の直じき参さんの方が盲人の金を借りて居て出来ないから返せぬと仰しやつては甚はなはだ迷惑を致します、そのうえ義理が重なつて居りますから遠慮して催促も致しません、大抵よつきし四月縛ばりか長くても五月いつつきという所を、べん／＼と廉やすい利ごようで御用達申し

て置いたのでげすから、へエ何うかこんにち今日御返金を願います、馬鹿々々しい、幾度来たつて果しはてが付きませんからなア」

新「これ、何だなん大声を致すな、何だ、瘦せても枯れても天下の直參が、長らく奉公をした縁合を以て、此の通り直々に目通りを許して、盃さかずきでも取らすわけだから、少しは遠慮という事が無ければならぬ、然るしかを何だ、余り馬鹿々々しいとは何うどいう主意を以て斯かくの如く悪口あっこうを申すか、この呆漢たわけめ、何だ、無礼の事を申さば切捨てたつてもよい訳だ」

宗「やア是は篋べらぼう棒らしゆうございます、こりやアきつと承りましょう、余りあんまと云えば馬鹿々々しい、何なんでげすか、金を借りて置きながら催促に来ると、切捨てゝもよいと仰しやるか、又金が

返せぬから斬つて仕舞うとは、余り理不尽じゃありませんか、  
 いくら旗はたもと下すちようにんでも素町人でも、理に二つは有りません、さア切  
 るなら斬つて見ろ、旗下も犬の糞くそもあるものか」

と宗悦たけが猛り立たけつて突つかゝると、此方こちらは元来御酒の上が悪い  
 から、

新「ナニ不埒ふらちな事を」

と立上ろうとして、よろける途端に刀かたな掛かけの刀に手がかゝる  
 と、切る気ではありませんが、無我夢中でスラリと引抜き、

新「この糞たわけめが」

と浴せかけましたから、肩先深く切込みました。

新左衛門は少しもそれが目に入らぬと見えて、

新「何だこのたわけめ、これ此処を何処と心得て居る、天下の直参の宅へ参つて何だ此の馬鹿者め、奥方、宗悦が飲酔つて参つて兎や角う申して困るから歸して下さい、よう奥方」

と云われて奥方は少しも御存じごさいませんから手燭を点けて殿様の処へ行つて見ると、腕は冴え刃物は利し、サツという機に肩から乳の辺まで斬込まれて居る死骸を見て、奥方は只べた／＼と畳の上ですわつて、

奥「殿様、貴方を遊ばしたのでございます、仮令宗悦が何の

様な悪い事がありましたしても別懇な間でございませぬのに、何でお手打に遊ばした、え、殿様」

新「ナニたゞ背打に」

と云つて、見ると、持つて居る一刀が真赤に鮮血に染みて居るので、ハツとお驚きになると酔が少し醒めまして、

新「奥方心配せんでも宜しい、何も驚く事はありません、宗悦が無礼を云い悪口たらしく申して捨置き難いから、一打に致したのであるから、其の趣を一寸頭へ届けければ宜しい」

ナ二人を殺してよい事があるものか、とは云うものゝ、此の事が表向になれば家にも障ると思ひますから、自身に宗悦の死骸を油紙あぶらかみに包んで、すっぽり封印を付けて居りますると、何にも

知りませんから田舎者の下男が、

男「へエ葛籠つづらを買つて参りました」

新「何だなん」

男「へエ只今歸りました」

新「ウム三右衛門さんえもんか、さア此処こゝへ這入れ」

三「へエ、お申付の葛籠とを買つて参りましたが何方どちらへ持つて参ります」

新「あゝこれ三右衛門、幸い貴様に頼むがな実は貴様も存じて居る通り、宗悦から少しばかり借りて居おる、所が其の金の催促おに來て、今日は出来ぬと云つたら不埒な悪口を云うから、捨置き難いによつて一刀両断に斬つたのだ」

三「へエ、それは何うも驚きました」

新「叱つ、何も仔細はない、頭へ届けさえすれば仔細はない事だが、段々物入りが続いて居る上に又物入りでは実に迷惑を致す、殊には一時面倒と云うのは、もう追々月迫致して居ると云う訳で、手前は長く正当に勤めてくれたから誠に暇を出すのも厭だけれども、何うか此の死骸を、人知れず、丁度宜しい其の葛籠へ入れて何処かへ棄て、然うして貴様は在処の下総へ帰ってくれよ」

三「へエ、誠に、それはまあ困ります」

新「困るつたつて、多分に手当を遣りたいが、何うも多分にはないから十金遣ろうが、決して口外をしてはならぬぞ、若し口外すると、己の懐から十両貰った廉が有るから、貴様も同罪になる



から然う思つて居ろ、万一この事が漏れたら貴様の口から漏れたものと思うから、何処までも草を分けて尋ね出しても手打にせんければならぬ」

三「へエ棄てまするのはそれは棄ても致しましょうし、又人に知れぬ様にも致しますが、わたくし私は臆病で、仏の入った葛籠を、一人で脊負しよつて行くのは気味が悪うございますから、たれ誰かと差担さしにないで」

新「万一にも此の事が世間へ流布してはならぬから貴様に頼むのだ、若し脊負えぬと云えばよんどころない貴様も斬らんければならぬ」

三「エ、脊負いますく」

と云うので十兩貰いました。只今では何なんでもございませませんが、其の頃十兩と申すと中々大たいした金でございますから、死人を脊負つて三右衛門がこの屋敷を出るは出ましたが、何どうしても是を棄てる事が出来ません、と申すは、臆病でございますから少し淋しい処を歩くと云うと、死人が脊中に有る事を思い出して身の毛が立つ程こわいから、なるたけ賑にぎやかな処ばかり歩いて居るから、何うしても棄てる事が出来ません、其の中うちに何処どこへ棄てたか葛籠を棄て、三右衛門は下総の在所へ帰つて仕舞うと、根津七軒町の喜連川きつれがわ様のお屋敷の手前に、秋葉あきはの原があつて、その原の側わきに自身番がござります。それから附いて廻つて四五間参りますると、幅広ろびの路次ろじがありまして、その裏すまに住つて居りますのは上方かみがた

の人でござりますが、此の人は長屋中でも狡猾こうかつ者の大慾張だいいよくばりと云うくらいの人、此の上方者が家主いえぬしの処へ参りまして、

上「ハイ今日は、お早うござります」

家主女房「おや、お出いでなさい何か御用かえ」

上「へエ今日は、旦那はんはお留守でござりますか、へエ、それは何方どちらへ、左様でござりますか、実はなア私わたくしは昨夜盗賊に出逢あいましたによつて、お届とどけをしようと思いましたが、何なにぶん分届ぶんをするのは心配でナア、世間へ知れてはよくあるまいから、どうもナア、その荷物が出さえすればよいと思つて居りました、実は私の嬢かゝいもとの妹がお屋敷奉公をしたところが、奥さんの氣に入られて、お暇ひまを戴く時に途方もない結構な物を品々戴いて、葛籠くわらごに一杯ある

を、何処どこか行く処の定まるまで預かつてくれえというのを預けられて、家うちに置くと、盗賊に出逢うて、その葛籠くわろうが無くなつたによつて、私はえらい心配を致しまして、もし、これからその義理ある妹へ何うしようと、実は嬬はなに相談して居りますると、秋葉あきはの傍わきに葛籠を捨てゝ有りますから、あれを引取つて参りとうござりませんが、旦那はんが居やはらんければ、引取られぬでござりましようか」

女房「おやく々そ然うかえ、それじゃアね、亭主うちは居りませんが、  
總助そうすけさんに頼んで引取つてお出いでなさい」

上「ハイ有難うござります、それでは總助はんに頼んで引取りを入れまして」

と横着者で、これから總助と云う町代ちようだいを頼んで、引取りを入れて、とうく脊負つて歸つて来ました。

#### 四

上「へエ只今總助はんにお頼み申して此の通り脊負せおうて参りました」

家主女房「おや大層立派な葛籠ですねえ」

上「へエ、これが無のうなつてはならんと大層心配して居りました、へエ有難うござります」

女房「何どうして其そこ処に棄てゝ行つたのでしよう」

上「それは私が不動の鉄縛かなしばりと云うのを遣りましたによつて、

身体が痺れて動かれないので、置いて行つたのでござりましよ、

エ、ヘイ誠に有難いもので、旦那がお帰りになつたら宜しゆう

お礼の処を願います、へエ左様なら」

とこれから路次の角から四軒目しけんめに住んで居りますから、水口みずぐち

の処を明けて、

上「おい一寸手を掛けてくれえ」

妻「あい、おや立派な葛籠じやアないか」

上「どうじゃ、ちゃんと引取りを入れて脊負せおうて来たのじやか

ら、何処どこからも尻も宮も来きやへん、ヤ何なんでもこれは屋敷から盗ん

で来た物に違いないが、屋敷で取られたと云うては、家事不取締

になるによつて容易に届けまへん、又置いていった泥坊は私の葛籠だと云つて訴える事は出来まへん、して見ればどこからも尻宮の来る氣遣きづかいはないによつて、私が引取りを入れて引取つたのじや、中にはえらい金目の縫模ぬいもよう様や紋付もあるか知れんから、何どのよう様にも売うりさばき捌さが付いたら、多分の金を持つて、ずっと上方へ二人で走つてしまえば決して知れる氣遣はなしじや」

妻「そうかえ、まあ一寸明けて御覽な」

上「それでも葛籠を明けて中から出る品物がえらい紋付や熨斗のし目めや縫ぬいの襦うちかけ襦うちかけでもあると、斯こう云う貧乏長屋に有る物でないと言いう処ところから、偶ひよつと然として足を附つけられてはならんから、夜よさり夜中に窃そつと明わぬしけて汝わぬしと二人で代しろもの物を分えけるが宜えワ」

妻「然そうだねえ嬉しいこと、お屋敷から出た物じやア其そん様な物はないか知らぬが、若もし花色裏の着物が有つたら一つ取つて置いてお呉れよ」

上「それは取つて置くとも」

妻「若しちよいと私に挿させそうな櫛笄くしづがひがあつたら」

上「それも承知や」

妻「漸よう々運が向いて来たねえ」

上「まあ酒を買こうて」

と云うので是から樂たのしみ酒みざけを飲んで喜んで寝ます。すると一

番奥の長屋に一人者があつて其そこ処に一人の食いそ客ろうが居りましたが、これは其の頃遊あそび人にんと云つて天下禁制の裸くすぶで燻くすぶつて居る奴、



○「おい甚太く」

甚「ア、ア、ア、ハア、ン、ア、アもう食えねえ」

○「おい寝惚けちやアいけねえ、おい、起きねえか、エ、静かにしろ、もう時刻は好いぜ」

甚「何を」

○「何をじやアねえ忘れちやア仕様がねえなア、だから獣もんじ肉いを奢おごったじやアねえか」

甚「彼の肉あを食うと綿衣どてら一枚違いちめえうというから半纏はんでんを質ちに置いてしまったが、オウ、滅法寒めつぽうくなつたから当てにやアならねえぜ、本当に冗談じやうたんじやアねえ」

○「おい上方者の葛籠くわらごを盗ぬすむんだぜ」

甚「ウン、違えねえ、そうだっけ、忘れてしまった、コウ彼奴あいつア太え奴ふてだなア、畜生誰も引取人ひきとりてが無えと思つてずうくしく引取りやアがつて、中の代物を捌さばいて好いいい正月をしようと言う了簡だが、本当に何処どこまで太えか知れねえなア」

○「ウン、彼奴あいつは今丁度食くらい酔つて寝て居やアがる中うちに窃そつと持つて来て中を発あばいて遣やらうじやアねえか、後で氣が附けんいて騒さわいだつてもとく彼奴の物でねえから、自分の身が劍けん呑のんで大きく云う事ことア出来ねえのさ」

甚「だがひよつと目を覚さましてキヤアバアと云つた時にやア一つ長屋の者で面つらを知つてるぜ」

○「ナニそりやア真ま黒くろに面を塗つて頬ほ冠かぶりをしてナ、丹波

の国から生獲いけどりましたと云う荒熊あらくまの様な妙な面あらくまになつて行きや  
 ア仮令面たとえを見られたつて分りやアしねえから、手前てまえと二人で面を  
 塗つて行つて取つて遣ろう」

甚「こりやア宜いいや、サア遣ろう、墨を塗るかえ」

○「墨かの欠ぐかけれえは有るけれども墨すを摺すつてちやア遅いから鍋な  
 煤べずみか何か塗つて行こう」

甚「そりやア宜よかろう、何なんだつて分りやアしねえ」

○「釜の下へ手を突込んで釜すの煤すを塗ろう、ナニ知れやアしね  
 え」

と云うので釜の煤を真黒に塗つて、すつとこ冠かぶりを致しまして、

○「何どうだ是じやア分るめえ」

甚「ウン」

○「ハ、ハ、妙な面だぜ」

甚「オイ、笑いなさんな、気味が悪いや、目がピカ、光つて歯が白くって何とも云えねえ面だぜ」

○「ナニ手前だつて然うだあナ」

とこれから窃と出掛けて上方者の家の水口の戸を明けてとう／＼盗んで来ました。人が取つたのを又盗み出すと云う太い奴でございます。

甚「コウ、グウ、寝て居やアがったなア、可笑しいじゃアねえか、寝て居る面は余り慾張った面でも無えぜ」

○「オイ、表を締めねえ、人が見るとばつがわりいからよ、ソ

レ行燈あんどんを其方そっちへ遣つちまつちやア見る事が出来やあしねえ、本  
 当あたにこんな金目の物を一いちど時ときに取とつた程たの楽しみな事ことアねえぜ、コウ  
 余あんまり明ある過あぎらア、行燈へ何か掛かけねえ」

甚「何を掛かけよう」

○「着物なでも何なんでも宜いいから早く掛かけやナ」

甚「着物なだつて着る物がありやア何も心配しやアしねえ」

○「何なんでも薄うツ暗くなるようにその檻ぼ褌ろを引掛ひけろ、何なんでも暗くせえなれば宜いいや、オ、封印ありが附ついてらア、エ、面おもを出だすな、  
 手て前めは食い客そだから主人あんが見みてそれから後あで見みやアがれ」

甚「ウン、十二食客ろでも主人あんでも露ろ頭けんをして縛ばられるのは同罪

だよ」

○「そりやア云わなくつても定きまつてるわ」

と云うので是から封印を切つて、

○「何だか暗くつて知れねえ」

甚「どれ見せや」

○「しッしッ」

## 五

甚「兄あにい何を考かんえてるんだ」

○「何どうも妙だなア、中あに油紙あぶらつかみがあるぜ」

甚「ナニ、油紙がある、そりやア模様物や友ゆう禅ぜんの染物へえが入いつ

てるから雨が掛つてもいゝ様に手当がして有んだ<sup>ある</sup>

○「敷紙が二重になつてゐるぜ」

と云いながら、四方が油紙の掛つて居る此方<sup>こちら</sup>の片隅を明けて楽みそうに手を入ると、グニヤリ、

○「おや」

甚「何だ<sup>なん</sup>く」

○「変だなア」

甚「何だえ」

○「ふん、どうも変だ」

甚「然<sup>そ</sup>う一人でぐずぐず<sup>ちつ</sup>楽まずに些と見せやな」

○「エ、黙つてろ、何だか坊主の天窓<sup>あたま</sup>みた様な物があるぞ」

甚「ウン、ナニ些とも驚く事アねえ、結構じやアねえか」

○「何が結構だ」

甚「そりやアおめえ踊おどりの衣裳だろう、御殿の狂言の衣裳の上に

坊主の髷かつらが載かつてゐるんだ、それをお前めえが押えたんだアナ」

○「でも芝居で遣う坊主の髷はすべくしてゐるが、此の坊主の髷はざらくしてゐるぜ」

甚「ナニざらくしてゐるならもじがふらと云うのがある、きつとそれだろう」

○「ウン然そうか」

甚「だから己おれに見せやと云うんだ」

○「でも坊主の天窗の有る道理はねえからなア、まアく待ち



ねえ己が見るから」

とまた二度目に手を入れると今度はヒヤリ、

○「ウワ、ウワ、ウワ」

甚「おい何<sup>な</sup>んだ」

○「何<sup>ど</sup>うも変だよ冷てえ人間の面アみた様な物がある」

甚「ナニ些とも驚くこたアねえやア、二十五座の衣裳で面<sup>めん</sup>が這<sup>へ</sup>入<sup>え</sup>つてるんだ、そりやア大變に価値<sup>ねうち</sup>のある物で、一個<sup>ひとつ</sup>でもつて二百両ぐれえのがあるよ」

○「ウン、二十五座の面か」

甚「兄い、だから己に見せやと云うんだ」

と云われたから、今度は思い切つて手を突込むとグシヤリ、

○「ウワア」

と云うなり土間へ飛下りて無茶苦茶にしんばりを外して戸外へ  
逃出しますから、

甚「オイ兄い、何処どこへ行く、人に相談もしねえで、無暗むやみに驚い  
て逃出しやアがる、此の金目かねめのある物を知らずに」

と手を入れて見ると驚いたの驚かないの、

甚「ウア、」

と此奴こいつも同じく戸外へ逃出しました。すると其の途端に上方者  
が目を覚して、

上「さアお鶴つるおき起んかえ時刻は宜えいがナ、起んか  
と云うとお鶴と云う女房が、

鶴「お止しよ眠いよ」

上「おい、これ、起んかえ」

鶴「お止しよ、酒を飲むと本当にひちつくどい、  
きしよく 気色が悪いから厭いやだよ、些ちつとお慎しみ」

上「何をいうのじや葛籠を」

鶴「葛籠、おや然そう」

と慾張つて居りますから直すぐに目を覚して、

鶴「おや無いよ、葛籠が無いじやアないか」

上「ア、彼のあ水口が明いとるのは泥坊が這入つたのじや、お長

屋の衆しゅく」

と唼どな鳴りますから、長屋の者は何事か分りませんが、  
ぶらぢようちん 吊提燈

を点<sup>つ</sup>けて出て参りますと、

上「貴方御存じか知りまへんが最前總助はんを頼んで引取りました葛籠を盗まれました、あの葛籠は妹<sup>いと</sup>から預かつて置いた大事の物で、盜賊に取られたのを漸<sup>ようよ</sup>う取り遂<sup>おお</sup>せたら又泥坊が這入つて持つて行き<sup>ゆ</sup>ましたによつて、同じお長屋の衆は掛<sup>か</sup>り合<sup>あい</sup>で御座りますナア」

△「ナニ掛り合の訳は有りません、路次の締りは固いのだがねえ、でも源<sup>げん</sup>八<sup>ぱち</sup>さん葛籠を取られたと云うのだがどうしましょう」

源「どうしまししょうつて彼奴<sup>あいつ</sup>は長屋の交<sup>つき</sup>際<sup>あい</sup>が悪くつて、此方<sup>こつち</sup>から物を遣<sup>む</sup>つても向<sup>む</sup>から返<sup>こ</sup>したこたア無いくらいだから、其<sup>そん</sup>様<sup>な</sup>に氣を揉<sup>も</sup>むこたア無いけれども、仕方がねえから大屋さんを起すが

「宜い」

● 「アノ奥の一人者の内に食客が居るから、彼処へ行って彼の人に  
行つて貰うが宜うございましょう」

△ 「じゃア連れて来ましょう」

と吊提燈を提げて奥へ行くと、戸袋の脇から真黒な面で目ばかり  
ピカ／＼光る奴が二人這出したから、

△ 「ウワア、何だこれおどかしちやアいけない」

と云う中に、二人とも一生懸命で路次の戸を打碎して逃  
しました。

△ 「ア、何だ、本当にモウ何うも胸を痛くした、こりやア彼奴  
が泥坊だ、私は大きな犬が出たと思つて怖りした、あゝこれだ／＼

「これだから一人者を置いてはならないと云うのだが、家主いえぬしが人が善いいから、追出すと意趣返しをすると云うので怖がつて置くのだが宜よくない、此処こゝにちゃんと葛籠があるわ、上方者だと思つて馬鹿にして凶々しい奴だ、一つ長屋に居て斯こんな事をするのは頭隠して尻隠さず、葛籠を置いて行くから直ぐに知れて仕舞うんだ、何か代物しろものが残つて居るかも知れねえから見てやろう、ウワアお長屋の衆」

と云うから驚おどいて外ほかの者が来て見ると、葛籠が有るから、

●「お、彼処あそこに葛籠がある、好いい塩梅あんばいだ、おや、中に、ウワア、お長屋の衆」

と来る奴もく、皆お長屋の衆と云う大騒ぎ。すると二つ長屋の

事でございますから義理合ぎりあいに宗悦の娘お園が来て見ると恟びつくりして、園「是は私のお父とつさんの死骸何どうしたのでございましょう、昨き日家のうちを出て帰りませんから心配して居りましたが」

△「イヤそれは何どうもとんだ事」

というので是から訴えになりましたが、葛籠しるしに記号も無い事でございまして頓とんと何者の仕業しわざとも知れず、大屋さんが親切に世話を致しまして、谷中やなかにつぼり日暮里せいうんじの青雲寺へ野辺送りを致しました。これが怪談の発端でござります。

## 六

引続きまして申上げます。深見新左衛門が宗悦を殺しました事は誰有<sup>たれ</sup>つて知る者はござりません。葛籠に記号<sup>しるし</sup>もござりませんから、只つまらないのは盲人宗悦で、娘二人はいかにも愁傷致しまして泣いて居る様子が憫然<sup>ふびん</sup>だと云つて、長屋の者が親切に世話を致します混雑の紛れに逃げました賭博<sup>ばくちうち</sup>打二人は、遂に足が付きました直<sup>すぐ</sup>に繩に掛つて引かれました御町<sup>おまち</sup>の調べになり、賭博<sup>ばくち</sup>兇<sup>よう</sup>状<sup>じよう</sup>と強<sup>ゆすり</sup>迫<sup>りき</sup>兇<sup>よう</sup>状<sup>じよう</sup>がありました故其の者は二人とも佃<sup>つく</sup>島<sup>だじま</sup>へ徒刑になりました。上方者は自分の物だと言つて他人の物を引入れました廉<sup>かど</sup>は重罪でございますけれども格別のお慈悲を以て所払いを仰せ付けられました其<sup>こと</sup>の一件は相済みましたが、深見新左衛門の奥方は、あゝ宗悦は憫然<sup>かわいそう</sup>な事をした、何<sup>ど</sup>うも実に情ないお



殿様がお手打に遊ばさないでも宜いものを、別に怨がある訳でもないに、御酒の上とは云いながら気の毒な事をしたと絶えず奥方が思います処から、所謂只今申す神経病で、何となく塞いで少しも気が機みません事でございます。翌年になりました安永三年二月あたりから奥方がぶら／＼塩梅が悪くなり、乳が出なくなりましたから、門番の勘藏がとつて二歳になる新吉様と云う御次男を自分の懐へ入れて前町へ乳を貰いに往きます。と云うものは乳母を置く程の手当がない程に窮して居るお屋敷、手が足りないからと云うので、市ヶ谷に一刀流の劍術の先生が有りました、後に仙台侯の御抱えになりました黒坂一齋と云う先生の処に、内弟子に参つて居る惣領の新五郎と云う者を家へ呼寄せて、

病人の撫なで擦さすりをさせたり、或あるは藥其いの外ほかの手当もさせます。  
 其の頃新五郎は年は十九歳でございませうが、よく母の枕まくら辺べに附  
 添つつて親切に看病を致しますなれども、小児こどもはあり手が足りませ  
 ん。殿様はやつぱり相変らず寢酒を飲んで、奥方うなが呻うなると、

新「そうヒイ〜呻うなつてはいけません」

などと酔よつた紛まれにわからんことを仰うしやる。手少てなで困こると

云いつて、中なか働はたらきの女を置まきました。是こは深ふか川がわ網あ打み場ちばの者はで

お熊くまと云いう、年二十九歳で、美よ女いおんなではないが、色いろの白しろいぽつ

ちやりした少まし丸まる形がたちのまことに氣きの利りいた、苦く勞らう人ひとの果はと見み

え、万ま事じ届ときます。殿と様さまの御ご酒しゆの相あ手てをすれば、

新「熊くまが酌しやくをすれば旨旨い」

などと酔つた紛れに冗談を仰しやると、此方こちらはなか／＼それ者しやの果と見えてとう／＼殿様にしなだれ寄りましてお手が付く。表おもてむき

向 届けは出来ませんがお妾と成つて居る。するともと／＼狡猾な女でございますから、奥方の纒訴ざんそを致し、又若様の纒訴を致すので、何となく斯こう家がもめます。いくら言つても殿様はお熊にまかれて、煩わづらつて居る奥様を非道な事をしてぶち打ちようちやく擲ちやくを致します。もう十九にもなる若様をも煙管きせるを持つて打ぶつ様な事でございませうから、

新五郎 「あゝ親父おやじは愚ぐな者である、こんな処とてには迎むかも出世は出来ぬ」

と若氣の至りで新五郎と云う惣領の若様はふいと家出を致しま

すると、お熊はもう此の上は奥様さえ死ねば自分が十分此処こゝの奥様になれると思ひ、

熊「わたしは何どうも懐妊した様でございます、四月から見るものを見ませぬ酸すツぱい物が食べたい」

何なんのと云うから殿様は猶なほさら更でれすけにおなり遊ばします。追

々其の年も冬になりました、十一月十二月となりますと、奥様の御病氣だんくが漸々悪くなり、その上寒さになりましたからキヤ／＼さしこみが起り、またお熊は、漸々お腹が大きくなって身体が思う様にき／＼ませんと云つて、勝手に寝てばかり居るので、殿様は奥方に薬一服も煎せんじて飲ませません。只勘藏ばかりあてにして、

新「これ／＼勘藏」

勘「へエ、殿様貴方御酒ばかり召上つて居て何うも困りますな  
 了奥様は御不快で余程御様子が悪いし、殊ことには又お熊様さんはあゝや  
 つて懐妊だからごろ／＼して居り、折々おり／＼奥様は差込むと仰し  
 やるから、少しは手伝つて頂きませんじゃア、手が足りません、  
 私わたくしは若様のお乳を貰いに往いくにも困ります」

新「困つても仕方がない、何か、さしこみには近辺はりいの鍼医を呼  
 べ、鍼医を」

と云うと、丁度戸外おもてにピー、と按摩あんまの笛、

新「おゝゝ、丁度按摩が通るようだ、素人療治しろうとではいかんか  
 ら彼れあを呼べゝゝ」

勘「へエ」

と按摩を呼入れて見ると、怪し気げなる黒の羽織を着て、

按摩「宜よろしゆうわたくし私が鍼をいたしましょう、鍼はお癩しやくき気には宜

しゆうございます」

というので鍼を致しますと、

奥方「誠に好よい心持に治まりがついたから何卒どうぞ明日の晩も来て

呉れ」

と戸外を通る揉療治ではありますが、一いつとき時しの凌しのぎに其の後のち五日

ばかり続いて参ります。すると一番いちばんまいの日に一本打ちました

鍼が、何どう云うことかひどく痛いことごとでございましたが、是は鍼

に動ずると云うので、

奥方「あゝ痛いた、アいたタ」

按摩「大層お痛みでございますか」

奥方「はいあゝ甚くひど痛い、今迄斯こんなに痛いと思つた事は無かつたが、誠に此の鳩尾みずおちの所に打たれたのが立割られたようで」

按摩「ナニそれはお動じでございます、鍼きぎが験まましたのでございますから御心配はございません、イエまア又明晩も参りましようか」

奥方「はい、もう二三日鍼やは止めましよう、鍼はひどく痛いから」

按摩「直しき癒なおります、鍼が折れ込んだ訳でもないのです、少しお動じですからナ、左様なら御機嫌よろしゅう」

と僅わずの療治代を貰つて帰りました。すると奥方は鍼を致した鳩

尾の所が段々痛み出し、遂には爛れて鍼を打った口からジクくと水が出るようで、猶更苦しみが増します。

## 七

新左衛門様は立腹して、

新「どうも怪しからん鍼医だ、鍼を打つてその穴から水が出る  
なんという事は無い訳で、堀抜井戸じゃア有るまいし、痴呆た話  
だ、全体何う云うものかあれ限り来ませんナ」

勘「奥方がもう来ないで宜いと仰しやいましたから」

新「間が悪いから来ないに違いない、不埒至極な奴だ、今夜で



も見たら呼べ」

と云われたから待つて居りましたが、それぎり鍼医は参りませ  
ん。すると十二月の二十日の夜よに、ピーーく、と戸外おもてを通りま  
す。

新「ア、あれく、笛が聞える、あれを呼べ、勘藏呼んで来い」  
勘「ハイ」

と駈出して按摩の手を取つて連れて来て見ると、前の按摩とは  
違い、年をとつて瘦やせこけた按摩。

新「何だなんこれじゃア有るまい、勘藏違つて居おるぞ」

按摩「へエお療治を致しますか」

新「何だてまえ汝ではなかつた、違つた」

按摩「左様で、それはお生憎様あいにくでございませうが何卒どうぞお療治を」

新「これ〜、貴様鍼をいたすか」

按摩「わたくしにわかめくら私は俄盲人でございまして鍼は出来ません」

新「じゃア致いたしかた方が無い、按腹あんぶくは」

按摩「療治も馴れません事で中々上手に揉みます事は出来ませんが、丈夫な方ならば少しは揉めます」

新「何の事だ病人を揉む事はいかぬか、それは何にもならぬナ、でも呼んだものだから、勘藏、これ、何処どこへ行つて居るかナ、じやア、まア折角呼んだものだからおれの肩を少し揉め」

按摩「へ工誠に馴れませんから、何処が悪いと仰しやつて下さい、けいらく経絡が分りませんから、こゝを揉めと仰しやれば揉みます」

と後へ廻つて探り療治を致しまするうち、奥方が側に居て、

奥方「ア、痛、ア、痛」

新「そう何うもヒイ／＼云つては困りますね、お前我慢が出来ませんか、武士の家に生れた者にも似合わぬ、痛い／＼と云つて我慢が出来ませんか、ウン／＼然う悶えては却つて病に負けるから我慢して居なさい、ア、痛、これ／＼按摩待て、少し待て、ア、痛い、成程此奴は何うもひどい下手だナ、汝は、エ、骨の上などを揉む奴が有るものか、少しは考えて遣れ、酷く痛いワ、ア、痛い堪らなく痛かつた」

按摩「ヘエお痛みでござりますか、痛いと仰しやるがまだ／＼中々斯んな事ではございませんからナ」

新「何を、こんな事でないとは、是より痛くつては堪らん、筋骨に響く程痛かった」

按摩「どうして貴方、まだ手の先で揉むのでございますから、痛いと言つてもたかが知れておりますが、貴方のお脇差でこの左の肩から乳の処まで斯う斬下げられました時の苦しみはこんな事では有りませんからナ」

新「エ、ナニ」

と振返つて見ると、先年手打にした盲もうじん人宗悦が、骨と皮許ばかりに瘦せた手を膝にして、恨めしそうに見えぬ眼を斑まだらに開いて、斯う乗出した時は、深見新左衛門は酒の酔えいも醒さめ、ゾツと総毛だつて、怖い紛れに側にあつた一刀をとつて、

新「己おのれ参まつたか」

と力まかに任まかして斬りつけると、

按摩「アツ」

と云うその声に驚きまして、門番の勘藏が駈出して来て見ると、宗悦と思いの外ほか奥方の肩先深く斬りつけましたから、奥方は七転八倒の苦しみ、

新「ア、彼あの按摩は」

と見るともう按摩の影はありません。

新「宗悦しゆうめ執しゆうねくもこれへ化けて参つたなど思つて、思わず知らず斬りましたが、奥方だったか」

奥「あゝ誰たれを怨うらみましよう、私わたくしは宗悦に殺されるだろうと思つ

て居りましたが、貴方御酒をお廃めなさいませんと遂には家が潰れます」

と一二度虚空をつかんで苦しみました。奥方はそのまゝ息は絶えましたから如何いかんとも致し方がございませませんが、この事は表向にも出来ません。殊ことには年末くれの事でございませぬから、これから頭かしらの宅へ内々参つてだん／＼歎願をいたしまして、極内ごくないぶん分の沙汰にして病死のつもりにいたしました。昔は能くよ変死が有つても屏風びょうぶを立てゝ置いて、お頭が来て屏風の外そとで「遺言を」なんど、申しますが、もう当人は夙とつくに死んでゐるから遺言も何も有りようはずはございませぬ。この伝で病氣にして置くこともおうおう有りおうましたから、病死の体ていにいたしてようや漸くの事で野辺送りやべんをいたしま

した。流石さすがの新左衛門も此の一事には大きおおに閉口おいたして居りました。すると其の年も明けまして、一陽いちようらいふく来復く、春を迎えましても、まことに屋敷は陰々いんくといたして居りますが、別にお話もなく、夏も行き秋も過ぎて、冬のとりつきになりました。するとほんじよきたわりげすい本所北割下水ざんじよきたわりげすいに、座光寺源三郎ざこうじげんざぶろうと云う旗下きせが有つて、これが女太夫おんなだゆうのおこよと云う者を見初めみそ、浅草竜泉寺りゆうせんじ前の梶井かじいし主膳ゆぜんと云う売卜者うらないしやを頼み、其の家を里方にいたして奥方に入れた事が露見して、御不審ごふしんがかゝり、家来共も召捕吟味中めしとり、深見新左衛門、諏訪部三十郎すわべさんじゆうろうと云う旗下の両家は宅番を仰せつけられたから、隔番かくばんの勤めでございます。すると十一月の二十日の晩には、深見新左衛門は自分を出ぬ事になりましたから、

新「熊や今晚は一杯飲んでらくく休める」

と云うので御酒を召上ったが、少し飲過ぎて心持がわるいと小  
 用場ようばへ往いつてから、

新「水を持って、嗽うがいをしなければならん」

と云うので手水鉢ちようずばちのそばで手を洗つて居りますると、庭の植う

えごみ

込の処えごみに、はつきりとは見えませんが、頬骨とがの尖とがつた小鼻とがの落

ちました、眼の所がポコンと凹くぼんだ頬こから頤こへ胡麻ごま塩しお交まじりの髯ひげが

生えて、頭はまだらに禿はげている瘦せかれた坊主が、

坊「殿様く」

と云う。

新「エ、」



と見るやいなや其の儘トンくくくと奥へ駈込んで来て、  
刀掛に有った一刀を引抜いて、

新「狸の所為か」

と斬りつけますと、パツと立ちます一団の陰火が、髻髻とし  
て生垣いけがきを越えて隣の諏訪部三十郎様のお屋敷へ落ちました。

## 八

新左衛門はハテ狐狸こりの所為かと思いましたが、すると其の翌日から諏訪部三十郎様が御病気で、何をしてもお勤つとめが出来ませんから、二人して勤めべき所、お一方ひとかたが病氣故、新左衛門お一方で座光

寺源三郎の屋敷へ宅番に附いて居ると、或夜彼の梶井主膳と云う  
 者が同類を集めて駕籠を釣らせ、抜身の鎗で押寄せて、おこよ、  
 源三郎を連れて行こうと致しますから深見新左衛門は役柄で捨置  
 かれず、直に一刀を取って斬掛けましたが、多勢に無勢で、とう  
 々深見を突殺し、おこよ源三郎を引さらつて遠く逃げられまし  
 た故、深見新左衛門は情なくも売卜者の為に殺されてお屋敷は改  
 易でございます。諏訪部三十郎は病気で御出役が無かつたのだ  
 が公辺のお首尾が悪く、百日の間閉門仰付けられますると云  
 う騒ぎ、座光寺源三郎は勿論深見の家も改易に相成りまして、致  
 し方がないから産落した女の児を連れて、お熊は深川の網打場  
 へ引込み、門番の勘藏は新左衛門の若様新吉と云うのを抱いて、

自分の知己しるべの者が 大門町だいもんちようにございますから、それへ参つて若  
 様に貰い乳をして育て、居るといふ情ない成行なりゆき、此の通り無茶  
 苦茶に屋敷の潰れた跡へ、帰つて来たのは新五郎と云う惣領でござ  
 いますが、是は下総の三右衛門の処へ参つて少しの間厄介に成  
 つて居りましたが、素もとより若気の余りに家を飛出したので淋しい  
 田舎には中々居られないから、故郷ぼう忘じがたく詫言わびごとをして帰ろ  
 うと江戸へ参つて自分の屋敷へ来て見ると、改易と聞いて途方に  
 暮れ、爰こゝと云う縁類えんるいも無いから何うどしたらよかろうと菩提ぼだい所  
 へ行つて聞くと、親父は突殺され、母親は親父が斬殺きりころしたと聞  
 きまして少しのぼせたものか、

新五「これは怪けしからん事、何たる因果因縁か屋敷は改易にな

り、両親は非業の死を遂げ、今更世間の人に顔を見られるも恥かしい、もう迎も武家奉公も出来ぬから寧そ切腹致そう」

と、せいしよういん青松院の墓所はかしよで腹を切ろうとする処へ、墓参りに来たのは、やなかしちめんまえ谷中七面前しもふさやそうべえの下總屋惣兵衛と云う質屋あるじの主人で、これを見ると驚いて刃物をもぎとつて何う云う次第と聞くと、

新五「これくの訳」

というから、

惣「それなら何も心配なさるな、若い者が死ぬなんと云う心得違いをしてはいけぬ、無分別な事、ひとりみ独身なれば何うでもなりますから私の家へ入らつしやい」

と親切にいた労わつて家へ連れて来て見ると、人柄もよし、年二十

一歳で手も書け算盤そろばんも出来るから質店しちみせへ置いて使つて見るとじつめいで応対が本當なり、苦勞した果はてで柔和ひとづきあいで人交際ひとづきあいがよいから、

甲「あなたの処とこでは良い若い者を置当てなすつた」

惣「いゝえ彼あれは少し訳があつて」

と云つて、内の奉公人にもその実じつを言わず、

惣「少し身寄から頼まれたのだと云つてあるから、あなたも本名を明してはなりません」

と云うので、誠に親切な人だから、新五郎もこゝに厄介になつて居ると、この家うちにお園うちという中なか働はたらきの女中が居ります。これは宗悦の妹娘で、三年あとから奉公して、誠に眞実に能く働きます。

すから、主人の気に入られて居る。併ししか新五郎とは、敵かたき同士が此処へ寄合つたので有りますが、互にそういう事とは知りません。

園「新どん」

新「お園どん」

と呼合います。新五郎は二十一歳で、誠に何どうも水の出端でばなでございます。又お園は柔和な好よい女、

新「あゝ、いう女を女房に持ちたい」

と思うと何どういう因果因縁か、新五郎がお園に死ぬほど惚れたので、お園の事というと、能く気を付けて手伝つて親切にするから、男おとこ振こぶりは好よし応対も上手、其の上柔和で主人に気に入られて居るから、お園はあゝ優しい人だと、新どんに惚れそうなもの

だが、敵同士とはいいなながら虫が知らせるか、お園は新五郎に側へ来られると身毛立みのけだつほど厭に思うが、それを知らずに、新五郎は無暗むやみに親切を尽しても、片方かたは碌ろくに口もききません。主人もその様子を見て、

惣「お園はまことに希代きだいだ、あれは感心な堅い娘だ、あれは女中のうちでも違つて居る、姉は何だか、稽古の師匠で豊志賀とよしがというが、姉きょうだい妹とも堅い氣象で、あの新五郎は頻りしきとお園に優しくするようだが」

と気は附いたけれども、なに兩人ふたりとも堅いから大丈夫と思つて居りまするくらいで、なか／＼新五郎はお園の側へ寄付よりつく事も出来ませんが、ふとお園が感ひき冒かぜの様子で寝ました。すると新五郎

は寝ずにお園の看病をいたします。薬を取りに行つたついでに氷砂糖を買つて来たり、葛湯くずゆをしてくれたり、蜜柑みかんを買つて来る、  
九年母くねんぼを買つて来たりしてやります。主人も心配いたして、

惣「おきわ」

きわ「はい」

惣「お園は何も大した病気でもないから宿へ下げる程でもなし、あれも長く勤めておることだから、少しの病気なれば、医者こは此こ方つちで、山田さんが不都合なら、幸庵こうあんさんを頼んでもいゝが、何なんだね、誠にその、看病人が無くつて困るね」

## 九



きわ「私が折わたくしおりに園の部屋へ見舞に参りますと、直ぐ布団の上へ  
 起きなおりまして、もうなに大きおおに宜しゆうございますなど、云  
 つて、まことに快よい振ふりをして居るから、お前無理をしてはいけな  
 いから寝ておいでと申しまして、心配しんぱい家でございませうから私  
 も誠に案じられます」

惣「そりやア誠に困つたものだ、誰たれか看病人が無ければならん、  
 成程おれ己も時に行つて見ると、ひよいと跳はね起おきるが、あれでは却かえつ  
 てぶり返すといかんから看病人に姉でも呼ぼうか」

きわ「でも仕合せに新五郎が参つては寝ずに感心に看病致しま  
 す、あれは誠に感心な男で、店がひけると薬を煎じたり何か買ひ

に行ったり、何も彼も一人で致します」

惣「なに新五郎がお園の部屋へ這入ると、それはいかん、それは女部屋のことはお前が気を付けて小言を云わなければなりません、それは何事も有りはしまいが」

きわ「有りはしまいたって新五郎はあの通りの堅かたじん人ですし、お園も変人ですから、変人同士で大丈夫何事もありません」

惣「それはいかん、猫に鯉節で、何事がなくつても、店の者や出入でいりの者がおかしく噂でも立てると店の為にならぬから、きつと小言を云わんければならぬ」

きわ「それじゃア女中部屋へ出入とを止めます」

と云つて居る所へ、何事も存じませぬ新五郎が帰つて来て、

新「へエ只今帰りました」

惣「何処どこへ往つた」

新「番頭さんがそう仰しやいますから、上野町うえのまちの越後屋さんえちごやの久七きゆうしちどんに流れの相談を致しまして、帰りにお薬を取つて参りましたが、山田さんがそう仰しやるには、お園さんは大分好よい塩梅だが、まだ中々大事にしなければならん、どうも少し傷しょう寒かんの性たちだから大事にするようにと仰しやつて、今日はお加減が違いましたからこれから煎じます」

惣「お前が看病致しますか」

新「へエ」

惣「お前の事だから何事もありますまいがネけれどもその、お

前もそれ廿一、ね、お園は十九だ、お互に堅いから何事も無かるうが、一体男女なんによの道はそういうものでない、私の家は極うちく堅い家であつたけれども、やっぱりこれにナ許いいなずけ嫁けが有つたが、私がつい何して、貰うような事で」

きわ「何を仰しやる」

惣「だから堅いが堅いに立たぬのは男女の間柄、何事もありはしまいが、店の若い者がおかしく嫉やきもち妬ねたをいうとか、出入の者がいやに難癖を附けるとか、却つて店の示しにならぬからよろしくないいかにも取締りが悪い様だからそれだけはナ」

新「へエ薩さつぱり張心付きませんかつたが、店の者が女部屋へ這入つては悪うございますか、もうこれからは決して構いませんよう

に心づけます、決して構いません」

惣「決して構わんでは困ります、看病人が無いから決して構わんと云つてはお園かわいそうが憫然だから、それはね、ま構つてもいゝがね、少しそこをど何うか構わぬ様に」

何だか一向分りませんが少しは構つてもよいという題が出ましたから、新五郎は悦びながら女部屋へ往つて、

新「お園どん山田様へいつてお薬を戴いてきたが、今日はお加減が違つたから、生しょうが姜を買つてくるのを忘れたが今直じきに買つて来て煎じますが、水も只では悪いから氷砂糖を煎じて水で冷して上げよう、蜜柑も二つ買つて来たが雲うんしゅう州のいゝのだからむいて上げよう、袋をたべてはいけないから只露つゆを吸つて吐出はきだしてお

しまい、筋をとつて食べられるようにするから」

園「有難う、新どんごしよう後生だから女部屋へ来ないようになしておくんない、今もおかみさんと旦那様とのお話もよく聞えました、店の者が女部屋へ這入つてきては世間体が悪いと云つておいでだから、誠に思おほしめし召おほしめしは有難いが、後生だから来ないようになして下さい」

新「だから私が来ないようにしよう構わぬと云つたら、旦那が来なくつちやア困る、お前さんが憫然かわいそうだから構つてやってくれと仰しやつたくらい、人は何といつても訝おかしい事がなければ宜しいから、今薬を煎じて上るから心配しないで、心配すると病気に障るからね」

園「あゝだもの新どんには本当に困るよ、厭だと思ふのにつか  
 く、這入つて来てやれこれ彼あんな様に親切にしてくれるが、どうい  
 訳かぞつとするほど厭だが、何どうしてあの人どが厭なのか、氣の毒  
 な様だ」

と種いろく々心に思つて居ると、杉戸すぎとを明けて、

新「お園どんお薬が出来たからお飲みなさい、余あんなり冷さますときか  
 ないから、丁度飲加減を持つて来たが、後あとは二番を」

園「新どん、お願いだから彼方あっちへ行つて下さいな、病氣に障り  
 ますから」

新「へエ左様でげすか」

と締めて立つて行くゆく。

園「どうも、来てはいけないと云うのに態わざと来るように思われる、何だか訝おかしい変な人だ」

と思つて居ると、がらり、

新「お園どんお粥が出来たからね、是は大變に好いいでんぶを買つて来たから食べてごらん、一寸ちよつといゝよ」

園「まあ新どんお粥は私一人で煮られますから彼方あつちへ行つて下さいよ、却つて心配で病気に障るから」

新「じゃア用があつたらお呼びよ」

園「あゝ」

というので扨よんどころなく出て行くかと思つたと又来て、

新「お園どんく」



とのべつに這入つて来る。すると俗に申す一に看病二に薬で、

新五郎の丹精が届きましたか、追々お園の病気も全快して、もう  
 行燈あんどんの影で夜なべ仕事が出来るようになりました。丁度十一月  
 十五日のことで、常にないこと、新五郎が何処どこで御馳走になつた  
 か真赤に酔つて帰りますると、もう店は退ひけてしまつた後あとで、何  
 となく極りが悪いからそつと台所へ来て、大きい茶碗で瓶かめの水を  
 汲んで二三杯飲んで酔えいをさまし、見ると、奥もしんとして退もけた  
 様子、女部屋へ来て明けて見ると、お園が一人行燈もとの下で仕事を  
 しているから、

新「お園どん」

園「あらまア、新どん、何か御用」

## 十

新「ナニ、今日はね、あの伊勢茂さんへ、番頭さんに言付けられてお使にいったら、伊勢茂の番頭さんは誠に親切な人で、お前は酒を飲まないから味淋みりんがいゝ、丁度流ながれ山やまので甘いからお飲あがりでないかと云われて、つい口当りがいゝから飲過ぎて、大層酔って間まがわるいから、店へ知れては困りますが、真赤になつて居るかえ」

園「大變赤くなつて居ます。アノお店も退け奥も退けましたから、女部屋へお店の者が這入つては、悪うございますから早くお

店へ行つてお寝やすみなさい」

新「エ、寝ますが、まあ一服呑みましょう」

園「早くお店へ行つて下さいよ」

新「今行きますが一服やりませう」

と真しんちゆう 鋤きせる の潰れた煙管を出して行燈の戸を上げて火をつけよ

うと思うが、酔つて居て手が慄ふるえておりますから灯ひが消えそう、

園「消してはいけませんよ、彼方あつちへ行つてお呉なさいなさい」

新「ハイ行きますよ、なに火が附きました、時にお園なほどん、お

前の病氣は大変に案じたが、本当にこう早く癒なほろうとは思わな

った、山田さんも丹精なすつたし私も心配致なほしましたが、実に有

難い、私は一生懸命に池いけの端はたの弁天様へ願掛がんがけをしました」

園「有難うございます、お前さんのお蔭で助かりました、もうお店が退けましたから早くお出でよ、新どん」

新「行きますよ、此の間ね、お前さんの姉あねさん様豊志賀さんが来

てね、たった一人の妹でございませうから大事に思うが、こんな稼し業ようばいをして居り、家も離うちれているから看病も届きませんでした

が、お前さんが丹精して下すつて本当に有難い、その御親切は忘れません、お前さんの様な優しい人を園の亭主もたに持たし度たいと思ひますとこう云つてね、お前の姉あねさんが、流石さすがは芸人だけあつて様子よつぽどのいゝ事を云うと思つたが、余程よつぽど嬉たのしかつたよ」

園「いけませんネ、奥も先刻さつきお退けになりましたからお店へお出でなさいよ」

新「行きますよ、お園どん誠に私は本当に案じたがね」

園「有難うございますよ」

新「弁天様へ一生懸命に二十一日の間私が精進して山田様も本当に親切にしてくれたがね、私は真赤に酔っていますか」

園「真赤でございますよ、彼方あっちへお出でなさいよ」

新「そんなに追出さんでもいゝやね、お園どん、伊勢茂の番頭さんが、流山の滅法よい味淋をお前にと云うので私は口当りがいゝから恐ろしく酔った、私はこんなに酔った事は初めて、私の顔は真赤でしよう」

園「真赤ですよ、先刻さつきお店も退けましたから早くお出でなさい

よ」

新「そんなに追出さなくてもいゝやね、お園どんく〜」

園「何なんですよ」

新「だがお園どん、本当にお前さんは大病で、随分私は大変案じて一時は六ヶひとつきり《むずか》しかつたから、私は夜も寝なかつたよ」

園「有難うございますが、そんなに恩にかけると折角の御親切も水の泡になりますから、余あんまくどり諄とく仰しやると、その位なら世話をして下さらんければいゝにと濟まないが思いますよ」

新「そう思つても私の方で勝手にしたのだからいゝが、ねえお園どんく〜」

園「何ですよ」

新「私の心持はお前さんちつ些とも分らぬのだね、お園どん、本当

に私は間が悪いけれどもね、お前さんに私は本当に惚れて居ますよ」

園「アラ、嫌いやな、あんな事をいうのだもの、お内儀かみさんに言いつつけけますよ」

新「言告るたつて……そんなことを云うもんじゃアない、お前は私が来ると出て行けくと、泥坊猫みた様に追出すから、迎とてもどう想つてもむだだとは思うが、寝ても覚めてもお前の事は忘れられないが、もう是からは因果と思つてふツつり女部屋へは来ません、けれども私かわいを憫然そうと思つて、一晩お前の床の中へ寝かしておくんないよ、エお園どん」

園「アラ厭いやなネ、私とお前さんと寝れば、人が色だと申します」

新「イ、工私もそれが知れ、ば失敗しくじつて此家こゝには居られないから、唯一ちよつと一寸並んで寝るだけ、肌を一寸触ふれてすうつと出ればそれで断念あきらめる、唯ごろツと寝て直ぐに出て行くから」

園「そんな事を云つてごろりと寝て直ぐに出て行くいつたつて、仕様がないうねえ、行つて下さいよ」

新「そんな事を云わずに」

園「いやだよ、新どん」

新「お願いだから」

園「お願いだつて」

新「ごろり一寸寝るばかりだ、永らく寝る目も寝ずに看病したろうじゃアないか、其の義理にも一寸枕を並べて、直ぐに出て行ゆ



くから」

園「仕様がございませぬね」

と云うが、永らく看病してくれた義理があつてみれば無下に振むげ払う事も出来ず、

園「新どん唯一寸寝る許ばかりにしておくんなさいよ」

新「ア、一寸一度寝るばかりでも結構、半分でもよろしい」

と云うのでお園の床へ這入りますと、お園は厭だからぐるりと脊中を向けて固くなつてゐるから、此方こつちも床へ這入りは這入つたが、ぎこちなくつて布団の外へはみ出す様、お園はウンともスンとも云わないから、何なんだか極なんりが悪いので酔えいも醒さめて来て、

新「お園どん、誠に有難う、お前がそんなに厭がるものを無理

無体に私がこんな事をして済まないが、其の代り人には決して云われない、私は是程惚れたからお前の肌に触れ一寸でも並んで寝れば私の想いも届いたのだから宜しいが、此家こゝに居ては面めん目ぼくなくて顔が合せられず、又顔を合せては猶な更お忘れられないし、こんな心では御恩を受けた旦那様にも済まないから、私は此家を今夜にも明日あすにも出てしまつて、私の行方ゆくえが知れなくなつたら、私の出た日を命日と思つて下され、もう私は思の遺こす事もないから死しんでしまいます」

とすうツと出に掛る。口説くど上手じきのどんづまりは大抵死ぬと云うから、今新五郎は死ぬと云つたら、まア新どんお待ちと来るかと思つと、お園は死ぬ程新五郎が厭だから何とも申しませんで、猶

小衾こいまきを額の上までずうツと揺ゆり上げて被かぶつたなり口もきゝませ  
 んから、新五郎は手持無沙汰にお園の部屋を出ましたが、是が因  
 果はじまの始りはじまで、猶更お園に念ねんがかゝり、敵かたき同士とは知らずして、遂  
 に又お園に恋慕れんぼを云いかけますという怪談のお話、一寸ひと一息いき  
 吐つきまして、

## 十一

深見新五郎がお園に惚れまするは物の因果で、敵同士の因縁と  
 いう事は仏教の方では御出家様が御説教をなさるが、どういふ訳  
 か因縁と云うと大概の事は諦めがつきます。

甲「どうしてあの人はあんな死しにやま様をしただろうか」

乙「因縁でげすね」

甲「あの人はどうしてあア夫婦中がいゝか知らん、あの不器量だが」

乙「あれはナニ因縁だね」

甲「なぜかあの人はあアいう酷ひどい事をしても仕出したねえ」

乙「因縁が善いいのだ」

と大概は皆因縁に押附おっつけて、善いも悪いも因縁として諦めをつ

けますが、其の因縁が有るので幽霊というものが出て来ます。そ

の眼に見えない処を仏教では説ときつく尽してございまするそうで、外

国には幽霊は無いかと存じて居りました処が、先せんだつ達わたくして私の宅へ

さる外国人が婦人と通弁が附いて三人でお出いでになりました、それは粹いきな外国人で、靴を穿いて来ましたが、其の靴をぬいで隠かくしから帛紗ふくさを取出しましたから何なんの風呂敷包かと思ひますと、其の中から上靴を出してはきまして、畳の上へ其の上靴で坐布団の上へ横ツ倒しに坐りまして、

外「お前の家うちに百幅幽霊ふくの掛物があるという事で疾とくより見たいと思つて居たが、何卒どうぞ見せて下さい」

という事。是は私わたくしがふと怪談会と云う事を致した時に、諸先生方が画かいて下さった百幅の幽霊の軸がございませうから、是を御覧に入れませうと、外国人の事でございませうから、一々是は何なんという名で何という人が画いたのかと云う事を、通弁に聞いて手帖に写

し、是れは巧い、彼れは拙いと評します所を見ると、中々眼の利いたもので、丁度其の中で眼に着きましたのは菊池容齋先生と柴田是眞先生の画いたので、是は別して賞められました。そのあとで茶を点れて四方八方の話から、幽霊の有無の話をしました  
が、

外「私は日本の語にうといから通弁から聞いて呉れ」

と云う。私も洋語は知りませんから通弁さんに聞くと、通弁さんの云うに、

通「お前の宅にこれだけの幽霊の掛物を聚めるには、幽霊というものが有るか無いかを確と知つての上でかように聚めたのでございましょう」

と云う問とでございました。所が有るか無いかと外国人に尋ねられて、私わたくしも当惑して、早速に答も出来ませんから、

圓「日本の国には昔から有るとのみ存じていますから、日本人には有るようで、貴方のお国には無いと云うことが学問上決して居るそうですから無いので、詰り無い人には無い有る人には有るのでございましょう」

と、仕方なしに答えましたが、此の答は固もとよりよろしくない様でございしますが、何分無いとも有るとも定めはつきません。先せんだ達つてある博識ものしり先生に聞きますと

「幽霊は有るに違い無い、現在僕は蛇の幽霊を見たよ」  
と仰しやるから、

## 圓「どういふ訳か」

と聞くと、蛇を壘びんの中へ入れてアルコールをつぎ込むと、蛇は苦しがつて、出よう／＼と思つて口の所へ頭を上げて来るところを、グツとコロップを詰めると、出ようと云う念をぴったりおさえてしまう。アルコール漬だから形は残つて居ても息は絶えて死んで居るのだが、それを二年許ほかり経つて壘の口をポンと抜いたら、中から蛇がずうツと飛出して、栓を抜いた方の手頸てくびへ喰付いたから、ハツと思うと蛇の形は水になつて、ダラ／＼と落おちて消えたが、是は蛇の幽霊と云うものじゃ。と仰しやりました。併しかし博識ものしりの仰しやる事には、随分拵こしらへごと事も有つて、尽ことく当あてにはなりません、出よう／＼と云う氣を止めて置きますと、其の氣というもの



が早晚屹度出るといのお話、又お寺様で聞いて見ますと氣息が  
 絶えて後形のちは無いが、靈魂と云うものは何処どこへ行くか分らぬと申  
 すこと、天国へ行くとか地獄極楽とか云う説はあつても、まだ地  
 獄から郵便の届いた試しもなし、又極楽の写真を見た事もござい  
 ませんから当にはなりません、併し悪い事をするおんねんと怨念ごんねんが取  
 付くから悪事はするな、死んで地獄へ行くゆと画えの如く牛頭馬頭ごずめずの  
 鬼に責められて実にどうも苦くるしみをする、此の有様ありさまは如何どうじや、  
 何と怖い事じやアないか、と云うので、盆の十六日はお閻魔様えんまさま  
 へ参詣致しますると、地獄の画が掛けてあるから、此の画を見て  
 子供はおゝ怖い、悪い事はしまいと思う。昔は私わたくしども共あも彼の画  
 を見ると、もう決して悪い事はしまいと思ひまして、女は子が出

来ないと血の池地獄へ落ちて燈心で竹の根を掘らせられ、男は子  
 が出来ないちようちんと提灯で餅を搗かせられると云う、皆恐ろしい話  
 で、実に悪い事は出来ませんものでございます。又因縁しやうで性を引  
 きますというは仏説でございませうが、深見新左衛門が斬殺きりころした  
 宗悦の娘お園に、新左衛門の悴せがれ新五郎が惚れると云うはどういう  
 訳でございませうか、寝ても覚めても夢にも現うつつにも忘れる事が  
 出来ませんで、其の時は諦めますと云つて出にかゝつたが、お園  
 が何とも云わぬから仕方がない、杉戸すぎどを閉たて、店へ往つて寝てし  
 まいましたつぱりが翌日になつて見ると、まさか死ぬにも死なれず、矢  
 張顔を見合せて居ります。其の中うちに土蔵くらの塗直しが始まり、質  
 屋さんでは土蔵を大事にあそばすので、土蔵の塗直しには冬が一

番持もちがいゝと云うので、職人が這入つてどしどし日暮れるまで  
 仕事をして、早出居残りはやでりと云うのでございます。職人方が帰り際  
 には台所で夕飯時ゆうめしどきには主人が飯を喫たべさせ、寒い時分の事だか  
 ら葱鮪ねぎまなどは上等で、或は油揚あらいに昆布などを入れたのがお商人  
 衆の惣菜でございます。よく気をつけてくれますから、台所で  
 職人がどん／＼這入つて御膳を食べ、香の物がないといつて、櫛たすき  
 を掛けて日の暮くれ々々にお園が物置へ香の物を出しにゆきました。  
 此の奥に土蔵が有つてその土蔵の脇は物置があり、其の此方こちらには  
 職人が這入つて居るから荒木田あらかたがあり、其の脇には藁わらが切つてあ  
 り、藁わらなどが散ちばっている間をうねつて物置へ往つて、今香の物  
 を出そうとすると、新五郎が追っかけて来たから、見ると少し顔

色も變つて何だか氣違きちがひじみて居る。もつとも惚れると云うと、  
馬鹿ばか氣げて見えるものでございますが、

新「お園どんく」

園「アラ、びっくりした、新どん、何なんでございます」

## 十二

新「アノお園さん、私はね、此の間お前と枕を並べて一度でも  
寝れば、死んでも宜いい、諦めますと云いました」

園「そんなことは存じませんよ」

新「存じませんと云ったつて覚えてお居いでだろう、だがネ私は

きつと諦めようと思つて無理に頼んでお前の床へ這入つて酔つた  
 紛れに一寸枕を並べたばかりだが、私はお前と一つ床の中へ這入  
 ったから、なお猶諦めが付かなく成つたがね、お園どん、是程思つて  
 居るのだからたった唯一度ぐらいは云う事を聴いてもいゝじやアないか」  
 園「何だなんネ新どん、氣違じみて、お前さんも私も奉公して居る  
 身の上でそんな事をして御主人に済みますか、其の事が知れたら  
 お前さんは此の家を出てもうち行ゆきどころ処ところが無いじやアありませんか、  
 若しも間違があつたならば、私は身寄も親類も無い行処の無いとい  
 う事は何時いつでも然そう云つておいでなのに、大恩のある御主人に済  
 みませんよ」

新「済まないのは知つて居るが、たった唯一度で諦めて是ツ切りいや猥ら

しい事は云う氣遣きづかいないから」

園「アラおよしよ」

新「お前こんなな思つて居るのに」

と夢中になりお園の手を取つてグツと引寄せる。

園「アレお止し」

と云ううち帯を取つて後うしろへ引倒しますから、

園「アレ新どんが」

と高たか声こえを出して人を呼ぼうと思つたが、そこは病氣の時に看病を受けました事があるから、其の親切ほだに羈はだされて、若もし私わたしが嘔ど鳴なれば御主人ごしゅじんに知れて、此この人が追出おしだされたら何処どこへも行く処ゆも無し氣の毒どくと思ひますから、唯小聲こゝろで、

園「新どんお止しよ〜」

と声を出すようで出さぬが、声を立てられてはならんと、袂たもとを口に当てがって、

新「此方こつちへお出で」

と藁の上へ押倒して上へ乗掛のりかるから、

園「アレ新どん、お前氣違じみた、お前も私もしくじつたら何どうなさる、新どん、新どん」

ともがくのを、無理無体に口を押え、夢中になつて上へ乗掛のりかるうとすると、

園「アレ新どん〜」

ともがいているうちに、お園がウーンと身を慄ふるわして苦しみ、

パツと息が止つたから恟びつくりして新五郎が見ると、今はどつぷり日が暮れた時で、定かには分りませんが、側にある劔すさが真赤に血だらけ、

新「何うしたのか」

と思つて起上ろうとすると、苦し紛れに新五郎の袖に手をかけ、しがみ付いたなりに、新五郎と共にずうツと起おきたのを見ると真赤、

新「お園どん何うしたのだえ」

と襟えりに手をかけて抱だき起おこすと、情なさけないかな下にあつたのは劔すさを

切る押切おしきりと云うもの、是は畳屋さんの庖丁を仰向あおむけにした様な

実に能よく切れるものでございませうが、此の上へお園の乗つた事を

知らずに、男の力で、大声を立てさせまいと思ひ、口を押えてグ



ツクと押すから、お園はお止しよくと身体を蹴もがくので、着物の上からゾク／＼あばら肋へかけて切り込みましたから、お園は七転八倒の苦しみ、其の儘息の絶えたのを見て、新五郎は、

新「ア、南無阿弥陀仏／＼／＼、お園どん堪忍しておくれ、全くお前と私は何たる悪縁か、お前が厭がるのを知りながら私が無理無体な事を云いかけて、怖ろしい刃物のあるを知らずにお前を此所こゝへ押倒して殺してしまったから、もう私は生きてはいられない、お園どん確しっかりしておくれ、私が死んでもお前を助けるから」と無理に抱だき起おこして見ましたが、もう事が切れて居る。

新「ハア、もう是は迎とてもいかぬな」

と夢の覚めた様な心持で只茫然として居りましたが、もう迎も

此処こゝの家には居うちられぬ、といつて今更何処どこといつて行く処ゆも無い  
 新五郎、エ、毒喰くわば皿ねぶまで舐ねれ、もう是こゝまでというので、屎くそや  
 けになる。若い中うちにはあることで、新五郎は暗やみに紛まれてこつそり  
 店へ這入こつて、此の家うちへ来る時差して来た大小を取出し、店に有あ  
 りあわせ  
 合あの百金を盗み取つて逐電しゆでんいたしましたが、さて行く処ゆがな  
 いから、遥はる々／＼、奥おう州しゅうの仙台へ参り、仙台様のお抱かゝになつて  
 居る、劍客けんかく者しや黒坂一齋と云う、元劍術の指南を受けた師匠の処  
 へ参つて塾に這入り、劍術の修しゅう業ぎようをして身を潜めて居りまし  
 たが、城中に居りましたから、頓とんと跡が付きません。なれども故  
 郷忘じ難く、黒坂一齋の相果てゝからは、何どうも朋輩ほうばいの交際つきあい  
 が悪わるうございますから、もう二三年も経つたから知れやしまいと

思つて、又奥州仙台から、江戸表へ出て来たのは、十一月の丁度  
 二十日でございます。先まず浅草の観音様へ参つて礼らい拝はいを致し、  
 是どこから何処ゆこへ行ゆうか、何どうしたらよかろうと考える中うちに、ふと胸  
 に浮ゆうんだのは勇治ゆうじと云う元屋敷の下男で、我が十二歳ぐらいの頃  
 まで居たが、其の者は本所辺に居ると云う事で、慥たしか松倉町と聞  
 いたから、兎も角も此の者を尋ねて見ようと思ひ、吾妻橋あづまばしを渡  
 つて、松倉町へ行ゆきます。菅すげの深い三度笠かぶを冠かぶりまして、半合はんがっ  
 羽ぼに柄つかぶくろ袋ふくろのかゝつた大小おほいを帶たいし、脚半甲きゃはんこうがけ草鞋わらじばき穿きで、  
 いかにも旅馴りれて居りまする扮装いでたち、行李ことうりを肩かたにかけ急いいで松倉  
 町から、斯こう細い横町へ曲まりに掛かると、跡あとからバラ／＼／＼と五  
 六人の人が駈かけて来るから、是は手が廻まつたか、しくじつたと思

い、振返つて見ると、案の如く小田原提灯が見えて、紺足袋こんたびに雪せ駄穿つたばきで捕者とりものの様子だから、あわて、其処そこにある荒物屋の店の障子をがらりと明けて、飛上つたから、荒物屋さんでは驚きました。

女房「何ですnee、恟びつくりしますね」

と云うと、

新「ハイくくく」

と云つてブルくふる慄ふるえながら、ぴったり後うしろを締めて障子の破れから戸外そとを覗のぞいて居ります。

女「まあ何処どこの方です、突然いきなり人の家うちへ這入つて、草鞋をはいたなりで坐つてサ、何うどしたんだえ」

新「是はく、何うも誠に相済まぬが、今間違で詰らぬ奴に喧嘩を仕掛けられ、私は田舎武ざむらい士で様子が知れぬから、面倒と思つて、逃ると追掛おっかけたから、是は堪たまらんと思つて当家へ駈込みお店を荒して済みませんが、今覗いて見れば追掛けたのではない酒屋の御用が犬を嗾けしかけたのだ、私は只怖いと思つたものだから追掛けられたと心得たので、誠に相済みません」

女「困りますね、草鞋を脱いで下さい、泥だらけになつて仕様がございませぬね、アレ塩煎餅しおせんべいの壺へ足を踏みかけて、まあお

前さん大變樽たるがき柿を潰したよ」

新「誠に濟まないが、ツイ踏んで二つ潰したから、是は私が買つて、あとは元の様に積んで置きます、あの出刃庖丁は何なんでげすな」

女「あれは柿の皮を剥むくのでございますよ、何どうも困りますね、だが買つて下さればそれで宜ようございます、けれども貴方草鞋をおとんなさいナ」

新「何どうか、樽柿は幾いくつ個でも買いますが、何どうかお茶でも水でも下さい」

女「お茶は冷つめとうございますが、ナニ沢山買つて下さらないでも、潰れただけの代を下さればようございます」

新「え、御家内此処は何と云う処でございますえ」

女「此処は本所松倉町でございます」

新「あ、左様かえ、少しお聞き申すが、前々小日向服部はつとり坂ざかの屋敷に奉公を致して居った勇治と云う者が此の近きんじよ処に居りませんか、年は今年で五十八九になりましたようか、慥たしか娘が一人あつて其の娘の夫は\*こまいかき搔と聞きましたか」

\*「壁下地の小竹をとりつける職人」

女「貴方は、なんでございますか、深見新左衛門様の若様でございますか」

新「え、何あのお前は勇治を御存知かえ」

女「ハイ私は勇治の娘でございますよ、春と申しまして」

新「はあ然<sup>そ</sup>う」

春「私はね、もうねお屋敷へ一度参つた事がございませがね、其の時分は幼少の時で、まアお見違<sup>みそれ</sup>申しました、まだ貴方のお小さい時分でございましてからさっぱり存じませんで、大層お立派におなり遊ばした事、お幾<sup>いくつ</sup>才におなり遊ばした」

新「今年二十三になります」

春「まアお屋敷もね、何だか不祥<sup>いや</sup>な事になりました、昨年私の親父も亡なりましたが、お屋敷はあゝなつたが、若様は何<sup>ど</sup>うなされたかお行方が知れぬが、ひよつとして尋ねていらつしやつたら、永<sup>ながく</sup>々御恩を受けたお屋敷の若様だから何<sup>ど</sup>んなにもして上げなければならん、と死<sup>しにぎわ</sup>際に遺言して亡なりましたが、貴方が若様な



れば何うか此方こちらへ一晩でもお泊め申さんでは済すませんから」

新「やれく是はく左様かね、図らず勇治の処へ来たのは何さいわいより幸で、拙者は深見新五郎であるが、仔細あつて暫く遠方へ参つて居たが、今度此方へ出て参つても何処どこと云つて頼る処も無し、何処か知れぬ処へ奉公住ほうこうずみを致したいが、請人うけにんがなければならんから当家で世話をして請人になつてくれんか」

春「お世話どころじゃアございません、是非ともお世話を為しなければ済みません、まア能く入らっしゃいました、貴方それじゃアまア脚半や草鞋をお取りなすつて、なに御心配はございません、今水を汲んで来ます、ナニその汚れた処は雑巾で拭きますから、まア合羽などはお取りなさいまし」

と云うから新五郎はホツト息を吐<sup>つ</sup>きます。すると、

春「まア此方<sup>こちら</sup>へ」

と云うので何か親切に手当を致し、大小は風呂敷に包み<sup>たんす</sup>箆<sup>ひきだし</sup>斗へ入れてピンと錠<sup>おろ</sup>を卸し、

春「貴方これとお着かえなさいましな」

新「イヤ着換は持つて居るから」

と包の中から出して着物を着かえ、

新「何うか空腹であるから御飯を」

春「ハイ宜しゆうございます、貴方御酒を召上るならば取つて参りましょう、此の辺は田舎同様場末でございますから何<sup>なん</sup>にもよいものはありませんが、貴方鰻を召上りますなら鰻でも」

新「鰻は結構、私が代を出すから何か買つて貰いたい」

春「そんなら跡を願いますよ」

とはからガラリ障子を明けて戸外へ出ました。すると此の女房は、実は深見新五郎が来たらは々と、亭主に言付けられているから、亭主の行つて居る処へ行つて話をする。此の亭主は石河伴作いしかわばんと云う旦那衆しゅの手先で、森田の金太郎と云う捕者の上手、

かねて網を張つて待つていた処だから、それは丁度好いと、それてくぼり／＼手配てしやをしたが、併ししか劍客者と聞いているから刃物を取上げなければならんが、何うしたものだらうと云うと女房が聞いて、刃物は是々してちゃんと箆笥の抽斗へ入れて錠を卸して仕舞つて、鰻あつらを誂えに行くつもりにして来たと云う。

金「そんなら宜しい」

と云つて直すぐに鰻屋の半纏はんでんを引掛ひっかけて若者の姿で金太郎が遣やつ

て来て、

金「エ、鰻屋でございます」

と云うと、此方こちらは気が附きませんから、

新「ハイ大きに御苦労」

金「お誂えが出来ました、あゝ山椒さんしよの袋を忘れた」

と云いながら新五郎の受取うけとりに来る処を飛上つて、

金「御用だ神妙にしろ」

と手を取つて逆に捻伏ねじふせられたから起おきる事が出来ません。

## 十四

金「手前は深見新五郎だろう、谷中の下總屋でお園を殺し、主人の金を百両盗んで逐電した大泥坊め」

新「イヤ手前は左様なものではござらん」

とは云つたが、あゝ残念なことをした、それでは此処の女房もぐるであつたと見える、刃物を仕舞われたからはもう逆も遁れぬ。と思ひました。いゝ悪党なれば、斯う云う時の為に懐にどすといつて一本ヒ首をのんで居るが、それ程商売人の泥的ではありませんから、用意をいたしておりません。もう天命究まつたと思うと、一寸指の先へ障りましたのは、先刻ふと女房に聞いた

柿の皮を剥く庖丁と云う鱒切あじきりの様な物が、これが手に障つたのを幸さいわいと、

新「左様な覚おぼえはない、人ひと違ちがいでござる」

と云つて、起おきあ上りながらズンと金太郎の額へ突掛つけたから、

金「アツ」

と後あとへ下さがつて傷口を押えると、額から血がダラ／＼流れて真赤になり、真実ほんとうの金太郎の様になります。続いて逃にげれたらと隠れていた捕者の上手な富藏とみぞうと云う者が、

富「神妙にしろ、御用だ」

と十手を振上げて打って掛るやつを取つて抉えぐつたから、ヒヨロ／＼とひよろついて台所の竈へつでボツカリ膝ひざを打つて、裏口へ蹠よろけ跟

出したから、しめたと裏口の戸をしめ、辛張しんぱりをかつて置いて表を覗のぞくと人が居る様子だから、確しつり鑰かぎを掛がけて燈光あかりを消し、庖丁の先で箆笥の錠をガチ／＼やって漸ようやく錠を明け、取出とてした衣類を身に纏まとい、大小を差して、サア出ようと思つたが、迎とても表からは出られませんから、屋根伝いにして逃げようと、階はしご子あがを上つて裏手の小窓を開けて見ると、ずうつと棟割むねわり長屋になつて物干つなが繋がつて居て、一軒毎ごとに一間ばかりの丸太がありそれへ小割こわりが打つて物干竿ものほしざおの掛かる様になつてゐるから、此の物干伝いに伝わつて行けば、何処どこへか逃げられるとは思つたが、なか／＼油断は出来ませんから、長物ながものを抜いて新五郎が度胸をすえ、小窓から物干へ這出して来ます。すると捕手とりての方も手当は十分に附ついてゐるか

ら、もし此の窓から逃出したら頭脳あたまを打破うちわろうと、勝藏かつぞうと云う者が木太刀きだちを振上げて待つて居る所へ、新五郎は斯こう腹這はらばいになつて頸くびをそうツと出した。すると、

勝「御用だ」

ピユツと来るやつを、身を退ひき身体を逆に反かえして、肋あばらの所へ斬込んだから、勝藏は捕者は上手だが物干から致してガラ／＼／＼どうと転がり落ちる。其の間に飛下りようとする。所が下には十分手当が届いているから下りる事が出来ません。すると丁度隣の土蔵が塗直して足場が掛けてあつて筈とまが掛かつてゐるから、それを潜くぐつて段々参ると、下の方ではワア／＼と云う人声ひとごえ、もう然そうなると、人が十人居ても五十人も居る様に思われますから、新



五郎は窃そつと音のしない様に筈を潜り抜けて、段々横へ廻つて参り、此の空地あきちへ飛下り、彼方あちらの板塀いちはいを毀こわして、向むこうの寺へ出れば逃のがれようと思ひ、足場を段々に下りまして、もう宜よかろう、と下を見ると藁わらがある。しめたと思つてドンと其処そこへ飛下りると、

新「ア痛タ……」

と臀しりもち餅もちをつく筈はずです、其の下にあつたのは押切おしぎりと云う物で、

土踏まずの処を深く切込みましたから、新五郎ももう是までと覺悟びつこしました。跛びつこになつては、逆とても遁のがれる事も出来ませんから、到と頭うとう繩じゆんに掛つて引かれます。

新「あゝ因縁は恐しいもの、三年跡あとにお園を殺したも押切、今又押切へ踏掛けてそのために己おれが繩じゆんに掛つて引かれるとは、お園

の怨うらみが身に纏まとつて斯かくの如くなること」

と実に新五郎も夢の覚めた様になりましたが、是が丁度三年目の十一月二十日、お園の三回忌の祥しょう月つき命めい日にちに、遂に新五郎が繩目に掛つて南の御役宅へ引かれると云う、是より追々怪談のお話に相成ります。

## 十五

引続きまして真景累ヶ淵、前回よりは十九年経ちましてのお話に相成りますが、根津七軒町の富とみもと本の師匠とよし豊志賀は、年卅九歳で、誠に堅い師匠でございます、先年妹お園を谷中七面前の下

總屋と云う質屋へ奉公に遣つて置きました処、凶らぬ災難で押切  
 の上へ押倒され、新五郎の為に非業の死を遂げましたが、それか  
 らは稽古をする気もなく、同きようだい胞たい思いの豊志賀ねんごろは懇ねんごろに妹お園の  
 追福を営み、追々月日も経ちまするので気を取直し、又矢やっぱり張稽  
 古をする方が気が紛れていゝから、と世間の人も勧めまするので、  
 押つ張つて富本の稽古を致す様になりましたが、女の師匠と云う  
 者は、堅くないとお弟子がつきません。彼あすこ処この師匠は娘を遣つて  
 置いてても行儀もよし、言葉遣いもよし、真まことに堅いから、あの師匠  
 なら遣るが宜いい、実に堅い人だ、と云うので大家たいけの娘も稽古に参  
 ります。すると、男嫌いで堅いと云うから、男は来そうもないも  
 のでございませが、堅い師匠だと云うと、妙に男が稽古に参りま

す。

「師匠是は妙な手桶で、台所で遣うのには手で持つ処が小さくつて軽くつて、師匠などが水を汲むにいゝから、私が一つ桶屋こしらに拵えさして持つて来た」

とか、又朝早く行つて、瓶かめへ水を汲んで流しを掃除しようなどと手伝いに参ります。中には内々ないく張子連はりこれんなどと申しまして、師匠が何かしてお世辞の一言ひとことも云うと、それに附込んで口説くどきお落とそうなどと云う連中れんじゆう、経師屋連きやうじやだの、或は狼連あるいなどと云う、転んだら喰おうと云う連中が来るのでありますから、種々いろ／＼親切に世話を致します。時々さか浚いや何か致しますと、皆此みんなの男の弟子が手伝いに参りますが、ふと手伝いに来た男は、下谷大したやだ

いもんちよう  
 門町に烟草屋を致して居る勘藏と云う人の甥、新吉と云うの  
 でございますが、ぶら／＼遊んで居るから本石町四丁目の松  
 田と云う貸本屋へ奉公に遣りましたが、松田が微禄いたして、伯  
 父の処へ帰つて遊んでいるから、少し烟草を売るがいと云うの  
 で、掴煙草を風呂敷に包み、処々売つて歩きますが、素より  
 稽古が好きで、閑の時は、水を汲みましようお湯を沸しましよう  
 などと、へエ／＼云つてまめに働きます。年二十一でございます  
 が、一寸子柄の好い愛敬のあると云うので、大層師匠の氣に入り、  
 其の中に手少なだから私の家に居て手伝つてと云うと、新吉も伯  
 父の処に居るよりは、芸人の家に居るのは粹で面白いから楽しみも  
 楽みだし、芸を覚えるにも都合がいゝから、豊志賀の処へ来て手

伝いをして居ります。其の年十一月二十日の晩には、みぞれ霰がバラ／＼降つて参りまして、ごく極寒いから、新吉はいそろう食客の悲しさで二階へ上つてあが寝ますが、いつのぶとん五布蒲団のかしわもち柏餅でもまだ寒いと、肩の処へ股引などを引摺ひきずりこ込んで寝ますが、曇曇はざあ／＼と窓へ当ります。其の内に少し寒さがゆる緩みましたかして、夜よが更けてから雨になりました、どつと降つて参ります。師匠は堅いから下に一人で寝て居りますが、なん何だか此の晩は鼠がガタ／＼して豊志賀は寝られません。

豊「新吉さん／＼」

新「へエなん何でげすね」

豊「お前まだ眼が覚めていますかえ」

新「へエ、私はまだ覚めて居ります」

豊「そうかえ私も今夜は何だか雨の音が気になって少しも寝られないよ」

新「私も気になって些ちっとも寝られませんか」

豊「何だか誠に訝おかしく淋しい晩だね」

新「へエー訝しく淋しい晩でげすね」

豊「寒いじゃアないか」

新「何だかひどく寒うございますね」

豊「なんだね同じ様なことばかり云って、誠に淋しくっていけない、お前さん下へ下りて寝ておくれな、どうも気になっていけないから」

新「そうですか、私も淋しいから下へ下りましょう」

と五布蒲団と枕を抱えて、危い階子はしごを下りて来ました。

豊「お前、新吉さん其方そっちへ行つて柏餅では寒かないかえ」

新「へエ、柏餅が一番宜いんです、布団の両端りょうはじを取つて巻

付けて両足を束そくに立つて向むこうの方に枕を据すえて、これなりにドンと

寝ると、好いい塩梅に枕の処へ参りますが、そのかわり寝像ねぞうが悪い

と餡あんがはみ出します」

豊「お前寒くつていけまい、斯こうしておくれな、私も淋しくつ

ていけないから、私のネこの上掛うわがけの四布蒲団よのぶとんを下に敷いて、私

の搔卷かいまきの中へお前一緒に這入つて、其の上へ五布蒲団を掛ける

と温あつたかいから、一緒にお寝な」



新「それはいけません、どうして勿体ない、お師匠さんの中へ這入つて、お師匠さんの身体から御光ごこうが射すと大変ですからな」

豊「御光だつて、寒いからサ」

新「寒うございますがね、明日あしたの朝お弟子が早く来ましよう、然そうするとお師匠さんの中へ這入つて寝てえれば、新吉はお師匠さんと色だなどと云いますからねえ」

豊「宜いいわね、私の堅い気象は皆みんなが知つて居るし、私とお前と年を比べると、私は阿母おつかさんみた様で、お前の様な若い子みたいな者と何どう斯こう云う訳は有りませんから一緒に寝よ」

新「それでげすか、でも極りが悪いから、中に仕切を入れて寝ましようか」

豊「仕切を入れたつて痛くつていけませんよ、お前間まがわるければ脊せな中なか合あわわせにして寝ましよう」

と到頭ひとつね同衾ひとつねをしましたが、決して男女なんによ同衾はするものでございませぬ。

## 十六

日頃堅いと云う評判の豊志賀が、どう云う悪縁か新吉と同衾をしてから、不図ふと深い中になりましたが、三十九歳になる者が、二十一歳になる若い男と訳があつて見ると、息子のような、亭主のような、情いろおとこ夫おとこの様な、弟の様な情が合併して、さあ新吉が段

々かわいゝから、無茶苦茶新吉へ自分の着物を直して着せたり何か致します、もと食いそろうろう客だから新吉が先へ起きて飯めしごしら拵えをしましたが、此の頃は豊志賀が先へ起きてお飯まんまを炊くようになり、枕元で一服つけて

豊「さア一服お上りあがよ」

新「へエ有難う」

豊「何なんだよへエなんて、もうお起きよ」

新「あいよ」

などと追々増長して、師匠の布子どてらを着て大胡坐おおあぐらをかいて、師匠が楊枝箱ようじばこをあてがうと坐つて、楊枝を遣つかい嗽うがいをするなどと、どんな紙屑買が見ても情夫いっひととしか見えません。誠に中よく致し、

新吉も別に行く処も無い事でございますから、少し年をとった女房を持った心持でいましたが、此家へ稽古に参ります娘が一人ありまして、名をお久と云つて、総門口の小間物屋の娘でございます。羽生屋三五郎と云う田舎堅気の家でございますが、母親が死んで、継母に育てられているから、娘は家に居るより師匠の処に居る方がいと云うので、能く精出して稽古に参ります。すると隠す事程結句は自然と人に知れるもので、何うも訝しい様子だが、新吉と師匠と訳がありやアしないかと云う噂が立つと、堅気の家では、其の様な師匠では娘の為にならんと云つて、好い弟子はばらく下つてしまい、追々お座敷も無くなります。そうすると、張子連は憤り出して、

「分らねえじやアねえか、師匠は何なんの事だ、新吉などと云う青二歳を、了簡違いな、また新吉の野郎もいやに亭主ぶりやアがつて、くわえぎせる銜煙管でもつてハイお出で、なんと云つてやがる、本当に呆れけえらア、下れさがく」

と。ばらく張子連は下ります。其の他たの弟子も追々其の事を聞いて下りますと、詰つまつて来るのは師匠に新吉。けれどもお久ばかりは相変らず稽古に来る、と云うものは家うちに居ると、継母いじに苛められるからで、此のお久は愛嬌のある娘で、年は十八でござい  
ますが、一寸笑うと口の脇えくぼへ靨えくぼと云つて穴があきます。何もずぬけて美女いゝおんなではないが、一寸男おとこ惚ぼれのする愛らしい娘。新吉の顔を見てはにこく笑うから、新吉も嬉しいからニヤリと笑う。其

の互たがいに笑うのを師匠が見ると外面うわべへは頭あわさないが、何か訳わけがあるかと思つて心では妬やきます。この心で妬くのは一番毒で、むやくく修羅しゆらを燃もして胸むねに燃火たくひの絶える間まがございせんから、逆上のぼせて頭痛づうとうがするとか、血の道みちが起おるとか云う事ことのみでございます。と云つて外ほかに意趣返いそへんしの仕様しやうがないから稽古けいこの時ときにお久おきうを苛いらめま  
す。

豊「本ほん当とうに此この娘こは何なにてえ物もの 覚おぼえが悪い娘むすめだろ、其そこ処ところがいけないよ、此こ様んなじれつたい娘むすめはないよ」

と無暗むやみに捻つねるけれども、お久おきうは何なにも知らぬから、芸あが上あると思おもいまして、幾いくら捻つねられてもせつせと来きます。それは来きる訳わけで、家うちに居いると継母けいぼに捻つねられるから、お母つかさんよりはお師匠ししやうさんの方が

数が少いと思つて近く来ると、猶なほ師匠は修羅を燃もやして、わく／＼  
 悋りん氣の焰ほむらは絶える間は無く、益々逆上して、眼の下へポツリと訝おか  
 しな腫物できものが出来て、其の腫物が段々腫上はれあがつて来ると、紫色に  
 少し赤味がかつて、爛たゞれて膿うみがジク／＼出ます、眼は一方腫はれふ  
 塞さがつて、其の顔の醜いやな事と云うものは何なんとも云いようが無い。  
 一体少し師匠は額の処ぬけあがが拔上ぬつて居る性たちで、毛が薄い上に鬢びんが  
 腫上はつているのだから、実に芝居で致かさねす累かさねとかお岩とか云うよう  
 な顔付でございます。医者が来て脈を取つて見る。豊志賀が、是  
 は氣この凝こりでございましょうか、と云うと、イヤ然そうでない是は面め  
 疔んちように相違ちがないなど、云うが、それは全く見立みたち違ちがいで、只今  
 の様に上手なお医者はございせん時分で、只今なら佐藤先生の

処へ行けば、切断して毒を取って跡は他人の肉で継つぎ合わせると云  
 う、飴細工の様な事も出来るから造作はないが、其の頃は医術が  
 開けませんから、十分に療治も届きません。それ故段々いたみはげ痛が烈し  
 くなり、随したがつて気分も悪くなり、終ついにはどつと寝ました。ところ  
 が食しよくもとは固より咽喉へ通りませんし、湯水も通らぬ様になりました  
 から、師匠は益々やせ瘦るばかり、けれども顔の腫物できものは段々に腫上  
 って来ますが、新吉はもと師匠の世話になつた事を思つて、能よ  
 く親切に看病致します。

新「師匠く、あのね、薬の二番が出来たから飲んで、それか  
 ら少し腫物の先へ布ひきぐすり薬しを為よう、えゝおい、寝て居るのかえ」

豊「あい」



と膝に手を突いて起上りますると、鼠ねずみこもん小紋ふだんぎの常着ねまきを寢着ねまきにおろして居るのが、汚れけツ気が来ており、お納戸なんどいろ色いろの下し《し  
たじめ》を乳の下に堅く《し》め、溢くびれたように瘦せて居りま  
す。骨と皮ばかりの手を膝に突いて漸ようやくの事で薬のを服み、

豊「ほッ、ほッ」

と息を吐つく処を、新吉は横眼でじろりと見ると、もうく二眼ふため  
と見られない醜いやな顔。

新「些ちつとは快いかえ」

豊「あい、新吉さん、私はね何どうも死度しにたいよ、私のような斯こん  
なお婆おばさんを、お前が能く看病なまをしておくれで、私はお前の様ような  
若い奇麗きれな人に看病なまされるのは氣の毒なだくと思おもうと、猶病な氣おが

重おもつて来る、ね、私が死んだら嘸さぞお前まへが楽らく々々すると思うから、  
 本当に私は一時いちじも早く楽らくに死度しどいと思うが、何なにうも死切しにきれないね」  
 新「詰つまらない事を云いうもんじゃアない、お前まへが死んだら私が楽らく  
 をしようなど、そんなことのほで看病できものが出来なるものでは無い、わく／＼  
 そんな事を思しうから上のほせるんだ、腫物できものさえ癒なおつて仕舞しやア宜い  
 いのだ」

豊「でもお前まへが厭いやだろうと思しつて、私わたしはお前まへ唯たゞの病人びやうにんなら仕方  
 もないけれども、私わたしは斯こんな顔かほになつて居ゐるのだもの」

新「斯こんな顔かほだつて腫物なまものだから癒なおれば元もとの通りになるから」

豊「癒なおればあとが引釣ひつりになると思しつてね」

新「そんなに氣きを揉もんではいけない、少しは腫はれが退ひいたようだ

よ」

豊 「嘘をお吐きよ、私は鏡で毎日見て居るよ、お前は口と心と違つて居るよ」

新 「なに違うものか、私は心配して居るのだ」

豊 「あゝもう私は早く死度い」

新 「お廃<sup>よ</sup>しよ、死<sup>しに</sup>たいくつて気がひけるじやアないか、些<sup>ちつ</sup>とは看病する身になつて御覽、何<sup>なん</sup>だつてそんなに死度いのだえ」

豊 「私が早く死んだら、お前の真<sup>しん</sup>底<sup>そこ</sup>から惚<sup>おぼ</sup>れているお久さんとも逢<sup>あ</sup>われるだろうと思<sup>おも</sup>うからサ」

## 十七

新「あゝいう事を云う、お前は何ぞなんと云うとお久さんを疑うたぐつて、ばんごと云うがね、私とお久さんと何か訳があると思つて居るのかえ」

豊「それはないわね」

新「ないものを兎や角云わなくつても宜いいじゃアないか」

豊「ないからつたつても、私と云うものがあるから、お前が惚いれているという事を、口にも出さず、情いろ夫にもなれぬと思うと、私は本当に気の毒だから私は早く死んで上げて、そうして二人を夫婦にして上げたいよ」

新「およしな、そんな詰らぬ事を、仕様がないな、本当にお前

も分らないね、お久さんだつて一人娘で、婿を取ろうと云う大事な娘だのに、そんな訳もない事を云つて疵きずを附けては、向むこうの親父さんの耳にでも入ると悪いやね、あの娘のお母つかさんは継母やかまで喧やしいから可愛かわいそうだわね」

豊「可愛かわいそうでございましょう、お前はお久さんの事ばかりかわいそうで案じられるだろうが、私が死んでもお前は可愛かわいそうだと思おもう氣遣きづかいはないよ」

新「あ、あゝいう事を、お前仕様がないね、よく考えて御覽な、全体私うちは家の者じゃアないか、仮令たとえ訳があつても隠すが当然だろ、それを訳のない者を疑つて、あるくと云うと、世間の人まですると思つて私が困るよ」

豊「御ごもつとも尤とでございますよ、でも何どうせあるのはあるのだね、私が死ねば添どうぞわれるから、何卒添どうぞわして上げたいから云うのだよ、新吉さん本当に私は因果だよ、私は何なんうも死切れないよ」

新「あゝ云う事を云う、何を証拠あんに……えゝそれはね……彼様あんな事を……又あゝいう事を……お前うちそう疑るからいけない、此の頃来たお弟子ではなし、家の為うちになるからそれはお前、お天氣がいゝとか、寒うございますとか、芝居へおいでなすつたか位のお世辞は云わなければならぬやね、それも家の為だと思おもうから云おうじゃアないか、あれサ仕様がないね、別に何も……此の間も見舞物ふたものを持って来たから台所へ行つて蓋物ふたものを明けて返す、あれサそれを、あゝいう分ぶんらぬ事を云う仕様がねえなア」

とこぼして居る所へ這入つて来たのは何も知らないお久でございます。何か三組みつぐみの蓋物へおいしいものを入れて、

久「新吉さん、今日こんにちは」

新「へエ、お出いでなさい、此方こちらへお這入りなすつて、へエ有難う、

まあ大きに落おちつき付つきました様で」

久「あのお母つかさんが上あがるのですが、つい店が明けられませんか

御無沙汰を致しますが、慥たしかお師匠すきさんがお好すきでございますから、

よくは出来ませんが何卒どうぞ召上つて」

新「有難うございます、毎度お前さんの処から心にかけて持つ

て来て下さつて有難う、錦手にしきでの佳いい蓋物たまごです、是は師匠だが大

好いすきでげす、煎豆腐いりどうふの中へ鶏卵たまごが入つて黄色くなつたの、誠に

有難う、師匠が大好、おい師匠くあのねお久さんの処からお前の好きな物を煮て持って来ておくんなすつたよ、お久さんが来たよ」

豊「あい」

とお久と云う声を聞くと、こくり起上つて手を膝について、お久の顔を見詰めて居ります。

久「お師匠さんいけませんね、お母<sup>つか</sup>さんがお見舞に上るのですが、つい店が明けられませんで、些<sup>ちっ</sup>とはお快<sup>よろし</sup>ゆうございますか」

豊「はい、お久さん 度々<sup>たび／＼</sup>御親切に有難うございます。お久さん、お前と私とは何<sup>な</sup>んだえ」

新「何を詰らない事を云うのだよ」

豊「黙っておいでなさい、お前の知った事じゃアない、お久さ



んに云いたい事があるのだよ、お久さん私とお前とは弟子師匠の間じゃアないか、何故お見舞にお出でぐない」

新「何を云うのだよ、お久さんは毎日お見舞に来たり、何うかすると日に二度ぐらゐも来るのに」

豊「黙っておいで、其様そんなにお久さんの鼻ひいき肩ばかりおしでない、それは私が斯こうしているから案じられて来るのじゃア無い、お久さんはお前の顔を見たいから度々来るので」

新「仕様がないな詰らぬ事を云つて、お久さん堪忍してね、師匠は逆上して居るのだから」

久「誠にいけませんね」

とお久は少し怖くなりましたから、こそくと台所から帰つて

しまいました。

新「困るね、えゝ、おい師匠何うしたんだ、冗談じゃアねえ、顔すから火が出たぜ、生娘めのうぶな娘こに彼様あんな事を云つて、面目めんぼく無なくつて居られやアしない」

豊「居られますまいよ、顔が見たけりやア早く追駈おつかけてお出で」

新「あゝ、いう事を云うのだもの」

豊「私の顔は斯んな顔になつたからつて、お前がそういう不人情な心とは私は知りませんでしたよ」

新「何を云うのだね、誠に仕様がねえな、些ちつと落付いてお寝よ」  
豊「はい寝ましようよ」

新吉は仕方がないから足を摩さすつて居りますと、すやく／＼疲れて

寝た様子だから、いゝ塩梅だ、此の間に御飯でも喫たべようと膳ぜんだを立ててしていると言出して、

豊「新吉さん」

新「何なんだい、肝きもを潰つぶしたねえ」

豊「私が斯んな顔で」

新「仕様がねえな冷ひえるといけないからお這入りよ」

と云う塩梅、よる夜中よなかでも、いゝ塩梅に寝附いたから疲れを休めようと思つて、ごろりと寝ようとする、

豊「新吉さんく」

と揺ゆり起すから新吉が眼さまを覚すと、ヒョイと起上つて胸むなぐら倉くらを

取つて、

豊「新吉さん、お前は私が死ぬとねえ」

と云うから、新吉は二十一二で何を見ても怖がつて尻餅をつくと云う臆病な性たちでございますから、是は不人情のようだがとて此こ処ゝには居られない、大門町へ行つて伯父と相談をして、いつその事下総の羽生村に知つて居る者があるから、其処そこへ行つてしまおうかと、種々いろく考へて居る中うちに、師匠は寝付いた様子だから、その間まに新吉はふらりと戸外そとへ出ましたが、若い時分には氣の変りやすいもので、茅町かやちようへ出て片側町かたかわまちまでかゝると、向むこうから提灯てっとうを点けて来たのは羽生屋の娘お久と云う別嬪べっぴん、

久「おや新吉さん」

十八

新「これはお久さん何処どこへ」

久「あの日野屋へ買物に」

新「思いがけない処でお目にかゝりましたね」

久「新吉さん何方どちらへ」

新「私は一寸大門町まで」

久「お師匠さんは」

新「誠にいけません、此の間はお気の毒でね、あんな事を云つて何どうもお前さんにはお気の毒様で」

久「何う致しまして、丁度好よい処でお目に掛つて嬉しいこと」

新「お久さん何処へ」

久「日野屋へ買物に」

新「本当にあんな事を云われると厭いやなものでね、私は男だから構くいませんが、お前さんは嘔さぞ腹が立つたろうが、お母つかさんには黙もって」

久「何ういたしまして、私の方ではあゝ云われると、冥みよう加がに余あつて嬉しいと思おもいますが、お前さんの方で、外聞げんがわるかろうと思おもつて、誠まことにお氣きの毒どく様さま」

新「うまく云つて、お久さん何処へ」

久「日野屋へ買物に」

新「あの師匠しせうの枕元まくらもとでお飯まんまを喫たべると、おちく咽喉のどへ通りませ

んから、何処かへ往いつてお飯を喫べようと思うが、一人では極りが悪いから一緒に往いつておくんなさいませんか」

久「私の様な者をおつれなさると外聞が悪うございますよ」

新「まあ宜いいからお出でなさい、蓮見はすみずし鮎へ参りましょう」

久「ようございますか」

新「宜いからお出でなさい」

と下心があると見え、お久の手を取つて五目鮎ごもくずしへ引張ひっぱり込む

と、鮎屋でもさしで来たから訝おかしいと思つて、

鮎「いらつしやい、お二階へあがく、あの四畳半がいゝよ」

と云うのでとんくくくくと上あがつて見ると、天井が低くつて

立つては歩かれません。

新「何なんだか極りが悪うございますね」

久「私は何どうも思いません、お前さんと差向いでお茶を一つ頂く事も出来ぬと思つて居ましたが、今夜は嬉しゆうございますよ」

新「調子のいゝことを」

女「誠に今こんにち日はお生あいにく憎様、握にぎり鮓ばかりで何なんにも出来ません、

お吸物も、なんでございます、詰らない種でございますから、海の苔りでも焼いて上げましょうか」

新「あゝ海苔で、吸物は何か一寸見みはから計つて、あとは握鮓がい

ゝ、おいゝ、お酒は、お前いけないねえ、しかし極りが悪いから、沢山は飲みませんが、五ごしやく勺ばかり味みりん酊でも何でも」

女「畏かしこまりました、御用がありましたらお呼びなすつて、此こ処い



は誠に暗うございますが」

新「何ようございます、其処そこをぴつたりメ《し》めて」

女「ハイ御用があつたらお手を、此の開きは内から鎖かき鑰がねが掛りますから」

新「お前さんとさしで来たから、女がおかしいと思つて内から鎖鑰が掛るなんて、一寸\*たかいね、お久さん何処へ」

\*「たかい目が高いの略」

久「日野屋へ来たの」

新「あ然そうく、此の間はお気の毒様で、お母つかさんのお耳へ這入つたら嘸さぞ怒りなさりやアしないかと思つて大變心配しましたが、師匠は彼あの通り仕様がないので」

久「何うも私共の母なども然う云つておりますよ、お師匠さんがあんな御病気になるのも、やっぱり新吉さん故だから、新吉さんも仕方がない、何様にも看病しなければならぬが、若いから嘸お厭だろうけれども、まアお年に比しては能く看病なさるつてお母さんも誉めて居ますよ」

新「此方も一生懸命ですがね、只煩つて看病するばかりならい、けれども、何うも夜中に胸倉を取つて、醜な顔で変な事を云うには困ります、私は寢惚て度々悔りしますから、誠に濟まないがね、思い切つて斯うふいと何処かへ行つて仕舞うかと思つて、それは下総に些の知己が有りますから其処へ行こうかと思つたので」

久「おやお前さんの田舎はあの下総なの」

新「下総と云う訳じやアないが些ちつと知って居る……伯母さんがあるのよ」

久「おやまあ。私の田舎も下総ですよ」

新「へえお前さんの田舎は下総ですか、世には似た事があるも  
のですね、然そう云えば成程お前さんの処の屋号は羽生屋と云うが、  
それじやア羽生村ですか」

久「私の伯父さんは三三藏さんぞうと云うので、親父は三九郎と云いま  
すが、伯父さんが下総に行つて居るの、私は意気地いくじなしだから迎むか  
も継母の氣に入る事は出来ないけれども、余あんなりぶち打ち擲ちやくされ  
ると腹が立つから、私が伯父さんの処とこへ手紙を出したら、そんな  
処に居らんでも下総へ来てしまえと云うから、私は事によつたら

下総へ参りたいと思います」

新「へエ然うでございますか、本当に二人が情夫か何かなれば、ずうつと行くが、何でもなくつては然うはいきませんが、下総と云えば、何んですね、累の出た処を羽生村と云うが、家の師匠などはまるで累も同様で、私をこづいたり腕を持って引張ったりして余程変ですよ、それに二人の中は色でも何でもないのに、色の様に云うのだから困ります、何うせ云われるくらいなれば色になつて、然うしてずうつと、二人で下総へ逃ると云うような粹な世界なら、何と云われても云われ甲斐がありませんが」

久「うまく仰しやる、新吉さんは実があるから、お師匠さんを可愛いと思うからこそ辛い看病も出来るが、私のような意気地な

しの者をつれて下総へ行きたいなんと、冗談にも然う仰しやうつてはお師匠さんに済みませんよ」

新「濟まないのは知つてるが、迎も家には居られませんか」

久「居られなくつても貴方が下総へ行つてしまふとお師匠さんの看病人がありません、家のお母さんでも近所でも然う云つて居りますよ、あの新吉さんが逃出して、看病人が無ければ、お師匠さんは野倒死のたれじにになると云つて居ります、それを知つてお師匠さんを置いて行つては義理が済みません」

新「そりやア義理は済みませんがね、お前さんが逃げると云えば、義理にも何にも構わず無茶苦茶に逃げるね」

久「えゝ、新吉さん、お前さんほんとうに然う云つて下さるの」

新「ほんとうとも」

久「じゃアほんとうにお師匠さんが野倒死をしても私を連れて逃げて下さいますか」

新「お前が行くと云えば野倒死は平気だから」

久「本当に豊志賀さんが野倒死になつてもお前さん私を連れて行きますか」

新「本当に連れて行きます」

久「えゝ、お前さんと云う方は不実な方ですねえ」

と胸倉を取られたから、フト見詰めて居ると、綺麗な此の娘の眼の下にポツリと一つ腫物できものが出来たかと思うと、見る間に紫立まつて膨れは上り、斯こう新吉の胸倉を取つた時には、新吉が怖いとも

怖くないともグツと息が止るとまようで、唯だ無茶苦茶に三尺の開ひらき  
戸どを打毀うちこわして駈出したが、階はしご子段だんを下りたのか転がり落おちた  
のか些ちっとも分りません。夢中で鮓屋を駈出し、トツトと大門町の  
伯父の処へ来て見ると、ぴったり閉しまつて居るからトンくくくく、

新「伯父さんくくく」

## 十九

勘「オイ騒々しいなア、新吉か」

新「え、一寸早く明けて、早く明けておくんなさい」

勘「今明ける、戸が毀れるワ、篋棒な、少し待ちな、え、仕様がねえ、さあ這入んな」

新「跡をピツタリ締めて、南無阿弥陀仏く」

勘「何だなんって己おれを拜む」

新「お前さんを拜むのではない、ハア何どうも驚きましたネ」

勘「お前のように子供みたいにあどけなくつちやア困るね、え、オイ何故師匠が彼程あれほどの大病で居るのを一人置いて、ヒヨコく看病人が外へ出て歩くよ、済まねえじゃアないか」

新「済まねえが逆とても家には居られねえ、お前さんは知らぬからだが其の様子を見せたいや」

勘「様子だつて、何どんな事があつても、己おれが貧乏して居るのに、



てめえ  
汝は師匠の家へ手伝いに往つてから、羽織でも着る様になつて、  
新吉さんくと云われるのは皆豊志賀さんのお蔭だ、その恩義を  
忘れて、看病をするお前がヒヨコく出歩いては師匠に氣の毒で  
仕様がねえ、全体師匠の云う事はよく筋がわかつているよ、伯父  
さん誠に面目ないが、打明けてお話を致しまするが、新吉さんと  
去年から訝しなわけになつて、何だか私も何う云う縁だか新吉さ  
んが可愛いから、それで詰らん事に氣を揉みまして、斯んな煩い  
になりました、就ては段々弟子も無くなり、座敷も無くなつて、  
実にこんな貧乏になりましたも皆私の心柄で、新吉さんも嘸こん  
な姿で愠氣らしい事を云われたら厭でございましょう、それで新  
吉さんが駈出してしまったのでございいますから、私はもうプツ、

り新吉さんの事は思い切りまして、元の通り、尼になった心持で  
 堅気の師匠を遣りさえすれば、お弟子も振を戻して来てくれまし  
 ようから、新吉さんには何んな処へでも世帯を持たせて、自分  
 の好いた女房を持たせ、それには沢山のことも出来ませんが、病  
 気が癒れば世帯を持つだけは手伝いをする積り、又新吉さんが煙  
 草屋をして居ては足りなからうから、月々二両や三両位はすける  
 から、何卒伯父さん立会の上、話合で、表向プツ、り  
 と縁を切る様にしたから何卒願います、と云うのだが、気の毒  
 でならねえ、あの利かねえ身体で、\*四つ手校注に乗って広袖を  
 着て、きつとお前が此家に居ると思つて、奥に先刻から師匠は来  
 て待つて居るから、行つて逢いな、気の毒だあナ」

\* 「四つ手かごの略。戸はまれに引戸ものあれど多くは垂れなり」。

新「冗談云つちやアいけない、伯父さんからかつちやアいけません」

勘「からかいも何もしねえ、師匠、今新吉が来ましたよ」

豊「おやマア大層遅く何処へ行つておいでだった」

勘「新吉、此方へ来なよ」

新「へエ、逢つちやアいけねえ」

と怖々、奥の障子を明けると、寝衣の上へ広袖を羽織つたな

り、片手を突いて坐つて居て、

豊「新吉さんお出なすつたの」

新「エ、ド何うして来た」

豊「何うして来たつてね、私が眼を覚さまして見るとお前がい  
 ないから、是は新吉さんは愛想が尽きて、私が種いろく々な事を云つて困  
 らせるから、お前が逃げたのだと思つて気が付くと、ホツと夢の  
 覚めたようであゝ悪い事をして嘸さぞ新吉さんも困つたらう、厭いやだつ  
 たらうと思つて、それから伯父さんにね、打明けて話をして、私  
 も今迄の心得違さがいは伯父さんに種々詫言わびごとをしたが、お前とは年も  
 違たうし、お弟子は下り、世間の評判になつてお座敷もなくなり、  
 仮令たとえ二人で中よくして居ても食くい方かたに困るから、お前はお前で年  
 頃の女房を持てば、私は妹だと思つて月々沢山たんとは出来ないが、元  
 の様に二両や三両ずつはすける積り、伯父さんの前でフツ、リ縁

を切るつもりで私が来たんだよ、利かない身体で漸やっと来たのでございませぬ、何卒どうぞ私が今までの了簡りょうかん違ちがいをした事は、お前腹も立つだろうが堪忍して、元の通りあかの他人とも、又姉きょうだい弟とも思つて、未長くねえ、私も別に血縁たよりがないから、塩梅の悪い時はお前と、お前のお内儀かみさんが出来たら、夫婦で看病でもしておくれ、死しにみず水だけは取つて貰もらいたいと思つて」

勘「師匠、此の通り誠に子供同様で、私も誠に心配して居る、またお前さんに恩になつた事は私が知つて居る、おい新吉冗談じやアねえ、お師匠さんに義理が悪いよ、本当にお前めえには困るナ」

新「なア二師匠お前が種々な事を云いさえしなければいゝけれども：お前さつきどこ先刻何処かの二階へ来やアしないかえ」

豊 「何処へ」

新 「鮫屋の二階へ」

豊 「いゝえ」

新 「なんだ、そうすると矢張りやっぱあれは気のせえかしらん」

勘 「何をぐずぐず云うのだ、お前めえ附いて早く送って行きな、ね、

師匠そこはお前さんの病気が癒なおつてからの話合だ、今其の塩梅の

悪い中で別れると云つたつて仕様がねえ、私も見舞に行きたいが、

一人の身体で、つまらねえ店でも斯こうして張つてるから、店を明

ける事も出来ねえから、病気の癒る間新吉を上げて置くから、ゆ

つくり養生して、全快の上で何どうとも話合をする事にね、師匠：

…ナニお前めえ送って行きねえ、師匠、お前さん四つ手でお出いでなすつ

だが、彼あれじゃア乗りにくいと思つて今\*あんぽつをそう言つたら、あんぽつでお帰りなさいよ、エ、何なんだい」

\*「町人の用うるかごの一種四つ手より上等にして戸は引戸」  
駕籠屋「此方こつちから這入りますか駕籠屋でげすが」

勘「ア駕籠屋さんか、アノ裏へ廻つて、二軒目だよ、其の材木が立掛けて有る処から漬物屋の裏へ這入つて、右へ附いて井戸端を廻つてネ、少し：二間けんばかり真直まっすぐに這入ると、己おれの家の裏口へ出るから、エ、なに、知れるよ、あんぽつぐらいは這入るよ」

駕「へエ」

勘「じゃア師匠、私が送りたいが今云う通り明ける事が出来な  
いから、新吉が附いて帰るから、ね、師匠、新吉の届かねえ処は、

年もいかねえから勘弁して、ね、私が附いてるからもう不実な事はさせません、今迄の事は私が詫<sup>わ</sup>びるから……冗談じゃアねえ……新吉、お送り申しな、オイ今<sup>あけ</sup>明るよ、裏口へ駕籠屋が来たから明けて遣<sup>や</sup>りな、おい御苦労、さア師匠、広袖を羽織つていゝかえ」

豊「ハイ伯父さんとんだ事をお耳に入れて誠に」

勘「宜<sup>い</sup>いからさア掴<sup>つか</sup>まつて、いゝかえ、おい若<sup>わか</sup>衆<sup>かいしゆ</sup>お頼申すよ、病人だから静かに上げておくれ、いゝかえ緩<sup>ゆる</sup>くりと、此の引戸を立てるからね、いいかえ」

と云うので引戸をメ《し》めてしまうと、

新「じゃア伯父さん提灯を一つ貸して下さいな、弓張でもぶらでも何<sup>なん</sup>でも宜<sup>い</sup>いから、え、蠟<sup>ろうそく</sup>燭が無けりやア三ツばかりつない



で、え、箸を入れてはいけませんよ、焙あぶればようございます」

男「御免なさい」

トシく。

勘「へエ、どなた何方でげす」

男「新吉さんは此方こちらですか、新吉さんの声の様ですね、え、新吉さんかえ」

勘「へエ何方でげすえ、へエ：ねえ新吉、誰かお前の名を云つて逢いたいと云つてるから明けねえ」

新「おやお出でなさい」

男「おやお出でじゃアねえ、新吉さん困りますね、病人を置いて出て歩いては困りますね、本当に何様どんなに搜したか知れない、時

にお気の毒様なこと、お前さんの留守に師匠はおめでたくなつてしまつたが、何うも質すじの悪い腫物できものだねえ」

## 二十

新「何を詰らない事を、善六さん極きまりを云つてら了」

善「極りじゃアねえ」

新「そんな冗談云つて、いやに気味が悪いなあ」

善「冗談じゃアねえ、家内がお見舞に往つた処が、お師匠さんが寝てえると思つて呼んで見ても答がねえので、驚いて知らせて来たから私も行き彦六さんも皆みんな来て、何う斯こうと云つた処が何う

しても仕ようがねえ、新吉さん、お前めえが肝腎の当人だから漸ようやく搜して来たんだが、あのくらいな大病たいびよう人にんを置いて出歩いちやアいけませんぜ」

新「ウー、ナン、伯父さんく」

勘なん「何だよお前めえ、御挨拶もしねえで、お茶でも上げな」

新「お茶どころじゃアねえ、師匠が死んだって長屋の善六さんが知らせに来てくれたんだ」

勘「何を馬鹿な事を云うのだ、師匠は来て居るじゃアねえか」

新「あのね、御冗談仰しやっちゃアいけません、師匠さつきは先刻さつきから此方こつちへ来て居て、是から私が送って帰ろうとする処なん、何の間違

いでげしよう」

善「冗談を云つちやアいけません」

彦「是は何なんだぜ、善六さんの前だが、師匠が新吉さんの跡を慕つて来たかも知れないよ、南無阿弥陀仏く」

新「そんな念仏などを云つちやアいけないやねえ」

善「じゃアね新吉さん、彦六さんの云う通りお前の跡めえを慕つて師匠が来たかも知れねえ」

新「伯父さんく」

勘「うるさいな、ナニ稀代きたいだつて、師匠は来てえるに違ちげえねえ、今連れて行くんじやアねえか」

と云いながらも、なんだか訝おかしいと思うから裏へ廻つて、

勘「若わかいしゆ衆 少し待つておくんなさい」

新「長屋の彦六さんがからかうのだから」

勘「師匠く」

新「伯父さんく」

勘「え、よく呼ぶな、何だえなん」

新「若衆少し待っておくれ、師匠く」

と云いながら駕籠の引戸を明けて見ると、今乗ったばかりの豊志賀の姿が見えないので、新吉はゾツと肩から水を掛けられる様な心持で、ブルくふる慄えながら引戸をバタリと立て、台所へはいあ這上ありました。

勘「何なんて真似をして居るのだ、ぐずくなんして何だ」

新「伯父さん、駕籠の中に師匠は居ないよ」

勘「エ、居ねえか本当か」

新「今明けて見たら居ねえ、南無阿弥陀仏く」

勘「厭いやだな、本当に涙をこぼして師匠が己おれに頼んだが、お前めえが家うちを出なければ斯こんな事にはならねえ、お前めえが出て歩くから斯んな事に、オイ表に人が待つて居るじゃアねいか己おれが出よう」

と云うので店へ出て参りまして、

勘「お長屋の衆、大きに御苦勞様で、実は新吉は、私よんどころに抛ない

用事があつて、此方こちらへ参つて居る留守中に師匠が亡なりました、

皆さん方が態々わざく知らして下さつて有難うございます、生あいにくし憎死

目にめに逢いませんで、貴方がたも誠こまりにお困でございましょう、実に

新吉も残のこりお惜しく思います、何れいず只今私も新吉と同道で参ります

から、へエ有難う、誠に御苦労様で」

長屋の者「左様で、じゃアお早くお出いでなすつて」

勘「只今私が連れて参ります、誠に御苦労様、馬鹿」

新「其そん様に叱ちつちやアいけません、怖い中で叱ちられて堪たまるもの

か」

勘「己おれだつて怖いや、若衆大きに御苦労だつたが、待まち賃ちんは上

げるがもう宜しいから帰つておくんなさい」

駕籠屋「へエ、何方どなたかお乗りなすつたが、駕籠は何ど処どこへ参りま

す」

勘「駕籠はもう宜しいからお帰りよ」

駕「でも何方かお女中が一人お召しなすつたが」

勘「エ、ナニ乗つたと見せてそれで乗らぬのだ、種々いろく訳があるから帰つておくれ」

駕「左様でげすか、ナ、オイ駕籠はもう宜いと仰しやるぜ」

駕「いゝつたつて今明けてお這入んなすつた様だつた、女中がネ、然うでないのですか、何だか訝おかしいな、じゃア行ゆこうよ」

と駕籠を上げに掛ると、

駕「若もしく、お女中が中に這入つて居るに違いございません、駕籠が重うございますから」

新「エ、南無阿弥陀仏」

勘「オイ駕籠屋さん、戸を明けて見な」

駕「左様そうでげすか、オヤくく成程居ない、氣せえの故おもで重おもてえ



と思つたと見える、成程何方どなたも入らつしやいません、左様さやうなら」  
 勘「これ新吉、表を締めなよ手前てめえのお蔭で本当に此の年になつて初めて斯こんな怖い目に遇あつた、家は閉うちめて行くから一緒に行いきな」

新「伯父さんく」

勘「何なんだよ、いやに続けて呼ぶな、跡の始末を附つけなければならねえ」

と云うので是から家うちの戸締りをして弓張を点つけて隣へ頼たのんで置いて大門町から出かけて行ゆきます。新吉は小さくなつて慄ふるえながら仕方なしに提灯を持って行ゆく、

勘「さア新吉、然そう後あとへ退さがつては暗くつて仕様がねえ、提灯持

は先へ出なよ」

新「伯父さんく」

勘「なぜ然う続けて呼ぶよ」

新「伯父さん、師匠は全く私を怨んで来たのに違いございませ  
んね」

勘「怨んで出るとも、手前考えて見ろ、彼までお前が世話にな  
つて、表おもてむき向亭主ではねえが、大事にしてくれたから、どんな

無理な事があつても看病しなければならねえ、それをお前が置い  
て出りやア、口惜くやしいと思つて死んだから、其の念が来たのだ、死  
んで念の来る事は昔から幾らも聞いている」

新「伯父さん私は師匠が死んだとは思いません、先刻逢さつきつたら、

矢張<sup>やっぱり</sup>平常<sup>ふだん</sup>着て居る小紋の寝衣<sup>ねまき</sup>を着て、涙をボロ／＼<sup>こぼ</sup>翻<sup>ひ</sup>して、私  
 が悪いのだから元の様に綺麗さっぱりとあかの他人になつて交際<sup>つきあ</sup>  
 います、又月々幾ら送りますから姉だと思つてくれと、師匠が膝  
 へ手を突いて云つたぜ、ワア」

勘「ア、何だ<sup>なん</sup>／＼、エ、胆<sup>きも</sup>を潰した」

新「ナニ白犬が飛出しました」

勘「ア、胆を潰した、其の声は何だ、本当に魂<sup>たまげ</sup>消るね、胸が痛  
 くなる」

と慄<sup>ふる</sup>えながら新吉は伯父と同道で七軒町へ帰りまして、是<sup>こ</sup>れか  
 ら先<sup>ま</sup>ず早桶<sup>あつち</sup>を誂<sup>ゆかん</sup>え湯灌をする事になつて、蒲団を上げ様とすると、  
 蒲団の間に挿<sup>はさ</sup>んであつたのは豊志賀の書<sup>かき</sup>置<sup>おき</sup>で、此の書置を見て

新吉は身の毛もよだつ程驚きましたが、此の書置は事細かに書<sup>かき</sup>遺<sup>こ</sup>しました一通では何<sup>なん</sup>と書いてございますか、此の次に申し上げます。

## 二十一

ちと模様違いの怪談話を筆記致しまする事になりました、怪談話には取わけ小相<sup>こあい</sup>さんがよかろうと云うのでございますが、傍聴筆記でも、怪談のお話は早く致しますと大きに不都合でもあり、又怪談はネンバリくと、静かにお話をする、却<sup>かえ</sup>つて怖いものでございますが、話を早く致しますと、怖みを消すと云う事を仰

しやる方がございます。処わたくしが私は至つて不弁で、ネト／＼話を致す所から、怪談話がよかろうと云う社中のお思い付でございます。只今では大抵の事は神経病と云つてしまつて少しも怪しい事はござりません。明あきらかな世の中でございりますが、昔は幽霊が出るのは崇たりがあるからだ怨うらみの一念三世さんぜに伝わると申す因縁話を度たび々々承まわりました事がございます。豊志賀は実に執念深い女で、前申上げた通り皆川宗悦の惣領娘でございます。此処こゝに食いそ客ろうに参つていて夫婦同様になつて居た新吉と云うのは、深見新左衛門の二男、是も敵かたき同士の因縁で斯様かようなる事に相成ります。豊志賀は深く新吉を怨んで相果てましたから、其の書かき遺のこした一通を新吉が一人で開いて見ますると、病人のことで筆も思う様には廻りま

せんから、慄ふるえる手で漸よう々書きましたと見え、その文には『心得違いいにも、弟か息子の様な年下の男と深い中になり、是まで親切を尽したが、其の男に実意が有ればの事、私が大病で看病人も無いものを振捨て、出る様なる不実意な新吉と知らずに、是まで亭主と思ひ真実を尽したのは、実に口惜しいから、仮令たとえ此の儘死ねばとて、この怨は新吉の身体に纏まつつて、此の後ご女房を持つてば七人まではきつと取殺すから然そう思え』と云う書置で、新吉は是を見てゾツとする程驚きましたかようが、斯様な書置を他人に見せる事も出来ません、さればと申して、懐へ入れて居ても何なんだか怖くつて気味が悪いし、何どうする事も出来ませんから、湯灌とさきまちの時に窃そつとごまかして棺桶の中へ入れて、小石川戸崎町とさきまち清松院せいしよういんと云う寺

へ葬りました。伯父は、何でも法事供養をよく為なければいかな  
いから、墓参りに往いけよくと云うけれども、新吉は墓はかしよ所しよへ行ゆ  
くのは怖いから、成なるたけ昼間往ゆこうと思つて、昼ばかり墓参りに  
往ゆきます。八月二十六日が丁度みなのか三七日かで、其の日には都合が悪く  
墓参りが遅くなり、申な刻つぎ下りに墓参りをするものでないと其の頃  
申しましたが、其の日は空が少し曇つて居るから、急ぎ足で参つ  
たのは、只今の三時少し廻つた時刻、寺の前でお花を買つて、あ  
の辺は井戸が深いから、漸ようやくの事で二つの手桶へ水を汲んで、両  
方の手に提さげ、お花を抱えて石坂を上あつて、豊志賀の墓場へ来る  
と、誰たれか先に一人拜んで居る者が在あるから誰たれかと思つてヒョイと  
見ると、羽生屋の娘お久、

久「おやく〜新吉さん」

新「おやく〜お久さん、誠に何うも、何うしてお出でなすつた、  
悔びつくりました」

久「私はね、アノお師匠さんのお墓参りをして上げたいと心に  
掛けて、間まさえあれば七日〜には屹きつと度参ります」

新「そうですか、それは御親切に有難う」

久「お師匠さんは可哀相な事でした、其の後のちお目に掛りません  
が、貴方は嘸さぞお力落しでございましょう」

新「へエ、もう何うも落がっかり胆どしました、是は大層結構なお花を  
有難う、何うも弱りましたよお久さん」

久「アノお前さん此の間蓮見鮎の二階で、私を置おきつ放ばなしにし



て帰ってお仕まいなすつて」

新「え、ナニ急に用が出来ましてそれから私が慌あわて、帰つたので、つい御挨拶もしないで」

久「何なんだか私は悔なやりましたよ、私をポンと突飛ばして二階からドン／＼駈かけ下りて、私はまア何どうなすつたかと思つて居りましたら、それ切りぎでお帰りも無し、私は本当に鮎屋へ間まが悪うございますから、急に御用が出来て帰つたと云いましたが、それから一人ですから、お鮎が出来て来たのを折おりへ入れて提げて帰りました」

新「それは誠にお気の毒様で、然そう見えたので……気の故せいで見えたのだね……眼に付いて居て眼の前に見えたのだナ彼あれは……斯こ

んな綺麗な顔を」

久「何を」

新「エ、何サ宜うございます」

久「新吉さんいゝ処でお目に掛りました、私は疾とうからお前さんにお話をしようと思つて居りましたが、私の処のお母つかさんは継まは母でございますから、お前さんと私なんと、何でも訳があるように云つて責折檻せめせつかんをします、何でも屹度きつと新吉さんと訳が有るだろう、何なんにも訳がなくなつて、お師匠さんが彼様あんなに愷りんき氣らしい事を云つて死ぬ氣遣いは無い、屹度訳があるのだから云えと云うから、いゝえお母さんそんな事があつては済みませんから、決して然そう云う事はありませんと云うのも聴かずに、此の頃はぶち打ちようちやく擲

するので、私は誠に辛いから、いつそ家を駈出して、淵川ふちかわへでも身を沈めて、死のうと思う事が度々たび／＼ございますが、それも余り無分別だから、下総の伯父さんの処へ逃げて行きたいが、まさかに女一人で行かれもしませんからね」

## 二十二

新「それじゃア下総へ一緒に行きましようか」

と又怖いのも忘れて行くゆ気になると、

久「新吉さん本当に私を連れて行つて下さるなら、私は何様どのようにも致します、屹度、お前さんすえ末始終そ然う云う心なら、彼方あっちへ行

けば、伯父さんに頼んで、お前さん一人位何うにでも致しますから、何卒連れて行つて」

と若い同士とは云いながら、そんなら逃げよう、と直に墓場から駈落をして、其の晩は遅いから松戸へ泊り、翌日宿屋を立つ

て、あれから古賀崎の堤へかゝり、流山から花輪村鰯ヶ崎へ出

て、鰯ヶ崎の渡を越えて水街道へかゝり、少し遅くはなりまし

たが、もう直に羽生村だと云う事だから、行くことにしよう、併

し彼方で直に御飯をたべるも極りが悪いから、此方で夜食をして

行こうと云うので、麴屋と云う家で夜食をして道を聞くと、こ

れくで渡しを渡れば羽生村だ、土手に付いて行くと近いと云う

ので親切に教えてくれたから、お久の手を引いて此処を出ました

のが八月二十七日の晩で、鼻を撮つままれるのも知れませんと云う真  
 の闇、殊ことに風が吹いて、顔へポツリと雨がかゝります。あの辺は  
 筑波山つくばやまから雲が出ますので、是からダラ／＼と河原へ下りまし  
 て、渡しを渡つて横曾根村よこぞねむらへ着き、土手伝いに廻つて行くと羽生  
 村へ出ますが、其所そこは只今もつ以て累ヶ淵と申します。何う云う訳か  
 と彼方あちらで聞きましたら、累が殺された所で、與右衛門よえもんが鎌で殺し  
 たのだと申しますが、それはうそだと云う事、全くは鹿朶そだを沢どつさ  
 山脊りしよ負よわして置いて、累を突飛ばし、砂の中へ顔の滅めりこ込こむよう  
 にして、上から與右衛門が乗掛つて、砂で息を窒とめて殺したと云  
 うが本説だと申す事、また祐天ゆうてんおしやう和尚しゆぎやうちゆうが其の頃脩しゆぎ行ようちゆう中ちゆうの  
 事でございますから、頼まれて、累が淵むしろへ菴かぬを敷いて鉦かねを叩いて

念仏供養を致した、其の功力くりきに依よつて累が成仏得脱とくだつしたと云う、  
 累が死んで後絶のちえず絹川の辺ほとりには鉦の音が聞えたと云う事でござ  
 いますが、これは祐天和尚がカン／＼／＼／＼叩いて居たのでご  
 ざいましょう。それから土手伝いで参ると、左りへ下りるダラノ  
 下り口があつて、此処こゝに用水があり、其の用水辺べりにボサツカと  
 云うものがあります。是は何どう云う訳か、田舎ではボサツカと云  
 つて、樹きか草か分りません物が生えて何なんだかボサツカ／＼致して  
 居る。其所そこは入いり合あいになつて居る。丁度土手伝いにダラ／＼下りお  
 に掛ると、雨はポツリ／＼降つて来て、少したつとハラ／＼／＼  
 と烈しく降出しそんな気色けしきでございませぬ。すると遠くでゴロ／＼  
 と云う雷鳴で、ピカリ／＼と時々電いなびかり光かりが致します。

久「新吉さんく」

新「えゝ」

久「怖いじゃアないか、雷様が鳴つてね」

新「ナニ先刻さつき聞いたには、土手を廻つて下りさえすれば直すぐに羽生村だと云うから、早く行つて伯父さんに能く話よをしてね」

久「行きさえすれば大丈夫、伯父さんに話をするから宜いいが、暗くつて怖くつて些ちつとも歩けやしません」

新「サ此方こつちだよ」

久「はい」

と下りようとすると、土手の上からツルくと滑つて、お久が膝を突くと、

久「ア痛タ、」

新「何うした」

久「新吉さん、今石の上か何かへ膝を突いて痛いから早く見ておくんないよ」

新「どう／＼、おゝゝ大層血が出る、何うしたんだ、何の上へ転んだ、石かえ」

と手を遣ると草苳鎌。田舎では、草苳に小さい子や何かゞ秣を苳りに出て、帰り掛に草の中へ標に鎌を突込んで置いて帰り、翌日来て、其処から其の鎌を出して草を苳る事があるもので、大かた草苳が置いて行つた鎌でございました。お久は其の上へ転んで、ズブリ膝の下へ鎌の先が這入つたから、夥しく血が流れる。



新「こりやア、困ったものですね、今お待ち手拭で縛るから」

久「何<sup>ど</sup>うも痛<sup>いた</sup>くつて耐<sup>た</sup>まらないこと」

新「痛<sup>いた</sup>いたつて真<sup>ま</sup>暗<sup>くら</sup>で些<sup>ち</sup>とも分<sup>わ</sup>らない、まアお待ち、此の手拭で縛<sup>わ</sup>つて上げるから又一<sup>こ</sup>つ斯<sup>こ</sup>う縛<sup>わ</sup>るから」

久「あゝ大きに痛<sup>いた</sup>みも去<sup>い</sup>つた様でございますよ」

新「我慢してお出<sup>い</sup>でよ、私<sup>わ</sup>が負<sup>お</sup>い度<sup>た</sup>いが、包<sup>た</sup>を脊<sup>し</sup>負<sup>よ</sup>つてるから負<sup>お</sup>う事<sup>じ</sup>が出来<sup>あ</sup>らないが、私<sup>わ</sup>の肩<sup>か</sup>へ確<sup>し</sup>り攪<sup>か</sup>まつてお出<sup>い</sup>でな」

と、びっこ引<sup>ひ</sup>きなから、

久「あい有<sup>あ</sup>難<sup>が</sup>う、新<sup>あ</sup>吉<sup>き</sup>さん、私<sup>わ</sup>はまア本<sup>ま</sup>当<sup>だ</sup>に願<sup>ね</sup>いが届<sup>と</sup>いて、お

前さんと二人で斯う遣つて斯んな田舎へ逃げて来ましたが、是から世帯しよたいを持つて夫婦中能なかよく暮せれば、是程嬉しい事はないけれども、お前さんは男おとこぶり振はは好よし、浮気者と云う事も知つて居るから、ひよつとして外ほかの女と浮気をして、お前さんが私に愛想が尽きて見捨てられたら其の時は何うしようと思つと、今から苦勞でなりませんわ」

新なん「何だね、見捨てるの見捨てないのと、昨夜初ゆうべめて松戸へ泊つたばかりで、見捨てるも何も無いじゃアないか、訝おかしく疑るね」  
久ひさ「いゝえ貴方は見捨てるよ、見捨てるような人だもの」

新なん「何でそんな、お前の伯父たよさんを使つて厄介やくわいになろうと云うのだから、決して見捨てる氣遣きづかいはないわね、見捨てれば此方こつちが

困るからね」

久「旨く云つて、見捨てるよ」

新「何故そう思うんだね」

久「何故だつて、新吉さん私は斯こんな顔になつたよ」

新「えゝ」

と新吉が見ると、お久の綺麗な顔の、眼の下にポツリと一つの腫しゅもつ物が出来たかと思うと、忽たちまち腫れ上つてまるで死んだ豊志賀の通りの顔になり、膝に手を突いて居る所が、鼻を撮つままれるも知れない真の闇に、顔ばかりありくと見えた時は、新吉は怖い三ざ昧んまい、一生懸命無茶苦茶に鎌で打ぶちましたが、はずみとは云いながら、逃げて掛りましたお久の咽喉のどぶえへ掛りましたから、

久「あつ」

と前へのめる途端に、研澄とぎすました鎌で咽喉を斬られたことでございますから、お久は前へのめつて、草を掴んで七転八倒の苦しみ、

久「うゝン恨めしい」

と云う一ひとこえ声で息は絶えました。新吉は鎌を持ったなり

新「南無阿弥陀仏くくく」

と一生懸命に口の中で念仏を唱えまする途端に、ドウくと云う車軸を流すような大雨、ガラくくくくと云う雷鳴頻しきりに轟とどろき渡るから、知らぬ土地で人を殺し、殊ことに大雨に雷鳴ゆえ、新吉は怖い一いっさんまい三昧、早く逃げようと包を脊負しよつて、ひよつと人

に見られてはならぬと慄<sup>ふる</sup>える足を踏締めながらあせります。すると雨で粘<sup>ねばつち</sup>土が滑るから、ズリ滑つて落ちると、ボサツカの脇の処へズデンドウと臀<sup>しりもち</sup>餅を搗きます、とボサツカの中から頬<sup>ほ</sup>かぶり冠をした奴がニヨコリと立つた。此の時は新吉が驚きましたの驚きませんのではない。

## 新「ア」

と息が止るようで、後へ退<sup>あと</sup>つて向を見透<sup>さが</sup>すと、向の奴も怖かつたと見えて此方<sup>こつち</sup>を覗<sup>のぞ</sup>く、互<sup>たがい</sup>に見合いました、何様真<sup>ま</sup>の闇で、互<sup>にら</sup>に睨<sup>にら</sup>みあつた処が何方<sup>どつち</sup>も顔を見る事が出来ません。新吉は電<sup>いなびか</sup>光<sup>り</sup>の時に顔を見られないようにすると、其の野郎も雷<sup>らい</sup>が嫌いだと見えて能<sup>よ</sup>く見る事も致しません。電光の後で闇<sup>くら</sup>になると、

## 男「この泥坊」

と云うので新吉の襟を掴みましたが、是は土手下の甚藏じんぞうと云う悪漢わるもの、只今小博奕こばくちをして居る処へ突いきなり然手が這入り、其処そこを潜り抜けたが、烈しく追手が掛りますから、用水の中を潜り抜けてボサツカの中へ小さくなつて居る処へ、新吉が落ちたから、驚いてニヨコリと此の野郎が立つたから、新吉は又怪物ばけものが出たかと思つて驚きました、新吉は襟がみを取られた時は、もう天命きま極きわまつたとは思つたが、死物狂いで無茶苦茶に搔かきむしるから、此の土手の甚藏が手を放すと、新吉は逃げに掛る途端、腹這に倒れました。すると甚藏は是を追駈おっかけようとして新吉に躓つまつき向むこうの方へコロ／＼と転がって、甚藏はボサツカの用水の中へ転がり落ち

たから、此の間に逃げようとする。又後うしろから、

甚「此の野郎」

と足を取つてすくわれたから仰向に倒れる処へ、甚藏が乗掛つて掴まえようとする処を、新吉が足を挙げて股を蹴けつたのが辜きんたま丸に當つたから、

甚「ア痛タ」

と倒れる処を新吉が掴み付こうと思つたが、イヤ／＼荷物を脇へ落したからと荷物を探す途端に、甚藏の面つらへ筆むしり付いたから、

甚「此の野郎」

と組付いた処を其の手を取つて逆に捻ねじると、ズル／＼ズデンと滑つて転げると云う騒ぎで、二人とも泥ぼつけになると、三町ば

かり先へ落雷でガラ／＼／＼／＼／＼ビューと火の棒の様なる物  
 が下ると、丁度浄禅寺ヶ淵辺りへピシーリと落雷、其の響に驚  
 いて、土手の甚藏は、体は**なり**大**だい**兵**ひょう**で度胸も好**い**男だが、虫が嫌  
 うと見え、落雷に驚いてボサツカの中へ倒れました。すると新吉  
 は雷よりも甚藏が怖いから、此の間に包を抱えて土手へ這**はい**上**あ**り、  
 無茶苦茶に何処**どこ**を何う逃げたか覚え無しに、畑の中や堤**とて**を越して  
 無法に逃げて行く、と一軒茅**かやぶ**葺**ぎ**の家の中で焚**たき**物**もの**をすると見え、  
 おもて戸外へ火光が映**さ**すから、何卒**どうぞ**助けて呉れと叩き起しましたが、其  
 の家は土手の甚藏の家、間拔**うち**な奴で、新吉再び土手の甚藏に取っ  
 て押えられると云う。是から追**お**々**い**々怪談になります、一寸一息  
 つきまして。



## 二十四

一席引続きましてお聞きに入れますは、累きが淵のお話でござい  
す。新吉は土手の甚藏に引留められ、既に危あやうい処へ、浄禅寺ヶ淵  
へ落雷した音に驚き、甚藏が手を放したのを幸い、其の紛れに逃  
延なびましたが、何なにぶん分にも初めて参った田舎道、勝手を心得ませ  
んから、たゞ畑の中でも田の中でも、無茶苦茶に泥だらけになつ  
て逃げ出しまして、土手伝いでなだれを下おり、鼻を撮つままれるも知  
れません二十七日の晩でございですが、透すかして見ると一軒茅葺屋  
根の棟むねが見えましたから、是は好いい塩梅だ、此処こゝに人家があつた

と云うので、駈下りて覗くと、チラ／＼たきび焚火の明あかりが見えます。

新「へエ、御免なさい、少し御免なさい、お願いでございます」

男「誰だか」

新「へイ、わたくし私は江戸の者でございますが、御当地へ参りまして、

此の大雨に雷かみなり鳴で、誠に道も分りませんで難儀を致しますが、

少しの間お置きなすって下さる訳には参りますまいか、雨の晴れます間ですがナ」

男「ハア大雨に雷鳴で困るてえ、それだら明けて這入りなせい、  
明あける戸だに」

新「へエ左様でですか、御免なさい、慌あわてゝ居りますから戸が

隙すいて居りますのも夢中でね、ヘイ何どうも初めて参りましたが、泊とまりで聞きく参りました者で、勝手を知りませんから難儀致しまして、もう川へ落ちたり田の中へ落ちましたりして、漸よう々の事くで此方こちらまで参りましたが、何うか一晚お泊めなすつて下されますれば有難い事で」

男「泊めるたつて泊めねえたつて己おれの家うちじやアねえ、己も通り掛つて雷鳴が嫌いで、大雨は降るし、仕様が無なえが、此処こゝナ家いえへ駄だ込んで、主あるじは留守あまやだが雨止みをする間、火の気が無なえから些ちつとばかりそだ麁つつくべを突つ燻もやて燃して居るだが、己うちが家でなえから泊める訳にはいきませんが、今主あるじが帰けえるかも知んねえ、困るなれば、此こ処こゝへ来て、囲炉裡いろりの傍はたで濡れた着物を炙あぶつて、煙草でも呑んで緩ゆつく

り休みなさえ」

新「へ工貴方の家でないのうちで」

男「私わしが家では無なえが、同どうそん村の者だが雨で仕様がねえから来

ただ」

新「左様で、此方こちらの御主人様は御用でも有つてお出掛になつた

ので」

男「なアに主あるじは十日も廿日はつかも帰らぬ事もある、まア上りなさえ」

新「有難うございますが泥だらけになりまして」

男「泥だらけだつて己も泥足で駈込んだ、此方こちへ上りなさえ、

江戸の者が在郷へ来ては泊る処に困る、宿を取るには水街道へ行  
がねえば無ねえからよ」

新「はい水街道の方から参つたので、有難うございます、実に驚きました、酷ひどい雨で、此こんな様に降ろうとは思いませんでした、実に雨は一番困りますな」

男「今雨が降らんで作さくの為によく無なえから、私わしの方じゃ降ふるも些ちつとはよいちやア」

新「成程そうでしょうねえ、雷かみなり鳴には実に驚きまして、此地こつちは筑波つくば近ちかいので雷鳴は酷ひどうございますね」

男「雷も鳴る時に鳴らぬと作なの為によく無なえから鳴るもえ、だよ」

新「へエー、然そうでげすか、此方こちらの旦那様は何時頃いつごろ帰りましよ  
うか」

男「何時いつ帰けえるか知れぬが、まあ、何時帰ると私等わしらに断ことわつて出た訳わけで無なえから受合うえねえが、明あけると大概な七八日ようかぐれえ帰かえらぬ男で」

新「へエ、困こりますな、何どう云いう御商売ごしょうばいで」

男「何どうだつて遊あそび人にんだ、彼方あつち此方こつち二晩三晩にばんさんばんと何処どこから何処どこへ行くか知れねえ男で、やくざ野郎やろうサ」

新「左様さやうで、道楽だうらくなお方でござごいますので」

男「道楽だうらくだつて村むらじやア蝮まむしと云いう男おとこだけれども、又用またに立たつ男おとこ」

と悪口わるくちをきいて居ゐる処ところへ、ガラリと戸かどを明あけて帰かえつて来たが、

ずぶ濡ぬれで、

甚「あゝ酷ひどかった」

男「帰けえったか」

甚「ム、今帰けえった、誰せいだ清せいさんか、今帰けえったが、松まつが賀かで詰まらねえ小博奕こぼくちへ手を出して打うつて居ると、突だしぬけ然けに手てが這へえ入いつて、一生懸命いっしょうけんめいに逃にげたが、仕し様やまがねえから用よう水すいの中なかへ這こ入いつて、ボサツ力ちからの中なかへ隠かくれて居いた」

清「己おれは今いま通とり掛かつて雨あめに遇あつて逃にげる処ところがねえのに、雷らい様さまが鳴なつて来きたから魂たまげ消めえてお前まえらが家うちへ駈か込こんで、今いま囲い炉ろ裡らへ麁あアひとくべ一ひとくべ燻いしたゞ」

甚「いゝや何どうせ開あけツ放ばなしの家うちだアから、是これは何ど処どこの者ものだ、何なんだいお前まえは」

清「此家ここな主人あるじで、挨拶さつせえ、是は江戸の者だが雨が降つて雷鳴かみなりに驚き泊めてくれと云うが、己おれが家うちでねえからと話して居る処だ、是が主人だ」

新「左様で、初めまして、私わたくしは江戸の者で、小商こあきなを致しま

す新吉と申す不調法者、此地こちらへ参りましたが、雷鳴かみなりが嫌いで此

方様ちらさまへ駈込んだ処が、お留守様でございますから泊るとめ訳にはい

かぬと仰しやつて、お話をして居る処で、よくお帰りで、何卒どうぞ今

晩一晚お泊め下されば有難い事で、追々夜が更けますから、何卒

一晚何様どんな処でも寝かして下されば宜しいので」

甚「好いい若わえ者もんだ、いゝや、まア泊つて行きねえ、何どうせ着て

寝る物はねえ、留守勝るすがちだから食物くいものもねえ、鍋は脇へ預けてしま



つたしするから、コロリと寝て明日行きねえ、己と一緒に寝ねえ」

新「へエ、有難う存じます」

清「己おら帰けえるよ」

甚「まあく宜いやな」

清「己ア帰るべい、何か、手が這入へえったか」

甚「困ったからボサツカの中へ隠れて居たので、お前帰めえるなら  
うっかり往いつちやアいけねえ、今夜ボサツカの脇に人殺しが有つ  
た」

清「何処どこに」

甚「己がボサツカの中に隠れて居ると、暗くつて分らぬが、き  
やアと云う声がノウ女の殺される声だねえ、まあ本当に殺される

声は今迄知らねえが、劇場しばいで女が切殺される時、きやアとかあれ  
 イとか云うが、そんな事を云つたつてお前めえには分らねえが、凄すごい  
 ものだ、己も怖かつた」

清「怖おっかねえ、女をまア、何なんてエ、人を殺すつたつて村方むらかたの  
 土手じゃアねえか、ウーン怖かなかんべえ、ウーン何どうした」

甚「何なんうしたつて凄すごいやア、うっかり通つて怪我けがでもするとい  
 けねえから、其の野郎は刀や何かで殺す程の者でもねえ奴で、鎌  
 で殺しやアがつたのよ、女の死骸は川へ投ほうり込んだ様子、忌々いめえま  
 しい畜ちきしょう生しょうだ、此の村へも盗ぬす人とに這入へりやアがるだろうと思  
 うから、其の野郎の襟えりくび首を取つて引摺ひきずり倒した、すると雷が落  
 ちて、己はどんな事にも驚きやアしねえが雷には驚く、きやアと

云つて田の畔くろへ転げると、其の機はずみに逃げられたが、忌々しい事をした」

## 二十五

清 「怖おっかねえナ、然そうか怖かなくて通れねえ」

甚 「気を付けて行きねえ」

清 「まだ居るかなア」

甚 「もう居やアしめえ、大丈夫でえじようぶだ、美いゝおんな人なら殺すだろう

が、お前めえのような爺さんを殺す気遣いはねえ」

清 「じゃア己おれえ帰る、エ、じゃア又ちっ些とべえ畑の物が出来たら

くれべえ」

甚「何か持つて来て呉れても煮て食う間がねえから、左様なら、ピッタリ締めて行つてくれ、若者もつと此方へ来ねえ」

新「へエ」

甚「お前江戸から来るにやア水街道から来たか、船でか」

新「へエ渡を越して、弘教寺と云うお寺の脇から土手へ掛つ

て参りました」

甚「此方へ来る土手で能く人殺しに出会さなかつたな」

新「私は運よく出会しませんでした」

甚「まあ斯う、見ねえ、是はノ、其の女を殺した奴が投り出した鎌を拾つて来たが、見ねえ」

と鎌の刃はに巻付けてあつた手拭をぐるぐると取つて、

甚「此の鎌で殺しやアがつた、酷ひどい雨で段々血のりは無くなつたが、見ねえ、血ちが滅多おちに落ねえ物とみえて染しみこ込んで居らア、磨とぎすま澄ました鎌で殺しやアがつた、是で遣やりやアがつた」

新「へエー誠まことに何どうも怖おっかない事ことでげすナ」

甚「ナニ」

新「へエ怖こわい事ことですねえ」

甚「怖こわいたつて、此の鎌で是れで遣やりやアがつた」

新「へエ」

と鎌と甚藏を見ると、先刻襟首さつきを取つて引摺り倒した奴こいつは此奴こいつだな、と思つと、身体からだが慄ふるえて顔がんしよく色いろが違ちがうから、甚藏は物を

も言わず新吉の顔を見詰めて居りましたが、鎌をだしぬけに前へ  
 投げつけたから、新吉は悔りした。

甚「おい／＼余り薄気味あんなま うすつきみがよくねえ、今夜は泊って行きねえ」

新「ハイ大きに雨が小降こぶりになりました様子で、是で私わたくしはお暇いとまを  
 致そうと存じます」

甚「是から行つたつて泊める処とこもねえ小村こむらだから、水街道へ行  
 かなけりやア泊る旅籠屋はたごやはねえ、まア宜いいやナ、江戸子えどっこなれば懐  
 かしいや、己も本郷菊坂生れで、無懶やくざでぐずツかして居るが、小  
 博奕ばくちが出来るから此処こゝに居るのだが、お前めえも子柄こがらはよし、今の若  
 氣かぎでこんな片田舎へ来て、儲どころかる処か苦勞するな、些ちつとは訳があ  
 って来たろうが、お前が此処で小商こあきなでも仕ようと云うなら己おら

が家<sup>うち</sup>て居に貰いてえ、江戸子て工者は、田舎へ来て江戸子に遇<sup>あ</sup>う  
 と、親類にでも逢つた心持がして懐かしいから、江戸と云うと、  
 肩書ばかりで、身寄でも親類でもねえが其<sup>そこ</sup>処<sup>じょうあい</sup>ア情<sup>じょうあい</sup>合<sup>あ</sup>だ、己は  
 遊んで歩くから、家はまるで留守じゃアあるし、お前此処に居て  
 留守居をして荒物や駄菓子でも并<sup>なら</sup>べて居りやア、此処は花売や野<sup>せ</sup>  
 菜<sup>んざいもの</sup>物を売る者が来て休む処で、何<sup>なん</sup>でもポカ<sup>はけ</sup>く<sup>はけ</sup>捌<sup>は</sup>けるが、おいお  
 前留守居をしながら商<sup>あきねえ</sup>売<sup>え</sup>して居てくれ、ば己も安心して家をお  
 前に預けて明<sup>あけ</sup>るが、何も盗まれる物はねえが、一軒の主<sup>あるじ</sup>だから、  
 おいお前此処でそうして留守居をしてくれ、ば、己が帰<sup>けえ</sup>つて来て  
 も火は有るし、茶は沸いて居るし、帰つて来ても心持がい、己  
 ア土手の甚藏と云う者だが、村の者に憎まれて居るのよ、それが

ノ口をきくのが江戸子同士でなけりやア何うしても話が合わねえ、己は兄弟も身寄もねえし、江戸を喰詰めて帰れる訳でもねえから、己と兄弟分になつてくんねえ」

新「有難う存じますな、私も身寄兄弟も無い者で、少し訳があつて参りました者でございしますが、少し頼る処が有つて参りました者で、此方へ参つてから、だしぬけに亡くなりましたので」

甚「死んだのかえ」

新「へエ其処が、へエ何で、変になりましたので、へエ、何処へも参る処は無いのでございしますから、お宅を貸して下すつて商いでもさして下されば有難い事で、私は新吉と申す者で、何分親分御鼻肩にお引立を願います」



甚「話は早いがいゝが、其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>は江戸<sup>えど</sup>子<sup>こ</sup>だからのう、兄弟分の固めを仕なければならねえが、おいお前<sup>めえ</sup>田舎<sup>ちんや</sup>は堅えから、己の弟分だと云えば、何<sup>ど</sup>様<sup>な</sup>間<sup>ま</sup>違<sup>ちが</sup>いが有<sup>あ</sup>つたつてもお前<sup>めえ</sup>他人<sup>たにん</sup>にけじめを食<sup>く</sup>う気<sup>き</sup>遣<sup>や</sup>ねえ、己の事を云やア他人<sup>たにん</sup>が嫌<sup>きら</sup>がつて居<sup>ゐ</sup>るくれえだからナ、<sup>そつち</sup>其<sup>つよみ</sup>方の強<sup>つよ</sup>身<sup>み</sup>よ、さア兄<sup>き</sup>弟<sup>やう</sup>分<sup>でいぶん</sup>の固<sup>か</sup>めをして、お互<sup>たが</sup>に<sup>え</sup>のう」

新「へイ有難<sup>いと</sup>うございませぬ、何分<sup>い</sup>どうか、其の替<sup>か</sup>り身<sup>み</sup>で働<sup>はたら</sup>きます事は厭<sup>いと</sup>いませぬから、どんな事でも仰<sup>おん</sup>しやり付<sup>け</sup>て下<sup>くだ</sup>さればお役<sup>やく</sup>には立ちませぬでも骨<sup>ほね</sup>を折<sup>お</sup>ります」

甚「お前<sup>めえ</sup>幾<sup>いく</sup>才<sup>さい</sup>だ」

新「へエ二十二でございませぬ」

甚「色<sup>いろ</sup>の白<sup>しろ</sup>え好<sup>い</sup>男<sup>おとこ</sup>だね、女<sup>め</sup>が惚<sup>おぼ</sup>れるたちだね、酒<sup>さけ</sup>が無<sup>な</sup>えか

きようでえぶん  
ら兄弟分の固めには、先刻さつき一ひとく燻べしたばかりだから、微温ぬるまになつ

て居るが、此の番茶を替りに、己が先へ飲むから是を半分飲みな

新「へエー有難うございます、恰ちようど咽喉のども乾いて居りますから、

エ、有難うございます、誠まことに私わたしも力を得ました」

甚「おい兄弟分きようでえぶんだよ、いゝかえ」

新「へエ」

甚「兄弟分に成つたから兄に物を隠しちやアいけねえぜ」

新「へエく」

甚「お互たがえに悪い事も善いい事も打明けて話し合うのが兄弟分だ、

いゝか」

新「へエく」

甚「今夜土手で女を殺したのはお前めえだのう」

新「イ、エ」

甚「とぼけやアがるなエ 此こんち畜生きしやう、云いねえ、云えよ」

新「な、何を被おっしやる仰おので」

甚「とぼけやアがつて此畜生きしやうめ、先刻さつき鎌を出したら手前てめえの面つらつ

付きは變つたぜ、殺したら殺したと云えよ」

新「何どうもト、飛んでもない事を仰わたしやる、私わたくしは何どうもそんな、

外ほかの事と違ちがい人を殺すなぞと、苟かりにも私は、どうも此こち方ら様さまには

居おられませんか、へエ」

甚「居られなければ出て行け、さア居られなければ出て行きや、

無理に置きこうとは云わねえ、兄弟きやうだい分ぶんになれば善いい悪いいを明あかしあう

のが兄弟分だ、兄分あにぶんの己の口から縛らせる気遣きづけえねえ、殺したから殺したと云えと云うに」

新「何うもそれは困りますね、何もなにそんな事を、何うも是は、何うも外の事と違えますからねエ、何うもへエ、人を殺すなぞと、そんな私わたくしども、へエ何うも」

甚「此畜生分らねえ才さいづち槌づちだな、間拔め、殺したに相違ねえ、そんな奴を置くと村の難儀になるから、手前てめえを追出す代りに、己の口から訴人して、踏縛ふんじぼって代官所へでも役所へでも引くから然そう思え」

新「何うも私わたくしはもうお暇いとま致します」

甚「行きねえ、己おれが踏ふん縛じばるからいゝか」

新「そんな、何うも、無理を仰しやつて、私わたくしが何なんで、何うも」

甚「分らねえ畜生ちくせいだナ、手前てめえ殺したと打明けて云えよ、手前の

悪事を、己おれは兄あにぶん分ぶんだから云う氣遣きづけえはねえ、お互たげえに、悪事を云つ

てくれるなど隠し合かうのが兄弟きょうだいぶん分のよしみだから、是つばかりも

云わねえから云えよ、云わなければ代官所ひつぱへ引張ひつて行くぞ、さ

ア云え」

新「へエ、何うも、ちちつ：些ちつとばかり、ここ：殺ころしました」

甚「些ちつとばかり殺す奴があるものかえ、女を殺して手前てめえ金を幾

ら取った」

新「幾らにも何も取りは致しません」

甚「分らねえ事を云うな、金を取らねえで何<sup>な</sup>んで殺した、金があるから殺して取ったろう、懐<sup>ふところ</sup>に有ったろう」

新「金も何も無いので」

甚「有ると思つたのが無<sup>ね</sup>えのか」

新「十二然<sup>そ</sup>うじやアございません、あれは私<sup>わたくし</sup>の女房でございませす」

甚「分らねえ事を云う、十二此<sup>こんち</sup>畜<sup>ちぎ</sup>生<sup>し</sup>よう、女房<sup>かゝあ</sup>を何<sup>な</sup>んで殺した、外<sup>ほか</sup>に浮気な事でもして邪魔になるから殺したのか」

新「十二然<sup>そ</sup>うじやア無いので」

甚「何う云う訳だ」

新「困りますナ、じゃア私が打明けてお話致しますが、貴方決して口外して下さるな」

甚「なに、口外しねえから云えよ」

新「本当でげすか」

甚「為ないよ」

新「じゃア申しますが実は私はその、殺す気も何もなく彼処へ参りますと、あれがその、お化でな」

甚「何がお化だ」

新「私の身体へ附纏うので」

甚「薄気味の悪い事を云うな、何が附纏うのだ」

新「詳しい事を申しませんが、私は根津七軒町の富本豊志賀と申す師匠の処へ食客いそろうに居りますと、豊志賀が年は三十を越した女でですが、堅い師匠で、評判もよかったが、私が食客になりまして、豊志賀が私の様な者に一寸岡惚ちよつとおかほれをしたのでな」

甚「いやな畜生だ惚氣のろけを聞くんじやアねえ、女を殺した訳を云えよ」

新「それから私も心得わたくし違いをして、表向おもてむきは師匠と食客ですが、内所ないしょは夫婦同様で只ぶらくと一緒に居りました、そうすると此処こゝへ稽古に参ります根津の総門内の羽生屋と申す小間物屋の娘がその、私に何だか惚れたなん様に師匠に見えますので」

甚「うん、それから」



新「それを師匠が嫉妬やきもちをやきまして、何も怪しい事も無いのにワク／＼して、眼の縁ふちへポツリと腫物できものが出来まして、それが斯う膨はれまして、こんな顔になり其の顔で私の胸倉を取って恠りんき氣をしますから居いられませんか、私が豊志賀の家うちを駈出した跡で師匠が狂じにい死に死にましたので、死ぬ時の書置かきおきに、新吉と夫婦になる女は七人まで取殺すと云う書置がありましたので」

甚「ふうん 執念しゅうねん深ふけえ女だな、成程ふうん」

新「それで、師匠が亡なくなりましたから、お久と云う土手で殺した娘が、連れて逃げてくれと云い、伯父が羽生村に居るから伯父を尋ねて世帯しよたいを持つと云うので、それなら田舎へ行つて、俱ともに夫婦になろうと云う約束で出て参つたので」

甚「出て来てそれから」

新「先刻<sup>さつきあすこ</sup>彼処へ掛ると雨は降出します、土手を下りるにも、鼻<sup>つま</sup>を撮まれるも知れませんが、すると、お久の眼の下へポツ<sup>できもの</sup>りと腫物みたような物が出来たかと思うと、見て居るうちに急に腫れ上りましてねえ、へエ、貴方死んだ師匠の通りの顔になりましたまして、膝に手を付きました<sup>わたくし</sup>私の顔をじいツと見詰めて居ました時は私は慄<sup>ぞ</sup>つと致しましたので、へエ怖い一生懸命に私が斯<sup>こ</sup>う鎌で殺す気も何<sup>なんに</sup>もなく殺してしまつて見ると、其様<sup>そん</sup>な顔でも何<sup>なん</sup>でもないのです、私がしよつちゆう師匠の事ばかり夢に見るくらいでございますから、顔が眼に付いて居るので、殺す気もなくお久と云う娘を殺しましたが、綺麗な顔の娘が然<sup>そ</sup>う云うように見えたので、

見えたから師匠が化けたと思つて、鎌でやったので、へエ、やつぱり死んだ豊志賀が崇たつて居りますので、七人まで取殺すと云うのだから私の手をもつて殺さしたと思うと、実に身の毛がよだちまして、怖おそかつたの何なんのと、其の時お前さんが来て泥坊、と襟首を掴んだから一生懸命に身を振払つて逃げ、まア宜いいと思うと、一軒いっけん家が有つたから来たら、やつぱり貴方うちの家へ来たから、泡をくつたのでねえ」

甚お「ふうんそれじゃア其の師匠は手前てめえに惚おぼれて、狂くるい死じに死にんで、外ほかの女を女房にすれば取殺すと云う書置の通り崇たつて居るのだな」

新「崇たつて居るつたつて私わたくしの身体は幽霊が離れないのでへエ」

甚「<sup>きび</sup>氣味の悪い奴が飛込んで来たな、<sup>うすきび</sup>薄氣味の悪い、鎌を<sup>てめえ</sup>手前が持つて居るから悪いのだ」

新「鎌も<sup>そこ</sup>其処に落ちて有ったので、其処へお久が転んだので、膝の処へ少し<sup>きず</sup>疵が付き、介抱して居るうち<sup>そ</sup>然う見えたので、それで無茶苦茶にやったので、拾った鎌です」

甚「そうか、此の鎌は村の者の鎌だ、そんならそれで<sup>い</sup>宜いや、宜いが、おい幾ら金を取ったよう」

新「金は取りは致しません」

甚「女を連れて逃げる時、お前<sup>めえ</sup>の云うにア小間物屋の娘だお嬢さんだと云うのだ、連れて逃げるにやア、<sup>ろぎん</sup>路銀がなければいかねえから幾らか持出せと智慧を付けて盗ましたろう」

新「金も何も、私は卵塔場わたくしらんとうばから逃げたので」

甚「気味きびの悪い事ばかり云やアがつて、何なんで」

新「私わたくしは師匠はかまいの墓詣りに参りますと、お久も墓詣りに参つて居りまして、墓場でおやお久さんおや新吉さんかと云う訳で」

甚「そんな事は何どうでもいゝやア」

新「それから逃げて私わたくしは一分三朱ぶしゆと二百五十六文、女は三朱と四十八文ばかり有つたので、其の外ほかにはお花と線香を持って居るばかり、それから松戸で一晩泊りましたから、些ちっとばかり残つて居ります」

甚「一文なしか」

新「へエー」

## 二十七

甚「詰らねえ奴が飛込みやアがつたな、仕方がねえ、じゃアマア居ろ」

新「へエ何うぞ置いておくんなすつて、其の事は何うか仰しやつてはいけませんから」

甚「厄介な奴だ、畜ちきしやう生め、銭ぜにが無くて幽霊を脊負しよつて来やアがつて仕様がねえ、其処そこへ寝ろ」

と仕方が無いから其の夜は寝ましたが、翌朝よくあさから土鍋で飯は焚たきまして、お菜かずは外そとから買つて来まして喰たいますような事で、

此処こゝに居おります。甚藏はぶら／＼遊び歩きます。すると、此処から村までは彼かれ是これ四五丁程もある土手下で、花や野菜物せんさいものを担かついで来たり、肥こい桶おけなどをおろして百姓衆の休やすみ所どころで、

農夫「太左衛門何処へ行くだ」

太「今帰りよ」

農「そうか」

太「此間こねえだ勘右衛門かんえもんの所とけへ頼んで置いた、些ちつとベエごぼうだ午房種ねを貰うベエと思つてノウ」

農「然そうか、何なんとハア此の村でも段々にんぎ人氣が悪くなつて、人の心も變つたが、徳野郎あれはあのくれえふて太え奴はねえノ」

太「あの野郎何なんでも口の先で他人ひとを瞞だまして錢かを借かりる事は上手だ

が、大けえ声では云えねえが、此処な甚藏は蝮野郎でよくねえ怖かねえ野郎での中

太「今日は大分婆ア様を通るが何処へ行くだ」

農夫「三藏どんの処で法事があるので、此間此処に女が殺され

て川へ投げ込まれて有つて、引揚げて見たら、守の中に名前書

が這入つて居たので、段々調べたら三藏どんが家の姪に当る女

子で、母様が継母で、苛められて居られなくつて尋ねて来

ただが、些とは小遣も持つて居ただが、泥坊が附いて来て突

落して逃げたと云う訳で、三藏どんは親切な人で、引揚げて届

ける所へ届けて、漸く事済んで、葬りも済んで、今日は七日でお

寺様へ婆ア様達を聘つて御馳走するてえので、久し振で米の飯が



食えると云つて悦んで行きやしツけ、法蔵寺様へ葬りに成つた  
だ」

太「然うか、それで婆ア様ア悦んで行くのだ、久しく尋ねねえ  
だが秋口は用が多えで此の間買った馬は二両五粒だが、高え馬だ、  
見毛は宜いが、何うも膝頭突く馬で下り坂は危ねえの、噓ばかり  
りして屁ベエたれ通して肉おつぴり出す程だによ、婆ア様に宜し  
く云つて下せえ、左様だら」

新吉は内で此の話を聞いて居りましたが、お久を葬むつたと云  
うから参詣しなれば悪いと思ひ、

新「もし〜」

農「あゝ魂消た、何処から出ただ」

新「わたしは此処こゝに居いるので」

農「誰たれも居ねえと思つたが何なんだか」

新「只今お聞き申しましたが土手の脇で殺されました女の死骸ついでは、何なんと云うお寺へ葬りになりました、三藏さんてえお方が追ついで福くなされると聞きました、何と云うお寺へ葬りましたか」

農「法蔵寺様てえ寺で、累かさねの葬つてある寺と聞けば直じきに知れま  
す」

新「へエー成程」

農「何なんだね、なに其そ様な事ことを聞くのか」

新「私は無む尽じんのまじないに、なにそう云う仏様に線香を上げると無む尽じんが当ると云うので、へエ有難う存じます」

と、是から段々尋ねて、花と線香を持って墓場へ参りました。寺で聞けば宜しいに、己おのれが殺した女の墓所はかしよ、事によつたら、咎とがめられはしないか、と脚疵すねきずで、手桶を提さげて墓場でまごころして居る。

新「これだろう、これに違いない、是だ、花を挿さして置きさえすれば宜しい、何処どこへ葬つても同じだが、因縁とか何なんとか云うので、お久の伯父さんを使たよつて二人で逃げて来て、師匠の祟りこゝで殺したくもねえ可愛い女房を殺したのだが、お久は此処こゝへ葬りになり、己おれは、逃げれば甚藏が訴人するから、やつぱり羽生村に足を止めて墓詣はかまいりに来られる。是もやつぱり因縁の深いのだ。南無阿弥陀仏、エ、と法月童女ほうげつどうにょと、何なんだ是は子供の戒名だ」

と、頻りにまご／＼して居る処へ、這入つて来ました娘は、二  
 十才を一つも越したかと云う年頃、まだ元服前の大島田、色の白  
 い鼻筋の通つた一二重瞼ふたえまぶちの、大柄ではございますが人柄の好い、  
 衣装なりは常着ふだんぎだから好くはございませぬが、なれども村方でも大  
 尽いじんの娘と思ふ拵こしらへえ、一人付添つて来たのは肩の張つたお臀しりの大  
 きな下婢おんな、肥ふとつちようで赤ら顔、手織ておりの单衣ひとえに紫中形むらさきちちゆうがたの腹  
 合あわせの帯、手桶を提げてヒヨコ／＼遣やつて来て、

下女「お嬢様此方こちらへお出でなさいまし、此処こゝだよ、貴方あんたヨ待ち  
 なさいヨ、私わしよ能く洗うだからねえ、本当に可哀想だつて、己おらア且  
 那樣泣いた事はないけれども、お久様が尋ねて来て、顔も見ねえ  
 でおツ死ちんでしまつて憫然ふびんだつて泣いただ、本当に可哀想に、南

無阿弥陀仏くくく」

新「これだ、え、少々物が承りとうございます」

下女「何だかい」

新「へエ」

下女「何だかい」

新「真中ですとえ」

下女「イ、ヤ何だか聞くのは何だかというのよ」

新「へエと成程、この何ですかお墓は慥か川端で殺されて此の

間お検死が済んで葬になりました娘子様の御墓所でございま

すか」

下女「御墓所てえ何だか」

新「このお墓は」

下女「へエ此の間川端で殺されたお久さんと云うのを葬った墓  
場で」

新「へエ左様で、私にお花を上げさして拝まして下さいませ  
んか」

下女「お前様まえさま知つて居る人か」

新「イ、エ無尽の呪まじない咀しきみに櫛くしの葉を三枚盗むと当るので」

下女「そう云う鬮くじ引びきが当るのか、沢山花ア上げて下さえ」

新「へエく、有難う、戒名は分りませんが、あとでお寺様で承  
りましょう、大きに有難う」

と、ヒヨイと後あとへ下りさがそうにすると、娘が側に立つて居りまし

て、ジロリと横目で見ると、新吉は二十二でも小造りの性で、色白の可愛気のある何処となく好い男、悪縁とは云いながら、此の娘も、何うしてこんな片田舎にこんな好い男が来たろうと思うと、恥かしくなりましたから、顔を横にしながら横眼で見る。新吉も美しい女だと思つて立止つて見て居りました。

## 二十八

新「もしお嬢さん、このお墓へお葬りになりました仏様の貴方はお身内でございますかえ」

娘「はい私の身寄でございます」

新「へエ道理でよく似ていらつしやると思いました、イエ何、あのよく似たこともあるもので、江戸にも此こんな様事が有りましたから」

下女「あなた、何どこ処ところに居るお方だい」

新「私はあの直じき近きん処じよの者でげす、へエ土手の少し変なとこ処ところにちよつと一寸這入つて居ります」

下女「土手の変なとこ処ところてえ蒲鉾かまぼこ小屋こしやかえ」

新「乞食ではございません、其そこ処ところに懇意な者が有つて厄介になつて居るので」

下女「そうかね、それだら些ちつと遊びにお出でなさえ、直じき此この先の三藏と云うと知れますよ、質屋の三藏てえば直じき知れやす」



娘は頻りに新吉の顔を横眼で見惚れて居ると、何う云う事でございますか、お久の墓場の櫛の挿して有る間から一匹出ました蛇の、長さ彼れ是れ二二尺ばかりもあるくちなわが、鎌首を立て、ズーツと娘の足元まで這つて来た時は、田舎に馴れません娘で、

娘「あッ」

と飛び退いて新吉の手へすがりつくと、新吉も恟りしたが、蛇はまた元の様に、墓の周囲を廻つて草の茂りし間へ這入りました。娘は怖いと思ひましたから、思わず知らず飛退く機みで、新吉の手へ縋りましたが、蛇が居なくなりましたから手を放せばよいのだが、其の手が何時迄も放れません。思い内に有れば色外に頭われて、ジロリ、と互に横眼で見合いながら、ニヤリと笑う情と云

うものは、何<sup>なん</sup>とも申されません。女中は何も知りませんから、

下女「お前さん、在郷の人には珍らしい人だ、些<sup>ちつ</sup>とまた遊びに来て、何<sup>どこ</sup>処に居るだえ、エ、甚藏が処<sup>どこ</sup>に、彼の野郎評判の悪い奴<sup>わり</sup>で、彼<sup>あそこ</sup>処に、そうかえ些と遊びにお出でなさえ、嬢様お屋敷奉公に江戸へ行つて、此の頃<sup>けえ</sup>帰つても友達がねえで、話<sup>はなし</sup>しても言葉が分んねえてエ、食<sup>くい</sup>物が違つて淋しくつてなんねえテ、長く屋敷奉公したから種<sup>いろく</sup>々な芸事がある、三味<sup>さみ</sup>イおつ引<sup>ひい</sup>たり、それに本や錦絵があるから見にお出でなさえ、此の間見たが、本の間<sup>に</sup>に役者の人相書の絵が有るからね：雨が降つて来た」

新「其<sup>そこ</sup>処まで御一緒に」

娘「何<sup>ど</sup>うせお帰り遊ばすなれば私<sup>わたくし</sup>の屋敷の横をお通りになりま

すから御一緒に、あの傘を一本お寺様で借りてお出でよ」

下女「ハイ」

と下女がお寺で番傘を借りて、是から相合傘あいあがさで帰りましたが、娘は新吉の顔が眼先を離れず、くよくよして、兄に悟られまいと思つて部屋へ這入つて居ります。新吉の居場処いばしよも聞いたがうっかり逢う訳に参りません、段々だんくひかず日数も重ると娘はくよくよふさ鬱ぎ始めました。すると或夜日暮から降出した雨に、少し風が荒く降っかけましたが、門口かどぐちから、

甚「御免なさい〜」

三「誰だい」

甚「へエ旦那御無沙汰致しました」

三「おゝ甚藏か」

甚「へエ、からもう酷く降出しまして」

三「傘なしか」

甚「へエ傘の無いのでびしよ濡になりました、何うも悪い日和で、日和癖で時々だしぬけに降出して困ります：エ、お母様御機嫌よう」

三「コウ甚藏、お前もう能い加減に馬鹿も廃めてナ、大分評判が悪いぜ、何とかにも釣方で、お前の事も案じるよ、大勢に悪まれちやア仕方がねえ、名主様も睨んで居るよ」

甚「怖かねえ、からもう憎まれ口を利くから村の者は誰も私をかまつて呉れません、へエ、御免なすつて、えゝ此の間一寸嬢

さんを見ましたが、え、彼はあのお妹御様で、い、器量で大柄で人柄のいいお嬢でげすね、お前さんが時々異見を云つて下さるから、何うか止してえと思うが、資本は無し借金は有るし何うする事も出来ねえ、此の二三日は何うにも斯うにも仕様がねえから、些と許り質を取つて貰いてえと思つて、此方様は質屋さんで、価値だけの物を借りるのは当然だが、些とくどいから上手を遣わなければならねえが、質を取つてお貰え申してえので」

三「取つても宜い何だい」

甚「詰らねえ此様な物で」

と二三尺の間へ挿んで来た物に巻いて有る手拭をくるくると

取り、前へ突付けたのは百姓の持つ利鎌の錆の付いたのでござい

ます。

三「是か、是か」

甚「へえ是で」

三「此こん様な物を持って来たつて仕様がねえ、買ったつて百か二百で買える物を持って来て、是で幾いくら許ばかり欲しいのだ」

甚「二十両なくつては追附おっつかねえので、何どうか二十両にね」

三「極きまりを云つて居るぜ、戯ふざけるナ、お前めえはそれだからいけね

え、評判が悪い、五十か百で買える物を持って来て二十両貸せなんて工強迫騙ゆすりかたりみた様な事を云つては困る、此こん様な鎌は幾いくら許もある、冗談じゃアねえ、だから村にも居られなくなるのだよ」

甚「旦那、只の鎌と思つてはいけねえ、只の鎌ではねえ、百姓

の使うただの鎌とお前まえさん見てはいけねえ」

三「誰が見たつて百姓の使う鎌だ、錆だらけだア」

甚「錆びた処ねうちが価値ねうちで、能よつく見て、錆びたところに価値ねうちが有るので」

三「何どう」

と手に把とつて見ると、鎌の柄えいに丸の中に三の字の焼印やきいんが捺おしてあるのを見て、

三「甚藏、是は己おれの家の鎌だ、此の間與吉よきちに持たして遣やつた、

是は與吉の鎌だ」

甚「だから與吉が持つてればお前まえさんの処ところの鎌でしょう」

三「左様」

甚「それだから」

三「何が」

甚「何がって、旦那此の鎌はね、奥に誰も居やアしませんか」

三「誰も居やアせん」

甚「此の鎌に就いて何うしてもお前さんが二十両私にくれて宜い、私の親切をネ、鎌は詰らねえが私の親切を買って」

二十両何うしてもくれても宜い訳を話を致しますが、一寸一息吐きまして。

## 二十九



引続きまして申上げました羽生村で三藏と申すは、質屋をして居りまして、田地でんじの七八十石も持つて居ります可かなりの暮しで、斯か様に良い暮しを致しますのは、三右衛門と云う親父おやじが屋敷奉公致して居るうち、深見新左衛門に二拾両の金を貰つて、死骸の這入りました葛籠つづらを捨てまして国へ帰り、是こゝが資本もとでで只今は可なりに暮して居る。一体三藏と云う人は信しん実じつな人で、江戸の谷中七面前の下總屋と云う質屋の番頭奉公致して、事柄わがの解わかつた男でございますから、

三「コウお前まえそう極きまりで其様そんな分ぶんらねえ事を云うが、己おれだから云うが、いゝか、何が親切しんせつで何どう云う訳わけが有あつたつて草苅鎌くさきりを持つて来て二十両金を貸せなどと云つて、村の者もお前まえを置めいては

為にならねえと云う、此の間何と云った、私は此の村を離れましては何処でも鼻撮みで居処もございませぬから、元の如く此の村に居られる様にして呉れと云うから、名主へ行つて話をし、彼れは外面は瓦落くして、鼻先ばかり悪徒じみて居りますが、腹の中はそれほど巧のある奴では無いと、斯う己が執成して置いたから居られる、云はゞ恩人だ、それを背くかお前、何で鎌を、何う云う訳で親切などと下らぬ事を云うんだえ」

甚「それなら打明けてお話申しますが此の間松村で一寸小博突へ手を出して居るとだしぬけに御用と云うのでバラく逃げて入江の用水の中へ這入つて、水の中を潜り込んで土手下のボサツカの中へ隠れて居ると、其処で人殺しがあり、キアツと云う女の

声で、私も薄気味わつち うすきびが悪いから首を上げて見たが暗くつて訳が分ら  
 ず、土砂降だが、稲光がピカ／＼する度時たび々斯う様子が見えると、  
 女を殺して金を盗んだ奴がある、宜うがすか、判然はつきり分りません  
 が、其の跡へ私が来て見ると、此の鎌が落ちて居る、此の鎌で殺  
 したか、柄えにベツタリ黒いものが付いて有るのは血のりじみサ、取上  
 げて見ると丸に三の字の焼印が捺して有る、宜うがすか、旦那の  
 家うちの鎌、ひよつとして他の奴ほかが、此の鎌が女を殺した処ところに落ちて  
 有るからにやア此の鎌で殺したと、もしやお前まえさんが何様どんな係り  
 合になるめえ物でもねえと思ひ、幸い旦那の御恩返ごおんげえしと思つて、  
 私が拾つて家うちへ歸けえつて今迄隠して居た、宜うがすか、お前まえさんの  
 処ところで死骸しがいを引取つて己の家の姪めえと云うので法事も有つたのだから、

お前めえさんの処で女を殺して物を取った訳はねえが、悪い奴わりが拾い  
 でもすると、お前めえさんは善い人と思つては居るが、そう村中みん  
 なお前めえさんを誉ほめる者ばかりじゃアねえ、其の中うちには五人や八人は  
 彼あんな様になれる訳はねえと、工面いけんが良いと憎まれる事も有りましよ  
 う、それから中には悪く云う奴もある私わたしと斯こう中なか好く、お前まえさん  
 は江戸に奉公して江戸子同様と云うので、甚藏しんざうや悪い事わりはするナ、  
 と番ばん毎ごとに斯こう云つてお呉くんなさるは有あり難がたえと思つて居るが、  
 私わたしがお前めえさんに平生ふだんお世話に成つて居りますから、娘を殺して金  
 を取るような人でねえ事は知つて居りますが、宜よろうがすか、お前めえ  
 さんと若もし私わたしが中ちゆうが悪くつて、忌い々えましい奴だ、何どうかしてと思  
 つて居いれば、私わたしが鎌かまを持つて、斯こうだ此こゝの鎌かまが落ちて有あつた是こゝは

三藏とこの処とこの鎌だと振廻して役所へでも持出せば、お前めえさんの腰へ  
 否いやでも縄が付く、然そうでないまでも、十日でも二十日でも身動き  
 が出来ねえ、然そうすりやア年をとったお母様ふくろさまはじめ妹いもうとご 御も心  
 配だ、其の心配を掛けさせ度たくねえからねえ、然そう云う馬鹿があ  
 るめえものでもねえのサ、私などは随分遣やり兼ねかねえ性質だ、忌いめえ  
 々ましいと思えば遣やる性質だけれども、御恩になつて居るから、  
 旦那が殺したと思きづけえう気遣きづけえもねえけれども、理屈を付ければまア何ど  
 うでもなるのサ、彼様あんなに身代くめんのよくなるのも、些ちつとは悪い事をし  
 て居るだろうぐらいの話をして居る奴もあるから、殺した跡で世  
 間体が悪いわりから、死骸でも引取つて、姪めえとか何なんとか名を付けて、  
 とい弔わりいをしなければ成るめえと、さ、訝おかしく勘繰かんぐるといかねえ

から、他人に拾われねえ様に持つて来たのだから、十日でも二十日でも留められて、引出され、ば入費にゆうひが掛ると思つて、只私の親切を二十両に買つておくんなさりやア、是で博奕やめは止るから、ねえモシ旦那え」

三「コレ、甚藏、然そう汝きさまが云うと己が殺して死骸を引取つて、葬りでもした様に疑うたぐつて、訝おかしくそんな事を云うのか」

甚「お前めえさん私わっちが然う思うくれえなら、鎌は振廻して仕舞わア、大きな声じやア云えねえが、是は旦那世間の人に知れねえように、私が黙つて持つて居るその親切を買つて二十両、ね、もし、鎌は詰らねえが宜うがすか、お前めえさんと中が悪ければ、酷ひどい畜ちきし生しょうだなんて遣やり兼ねえ性質たちだが、旦那にやア時々小遣こづけえを貰つてる私

だから、何とも思やアしねえがネ、厭いやに世間の人が思うから鎌を拾つて持つて来た、其の親切を買つて、え、旦那、お前めえさん否いやと云えば無理にやア頼まねえが、私は草苅鎌を二十両に売ろうと云う訳ではねえのサ、親切ずくだからネ、達たつてとは云わねえ、そうじやアねえか、此の村に居てお前めえの呼吸いきが掛らなけりやア村にも居られねえ、其の時はいやに悪い仕事わりをして逃げる、そうなりやア何どうでも宜いいやア、ねえ、否いやでげすか、え、もし」

と厭からに絡からんで云いがゝりますも、蝮まむしと綽あだな名なをされる甚藏しんざうでございますから、うっかりすれば喰く付けかれますゆえ、仕方なく、

三「詰つらぬ口くちを利きかぬが宜いいぜ、金は遣やるから辛抱しんぱうをしねえよ」  
とただ取られると知りながら、二十両の金を遣やりまして甚藏しんざうを

歸しますと、其の夜三藏の妹お累るいが寝て居ります座敷へ、二尺余りもある蛇が出ました。九月中旬なかばになりましたは田舎でも余り蛇は出ぬものでございますが、二度程出ましたので、墓場で驚きましたから何が出ても蛇と思ひ只今申す神経病、

累「アレー」

と駈出して逃にげる途端母親おふくろが止め様とした機はずみ、田舎では大きな囲炉裏が切つてあります、上からは自在が掛つて薬罐やかんの湯が沸たぎつて居た処へ双もろに反かえりまして、片これ面これから肩これへ熱湯を浴びました。



お累が熱湯を浴びましたので、うちじゆう家中大騒ぎで、医者を呼び  
 まして種々いろくと手当を致しましたが何うしてもいかんもので、火  
 傷けどの痕あとが出来ました。追々全快も致しようが、二十一二にな  
 る色いろざかり盛さかの娘、顔にポツリと腫物できものが出来ましても、何うした  
 ら宜よかろうなどと大騒ぎを致すものでございますのに、お累は半  
 面紫色に黒み掛りました上、片鬢かたびんはげ兀ぼるようになりましたから、  
 当人は素もとより母親おふくろも心配して居ります。

累「あゝ情なさけない、この顔では此の間法蔵寺で逢つた新吉さんに  
 もう再び逢う事も出来ぬ」

と思ひますと是こゝが氣病きやみになり、食も進まず、奥へ引籠ひきこもつたき  
 り出ません、母親おふくろは心配するが、兄三藏は中々分つた人でござ

いますから、

三「お母様つかさん、えーお累は何様な塩梅でございますねえ」

母「はアただ胸が支えて飯が喰えねえつて幾ら勧めても喰えねえくと云う、疲れるといかねえから些と食つたら宜かんべえと勧めめるが、涙ア翻こぼして己ア此様な顔に成つたから駄目だ、何うせ此様な顔になつた位くれえなら、おツ死ちんだ方が宜え。と其様な事べえ云つてハア手におえねえのサ、もつと大え負傷けがアして片輪あれになる者さえあるだに、左様心配しんべえしねえが宜えと云うが、彼は幼ちつけえ時から内気だから、ハア、泣なくことばかりで何うしべえと思つてよ」

三「困りますね私も心配するなど云い聞きかせて置きますが、何う

云うものか彼<sup>あすこ</sup>処へ引籠った切りで、気が霽<sup>は</sup>れぬから庭でも見たら宜<sup>よ</sup>かろうと云うと、彼処は薄暗くつて病気に宜うございますからと云いますが詰らん事を気に病むから何うも困ります」

と話をして居ります。折から、お累は次の間の処へ参りましたから、

母「おゝ此方<sup>こつち</sup>へ出るとよう、出な」

三「あ、漸<sup>やっ</sup>と出て来た」

母「此方へ来てナ、畑の花でも見て居たら些<sup>ちつ</sup>たア気が霽<sup>は</sup>れよう  
と、今兄<sup>あにき</sup>どんと相談して居たゞ、えゝ、さア此<sup>こゝ</sup>処へ坐つてヨウ、  
よく出て来<sup>き</sup>いッけナ、心配<sup>しんぺえ</sup>してはいけぬ、気を晴らさなければ  
いかねえヨウ、兄どんの云うのにも、火傷しても火の中へ坐<sup>つ</sup>燻<sup>く</sup>ば

つたではねえ、湯気だから段々癒なおるとよ、少しぐれえ薄あとく痕あとが付くべえけれども、平常いつもの白粉おしろいを着ければ知れねえ様になり段々薄くなるから心配しんぺえしねえがえ、よ」

三「お前つかお母つかさんに斯こう心配しんぱいを掛けて、お母様つかさんがお食つかさんを勧めるのにお前は何故た喫たべない、段々疲れるよ、詰たらん事をくよくよしてはいけませんよ、お前と私たと是れから只た一人のお母様だから孝行を尽さなければならぬのに、お前がお母様に心配を掛けちやア孝行に成りません、顔は何様どんなに成ったつて構かわぬ、それならば片輪女には亭主がないと云うものでも有るまい、何様な跛びっこでもてんぼうでも皆みんなな亭主を持つて居ります、え、火傷したくらいで気落きおちして、お飯まんまも喫たべられないなんて、気落してはなりません、

お母様が勧めるからお食あがりなさい、喫べられないなんて其そん様な事はありませんよ」

母「喫べなせえヨウ、久右衛門きゆうえもんどんが、是なれば宜よかろうつて水街道へ行つて生魚なまうおを買つて来たゞ、随分旨い物もんだ常ふだんなら食べるだけれど、やア食えよウ」

三「お喫あがりなさい何どう云う様子だ、容ようだい体を云いなさい、えゝ、何か云うとお前は下を向いてホロ／＼泣いてばかり居て、お母様に御心配かけて仕様がないじやアありませんか、え、十二三の小娘じやアあるまいし、よウ、えゝ、何う云うものだ」

母「そんなに小言云わねえが宜ええつてに、其そこ処やめが病えだからハア手におえねえだよ、兄あにきどんの側に居ると小言を云われるから己おれ

が側へ来い、さア此方へ来い、く」

と手を引いて病間へ参ります。三藏も是は一通りの病気ではないと思ひますから。

三「おせな」

下女せな「ヒえー」

三「何の事た、立つて居て返辞をする奴が有るものか」

せな「何だか」

三「坐りな」

せな「何だか、呼るのは何だかてえに」

三「コレ家のお累の病気は何うも火傷をした許りでねえ、心に思う処が有るのでそれが気になつてからの煩いと思つて居るが、

てめえ  
汝お久の寺詣てらまいりに行つた帰りは遅かつたが、年頃で無理じゃア  
ねえから他処わきへ寄つたか、隠さずと云いな」

せな「ナアニ寄りは為しません、お寺様へ行つてお花上げて拜まん  
で、雨降つて来たからお寺様で借かりべえつて法蔵寺様で傘借りて帰けえ  
つて来ただ」

三「汝てめえなぜ隠す」

せな「隠すにも隠さねえにも知んねえノ」

三「主人に物を隠すような者は奉公さしては置きません、なぜ  
隠す、云いなよ」

せな「隠しも何どうもしねえ、知んねえのに無理な事を云つて、  
知つて居れば知つて居るつて云うが、知んねえから知んねえと云

うんだ」

三「コレ段々お累を責めて聞くに、実は兄にいさん様濟まないが是々と云うから、なぜ早く云わんだ、年頃であたりまえ当然然の事だ、と云つて残らず打明けて己に話した、其の時はおせなが一緒に行って斯こうくと残らず話した、お累が云うのに汝てめえは隠して居る、汝はなぜ然そうだ、幼ちいさうちい中から面倒を見て遣やつたのに」

せな「アレまア、何なんて云うたろうか、ようお累様ア云つたか」

三「皆みんなな云つた」

せな「アレまア、汝われせえ云わなければ知れる氣遣きづけえねえから云うじやアねえよと、己おらを口止くちどめして、自分からおツ饒舌ちやべるつて、何なんてえこつた」



三「皆みんなないいな、有ありてい体に云いな」

せな「有体あていツたつて別に無ねえだ、墓参りに行つて年頃二十三になる好いいい男が来て居て、お前めえさん何処どこの者だと云つたら江戸の者だと云つて、近きんじよ処じよに居る者だがお墓参りして無く尽じ鬮まじ引ねの呪まじえにするつて、エー、雨降つて来たから傘借りてお累さんと二人手え引きながら帰けえつて来て、お累さんが云うにやア、おせな彼あ様んな好いいい男は無ねいやア、彼あ様んな柔やさしげな人はねえ、己おれがに亭主ていしを持たせるなれば彼あア云う人を亭主もちたに持度もちたいと云つて、内所で云う事が有つたけえ、其うちの中に火傷してからもう駄目あだ彼あの人に逢あいたくもこんな顔になつては駄目あだつて、それから飯も喰くえねえだ」

三「然そうか何どうも訝おかしいと思つた、様子ようがナ、汝てめえに云よわれて漸や

く分つた」

せな「あれ、横着者め、お累様云わねえのか」

三「なにお累が云うものか」

せな「彼あれだアもの、累も云つたから汝てめえも云えつてえ、己に云わ

して己云つたで事が分つたてえ、そんな事があるもんだ」

三「騒々あつちしい、早く彼方へ往けよ」

とこれから村方に作右衛門と云う口利くちきが有ります、これを頼んで土手の甚藏の処へ掛合やいに遣りました。

三十一

作「御免なせえ」

甚「イヤお出でなせえ」

作「ハイ少し相談ぶちに参りましたがなア」

甚「能くお出なせえました」

作「私わし頼まれて少し相談ぶちに参つたが、お前等めえらの家に此の

頃年としごろ齡二十三の若わかえ色の白しろえ江戸者が来て居ると云う話、そ

れに就ついて少し訳あつて参つた」

甚「左様で、出ちやアいけねえ引込ひっこんで居ねえ」

新吉は薄気味が悪いから蒲団の積んで有る蔭へ潜り込んで仕舞  
いました。

甚「へエ、な、何なんです」

作「エ、今日少しな、訳が有つて三藏どんが己おらが処とけえ頭を下  
 げて来て、さて儲作右衛門どん、何どうも他たの者に話をしては迎とても埒らちが  
 明かねえ、一人は大事な者なれども、何どうも是非がねえから無  
 理にも始末を着けなければなんねえから、お前等めえらをば頼むと云う  
 まア一づ訳になつて見れば、己おれも頼まれ、ば後あとへも退ひけねえ訳だ  
 から、己おれが五十石の田地でんじをぶち放つても此の話を着けねばなんね  
 え訳に成つたが其の男の事に付いて参めえつただ」

甚「へエーそうで、其の男と云うなア身寄でも親類でもねえ奴  
 ですが、困るてえから私わっちの処いに食い客そうろうだけでも、何を不調法  
 しましたか、旦那堪忍しておくんなえ、田舎珍らしいから、柿な  
 んぞをピヨコく取つて喰いかね、え奴だが、何なんでしょうか生いきう」

埋めにするなどというど、私わっちも人情として誠に困りますがねえ、

何を悪い事をしたか、何どう云う訳ですえ」

作「誰だりが柿イ取つたて」

甚「食客が柿を盗んだんでしよう」

作「柿など盗んだ何なんのと云う訳でねえ、そうでねえ、それ、お

前知めえつて居るが、三藏どんの妹いもとむすめ娘は屋敷奉公して帰けえつて来て

居た処、お前等めえらア家のノウ、其の若わえ男を見て、何処どこかで一緒に

なつたで口でもきゝ合つた訳だんべえ、それでまア娘が氣に、彼あ

ア云う人を何卒亭主どうかていしに為したいとか内儀かみさんになりてえとか云う訳で、

心に思つても兄さまあにが堅かてから八釜やかましい事云うので、処から段々

胸へ詰まつて、飯まも食まべずに泣ないてばかり居るから、医者ども見

放し、大切だいじの一人娘だから金えぶつ積んでも好いた男なら貰つて  
 遣りてえが、他ほかの者では頼まれねえが、作右衛門どん行つてくれ  
 と云う訳で、己おれが媒妁なこうどやく人役しなければなんねえてえ訳で来ただ」  
 甚「そんなら早くそう云つてくれ、ば宜いいに、胆きもを潰つぶした、私わっち  
 は柿でも盗んだかと思つて、そうか、それは有ありがて難え、じゃア何なん  
 だね、妹娘が思い染めて恋こい煩わずらいで、医者も見放すくれえで、  
 何どうでも聳むこに貰おうと云うのかね、是は有難え、新吉出や、ア此こ  
 処へ出る、ごうぎな事をしやアがった、此処へ来や、旦那是は私  
 の弟おとこぶん分ぶんで新吉てえます、是は作右衛門さんと云うお方でな、  
 名主様から三番目に坐る方だ、此の方に頭を押えられちやア村に  
 居い憎にくいやア、旦那に親ちかづき昵昵になつて置きねえ」

新「へエ初めまして、わたくし私は新吉と申す不調法者で、お見知り置かれまして御ごひいき鼻ひに願います」

作「是はまずくお手をお上げなすつて、まずく、それでは何うも、エ、石田作右衛門と申して至つて不調法者で、お見知り置かれやして、此のちの後も御ごべつこん別ね懇げに願ねえます」

甚「旦那、其そん様ていな町ねい、寧ねいな事を云つちやアいけねえ、マア早い話が宜いい、新吉、三藏さんと云つてな、小こ質しちを取つて居る家うちの一入娘、江戸で屋敷奉公して十一二年も勤めたから、江え戸ど子こも同おんなし事で、器量いは滅法好いい娘だ、宜いいか、其のお嬢さんが手て前めえを見てからくよくくと恋煩わいだ、冗談わじゃアねえ、此こん畜ち生きめしょう、え、こう、其の娘が塩梅わが悪いんで、手前に逢わねえじゃア病に障る

から貰<sup>もれ</sup>えてえと云う訳だ、有<sup>ありがて</sup>難え、好い女房<sup>かゝあ</sup>を持つのだ、手前運が向いて来たのだ」

新「成程、三藏さんの妹娘で、成程、存じて居ります、一度お目に掛りました、然<sup>そ</sup>う云つて来るだろうと思つて居た」

甚「此畜生、生意気な事を云やアがる、増長して居やアがる、

旦那腹ア立つちやアいけねえ、若<sup>わけ</sup>えからうっかり云うので、大層を云つて居やアがらア、手前<sup>てめえ</sup>己<sup>うぬぼれ</sup>惚るな、男が好<sup>い</sup>いたつて田舎だ

から目に立つのだ、江戸へ行けば手前の様な面はいけえ事有らア、此<sup>こ</sup>様な田舎だから少し色が白いと目に立つのだ、田舎には此様な色の黒い人ばかりだから、イヤサお前<sup>めえ</sup>さんは年をとつて居るから色は黒いがね、此様な有<sup>ありがて</sup>難え事はねえ、冗談じゃアねえ」



新「誠に有難い事でございます」

作「私もヤアぶち出し悪かつたが、お前様が承知なら頼まれれば有つて有難えだ、然うなれば私イ及ばずながら媒妁する簡だ、それじゃア大丈夫だろうネ、仔細無えね」

甚「へエ仔細有りません、有りませんが困る事には此の野郎の身体に少し借金が有るね」

作「なに借財が」

甚「へエ誠に何うもね、これが向が堅気でなければ宜いが、彼ア云う三藏さん、此の野郎が行きそうく方々から借金取が来て、新吉にくくと居催促でもされちやア、此の野郎も行った当坐極りが悪く、居たたまらねえで駈出す風な奴だから、行かねえ前に

綺麗薩さつぱり張借金を片付けければ私わっちも宜よし、宜うがすか、私が請うけにん人

になつて居るからね、其の借金だけは向むこうで払つてくれましようか」

作「でかく有れば困るが何どのくれえ」

甚「何どのくれえたつて、なア新吉、彼方あっちへ縁付かたづいてから借金取

が方々から来られちやア極わりりが悪いやア、其の極わりりを付けて貰う

のだから借金の高を云いねえよ、さ、借金をよう」

新「へエ借金は有りません」

甚「何を云うのだ」

新「へエ」

甚「隠すな、え借金をよう」

新「借金はありません」

甚「分らねえ事を云うな、此の間もゴタ／＼来るじやアねえか」

三十二

甚「手前てめえこゝ此処こゝに居るのたア違わア、三藏さんの親類になるのだ、それに可愛いお嬢さんが塩梅が悪くつて可哀想だから貰うと云うのだ、手前を貰わなければ命に障でえじる大事な娘の貰うのだから、借金が有るなれば有ると云つて、借金を片付けて貰えるからよ、然そうして仕度したくして行かなければならねえ、借金が有ると云え、エ、おい」

新「ヘエ、成程、ヘエ／＼成程、それは気が付きませんでした、

成程是は、随分借金は有るので、是で中々有るので」

甚「有るなれば有ると云え、よう幾らある」

新「左様五両ばかり」

甚「カラ何うも云う事は子供でげすねえ、幾らア五拾両、けれども、エへと、二拾両ばかり私が目の出た時返して、三拾両あります」

作「ほう、三拾両、巨えなア、まア相談ぶつて見ましょう」

とこれから帰つて話をする、

三「相手が甚藏だから其の位の事は云うに違いない、宜しい、

其の代り、土手の甚藏が親類のような気になつて出這入されては困るから、甚藏とは縁切で貰おう」

と云い、甚藏は縁切でも何でも金さえ取ればいゝ、と話が付き、  
 先まず作右衛門が媒なこうど人どで、十一月三日に婚礼致しました。田舎で  
 は妙なもので、婚礼の時は餅を搗つく、村方の者は皆来て手伝をい  
 たします。媒人なこうどが三々九度の盃をさして、それから、村で年としか  
 重かさな婆ばアさんが二人来て、麦搗むぎつきうた唄うたを唄うたいます。「目出度めでたいもの  
 は芋いもの種」と申す文句でございます。「目出度めでたいものは芋の種葉  
 広く莖長く子供夥あまた多たにエ、」と詰らん唄うたで、それを婆アさんが二  
 人並んで大きな声で唄うたい、目出度めでた祝ゆくして帰る。これから新吉が花  
 婿とこいりの床とこいり入いりになる。ところが何時いつまでたつても嫁お累おれいが出て来ま  
 せんので、極ごくりが悪いから嫌きらわれたかと思おもいまして、

新「もう来こそうなもの」

と見ると屏風びょうぶの外あんどうに行燈あんどうが有ります。その行燈あんどうの側ふさに、鬱ふさいで向むを向こいて居るから、

新なん「何なんだね、其そこ処こに居るのかえ、冗談じやアない、極りりが悪いねえ、何どうしたのだえ、間まが悪いね、其こ処こに引ひ込こんで居ては極りりが悪い、此こ方ちへ来て、よう、私わたしは来たばかりで極りりが悪い、お前まへばかり便たりに思うのに、初はめてじやアなし、法蔵寺ほつぞうで逢あつて知つて居るから、先刻さつきお前まへさんが白しろい綿帽わたぼうしを冠かぶつて居たが、田舎いんかは堅かいと思つて、顔かほを見み度たいと思つても、綿わたを冠かぶつて居るから顔かほも見みられず、間違まちがじやアねえかと思い、心配しんぱして居た、早はやく来て顔かほを見みせて、よう、此こ方ちへ来ておくれな」

累つ「こんな処こへ来て下すつて、誠まことに私わたしはお氣きの毒どく様さまで先刻さつきから

種々いろく考えて居りました」

新「氣の毒も何もない、土手の甚藏の云うのだから、訳も分らねえ借金まで払つて、お兄あにいさんが私の様な者を貰つて下すつて有難いと思つて、私はこれから辛抱して身を堅める了簡で居るか  
らね、よう、傍そばへ来てお寝な」

累「作右衛門さんを頼んで、お嫌いやながらいらしつて下すつても、私の様な者だから、もう三日もいらつしやると、愛想あいそが尽きて直じきお見捨みすなさろうと思つて、そればかり私わたしは心に掛つて、悲しくつて先刻さつきから泣いてばかり居りました」

新「見捨てるにも見捨みすてないにも、今来たばかりで、其様そのような詰つらんことを云つて、私は身寄たより便べんもないから、お前の方で可愛かわいがっ

てくれ、ば何処へも行きません、見捨てるなどと此方が云う事で

累「だって私はね、貴方、斯んな顔になりましたもの」

新「エ、あの私はね、此様な顔と云う口上は大嫌いなので、ド、何んな顔に」

累「はい此の間火傷を致しましてね」

と恥かしそうに行燈の処へ顔を出すのを、新吉が熟々見る

と、此の間法蔵寺で見たとは大違い、半面火傷の傷、額から頬へ  
かたびんぬげあが  
 片鬢かたびんぬげあが拔上りまして相が変ったのだから、あつと新吉は身の毛

立ちました。

新「何うして、お前まア恐ろしい怪我をして、エ、なに何だ  
はつきり  
 か判然と云わなければ、もつと傍へ来て、え、囲炉裡へ落ちて、



何うも火傷するたつて、何うも恐ろしい怪我じゃアないか、まアえゝ」

と云いながら新吉は熟々と考えて見れば、累が淵で殺したお久の為には、伯母に当るお累の処へ私が、養子に来る事になり、此の間まで美しい娘が、急に私と縁組をする時になり、此様な顔おかたちになると云うのも、やつぱり豊志賀が崇たり性しょうを引いて、飽くまでも己おれを怨うらむ事か、ア、飛んだ処へ縁付いて来た、と新吉が思いますると、途端に、ざら／＼と云う、屋根裏で厭いやな音が致しますから、ヒヨイと見ると、縁側の障子が明いて居ります、と其の外は縁側で、茅かやぶき葺屋根の裏に弁慶と云うものが釣つてある。それへずぶりと斜はすに挿さして有るは草苅鎌、甚藏が二十両に売付け

た鎌を與助と云う下男が磨とぎすま澄して、弁慶へ挿して置いたので、其の鎌の処へ、屋根裏を伝わつて来た蛇が纏まとい付き、二三度搦からまりました、すると不思議なのは蛇がポツリと二つに切れて、縁側へ落ると、蛇の頭は胴から切れたなりに、床とこの処へ這入つて来た時は、お累は驚きまして、

累「アレ蛇が」

と云う。新吉もぞつとする程身の毛立つたから、煙管きせるを持つて蛇の頭かしらを無暗むやみに撲うつと、蛇の形は見えずなりました。怖い紛まぎれにお累は新吉すがに縋すがり付く、その手を取つて新にいまくら枕、悪縁とは云いながら、たった一晩でお累が身重になります。これが怪談まじめの始はじめまございます。

## 三十三

新吉とお累は悪縁でございませうが、夫婦になりましてからは、新吉が改心致しました、と申すのは、熟々考えれば唯不思議な事で、十月からは蛇が穴に入ると云うに、十一月に成つて大きな蛇が出たり、又先頃墓場で見た時、身の毛立つ程驚いたのも、是は皆心の迷まよいで有つたか、あゝ見えたのは怖いと思ふ私が氣から引出したのか、お累も見たと云い殊ことに此の家うちは累が淵うで手に掛けたお久の縁えん合あ、其の家へ養子に來ると云うは、如何なる深き因縁の、今まで数々罪を作つた此の新吉、是からは改心して、

此家を出れば外ほかに身寄たより便も無い身の上、お累が彼様あんなな怪我をする  
と云うのも皆私故みんな、これは女房お累を可愛がり、三藏親子に孝行  
を尽したならば、是までの罪も消えるであろうと云うので、新吉  
は薩張さつぱりと改心致しました。それから誠まことに親切せつせつに致すから、三  
藏も、

三「新吉は感心な男だ、年のいかに似合なわぬ、何なんにしろ夫婦  
中ちゆうさえ宜よろければ何より安心、殊ととに片輪のお累を能よく目を掛けて愛  
してくれる」

と、家内は睦むつましく、翌年あしたになりますと、八月が産月うみづきと云うの  
でございますから、先高ますい処へ手を上げてはいかぬ、井戸端へ出  
てはならぬとか、食物しょくもつを大事だいじに為しなければならんと、初子ういごだから

母も心配致します。と江戸から早飛脚はやびきやくで、下谷大門町の伯父勘藏が九死一生で是非新吉に逢いたいと云うのでございますが、只今の郵便の様には早く参りませんから、新吉も心配して、兄三藏と相談致しますと、たった一人の伯父さん、年が年だから死しにみ水を取るが宜いと、三藏は気の付く人だから、多分の手当をくれましたから、暇いとまを告げ出立しゅつたつを致しまして、江戸へ着いたのは丁度八月の十六日の事でございます。長屋の人が皆寄り集つて看病致します。身寄便もない、女房はなし、歳は六十六になりますおやし爺で、一人で寝て居りますが、長屋に久しく居る者で有りますから、近所の者の丹精で、漸々ようよくに生延びて居ります処、

男「オヤ新吉さんか、さア〜何卒どうぞお上りなすつて、おかね、

盥たらひへ水を汲んで、足をお洗わし申して、荷や何かは此方こつちへ置いて、能よくお出いでなすつた、お待申しておりました、さア此方こちらへ」

新「へエ何どうも誠に久しく御無沙汰致しました、御機嫌宜しゅう、田舎へ引込ひきこみましてからは手紙ばかりが頼りで、頓とんと出る事も出来ません、養子の身の上でございませからな、此の度たびは伯父が大病でございまして、さぞお長屋の衆の御厄介あちらだろうと思ひ実は彼方あちらの兄とも申し暮しておりました、急いで参る積つもりでございませが何分にも道路みちが悪うございまして、撈取はかどりませんで遅う成りました」

男「何どう致しまして、大層お見違え申す様に立派にお成りなすつて、お噂ばかりでね、伯父さんも悦んでね、彼あれも身が定まり、

田舎だけれども良い処へ縁付きかたづ、子供も出来たつてお噂ばかりして、実に何うも一番古くお長屋にお住いなさるから、看病だつて届かぬながら、お長屋の者が替りく来て見ても、あゝ云う気性だから、お前さんばかり案じて、能くマア早くお出いでなすつた、さア此方こつちへ」

新「へエ、是はお婆さん、其の後は御無沙汰致しました」

婆「おやまア誠に暫しばらく、まア、めつきり尤もつともらしくおなりなすつたね、勘藏さんも然そう云つて居なすつた、彼あれも女房を持ちまして、児こが出来て、何月が産月だつて、指を折つて樂たのしみにして、病氣中もお前さんの事ばかり云つて、外ほかに身寄親類はなし、手許てもとへ置いて育てたから、新吉はたった一人の甥おいだし、子も同じだと云つて、

今もお前さんの噂をして、楽しみにしておいでなさるからね、此度こんどばかりはもう年が年だから、大した事はない様だが、長屋の者も相談してね、だけでも養子では有るし、お呼び申して出て来て、何だなん是つばかりの病気に、遠い処から呼んでくれなくも宜よさそうなもんだなどと云つて、長屋の者も余あんなりだと、新吉さんに思われても、何だなんと云つて、長屋の者、行事の衆と種いろく々相談してね、私の夫うちの云うには、然そうでない、年が年だからもしもの事が有つた日にやア、長屋の者も付いて居ながら知らして呉れそうなものと、又新吉さんに思われても成らんとか何なんとか云つて、長屋の者も心配して居て、能よくねえ、何どうも、然うだつて、大層だつてね、勘藏さんがねえ、彼あれもマア田舎へ行つて結構な暮しをして、然う



だつて、前の川へ往いけば顔も洗え鍋釜も洗えるつてねえ、噂を聞いて何うか見度みたいと思つて、あの畑へ何か蒔まいて置けば出来るつてねえ、然うだつて、まアお前さんの気性で鋤くわを把とつて、と云つたら、なアに鋤は把らない、向むこうは質屋で其処そこの旦那様に成つたつてね、と云うからおやそう田舎にもそう云う処ところが有るのかねえなんてね、お噂をして居ましたよそれにね」

男「コレサお前一人しやべで喋つて居ちやアいけねえ、病人に逢わせねえな」

婆「さア此方こちらへ」

新「へエ有難う」

と寝て居る病間へ通つて見ると、木綿の薄ツペらな五布布いつのぶとん団だんが

二つに折つて敷いて有ります上に、勘藏は横になり、枕に坐布団をぐる／＼巻いて、どうなか 胴中から独楽こまの紐で縛つて、括くり枕の代りにして、ねまき 寝衣のひとえもの 単物にぼろあわせ 衾を重ね、三尺帯を締めまして、少し頭痛がする事もあると見えて鉢巻もしては居るが、禿頭で時々すべ 辻つては輪なりの形で抜けますから手で嵌はめて置おきますが、箱たがの様でございます。

新「伯父さん／＼」

勘「あい」

新「私だよ」

男「勘藏さん、新吉さんが来たよ」

勘「有ありがて難え／＼、あゝ待つて居た、能よく来た」

新「伯父さんもう大丈夫だよ、大きに遅くなつたがお長屋の方が親切に手紙を遣よこして下すつたから取とり敢あえず来たがねえ、もう私  
が来たから案じずに、お前氣丈夫にしなければならねえ、もう一  
遍丈夫に成つてお前に樂をさせなければ濟まないよ」

勘「能く来た、病氣はそう呼びに遣やる程悪いんじやアねえが、  
年が年だから何卒どうぞ呼んでおくんなせえと云うと、呼んじやア悪か  
ろうの何だの彼だなんのと云つて、評議の方が長ながえのよ、長屋の奴等  
ア氣が利かねえ」

新「これサ、其様そんな事を云うもんじやアねえ、お長屋の衆も親  
切にして下すつて、遠くの親類より近くの他人だ、お長屋の衆で  
助かったに、其様な事を云うもんじやアねえ」

## 三十四

勘「お前はそう云うが、ただ枕元で喋るばかりで些ちつとも手が届かねえ、奥の肥ふとったお金きんさんと云うかみさんは、己おれを引立ひつたつて、虎子おまるへしなせえつてコウ引立ひきたつて居てズンと下おろすから、虎子で臀しりを打ぶつので痛いてえやな、あゝ人情がねえからな」

新「其様な事を云うもんじゃアねえ、何なんでもお前の好きな物を食べるが宜いい」

勘「有ありがて難え、もうねえ、新吉が来たから長屋の衆は帰けえつてくれ」

新「其様な事を云うもんじやアねえ」

長屋の者「じやア、マア新吉さんが来たからお暇致します、左様なら」

新「左様ですか、何うも有難うございます、お金さん有難うお婆さん有難う、へエ大丈夫で、又何うか願います、へエ、なにお締めなさらんでも宜しゆう、伯父さん長屋の人がねエ、親切にしてくれるのに、彼様な事を云うと心持を悪くするといかねえよ」

勘「ナアニ心持を悪くしたつて構うものか、己の頑固は知つて居るしなあ、能く来た、一昨日から逢いたくつてく堪らねえ、何卒して逢いてえと思つて、もう逢えば死んでも宜いやア、もう死んでも宜い」

新「其様な事を云わずに確しつかりして、よう、もう一遍丈夫になつて駕籠にでも乗せて田舎へ連れて行つて、暢のんき気な処へ隠居ひっこさしてえと思ふのだ、随分寿命も延のび々々、するから彼方あつちへお引込ひっこみよ  
う」

勘「独ひとり身みで煙草きざを刻きんで居るも、骨が折れてもう出来ねえ、ア、お前めえ嫁よめに子あかんぼう供ごが出来たてえが、男か女か」

新「何なんだか知れねえ是から生れるのだ」

勘「初めては女の児こが宜い、お前めえの顔を見たら形見かたみを遣やらうと思つてねえ、己おれは枕元へ出したり引込ひっこましたりして、他人ひとに見られねえ様に布団の間へ挿さしこ込んだり、種いろく々な事をして見付からねえように、懐で手拭くるで包くるんだりして居た」

新「まだく、大丈夫だよ伯父さん、だけれども形見は生きてい  
るうち貰つて置く方が宜い、形見だつて何をお前がくれるのだから  
知れねえが、何だい、なん大事にして持つよ」

勘「是を見てくんねえ」

と布団の間からようや漸く引摺出したは汚れた風呂敷包。

勘「これだ」

新「何だいなん」

と新吉はわずか僅少の金でも溜めて置いて呉れるのかと思ひまして、  
手に取上げて見ると迷子まいご札だ。

新「何だなん是は迷子札だ」

勘「迷子札を今迄肌身離さず持つて居たよ、是が形見だ」

新「是はいゝやア、今度生れる子が男だと丁度いゝ、若し女の  
子か知らないが、今度生れる坊のに仕よう」

勘「坊なぞと云わねえでお前めえ着けねえ」

新「少したが※がゆるんだね、大きな形なりをしてお守を下げ歩いてや  
アしねえ」

勘「まア読んで見ねえ」

新「エ、読んで」

と手に取上げてよく熟々見ると、唐真鍮とうしんちゆうの金かね色いろは錆さびて見え  
ます。が、深彫ふかぼりで、小日向服部坂深見新左衛門二男新吉、と  
彫付けてある故、

新「伯父なんさんは何だねえ私の名だね」



勘「アイ、そのねえ、汚れたね其の布団の上へ坐っておくれ」

新「いゝよう」

勘「イ、エ坐つてお呉れ、お願いだから」

新「はいくゝさア私が坐りました」

勘「それから私は布団おりから下るよ」

新「ア、下りないでも宜いよ、冷ひえるといけねえよ」

勘「何卒どうかお前に逢つてねえ、一ひとこと言此の事を云つて死にてえと

思つて心に掛けて居たがねえ、お前様は、まえさん小日向服部坂上で三百

五十石取つた、深見新左衛門様と云う、天下のお旗下のお前は若

様だよ」

新「へエ、私がかえ」

勘「ウムお前の兄様は新五郎様と云つてね、親父様はもうお

酒好でねえ、お前が生れると間もなく、奥様は深い訳が有つてお

逝去になり、其の以前から、お熊と云う中なかばたらき働おんなの下婢にお手が

付いて、此の女が悪い奴で、それで揉めて十八九の時兄様は行方

知れず、するとねえ、本所北割下水に、座光寺源三郎と云う、矢

張旗下つぱりが有つて、其の旗下おんなが女太夫なだゆうを奥方にした事が露あらわれ

て、お宅番が付き、そのお宅番が諏訪部三十郎様にお前の親父おとつき

様の深見深左衛門様だ、すると梶井主膳と云う竜泉寺前の売うらない卜

者しやがねえ、諏訪部様が病気で退ひいて居て、親父様が一人で宅番

して居るを附込んで、駕籠を釣らして来て源三郎とおこよと云う

女太夫を引ひ攪さつて逃げようとする、遣やるめえとする、争つて鎗

で突かれて親父様はお逝去かくれだから、お家は改易になり、座光寺の家も潰つぶれたがね、其の時に熊は何なんでもお胤たねを孕はらんで居たがね、屋敷は潰れたから、仕方がねえので深川へ引取ひきとり、跡は御家督もねえお前さんばかり、ちようどお前が三歳みつの時だが、私が下谷大門町へ連れて来て貰い乳して丹精して育てたのさ、手前てめえの親父や母おふくろは小さいうち死んで、己おれが育てたと云つて、刻煙草きざみたばこをする中で丹精して、本石町四丁目の松田と云う貸本屋へ奉公に遣りましたが実は、己はお前の処に居た門番の勘藏と申す、旧来御恩を頂いた者で、家来で居ながら、お前さんはお旗下の若様なまじだと※い若い人に知らせると、己は世が世なら殿様だが、と自暴やけになつて道楽をされると困るから、新吉々と使い廻して、馬鹿野郎、

間拔野郎と、御主人様の若様に悪たい吐ついて、実の伯父甥の様に  
 してお前さんを育てたから、心こころ安やす立だてが過ぎてお前さんを打ぶつ  
 た事も有りましたが、誠に済まない事を致しました、私はもう死  
 にますから此の事だけお知らせ申して死度しにたいと思ひ、殊ことにお前さ  
 んは親類縁者みよりたよりは無ないけれども、たゞ新五郎様と云う御惣領ごそうりょうの若  
 様が有つたが、今居れば三十八九になつたらうけれども行方知れ  
 ず覚えて居て下さい、鼻の高い色の白い好い男子おとこだ、目の下に大  
 きな黒痣ほくろが有つたよ、其の方に逢うにも、お前さんがこの迷子札  
 を証拠に云えば知れます、ア、もう何も云う事は有りませんが、  
 唯馬鹿野郎たぐなどと悪態を吐つきました事は何卒どうぞ眞平御免なすつて、  
 仏壇ほとけさまにお前様の親父様の位牌いはいを小さくして飾つて有ります、

新光院しんこういん様と云つて其の戒名だけ覚えて居ります、其の位牌を持つて往つて下さい」

### 三十五

新「然そうかい、私は初めて伯父さん聞いたがねえ、だがねえ、私が旗下の二男でも、家が潰れて三歳みつっの時から育てゝくれゝば親よりは大事な伯父さんだから、もう一ひとたび度快くなつて恩報おんがえしに、お前を親の様に、尚なおさら更私たのしが樂みをさしてから見送り度たいから、もう一二年達者になつてねえ、決して家来とは思わない、我わがま儘まをすれば殴打擲ぶちたくきは当あたりまえ然まで、貰い乳をして能よく育てゝくれた、

有難い、其の恩は忘れませんよ、決して家来とは思いません、真実の伯父さんよりは大事でございます」

勘「はいく、有難えく、それを聞けば直すぐに死んでも宜い、

ヤア、有難えねえ、サア死にしましょうか、唯死度しにたくもねえが、松か魚つおの刺身あつたで暖たきたてけえ炊立まんまの飯たを喫たべてえ」

新「さアく、何なんでも」

と云う。当人も安心したか間もなく眠る様にして臨終致しました。それからはず小石川の菩提所へ野辺送りをして、長く居たこといが養子の身の上こと殊ことには女房は懐妊、早く帰ろうと、長屋の者に引留められました。初七日までも居りませんで、精進物で馳走をして初七日を取越して供養をいたし、伯父すまが住すまいました其の家

は他人に譲りましたから、早々立ちまして、せめて今夜は遅くも亀有まで行きたいと出かけます。折悪しく降出して来ましたが、雨は、どう降で、車軸を流す様で、菊屋橋の際まで来て蕎麦屋で雨止をしておりましたが、更に止む気色がございませぬから、仕方がなしに其の頃だから駕籠を一挺雇い、四ツ手駕籠に桐油をかけて、

新「何卒亀有まで遣つて、亀有の渡を越して新宿泊りとしますから、四ツ木通りへ出る方が近いから、吾妻橋を渡つて小梅へ遣つてくんねえ」

駕籠屋「畏まりました」

と駕籠屋はビシヨク出かける。雨は横降りでどうくと云う。

往来が止りまするくらい。其の降る中をビシヨ〜かつ担がれて行くうち、新吉は看病疲れか、トロ〜と眠気ざし、遂には大おおいびき 軒きになり、駕籠の中でグウ〜と眠ねて居る。

駕籠屋「押ちやアいけねえ、歩けやアしねえ」

新「ア、わかいしゆ若衆もう来たのか」

駕「へエ」

新吉「もう来たのか」

駕「へエ、まだ参りません」

新「あゝ、トロ〜と中で寝た様だ、何処どこだか薩張さつぱり分らねえ

が何処どこだい」

駕「何処どこだか些ちつとも分りませんが、鼻つまを撮つままれるも知れませんが、



たゞ妙な事には、なア棒組、妙だなア、此方の左り手に見える燈あ火かりは何どうしてもあれは吉原土手の何なんだ、茶屋の燈火ちげに違ちがえねえ、そうして見れば此方にこの森が見えるのは橋場の総そう泉せん寺じ馬ば場ばの森まだろう、して見ると此こ処ゝは小塚ツ原かしらん」

新「若衆く、妙な方へ担いで来たナ、吾妻橋を渡つてと話したじゃアねえか」

駕「それは然そう云うつもりで参めえりましたが、ひとりでに此処へ来たので」

新「吾妻橋を渡ったか何なんだか分りそうなものだ」

駕「渡ったつもりでございませがね、今夜は何だか変な晩で、何どうも、変で、なア棒組、変だなア」

駕「些ちツとも足が運べねえ様だな」

駕「妙ですねえ旦那」

新「妙だってお前めえたち達は訝おかしいぜ、何どうかして居るぜ急いで遣や

つてくんねえ、小塚ツ原などへ来て仕様がねえ、千住へでも泊  
から本ほんじゆく宿まで遣つておくれ」

駕「へエ〜」

と又ビショ〜と担ぎ出した。新吉はまた中でトロ〜と眠氣ざ  
します。

駕「ア、恟びつくりすらア、棒組そう急いだつて先が一寸ちよつとも見えね

え」

新「あゝ大きな声だナア、もう来たのか若衆」

駕「それが、些ちつとも何処どこだか分りませぬので」

新「何処だ」

駕「何処だか少しも見当みあてが付きませんが、おい〜、先刻さつき左に

見えた土手の燈火あかりが、此度こんどア右手こつちに見える様になつた、おや〜

右の方の森が左になつたが、そうすると突当りが山谷の燈火か」

新「若衆、何どうも変だぜ、跡へ歸つて来たな」

駕「歸けえる気も何もねえが、何どうも変でございます」

新「戯ふざけちやア困るぜ冗談じやアねえ、お前めえたち達は訝おかしいぜ」

駕「旦那、お前なまぐささん何か腥なまぐさい物を持つておいでなさりやアしま

せんか、此処ここア狐こが出来ますからねえ」

新「腥どころい物処どころか仏の精進日だよ、しっかりしねえな、もう雨は

上つたな」

駕「へエ、上りました」

新「おろ下しておくれよ」

駕「何うもお気の毒で」

新「冗談じゃアねえ、めえたちお前達は変だぜ」

駕「へエ何うも、こん此様な事は、今迄長く渡しやうべえ世しますが、今

夜のような変な駕籠を担いだ事がねえ、行くと行って歩いてあとも後

へけえ帰る様な心持がするがねえ」

新「戯けなさんな、包を出して」

と駕籠から出て包を脊しよ負い、

新「い好い塩梅に星が出たな」

駕「へエ奴蛇の目の傘はこゝにございます」

新「いゝやア、まア路みちを拾いながら跣足はだしでも何なんでも構わねえ行

こう」

駕「低い下駄なれば飛とび々く行かれましよう」

新「まアいゝや、さつくと行きねえ」

駕「へエ左様なら」

新「仕様がねえな、何処だか些とも分りやアしねえ」

と云いながら出かけて見ると、更ふけましたから人の往来はござ  
いません。路を拾いゝ参りますと、此方こつちの藪垣やぶがきの側に一人  
人が立って居りまして、新吉ゆききちが行き過ると、

男「おい若わえけの、其そこ処こへ行いく若わえけの」

新「ソリヤ、此処は何でも何か出るに違えねえと思つた、畜ちぎし生ようく彼方あつちへ行け畜生く」

男「おい若えわけのくコレ若えの」

新「へエ、へエ」

と怖こわ々、其の人を透すかして見ると、藪の処に立つて居るは年の頃三十八九の、色の白い鼻筋の通つて眉毛の濃い、月代さかやきが斯こう森のように生えて、左右へつやくしく割り、今御牢内から出たろうと云うお仕着せの姿なりで、跛びっこを引きながらヒヨコく遣つて来たから、新吉は驚きまして、

新「へエく御免なさい」

男「何を仰しやる、これは貴公が駕籠から出る時落したのだ、

是は貴公様のか」

新「へエく、<sup>びつく</sup>恟り致しました何<sup>なん</sup>だかと思ひました、へエ」  
と見ると迷子札。

新「おや是は迷子札、是は有難う存じます、駕籠の中でトロノ  
ゝと寝まして落しましたか、御親切に有難う存じます、是は私<sup>わたくし</sup>の  
大事な物で、伯父の形見で、伯父が丹精してくれましたので、何<sup>ど</sup>うも  
有難うございます」

男「其の迷子札に深見新吉と有るが、貴公様のお名前は何<sup>なん</sup>と申  
します」

新「手前が新吉と申します」

男「貴公様が新吉か、深見新左衛門の二男新吉はお前だの」

新「へエ私わたくしで」

男「イヤ何どうも凶らざる処で懐かしい、何うも是は」

と新吉の手を取った時は驚きまして、

新「真まっぴら平何わたくしうか、私は金も何もございませぬ」

男「コレ、私をお前は知らぬは尤もつとも、お前が生れると間もなく

別れた、私はお前の兄の新五郎だ、何卒どうかして其方そちに逢い度たいと思

い居りしが、これも逢われる時節兄弟縁の尽きぬので、斯かよう様な処

で逢うのは実に不思議な事で有った、私は深見の惣領新五郎と申

す者でな」



新「へエ、成程鼻の高いいい男子おとこだ、眼の下に黒痣ほくろが有りますか、おゝ成程、だが新五郎様と云う証拠が何か有りますか」

新五郎「証拠と云つて別べつにないが、此の迷子札はお前伯父に貰つたと云うが、それは伯父ではない勘藏と云う門番で、それが私の弟を抱いて散り散りぢぢになつたと云う事をほの仄かに聞きました、其の門番の勘藏を伯父と云うが、それを知つて居るより外ほかに証拠はない、尤も外に証拠物もあつたが、永らく牢屋すまいの住居にして、実に斯様かような身の上になつたから」

新「それじゃアお兄様あにいさま、顔は知りませんが、勘藏なくが亡なくなります前、枕元へ呼んで遺言して、是を形見として貴方の物語り、此処こゝ

でお目に掛れましたのは勘藏が草葉の影で守つて居たのでしよう、それに付いても貴方のお身形みなりは何う云う訳で」

新五郎「イヤ面目ないが、若氣の至り、実は一人の女を殺あやめて駈落したれど露頭して追手おつてがかゝり、片足斯くのごとく怪我をした故逃げ遂おほせず、遂々とうくお繩にかゝつて、永い間牢に居て、いかなる責せめに逢うと云えど飽くまでも白状せずに居たれど、逆とても免のがるゝ道はないが、一度娑婆しゃばを見度みたいと思つて、牢を破つて、隠れ遂せて丁度二年越し、実は手前に逢うとは図らざる事であつた、手前は只今何処いずこに居おるぞ」

新「私わたくしはねえ、只今は百姓の家うちへ養子に往いきました、先は下総の羽生村で、三藏と云う者の妹いもとむすめ娘を女房にして居ります、三

藏と申すのは百姓もしますが質屋もし、中々の身代、殊ことに江戸に奉公をした者で気の利いた者ですが、貴方は牢を破つたなど、とんだ悪事をなさいました、知れたら大事で、早く改心なすつて頭を剃すつて衣に着替え、姿を変えて私と一緒に国へお連れ申しましょう、貴方何様どんなにもお世話を致しましょうから、悪い心を止やめてください、え、え、」

新五郎「下総の羽生村で三藏と云うは、何かえ、それは前に谷中七面前の下總屋へ番頭奉公した三藏ではないか」

新「え、能よく貴方は御存知で」

新五郎「飛とこんだ処へ手前縁付かたづいたな、其の三藏と言うは前々まえく朋輩うばいで、私わしが下總屋いに居るうち、お園という女を若氣の至りで殺

し、それを訴人したは三藏、それから斯様な身の上に成つたるも三藏故、白洲でも幾いくたび度も争つた憎い奴で其の憎い念は今だに忘れん、始終憎い奴と眼を付けて居るが、そういう処へ其の方が縁たづ付くとは如何いかにも残念、其の方もそういう処へは拙者が遣らぬ、決して行くな、是から一緒に逃去つて、永ながえ浮世なげに短みじけえ命、己と一緒に賊を働えようえいき、栄耀えいよう栄華えいがの仕放しほう題だいを致すがよい、心を広く持つて盗賊になれ」

新「これは驚きましたく、兄上考えて御覧なさい、世が世なれば旗下の家督相続もする貴方が、盗賊をしるなぞと弟に勧めるという事が有りましたようか、マア其そん様な事を言つたつて、貴方が悪いから訴人されたので、三藏は中々其様な者ではございませぬ」

新五郎「手前女房の縁に引かされて三藏の鼻<sup>ひいき</sup>屑<sup>き</sup>をするが、其の家を相続して己<sup>あだ</sup>を仇に思うか、サア然<sup>そ</sup>うなれば免<sup>ゆる</sup>さぬぞ」

新「免さぬつてえ、お前さんそれは無理で、それだから一遍牢へ這入ると人間が猶<sup>なお</sup>々々悪くなるというのはこれだな、手前の居る処は田舎ではありますが不自由はさせませんから一緒に来て下さい」

新五郎「手前は兄の言葉を背き居るな、よし／＼有つて甲斐なき弟故殺してしまふ覚悟しろ」

新「其<sup>そん</sup>様な理不尽な事を云つて」

新五郎「なに」

と懐に隠し持つたる短<sup>ど</sup>刀<sup>す</sup>を引抜きましたから、新吉は「アレー」

と逃げましたが、雨あめ降揚句ふりあげくで、ビショ／＼頭まではねの上りますのに、後うしろから新五郎は跛びっこを引きながら、ピヨ／＼追おっか駈かけまするが、足が悪いだけに駈かけるのも遅いから、新吉は逃げようとするが、何なにぶん分ぶんにも道路みちがぬかつて歩けません。滑なってズーンと横に転あがると、後あとから新五郎は跛びで駈かけて来て、新吉の前の処へポンと転あがりましたはずみに新吉を取とって押おえ付ける。

新五郎「不埒ふち至極しごくの奴殺やつころしてしまふ」

と云うに、新吉は一生懸命、無理に跳ね起きようとして足を抄すくうと、新五郎は仰向おんきやうに倒れる、新吉は其まの間に逃にげようとする、新五郎は新吉の帯を取とって引くと、仰向おんきやうに倒れる、新吉も死物狂いで組く付けく、ベツタリ泥田の中へ転あがり込こむ、なれども新五郎は

柔術やわらも習った腕前、力に任して引倒し、

新五郎「不埒至極な、女房の縁に引かれて眞実の兄が言葉を背く奴」

と押伏せて咽喉のどぶえ笛をズブリツと刺した。

新「情ない兄あにさん……」

駕籠屋「モシく、旦那く、大そううな斃されて居なさるが、雨はもう上りましたから桐油を上げましょう」

新「エ、ア、危うい処だ、ア、ハア、此処こゝは何処どこだえ」

駕「ちようど小塚ツ原の土手でござえやす」

新「えい、じゃア夢ではねえか、吾妻橋を渡つて四ツ木通りと頼んだじゃアねえか」

駕「へエ、然そう仰しやつたが、乗出してちようど門跡前へ来た  
ら、雨が降るから千住へ行つて泊るからと仰しやるので、それか  
ら此方こつちへ参めえりました」

新「なんだ、エ、長ながえ夢を見るもんだ、迷子札は、お、有るノ  
、何なんだなア、え、おい若衆わかいしゆく、咽喉なんは何ともねえか」

駕「へエ、何どうか夢でも御覽でござえましたか、魔まされておい  
でなせえました」

新「小用こようがたしてえが」

駕「へエ」

新「星が出たな」

駕「へエ、好いい塩梅あんべえ星が出ました」



新「じゃア下駄を出しねえ」

駕「是で天氣は定さだまりますねえ」

新「好い塩梅だねえ、おや此こゝ処はお仕置場だな」

と見ると二ツ足の捨札に獄門の次第が書いて有りますが、始めに当時無宿新五郎と書いて有るを見て、恟びつくりして、新吉が、段々

怖こわ々ながら細かに読下すと、今夢に見た通り、谷中七面前、

下總屋の中働お園に懸け想して、無理無体に殺せつ害がいして、百両を盗

んで逃げ、後のちお捕とり方かたに手向いして、重々不屈至極に付獄門に行

うものなりとあり。新吉はこれぞ正夢なり、妙な事も有るものだ

と、兄新五郎の顔が眼に残りしは不思議なれど、勘藏の話で想つ

たから然そう見えたか、何なんにしても稀有けうな事が有れば有るものだ、

と身の毛だちて、気味悪く思いますから、是より千住へ参つて一晩泊り、翌日早々下総へ帰る。新吉の顔を見ると女房お累が虫むし気け付きけまして、オギャアくと産落したは男の子でございます。此の子が不思議な事には、新吉が夢に見た兄新五郎の顔に生いき写うつしで、鼻の高い眼の細い、気味の悪い小児こどもが生れると云う怪談の始めでございます。

### 三十七

引続きまして真景累が淵と外題げだいを附しまして怪談話でございます。新吉は旅駕籠ゆらに揺れて帰りましたが、駕籠の中で怪しい夢を

見まして、何彼なにかと心に掛る事のみ、取急いで宅うちへ帰りますると、新吉の顔を見ると女房お累は虫気付き、産落したは玉のような男の児ことはいかない、小児こどもの癖に鼻がいやにツンと高く、眼は細いくせにいやに斯こう大きな眼で、頬肉が落ちまして瘡やせおとろ衰ええた骨と皮ばかりの男の児が生まれました。其の顔を新吉が熟つく々々見るゝと夢に見ました兄新五郎の顔に生いきうつ写しで、新吉はぞつとする程身の毛立つて、

新「然そうなれば此うちの家は敵同土かたきどうしと、夢にも兄貴が怨みたらノ云つたが、兄貴がお仕置に成りながらも、三藏に怨みを懸けたと見えて、その仇あだの家いえへ私が養子に來たと夢で其の事を知らせ、早く縁を切らなければ三藏の家うちへ崇たると云つたが、扱さては兄貴が生

れ變つて来たのか、但しは又崇りで斯う云う小児が生れた事か、何うも不思議な事だ」

と其の頃は怨み崇りと云う事があるの或は生れ變ると云う事も有るなどと、人が迷いを生じまして、種々に心配を致したり、除を致すような事が有りました時分の事で、所謂只今申す神経病でございますから、新吉は唯だ其の事がくよくく心に掛りまして、

新「あゝもう悪い事は出来ぬ、ふつつり今迄の念を断つて、改心致して正道に稼ぐより外に致し方はない、始終女房の身上小児の上まで、斯う云う崇りのあるのは、皆是も己の因果が報う事で有るか」

と様々の事を思うから猶なおよさら更気分が悪うございまして、宅うちに居りまして、食も進みません。女房お累は心配して、

累「御酒ごしゆでもお飲みなすつたらお氣晴しになりましたよう」

と云うが、何どうも宅いに居れば居る程気分が悪いから、寺参りにも行く方ゆが宜よかろうというので、寺参りに出掛けます。三藏も心配して、

三「一緒に居ると気が晴れぬ、姑しゅうとなどと云う者は誠に氣詰りな者だと云うから、一軒家うちを別にしたら宜かろう」

と羽生村きたざかの北坂と云う処へ一軒新あたらに建てまして、三藏方かでも不足なく仕送かつてくれます。新吉は別に稼かせぎもなく、殊ことには塩梅しんばいが悪いので、少すくしずつ酒でも飲んではぶらく土手でも歩い

たり、また大宝たいほうの八幡様へ参詣ゆに行くとか、今日は水街道、或はおおなごう大生郷の天神様へ行くなどと、諸方を歩いて居りますが、まア寺まいりの方へ自然行く気になります。翌年寛政八年ちよう恰ちようど二月三日の事でございましたが、法蔵寺へ参詣ゆに來ると、和尚が熟々つく、新吉を見まして、

和尚「お前は死霊の祟りのある人で、病氣なほは癒なほらぬ」

新「へエ何どうしたら癒どりましたよう」

和尚「無縁墓の掃除をして香こう花はなを手たむ向けるのは大功德だいくどくなもので、これを行つたら宜よろかろう」

新「癒どりますれば何ど様な事でも致いたしますが、無縁の墓が有りましようか」

和尚「無縁の墓は幾らも有るから、能く掃除をして水を上げ、  
 香花を手向けるのはよい功德になると仏の教えにもある、昔から  
 譬えにも、千本の石塔を磨くと忍術が行えるとも云うから、其様  
 な事も有るまいが功德になるから参詣なさい」

と和尚さんが有難く説きつけるから、新吉は是から願に掛けて、  
 法蔵寺へ行つては無縁の墓を掃除して水を上げ香花を手向けます  
 る。と其処が気の故か、神経病だから段々数を掃除するに従つて  
 気分も快くなつて参ります。三月の二十七日に新吉が例の通り墓  
 参りをして出に掛ると、這入つて来ました婦人は年の頃二十一二  
 にもなりましようか、達摩返しと云う結髪で、一寸いたした  
 藍の万筋の小袖に黒の唐繻子の帯で、上に葡萄鼠に小さ

い ひとつもん 一 紋 ちりめん を付けました 縮緬 はんでんばおり の半纏羽織 は を着まして、其の頃 は 流行 は った吾妻下駄 は を穿いて這入つて来る。跡からついて参るのが馬方の作藏と申す男で、

作 「お賤 しず さん是 かさね が累の墓だ」

賤 「おやまア累の墓と云うと、名高いからもつと大きいと思つたら大層小さいね」

作 「小さいつて、是 ど が何 なん うも何と二十六年崇つたからねえ、執 し

念 ゆうねんぶけ 深 あま え阿魔も有るもので、此 めえ の前 すけ に助と書いてあるが、是 し は

何 なん う云う訳か累の子だと云うが、子でねえてねえ、助と云うのは先代の與右衛門の子で、是 ま が継 は 母 いじ に虐められ川の中へ打 ぶ 流 ち されたんだと云う、それが崇つて累が出来たと云うが、何 なん だか判 は 断 つ き



然しねえが、村の者も墓参りに来れば、是が累の墓だと云つて  
 皆線香の一本も上げるだ、それに願掛が利くだねえ、亭主が道楽  
 ぶつて他の女に耽つて家へ帰らぬ時は、女房が心配して、何う  
 か手の切れる様に願えますと願掛すると利くてえ、妙なもので」  
 賤「そうかね、私はまア斯うやつて羽生村へ来て、旦那の女房  
 さんに、私の手が切れる様に願掛をされて、旦那に見捨てられて  
 は困るねえ」

作「なに心配しねえが宜いだ、大丈夫、内儀さんは分つた  
 者で、それに若旦那が彼ア遣つて堅くするし、それに小さいけれ  
 ども惣吉様も居るから其様な事はねえ、旦那は年い取つてるから、  
 たゞ氣に入つたで連れて来て、別に夢中になるてえ訳でもねえか

ら、それに己連れて来たゞと云つて話して、本家でも知つてるから心配しんぺえねえ、家も旦那うちどの何で、貴方あんたが斯うこしてと云つて、旦那あつちの詠えだから家も立派あつちに出来たゞのう」

賤なん「何だか茅葺かやぶきで、妙な尖とがった屋根など、其様そんな広い事はいらなちよつといといつたんだが、一寸離れて寝る座敷ちよつとがないといけな

からつてねえ、土手から川の見える処は景色いが好いよ」

作「好ようがすね。ヤア新吉さん」

新「おや作さん久しくお目に掛りませんで」

作「塩梅あんべいが悪わりいてえが何どうかえ」

新「何ようも快よくなくつて困よります」

作「はア然そうかえ能よくまア心に掛けて寺参りするてえ、お前めえの

様な若<sup>わ</sup>え人に似合<sup>あ</sup>わねえて、然<sup>しか</sup>う云<sup>い</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る、えゝなアに彼<sup>あ</sup>れは名<sup>な</sup>主<sup>しゅ</sup>様の<sup>の</sup>妻<sup>め</sup>よ」

新「ウン、ア、江戸者か」

### 三十八

作「深川の櫓<sup>やぐら</sup>下<sup>した</sup>に居<sup>ゐ</sup>たつて、名<sup>な</sup>前<sup>め</sup>はおし<sup>し</sup>ずさんと云<sup>い</sup>つて如<sup>じ</sup>才<sup>よ</sup>ねえ女子<sup>あまご</sup>よ、年<sup>とし</sup>は二十二だと云<sup>い</sup>うが、口<sup>くち</sup>の利<sup>り</sup>き様<sup>さま</sup>は旨<sup>うめ</sup>えもんだ、且<sup>かつ</sup>那<sup>な</sup>様が連<sup>つ</sup>れて来<sup>き</sup>たゞが、家<sup>うち</sup>にも置<sup>お</sup>かれねえから若<sup>わ</sup>且<sup>かつ</sup>那<sup>な</sup>や御<sup>ご</sup>新<sup>しん</sup>造<sup>ぞう</sup>様<sup>さま</sup>と話<sup>わ</sup>合<sup>あ</sup>いで別<sup>べ</sup>に土<sup>ど</sup>手<sup>て</sup>下<sup>げ</sup>へ小<sup>こ</sup>さく一<sup>い</sup>軒<sup>けん</sup>家<sup>いえ</sup>え造<sup>ぞう</sup>つて江<sup>え</sup>戸<sup>ど</sup>風<sup>ふう</sup>に出<sup>い</sup>来<sup>き</sup>ただ、まア且<sup>かつ</sup>那<sup>な</sup>が行<sup>い</sup>かない晩<sup>ばん</sup>は淋<sup>しみ</sup>しくつてい<sup>い</sup>けねえから遊<sup>あそ</sup>びに来<sup>こ</sup>

うと云うから、己が詰らねえ馬子唄アやったり麦搗唄は斯う云  
 うもんだって唄って相手をすると、面白がつて、それえ己がに教  
 えてくれるなどと云つてなア、妙に馬士唄を覚えるだ、三味線弾  
 いて踊りを踊るなア、食物ア江戸口で、お前塩の甘たつけえの  
 を、江戸では斯う云う旨え物喰つて居るからつて、食物ア大變八  
 釜しい、鰹節などを山の様に搔いて、煮汁を取つて、後は勿体  
 ないと云うのに打棄つて仕まうだ、己淋しくねえように、行つ  
 て三味線弾いては踊りを踊ったり何かするのだがね彼処は淋しい  
 土手下で、余り三味線弾いて騒ぐから、狸が浮れて腹太鼓を敲き  
 やアがつて夜が明けて戸を明けて見ると、三匹位え腹ア敲き破つ  
 てひっくり返つて居る」

新「嘘ばっかり」

作「本当だよ」

賤「一寸く作さん、何にも見る処が無いから、もう行こう」

作「え、参りましょう」

賤「一寸作さん今話をして居た人は何所の人」

作「彼れは村の新吉さんてえので」

賤「私は見たような人だよ」

作「見たかも知んねえ江戸者だよ」

賤「おや然うかい、一寸気の利いたおつなだね」

作「え、極柔和しい人で、墓参りばかりして居てね、身体が

悪いから墓参りして、何でも無縁様の墓ア磨けば幻術が使えると

か何とか云つてね、願掛がんがけえして」

賤「おや気味の悪い、幻術使いかえ」

作「今是から幻術使いになるべえと云うのだろう」

賤「然うかえ妙な事が田舎には有るものだねえ、何かえ江戸の者こつちで此方へ来たのかえ」

作「へエ上かみの三藏さんてえ人の妹いもとむすめ娘お累めえてえが、お前めえさん、

新吉が此方へ来たので娘心に惚どれたゞ、何うかど智ちに貰もらえてえつて恋煩こひわづらいして塩梅しんばいが悪わるくなつて、兄様あにさまも母親おつかさま様も見兼ねて金出し

た恋智こひちよ」

賤「然うかえ、新吉しんきち様と、おや新吉さんというので思おもい出した

が、見た訳わけだよ私がね櫓下りよに下地したじ子こに成なつて紅葉屋もみじやに居ゐる時分ときばん、

彼の人は本石町の松田とか榊田とか云う貸本屋の家に奉公して居て、貸本を脊負つて来たから、私は年のいかない頃だけでも、度々見て知つて居るよ、大層芸者衆もヤレコレ云つて可愛がつて、そうく／＼中々愛敬者で、知つて居るよ」

作「ア、マア新吉さんく、おい此方へ来なせえ、アノ御新造様がお前を知つて居るてねえ」

新「何方様でげすえ」

賤「ちよいと新吉さんですか、私は誠にお見連れ申しましたよ、慥か深川櫓下の紅葉屋へ貸本を脊負つてお出でなすつた新吉さんでは有りませんか」

新「へエ、私もねえ先刻からお見掛け申したような方と思つた

が、若も間違つてはいけねえと思つて言葉を掛けませんでした、  
 慥かお賤さんで」

作「それだから知つて居るだ何処で何様な人に逢うか知んねえ、  
 嘘は吐けねえもんだ」

賤「私は此の頃此方へ来て、斯ういう処にいるけれども、馴染  
 はなし、洒落を云つたつて向に通じもしないし、些とも面白くな  
 いから、作藏さんが毎晩来て遊んでくれるので、些とは気晴しに  
 なるんだが、新吉さん本当に好い処で、些とお出でなさいな、ち  
 ようど旦那が遊びに来て居るから、変な淋しい処だけでも、閑  
 静で好いから一寸お寄りな」

新「へエ有難うございます、私はね此方へ参りまして未だ名主



様へ染しみ々々、お近付にもなりませんで、兄貴が連れてお近付に参ると云つて居りますが、何なんだか気が詰つむと思つてツイ御無沙汰をして参りませんので」

賤「なに気が詰どころる所じゃ無い、さつくり能よく解わかつた人だよ、私を娘の様に可愛がつて呉ちよいとれるから一寸お寄りな、ねえ作さん」  
作「それが好いい、新吉さんお出でよ、何なんでもお出で」

と勧められるから新吉は、幸い名主に逢あうと行ゆきましたが、少し田たんぼ甫ぼを離れて庭があつて、囿かこいは生垣なまになつて、一寸ちよいとした門の形が有る中に花壇などがある。

賤「さア新吉さん此こ方ちへ」

惣「大層遅かつたな」

賤「遅いったつて見る処がないから累かさねの墓を見て来ましたが、  
 気味が悪くて面白くないから帰つて来たの」

作「只今」

惣「大きに作藏御苦勞、誰か一緒か」

賤「彼あの人は新吉さんと云つて私が櫓下に居る時分、貸本屋の  
 小僧さんで居て、その時分に本を脊負つて来て馴染なので、思い  
 掛けなく逢いましたら、まだ旦那様にお目に掛らないから、何卒どうか  
 お目通りがしたいと云うから、それは丁度好よい、旦那様は家うちに來  
 て居らつしやるからと云つて、無理に連れて来たので」

惣「おやく／＼そうか、さア此方こちらへ」

新「へエ初めまして、私わたくしはえゝ三藏さんざうの家うちへ養子に参りました新

吉と申す不調法者で、何卒どうぞ一遍は旦那様にお目通りしたいと思いましたが、掛違りいましてお目通りを致しません、今日こんにちは好よい折お柄りお賤さんにお目に掛つて出ましたが、ついお土産も持参致しませんで」

惣「いゝえ、話には聞いたが、大層心掛の善い人だつて、お前さん墓参りに能よく行くつてね」

新「へエ身体が悪いので法蔵寺の和尚様が、無縁の墓へ香花を上げると、身体が丈夫になると云うから、初めは貶けなしましたが、それでも親切な勧めだと思つて参りますが、妙なもので此の頃は其の功德かして大きに丈夫に成りました」

惣「うん成程そ然うかえ、能く墓はかめえ参りをする、中々温順おとなしやか

な実銘じつめいな男だと云つて、村でも評判が好いい」

賤「本当に極くおとなしい人で、貸本屋に居て本を脊負つてくる時分にも、一寸ちよつと来ても、新吉さん手伝つておくれなんて云うと、冬などは障子を張替えたり、水を汲んだり、外を掃除したり、誠に一寸人柄は好よしねえ、若い芸者衆は大騒ぎやったので、新吉さん遠慮しないで、窮屈になると却かえつて旦那は困るから、ねえ旦那、初めてゞすからお土産などと云つたんだけれども止とめましたが、初めてですからお金を一寸少しばかり遣やつて下さいな」

惣「お金を、幾ら」

賤「幾らだつて少しばかりは見つともないし、貴方は名主だからへエくあやまつてるし、初めてですから三両もお遣んなさい

「よ」

惣「三両、余あんまり多いや一両で宜よかろう」

賤「お遣りなさいよ、向むこうは目下だから、それに、旦那あの博多の帯はお前さんに似合いませんから彼の帯あもお遣りなさいよう」

惣「帯を、種いろく々な物を取られるなア」

と是はが始はじまりで新吉は近しく来ます。

### 三十九

お賤は調子が宜し、酒が出ると一寸小声で一いっちゆうぶし中節うちでもやるから、新吉は面白いから猶なお近しく来る。其の中に悪縁うちとは申しな

がら、新吉とお賤と深い中に成りましたのは、誰れ有つて知る者はございませぬけれども、自然と様子がおかしいので村の者も勘付いて来ました。新吉は家へ帰ると女房が、火傷の痕で片鬢かたびん兀げちよろになつて居り、真黒な痣あざの中からピカリと眼が光るお化ばけの様な顔に、赤ん坊は獄門の首に似て居るから、新吉は家へ帰り度い事はない。又それに打つて代つて、お賤の処へ来ると弁天様か乙姫の様な別嬪べっぴんがチャホヤ云うから、新吉はこそく抜けては旦那の来ない晩には近くしけ込んで、作藏に少し銭を遣れば自由に媾あいびき曳きが出来ますが、倅さて悪い事は出来ぬもので、兄貴は心配しても、新吉に意見を云う事は出来ませんから、お累に内々ないく意見いけんを云わせます、意見を云わないと為にならぬ向むこうが名主様だから

知れてはならぬという、それを思うから、女房お累が少し意見がましい事をいうと、新吉は腹を立て、打ち打ちようちやく擲致しまするので、今迄と違つて実に荒々しい事を致しては家を出て行ゆきまするような事なれども、人が善よいから、お累は心配する所から段々病気に成りまして、遂には頭かしらが破わられる様に痛いとか、胸が裂ける様だとか、癩しやくという事を覚えて、只おろ／＼泣いてばかりおります。兄貴は改つて枕元へ来て、

三「段々村方の者の耳に這入り、今日は老母としよりの耳にも這入つて、捨てゝは置かれず、私わしが附いて居て名主様に濟まない、殊ことに家うちの物を洗いざらい持出して質に置き、水街道の方で遊んで、家うちへ歸らずに、夜になればお賤の処へしけ込んでおり、お前が塩梅

が悪くつても、子供が虫が発つても薬一服吞ませる了。簡もな  
い不人情な新吉、金を遣れば手が切れるから手を切つてしまえ」

と兄が申します。所がお累は

「何うも相済みませんが、仮令親や兄弟に見捨てられても夫に附  
くが女の道、殊には子供も有りますから、お母様やお兄様には不  
孝で有りますが、私は何うも新吉さんの事は思い断られませぬ」

と、ぴつたり云い切つたから、

三「然うなれば兄妹の縁を切るぞ」

と云渡して、纏めて三十両の金を出すと、新吉は幸い金が欲しい  
から、兄と縁を切つて仕舞つて、行通いなし。新吉は此の金を  
持つて遊び歩いて家へ帰らぬから、自分は却つて面白いが、只憫



わいそう 然しかなのは女房お累、次第ついでく胸むねの焰ほむらは沸わえ返かへる様ようになりま  
 す。殊ことに子供は虫むしが出て、パイパイく泣な立てられ、糸いとの様ように瘦やせせて  
 も薬くすり一服いつぷく吞のませません。なれども三藏さんざうの手てが切きれたから村方むらたての者もの  
 も見舞みまひに来きる人もござりません。新吉しんきちは能いい気きになりまして、種い  
 ろく々ろくろくな物ものを持出もしては売う払い、布団ふだんどころではない、遂ついには根太ねだ  
 板いたまで剥はがして持出もすような事ことでございますから、お累お累は泣入なみつて  
 おりませんが、三藏さんざうは兄妹けいまいの情じょうで、縁ゆかりを切きつても片時ひまも忘われる暇ひまは  
 有りません故ゆゑ、或日用よくたし達たちに参まつて帰かへりがけ、旧来きうらい居いります與助よすけ  
 と云いう奉公ほうこう人を連つれて、窃そくつと忍しのんで参まり、お累お累の家うちの軒下のきげに立  
 つて、

三「與助や」

與「へエ」

三「新吉が居る様なれば寄らねえが、新吉が居なければ一寸  
逢つて行きたいから窃そつと覗のぞいて様子を見て、新吉が居ては迎とても顔  
出しは出来ぬ」

與「マア大てえげえ概留守勝だと云うから、寄つて上げておくんなさ

え、ねえ、憫然かわいそうで、貴方あんたの手が切れてから誰たれも見舞みめえにも行かぬ、

たたとええあなた 仮令貴方の手が切れても、塩梅あんべえが悪いから村の者は見舞みめえに行つた

つても宜ええが、それを行かぬてえから大てえげえ概人の不人情も分つて

いまさア、何どうか寄つて顔を見て遣やつておくんなさえ、私わしもお累

さんが小せえうちから居りやすから、訪ねてえと思うが、訪ねる

事が出来ねえが、表で逢つても、新吉さんお累さんの塩梅あんべえは何う

で、と云うと、何だ汝は縁の切れた所の奉公人だ、くたばろうと  
 何うしようと世話にはならねえ、と斯う云うので、彼の野郎彼様  
 な奴ではなかつたが、魔がさしたのか、始終はハア碌な事はねえ、  
 お累さんに咎はねえけれどもそれ聞くと遂足遠くなる訳で」

三「何たる因果でお累は彼様な悪党の不人情な奴を思い断れな  
 いというのは何かの業だ、よ、覗いて見なよ」

與「覗けませんよ」

三「なぜ」

與「何うも檐先へ顔を出すと蚊が舞つて来て、鼻孔から這  
 入って口から飛出しそうな蚊で、ア、何うもえれえ蚊だ、誰も居  
 ねえようで」

三「然<sup>そ</sup>うか、じゃア這入<sup>こ</sup>つて見よう」

と日暮方で薄暗いから土間の所から探りく上<sup>あ</sup>つて参ると、煎<sup>せ</sup>餅<sup>んべい</sup>の様な薄っぺらの布団を一枚敷いて、其の上へ赤ん坊を抱いてゴロリと寝ております。蚊の多いに蚊帳<sup>かや</sup>もなし、蚊燻<sup>かいぶ</sup>しもなし、暗くつて薩張<sup>さつば</sup>り分りません。

三「ハイ御免よ、おツ、此<sup>こゝ</sup>処に寝て居る、えゝお累く私だよ  
兄だよ…三藏だよ」

累「は…は…はい」

## 四十

三「ア、危ない、起きなくつてもいゝよ、そうしていなよ、然そうしてね、お前とは縁えんきり切きに成なつて仕舞しつたから、私わたしが出で這入たりをする訳わけじゃアないが、縁えんきりは断きれても血筋けつきんは断きれぬと云いう譬たとえで何なんとなく、お前の迷まよいから此こん様んな難儀なんぎをする、何どうかしてお前の迷まよが晴はれて新吉しんきちと手てが切きれて家うちへ帰かる様ようにしたいと思おもつて居いるから、もう一いっ応おんお前の胸むねを聞ききに來きたので、新吉しんきちも居いない様子ようすだから話わに來きた、エ、ちようど與助よじうすけが供たねでね、あれもお前まへが小こさい時とき分ぶんからの馴染なれだから、何どうぞ一いっ目逢あつて來き度たいと云いつて、與助よじうすけ此方こちへ這入まりな」

與「へエ有難ありがたう、お累れいさん與助よじうすけでござえますよ、お訪まね申ましてえけれども、旦那だんなにも云いう通り、新吉しんきちさんが憎にくまれ口くちイいきくので、

つい足イ遠くなつて訪ねませんで、長え間塩梅が悪くつてお困り  
 だろう、何様な塩梅で、エ、暗くつて薩張分りませんが、些とお  
 擦り申しませう、お、お、其様なに瘦もしねえ」

三「それは己だよ」

與「然うかえお前さんか、暗くつて分らねえから」

三「何しろ暗くつて仕様がな、灯を点けなければならん、新  
 吉は何処へ行つたえ」

累「はい有難う、兄さん能く入らして下さいました、お目に  
 掛られた義理ではありませんが、何卒もう私も長い事はございま  
 すまいから、一眼お目に掛つて死にたいと存じましても、心から  
 でお招び申す事も出来ない身の上に成りましたも、皆お兄様やお

母つかさま様の罰ばちでございませうが、心に掛けておりました願いが届きまして、能く入らしつて下さいました、與助能く来てお呉れだね」

與「へエ、来てえけれどもねえ、何どうも来られねえだ、新吉が憎まれ口きくでなア、実にはア仕様がねえだ、蚊が多いなア、まア」

三「新吉は何処へ行つた、なに友達に誘われて遊びに行つたと、作藏と云う馬方と一緒に遊んで居やアがる、忌いめえま々しい奴だ、蚊帳は何処にある、蚊帳を釣りましよう、なに無いのかえ」

累「はい蚊帳どころではございません、着ております物を引剥ひんむいて持出しまして、売りますか質に入れますか、もう蚊帳も持出して売りました様子で」

三「呆あきれますな何どうも、蚊帳を持出して売って仕舞つたと、この蚊の多いのによ」

與「だから鬼だつて、自分は勝手かつてざんまい三昧して居るから痒かいくもねえが、それはお累様ア憎いたつて、現在赤ん坊が蚊に喰殺されても構わねえて云うなア心が鬼だねえ」

三「與助や家うちへ行つて蚊帳を取つて来て呉んな、家の六畳で釣る蚊帳が丁度宜いい、あれは六ろく七しちの蚊帳だから、あれで丁度よろう、若もしあれでなければ七しち八はちの大きいので宜い病人の中へ這入さつて擦さする者も広い方が宜いから」

與「直じき往つて来ましよう」

三「早く往つて」



與「へエ、お累様直往じきつて参めえりますよ」

と親切な男で、飛ぶようにして蚊帳を取りに行ゆきました。

三「暗くつていかぬから灯あかりを点つけましょう、何処どこに火打箱はあ  
るのだえ、何所どこに、え、竈かまどを持出して売ったア、呆れます何どうも、  
家うちではお飯まんまも喰わねえ了簡、左様そう云う悪い奴にくだ」

と段々手探りで台所の隅へ行つて、

三「ア、茲こゝに在あったく」

と漸ようやく火打箱を取出しましてカチ／＼打ちまするが、石は丸く

なつて火が出ない、漸くの事で火を附木つけぎに移し、破れ行燈あんどうを引出

して灯あかりを点つけ、善よく々お累の顔を見ると、実に今にも死のうかと

思うほど瘦衰えて、見る影はありませんから、兄三藏は驚きまし

て、

三「あゝお累、お前は一通りの病気ではない余程の大病だよ、此の前に来た時は此様なに瘡てはいなかつたが、何も食べさせはせず、薬一服煎じて吞ませる了簡もなく、出歩いてばかり居る奴だから、自分には煮炊も出来ずお前が此様な病気でも見舞に来る人もないから知らせる人もなし、物を食べなけりやア力が附かないから、是では仮令病気でなくとも死にます、見れば畳も持出して売りやアがつたと見えて、根太が処々剥がれて、まア縁の下から草が出ているぜ、実に何うも酷いじやアないか、えゝおい、彼の非道な新吉を何処までもお前亭主と思つて慕う了簡かえ、お前は罰があたつて居るのだよ、私がお母様にお氣の毒だと思つ

て種々いろく云うと、お母様は私への義理だから、何なんの親同きようだい胞はいを捨て、出る様な者は娘とは思わぬ、敵かたき同士だ、病氣見舞にも行つてくれるな、彼あ様な奴は早く死ねばいゝ、と口では仰しやるけれども、朝晩如来様に向つて看かん經きんの末には、お累は大病でござい  
ます、何卒どうかお累の病氣全快を願います、新吉と手を切りまして、  
一つ処へ親子三人寄つて笑わらい顔がおを見て私も死度しにとうござい  
ます、何卒まもお護りなすつて下さいまし、と神様や仏様に無理な願掛がんかけをな  
さるも、お前が可愛いからで、親の心子知らずと云うのはお前の  
事で、さア今日は新吉とフツ、リ縁を切ります諦めますとお前が  
云えば、彼様な奴だから三十両か四十両の端はした金かねで手を切つて、  
お前を家うちへ連れて行つて、身体さえ丈夫になれば立派な処へ縁附

ける、左も無ければ別家をしてべっけも宜い、彼奴あいつに面当つらあてだからな、え、今日は諦めますと云わなければなりませんよ、さア諦めたと云いなさい、え、おい、云えないかえ、今日諦めなければ私はもう二度と再び顔は見ません、もう決して足踏あしづみは致しません、もう兄妹の是が別れだ、外ほかに兄弟があるじゃアなし、お前と私ばかり、お前亭主を持たないうち何なんと云った、私が他わきへ縁付きましても、子というは兄あにさんと私わきりだから、二人でお母様に孝行しよう云ったじゃアないか、して見れば親の有難い事も知つているだろう、さア、お前の身が大事だからいふのだよ、返答が出来ませんかよ、え、お累、返答しなければ私は二度と再び来ませんよ」

## 四十一

累「はいく」

と利かない手を漸やっと突いてガツクリ起上り、兄三藏の膝の上へ手を載せて兄の顔を見る眼に溜たまる涙の雨はらくくと膝こぼに翻れるのを、

三「これくたゞ泣いていては却かえつて病やまいに障るよ」

累「はいお兄様あにいさまどうも重じゆうく々の不孝でございました、まア是

迄御丹精を受けました私わたくしが、お兄様のお言葉を背きましたは、お

母様つかさまへ猶なお々々不孝を重ねまする因果者、此の節のように新吉が

打つて變つて邪慳では、とて 迎も側には居られません、少しばかり意見がましい事を申せば、手にあたる物でぶち打擲致しますから、小兒が可愛くないかと膝の上へ此の坊を載せますと、エ、うるせえ、とこんな病身の小兒を畳の上へ放り出します、それほど気に入らぬ女房なれば離縁して下さい、兄の方へ帰りましようと思しますと、男の子は男に付くものだから、此の與之助は置いて行くと申します、彼様な鬼の様な人の側へ此の坊を置きましたは、見すく見殺しに致しまするようなものと、つい此の小僧に心が引かされて、お兄様やお母様に不孝を致します、せめて此の與之助が四歳か五歳に成ります迄何卒お待ち遊ばして」

三「其様な分らぬ事を云つては困りますよ、お前何うも、四歳

か五歳になる迄お前の身体が保ちやアしませんよ、能く考えて御覧、子を捨てる藪はあるが身を捨てる藪はないと云う譬の通りだ、置いて行けと云うなら置いて行って御覧、乳はなし、困るからやっぱりお前の方へ帰って来るよ、エ、私の云う事を聴かれませんか、是程に訳を云つてもお前は聴かれませんかえ、悪魔が魅入つたのだ、お前そんな心ではなかつたが情ない了簡だ、私はもう二度と再び来ません、思えばお前は馬鹿になつて了つたのだ、呆れます」

と腹が立つのでは有りませんが、妹が可愛い紛れに荒い意見をいうと、お累は取詰めて来まして癩を起し、

累「ウーン」

と虚空を掴んで横にぱったり倒れましたから、三藏は驚きまして、

三「エ、困ったなア、少し小言を云うと癪を起すような小さい心でありながら、何う云うもので、此様なに強情を張るのだろう、新吉の野郎め、困ったな、水はねえかな、何卒これ、お累確かりしてくれよ、心を慥かに持たなければならんよ、此の大病の中で差込が来ては堪らん、確かりして」

と一人で手に余る処へ、帰って来たは與助、風呂敷包に蚊帳の大きなのを持って、

與「旦那取って来ました」

三「蚊帳を取って来たか、今お累が癪を起して気絶してしまっ



た」

與「えゝまア、そりや、お累さんく何うしただ、これお累さん、あゝまア齒ア喰いしばつて、えらい顔になつて、是はまア死んだに違えねえ、骨と皮ばかりで」

三「死んだのじゃアねえ今塞じて来たのだが、ア、これつ切りに成るかしら、あゝもうとても助かるまい」

與「助からねえツてえ可哀そうに、これマア逆も駄目だねえ、お累さん私イ小せえうちから馴染ではござえませんか、私イ今ア蚊帳取りに行く間待つても宜かんべえがそれにマア死んでしまうとは情ねえ、彼様な悪徒野郎が側に附いて居るから、近所の者も見舞にも来ず、薬一服煎じて飲ませる看病人も無い、此様なにな

つて死ぬのは誠に情ねえ訳で、何うして死んだかなア」

三「其そんな様に泣いたつて仕様があるものか、命数が尽きれば仕方がねえ、其様に女々しく泣くな、男らしくもねえ、腹一杯親きよう同胞だいに不孝をして苦勞を掛けて是で先立つたア此こん様な憎い奴はねえ、憫然かわいそうとは思わない、悪いと思え、泣く事はねえ、泣くな」

與「泣くなつて、泣いたつて宜よかんべえ、死んだ時でも泣かないやア泣く時はねえ、私わしい憫然でなんねえだよ、斯こんな立派な兄あにさんがあつても、薬一服煎じて飲ませねえで憫然だと思ふから泣くのだ、お前さんも我慢しず泣くが宜ええ」

三「まア水でも飲まして見ようか」

與「まだ水も何も飲ませねえのかえ」

三「オイ己おれが水を飲ませるから其そこ処を押えて、首を斯こうやって、固く成つて居るからの、力一ぱい、なに腕が折れると、死んで居るから構やアしねえ、宜いいか、今水を飲ませるから、ウグくくく」

與「何だか云う事が分んねえ」

三「いけねえ、己が飲んでしまった」

與「仕様がねえな、含くんで、喋れば飲込むだ、喋らずに」と漸ようやく三藏が口移しにすると、水が通つたと見えて、

累「ウム」

という。

三「ア、與助、漸く水が通つた」

與「通つたか、通れば助かります、お累様ア、確しつかりして、水が通つたから確しつかりして、お累さんく」

三「お累確しつかりしろ、兄あにさんが此こゝ処こゝに附ついて居ゐるから確しつかりしろよ」

與「お累様確しつかりおしなさいよ、與助が此こゝ処こゝへ参まゐつて居ゐりますから、お累様、確しつかりおしなさいよ」

累「ア……………」

三「其そつち方はへ退どきなさい、頭あたまを出すから、ア、痛い」

與「大で丈えい夫ふう己おのれ来きたからよう、ア、好いい塩あん梅べえだ氣きが付ついた、ア

、……………」

三「何なんだ手て前めえ氣きが付つきやアそれで好いいや、氣きが付ついて泣なく奴やつが

あるものか」

與「嬉し涙で、もう大丈夫だ」  
でえじょうぶ

三「もう一杯飲むかえ、さアく、水を飲みなさい」

## 四十二

累「ハイ……気が付きました、何卒御免なされて下さい」  
どうぞ

三「私が余りあんま小言を云つたのは悪うございました、ついお前の  
身の上を思うばかりに愚痴が出て、病人に小言を云つて、病に  
障る様な事をして、兄さんあにが思い切りが悪いのだから、皆定まる  
約束と思つて、もう何にもなん云いますまい、小言を云つたのは悪か

った、堪忍して」

與「誰工小言云った、能くねえ事こつた、貴方正直だから悪い、此わりの大病たいびょうにん人に小言を云うつてえ、此の馬鹿野郎め」

三「何なんだ馬鹿野郎とは」

與「けれども小言を云ったつて、旦那様もお前めえさま様の身を案じてねえ、新吉さんと手が切れて家うちへ帰けえれるようにしたいと思うから意見を云うので、悪く思わねえ様に、ようく」

三「蚊帳を持って来たから釣りましたよう、恐ろしく蚊に喰われた、釣手があるかえ」

累「釣手は売られないから掛って居ります」

三「そうか」

と漸く二人で蚊帳を釣つて病人の枕元を広くして、

三「あのね、今帰り掛けて持合せが少ないが、三両許りあるから是を小遣に置いて行きましよう、私も諦らめてもう何も云いません、若し小遣が無くなったら誰か頼んで取りによこしなよう、大事にしなよう、蚊帳を釣つたから、もういゝ、何も、もう其様な事を云うなえ、サ、行きましよう〜」

與「へエ参りましよう、じやアねえ、お累さん行きますよ、旦那様が帰るといふから私も帰るが、大事にしてお呉んなさえよ、よう、くよく〜思わなえが宜え、エ、何うも仕様がねえ、帰りますよ」

三「ぐず〜云わずに先へ出なよ、出なつたら出なよ、先へ出

なてえに」

と兄が立ちに掛ると、利かない手を突いて漸ようやくに這出して、蚊帳こまくを斯う捲つてお累が出まして、行きに掛る兄の裾すそを押えたなり、声を振わして泣倒れまする。

三「其様そんなにお前泣いたり何かすると毒だよ、さア蚊帳の中へ這入りな、坊が泣くよ、さア泣いているから這入んな」

累「お兄様あにいさま只今まで重々の不孝を致しました、先立つて済みませんが、とて逆も私は助かりません、何卒どうぞ御立腹でもございましょうが、お母様つかさまに只た一目お目に掛つて、お詫をして死にとう存じますいでが、お母様にお出下さる様に貴方からお詫をなすつて下さいませんか」



三「もうそんな事をおいいでないよ、お母様もまた是非来たが  
 って居るのだからお連れ申す様にしましょう、其様そんな事をいわず  
 にくよくよせずでえじようぶに、さア〜蚊帳の中へ這入つて居なよ」

與「大丈夫でえじようぶだよ、お母様ア己が連れて来るよ、其様な事を云  
 うと悲しくつて帰けえれねえから這入つてお呉んなさえよ、ア、赤ん  
 坊が泣くよ、憫然かわいそうに本当に泣けねえ」

三「ア、鼻血が出た、與助、男の鼻血だから仔細はあるまいけ  
 れども、盆ぼんのくぼ凹の毛を一本抜いて、ちり毛を抜くのは呪まじだから、  
 ア、痛いてえ、其様そんなひとつかみに沢山抜く奴があるか、一搦ひとつかみ抜いて」

與「沢山たんと抜けば沢山き駿きくと思つて」

三「え、痛いワ、さあ〜行きますよ」

と名残惜なごりおしいが、二人とも外へ出ると生憎あいにく気になる事ばかり。

三「ア、痛」

與「何どうかしましたかえ」

三「下駄の鼻緒が切れた」

與「横鼻緒が切れましたか、へエ」

三「與助何うも気になるなア、お累の病気はとても助かるまいよ」

與「へエ助かりませんか、憫然かわいそうにねえ、早くお母様アおよこし

申す様にしましょうか」

三「何しろ早く帰ろう」

と三藏が帰ると、入違えて帰って来たのは深見新吉。酒の機嫌

で作藏を連れてヒヨロ／＼よろ跟けながら帰つて来て、

新「オイ作藏、今夜行かなければ悪かろうなア」

作「悪わりいつて悪くねえつて行かねば己叱られるだ、行つて遣つ

て下せえ、出掛でがけに己ア肩叩おらえてなア、作さん今夜新吉さんを連れ

て来ないと打ぶつた敲くよ、と云つて斯こう脊中ア打ぶつたから、なに大で

丈夫えじようぶだ、一杯飲いっぺえんで日が暮れると来るから大丈夫だと云つて、

声掛けて来ただ」

新「いつも行く度ゆに向たびむこうで散財して、酒さけさかな肴さかなを取つて貰つて、

余あんまり氣が利かねえ、些ちつとは旨うめえ物でも買つて行いこうと思うが、金

がねえから仕方がねえ」

作「金工なくつたつて、向でもつて小遣も己おれに呉れて、何うも

ハア新吉さんなら命までも入れ上げる積りだよ、と姉御あねごが云つて  
 るから、行つて逢つてお遣りやなせえよ」

新「明日あしたはまた大生郷辺いっぺえで一いっぺえ杯遣つて日を暮さなければ成ら  
 ねえ、仕方がねえから今日は家うちに寝ようと思つて」

作「家に寝るつて、己おらが困るから行つてよう」

新「コウく見ねえく」

作「何なんだか」

新「妙な事がある、己おれの家に蚊帳が釣つてある」

作「ハテ是は珍らしいなア、是は評判すべえ」

新「其そん様な余計な憎まれ口をきくなえ、今行ゆきちが違つたなア三藏だ、己が留守に来やアがつて蚊帳ア釣つて行きやアがつたのだな、斯こんな大きな蚊帳が入るもんじゃアねえ、蚊帳を窃そつと畳んで、離れた処とけえ持つて行つて質に入れゝば、二両や三両は貸すから、病人に知れねえ様に持出そう」

作「だから金と云うものは何処どこから来るか知れねえなア、取るべえ」

新「手前てめえひよろ／＼していきねえ、病人が眼を覚さますといけねえから」

と云うが、酔つておりますから階子はしごに打突ぶつつかつて、ドタリバタ

り。是では誰にでも知れますが、新吉が病人の頭の上からソックリ蚊帳を取って持出そうとすると、お累は存じて居りますから、

累「旦那様お帰り遊ばせ」

新「ア、眼が覚めたか」

累「はい、貴方此の蚊帳を何うなさいます」

新「何うするたつて暑ツ苦しいよ、今友達を連れて来たが、狭い家<sup>うち</sup>にだゞつ広い<sup>びろ</sup>大きな蚊帳を引摺り<sup>ひんまア</sup>引廻して、風が這入らねえのか、暑くつて仕様がねえから取るのだ」

累「坊が蚊に螫<sup>く</sup>われて憫然<sup>かわいそう</sup>でございますから、何卒<sup>どうか</sup>それだけはお釣り遊ばして」

新「少し金が入用<sup>いりよう</sup>だからよ、これを持って行って金を借りる

んだ、友達の交際つきあいで仕様がねえから持つて行くよ」

累「はい、それをお持遊ばしては困りますから何卒どうぞお願いで」

新「お願いだつて誰がこんな狭い家うちへ大きな蚊帳を引摺り引ひんま廻せと云つた、茲こゝは己の家うちだ、誰が蚊帳を釣つた」

累「はい今こんにち日兄が通り掛りまして、手前は憎い奴だが如何にも坊が憫然だ、蚊くツ喰くいだらけになるから釣つて遣ろうと申して家から取寄せて釣つてくれましたので」

新「それが己の氣に入らねえのだ、よ、兄と己は縁が切れて居る、手前てめえは己の女房だ、親同きょうだい胞たいを捨て、も亭主に附くと手前云つた廉かどがあるだろう、然そうじゃアねえか、え、おい、縁の切れた兄なせを何故敷居またを跨またがせて入れた、それが己の氣に入らねえ、兄

の釣つた蚊帳なれば猶なほ氣に入らねえ、氣色わが悪いから是を売つて他の蚊帳にするのだ」

累「何卒どうぞお金子かねがお入用いりようなれば兄が金を三両程置いて参りましたから、是をお持ち遊ばして、蚊帳だけは何卒どうぞ」

新「金を置いて行つた、そうか、どれ見せろ」

作「だから金は何処どこから出るか知んねえ、富貴天ふうきにあり牡丹餅ぼたんもち棚たなにありと神道者しんどうしゃが云う通りだ、おいサア行くべえ」

新「行くつたつて三両許ばかりじゃア、塩えん噌そに足りねえといけねえ、蚊帳ついでも序ついでに持つて行つて質しつに入れ様さまじゃアねえか」

作「マア蚊帳は止せよ、子供が蚊に喰くわれるからと姉御が云うから、三両取つたら堪忍かんなして遣つて、子供が憫然ひんぜんだから蚊帳は止



せよ」

新「何だ弱え事を云うな」

作「弱えたつて人間だから、お内儀さんが塩梅の悪いのに憫然ぐれえ知つて居らア、止せよ」

新「憫然も何も有るもんか、何を云やアがるのだ此ン畜生、蚊帳を放さねえか」

累「それは旦那様お情のうございます、金をお持ち遊ばして其の上蚊帳までも持つて行つては私は構いませんが坊が憫然で」

新「何だ坊は己の餓鬼だ、何だ放さねえかよう、此畜生め」

と拳を固めて病人の頬をポカリ／＼撲つから、是を見て居る作

藏も身の毛立つようで、

作「止せよ兄貴、己酒の酔えいも何も醒さめて仕舞つた、兄貴止せよ、姉御、見込んだら放さねえ男だから、なア、仕方がねえから放しなさえ、だが、敲くのは止せよ」

新「なに、此畜生なまこめ、オイ頭はげの兀とこてる所ところを打ぶつと、手が粘つて変な心持こころもちがするから、棒か何か無なえか、其そこ処ところに麩そだ朶たがあらア、其の麩朶を取つてくんな」

作「止せよく、麩朶はお願いだから止せよ」

新「なに此畜生なまこ撲なぐるぞ」

作「姉御麩朶を取つて出さねえと己おらを撲なぐるから、放すが宜ええ、見込まれたら蚊帳ぶんぢやうは助たすからねえからよ」

新「サア出せ、出さねえと撲なぐるぞ、厭いやでも撲なぐるぞ、此度こんだア手てじ

やアねえ薪まきだぞ、放さねえか」

累「ア、お情ない、新吉さん此の蚊帳は私が死んでも放しませ  
ん」

と縫すがりつくのを五つ六つ続け打うちにする。泣なき転ころがる処を無理に  
取ろうとするから、ピリ〜と蚊帳が裂ける生爪はが剥はがれる。作  
藏は、

作「南無阿弥陀仏〜、酷ひどい事をするなア、顔は綺麗だが、怖おっ  
かねえ事をする、怖こええなア」

新「サア此の蚊帳かやア持つて行ゆこう」

作「アレ〜」

新「なに」

作「爪がよう」

新「どう、違ちがえねえ縋り付きやアがるから生爪が剥がれた、厭な色だな、血が付いて居らア、作藏舐なめろ」

作「厭だ、よせ、虫持むしもちじやア有るめえし、爪え喰う奴があるもんか」

新「此の蚊帳持かやアつて往つたら三両か五両も貸すか」

作「貸つくもんか」

新「爪を込んで借りよう」

作「琴の爪じやアあるめえし」

とずうくしい奴で、其の蚊帳を肩に引掛ひっかけて出て行ゆきます。

お累は出口へ斯こう這出したが、口惜くやしいと見えて、

累「エ、新吉さん」

と云うと、

新「何をいやアがる」

とツカくと立ち戻つて来て、脇に掛つて有つた薬罐やかんを取つて沸湯にえゆを口から掛けると、現在我が子與之助の顔へ掛つたから、子供は、

子供「ヒー」

とふたこえみこえ二声三声泣入つたのが此の世のなごり。

累「鬼の様なるお前さん」

新「何をいやアがるのだ」

と持つて居た薬罐を投げると、双もろに頭から肩へ沸湯あびを浴せたか

らお累は泣倒れる。新吉は構わずに作藏を連れて出て参りましたが、斯う憎くなると云うのは、仏説でいう悪因縁で、心から鬼は有りませんが、憎いくと思つて居る処から自然と斯様かような事になります。

#### 四十四

新吉は蚊帳を持って出まして、是を金にして作藏と二人でお賤の宅へしけ込み、こつそり酒さかもり宴を致して居ります、其の内に段々と作藏が酔つて来ると、馬方でございますから、野良で話を為しつけて居りますから、つい声が大きくなる。

新「おい作、手前酔うと大きな声を出して困る、些と静かにしろ」

作「静かにたつて、大丈夫だ人子一人通らねえ土手下の一軒家田や畑で懸隔つて誰も通りやアしねえから心配ねえよ」  
 賤「いゝよ、私はまた作さんの酔つたのは可笑しいよ余念が無くつて、お前さん慾の無い人だよ」

作「慾が無い事アねえ、是で慾張つて居るだが、何方かというと足癖の悪い馬ア曳張つて、下り坂を歩くより、兄いと二人で此処え来て、斯う遣つて酔つて居れば好いからね、先刻は己ア酔が醒めたね」

新「止せえ、先刻の話は止せよ」

作「止せたつてお賤さん、お前めえマア新吉さんは可愛い、人だと思つて居るから、首尾して、他人ひとにも知んねえように白しらばつくれて寄せるけれども、新吉さんが此こ処けえ来るつてえ心しん配ぺえは是こりアおれ己たまげが魂消た事がある、今日ね」

新「そんな詰らねえ事をいうな手前てめえは酔うとお喋りしゃべをしていけねえ」

作「お喋りつたつて、一いっ杯ぺえ飲んでけえ図けえに乗つていうのだ、エ、おい、それでねえ、マア一杯飲んで帰つた処とこが、銭イなえと云うから、無くつたつて好いいや、何なんでもお賤さんの処とこへ行つてお呉けえんなせえというと、いつも行つて馳走こづけえになつて小遣貫つて帰るべえ能けえでもねえじゃアねえか、何卒どうか己たまも偶うめにア旨うめえ物でも買つて行つ



て、お賤に食わしてえつて、其処そこはソレ情じょうあい合あだからそんな事を云つたゞが、いゝや旨え物持つて行つたつて無えものはハア駄目だ、お賤さんの方が、旨え物拵こしれえて待つて居るから今夜呼んで来てくんなせえよと、己が頼まれたから構わねえじゃアねえかと云つても、金が無ければてえので家うちへ帰けえると、家に蚊帳が釣つて有るだ」

新「よせく、そんな話は止せよ」

作「話したつて宜よかんべえ、それで其の蚊帳質屋かやアへ持つて行こうつて取りに掛ると、女房かみさんは塩梅あんべえが悪いし赤ん坊は寝て居るし」

新「コレよせ、よさねえか」

作「云つたつて宜ええ、そんなに小言云わねえが宜え、蚊帳すへ縫が

り付いて、己おらア宜えが子供が蚊に喰われて憫然かわいそうだから何卒どうかよう、と云つてハア蚊帳に縋り付くだ、それを無理に引張つたから、おめえ前生爪工剥したゞ」

新「おい冗談じゃアねえ、折角の興が醒めらア、止せ、撥くすぐるぞ」

作「撥ぐツちやアいけねえ」

新「お喋りはよせ」

作「宜えやな」

新「冗談云うな、喋ると口を押おせえるぞ」

作「よせ、口を押おせえちやアいけねえ、エ、おいお賤さん、其の爪を己おれがに喰えつて、誰が爪工食う奴が有るもんかてえと、己が

口へおツペし込んだゞ、そりやアまア宜えが、お前めえ薬罐を」

新「冗談はよせ」

作「いゝや、よせよ撥ぐつてえ」

新「寝ツちまいなく」

と無理に欺だまして部屋へ連れて行って寝かしてしまいました。それから二人も寝る仕度になりますと、何どう云う事か其の晩は酒の機嫌でお賤がすやく能く寝ます。雨はどうどと車軸を流す様に降つて来ました。彼是八ツ時でもあろうと云う時刻に、表の戸をトンく。

「御免なさいく」

新「お賤く誰か表を叩くよ、能く寝るなア、お賤く」

賤「あいよ、あゝ眠い、何うしたのか今夜の様に眠いと思った事はないよ」

新「誰か表を叩いて居る」

賤「はい、何方どなた」

「一寸御免なすつて、私わたくしでございます」

新「何だ庭の方から来たようだぜ」

賤「今明けますよ、何方でございますか名を云つて下さらないでは困りますが」

「へい新吉の家内、累でございます」

賤「え、お内儀かみさんが来たときア、はい只今」

新「よしねえ、来る訳はねえ、病人で居るのだもの」

賤「お前逢つて」

新「来るきづけえ氣遣ねえよ」

賤「氣遣きづかえがないつたつて、お内儀が迎いに来たのだから嬉しそ  
うな顔付をしてさ」

新「冗談じゃアねえ、嬉しい事も何もあるもんか、来るきづけえ氣遣ね  
えよ」

賤「只今開けますよ、大事な御亭主を引留めて済みませんねえ」  
と仇あだぐち口をきゝながら、がらりと明けますと、どんく降る中  
をびしよ濡になつて、利かない身体で赤ん坊を抱いて漸々ようくと縁  
側から、

累「御免なさい」

と這入ったから、

新「何だなんって此の降る中を来たのだなア何うどしたのだ」

累「貴方がお賤さんでございますか、駈違かけちがってお目に掛りま

せんが、毎度新吉が上りまして、御厄介様になりますから、何卒どうか

一度はお目に掛ってお礼を申し度たいと存じておりまして、何分

にも子供はございますし、私わたくしも疾とうより不快でございました故、御

無沙汰を致しました」

賤「誠にまア何うも降る中を夜中やちゆうにお出いでなすって、そんな事

を仰しやっては困りますねえ、新吉さんも江戸からのお馴染でご

ざいますから、私は此方こつちへ参つても馴染も無いもんでございます

から、遊びにお出なすって下さいと、私が申しました、それから

旦那も誠に鼻<sup>ひいき</sup>屑<sup>くず</sup>にして、斯<sup>こ</sup>うやつてお出なさるが、御亭主を引留めて遊ばしたと云えば、お前さんも心持が快<sup>よ</sup>くは有りますまいけれども、是に付いては種<sup>いろく</sup>々深い訳がある事でございますが、それは只今何も云いません、新吉さん折角迎いにお出でなすつたからお帰りよ」

新「帰<sup>けえ</sup>ることはねえ、おい、お前<sup>めえ</sup>冗談<sup>じや</sup>じゃアねえ、そんな形<sup>なり</sup>をして来て見つとも無い、亭主の恥<sup>さ</sup>を晒<sup>さら</sup>しに来る様なものだ、工何<sup>なん</sup>だなア、おい、此の降る中を、お前なんだ逆<sup>のほ</sup>上<sup>ぼ</sup>せて居るぜ、\*たじれて居るなア」

\*「のぼせて気が変になる。むちゆうになつて気ちがいじみる」

## 四十五

累「はい、たじれたか知りませんが、私は何うなつても宜しゆう  
ございませが、貴方の児だから殺とすも何共勝手になさいだが、  
表向には出来ませんから、此の坊やアだけは今晚夜が明けないう  
ち法蔵寺様へでも願つて埋葬を致したいと存じます、誰も宅へ  
参り人はなし、私が此の病人では何う致す事も出来ませんから、  
何卒一寸お帰りなすつて、お埋葬だけをなすつて、然うして又此  
方へ遊びに入らしつて下さい、お賤さん、私が申しますと宅が立  
腹致しますから、何卒あなたから、今夜だけ帰つて子供の始末を  
付けてやれと仰しやつて」



賤「はい、お帰りよ新吉さんよう」

新「<sup>けえ</sup>帰れたつて夜中に仕様がねえ」

賤「夜中だつて用があつて迎いに来たのだからお帰りよ、旨く云つて居ても本木に優る梢木は無いという事だからねえ、お内儀に迎いに来られ、ば心持が宜いねえ、旨く云つたつてにこゝ顔付に見えるよ」

新「何がにこゝ、冗談じゃアねえ、<sup>けえ</sup>帰らねえ、おい」

累「はい、何卒お前さん坊の始末を」

新「始末も何もねえ、<sup>ゆ</sup>行かねえか」

賤「<sup>そんな</sup>其様に云わずにお前お帰りよ、折角お迎いにお出なすつた

に誠にお気の毒様、大事な御亭主を引留めてね、さアお帰りよ、

手を引かれてよ」

新「何を云うのだ、けえ帰らねえか」

と、さア癩癩に障ったから新吉は、いきなり突然利かない身体の女房  
お累の胸倉を取るが早いか、どんと突くと縁側から赤ん坊を抱い  
たなりコロ／＼と転がり落ち、

累「あゝ情ない、新吉さん、今夜帰つて下さらんと此の兎この始  
末が出来ません」

と泥だらけの姿で這上るところを突飛ばすと仰向に倒れる、と  
構わずピタリと戸を閉たて、おろ下しざん棧をして仕舞つたから、表では  
お累がワツと泣き倒れます。此の時雨は愈々いよくはげ烈しくドウドツ  
と降出します。

新「エ、気色が悪い、酒を出しねえ」

賤「酒をつたつて私は困るよ、彼様な酷いことをして、一寸帰つてお遣りよ」

新「うまく云つてやアがる、酒を出しねえ、冷たくつても宜いや」

と爛かんざま冷しの酒を湯呑に八分目ばかりも酌いで飲み、

新「お前も飲みねえ」

と互に飲んで床につくと、何ういう訳か其の晩は、お賤が枕を付ける、常になくすや／＼能く寝ます。小川から雨の落込んで来る音がどう／＼といひます。夜は深ふけて一際ひときわしんと致しますと、新吉は何うも寝付かれませぬ。もう小一時こいつときも経たつたかと思

うと、二畳の部屋に寝て居りました馬方の作藏が魘うなせれる声が、

作「ウーン、アア……」

新「いめ忌えましい奴だな、こんちきしょう此畜生、作藏くおい作や、魘れ

て居るぜ、作藏、眼を覚まさねえかよ、作藏、夢を見て居るのだ」

作「エ、ウウ、ウンア」

新「忌えましい畜生だ、やい」

作「へエ、あゝ」

新「きも胆を潰さア、冗談じゃアねえ寝惚けるな、お賤が眼を覚さ

ア」

作「寝惚けたのじゃアねえよ」

新「何うした」

作「己おれが彼処あそこに寝て居るとお前めえ、裏の方の竹を打付けた窓がある、彼処のお前雨戸を明けて、何うして這入へえったかを見ると、お前の処の姉御、お累さんが赤ん坊を抱いて、ずぶ濡れで、痩せた手を己の胸の上へ載せて、よう新吉さんを帰けえしておくんなさいよ、新吉さんを帰けえしておくんなさいよと云つて、己が胸をおっぺしよ押しおっぺしよ圧おっぺしよれる時の、怖こええの怖くねえのつて、己はせつなくつて口イ利けなかつた」

新「夢を見たのだよ、種いろん々な事ことで氣を揉むから然そう云う夢を見るのだ、夢だよ」

作「夢で無ねえよ、あゝ彼処の二疊の隅に樽があるだろう」

新「ウン」

作「樽の上に簞みのが掛けてある」

新「ウン、ある」

作「簞の掛けてある処に赤ん坊を抱いて立つて居るよう」

新「よせ畜生、氣せいの故だ」

作「氣の故じゃア無え、あゝ怖おっかねえ、あれ〜」

新「おい潜り込んで己の処へ這入へえつて来ちやアいけねえ、仕様がねえなア」

とん〜、

「御免なさい〜」

新「誰だい」

作「また来た、あゝ怖つかねえ〜」

新「誰だい」

男「え、新吉さんは此方こち方にお出いなさいますか、ちよつくら帰けつて、家は騒うぎが出来ました、お累さんが飛んだ事になりましたか  
方ほう々々、捜して居たんだ、直すに帰けつて下せえ」

作「誰だか」

新「誰だか見な」

作「怖くつて外へは出られねえ、皆みん此処こゝに居るだけけれども、中々歩あく訳わけにいかねえ、足あすくんで歩あかれねえ」

## 四十六

新「何方どなたでございます」

とガラリと明けて見ると村の者。

男「やア新吉さん、居たか、あゝ好よかつた、さア帰けえつて、氣の毒なんとも何なんとも姉御の始末が付かねえ、何どうも搜したの搜さねえのつて直ぐ帰けえらないではいけねえ、届ける所へ届けて、名主様へも話イしてね、困るから、さア帰けえつて」

と云われ、新吉は何なんの事だかんと分りませんが、致し方なく夜明け方に帰りますると、情ないかな、女房お累は、草薙鎌の研と澄ぎすましたので咽喉のどぶえ笛を搔切かきつて、片手に子供を抱いたなり死んで居るから、ぞつとする程凄かつたが、仕方がないから氣が狂ちがつてなどと云立て、先まず名主へも届けて野辺送りをする事になりまし



た。それから懲りて三藏も中々容易に寄り付きません。新吉も  
 お累が死んで仕舞った後は、三藏から内所で金を送る事もなし、  
 別に見当みあてがないから宿替やどがえをしようと、欲しがる人に悉そっくり皆家を  
 譲つて、時々お賤の処へしけ込みます。其の間は仕方がないから、  
 水街道へ参つて宿屋へ泊り、大生郷の宇治の里へ参つて泊りなど  
 して、惣右衛門が留守だと近ちか々／＼しけ込みます。世間でもかん  
 づいて居るから新吉は憎まれ者で、誰たれも付合う人がない。横曾根  
 辺あたりの者は新吉に逢つても挨拶もせぬようになりました。新吉はど  
 ん／＼降る中を潜そつと忍んでお賤の処とこへ来ました。

新「おい／＼お賤さん」

賤「あい新吉さんかえ」

新「あゝ明けておくれな」

賤「あいなくお出いでだね、傘なしかえ」

新「傘は有ったが借かり傘がさで、柄漏えもりがして、差しても差さねえでも同じ事ですぶ濡だ、旦那の病気は何どうだえ」

賤「お前がちよいく見舞に来てくれるので、新吉は親切な者だ心に掛けてちよくく来て呉れるが感心だつて、悦んで居るが、年が年だからねえ、何なんだつて五十五だもの、病気疲れですつかり寝付いて居るからお上あがりよ」

新「そうかえ夜来るのも極りが悪い様だが、実は少し小遣こづけえが無くなつて、外ほかへ泊る訳にいかねえから、看病かた／＼来たのだが、能く御新造さんが承知で旦那を此方こっちへよこして置くね」

賤「なに碌ろくな看病もしないけれども、お宅うちでは氣に入らないと云つてね、氣に入つた処で看病をして貰う方がよいと人が来ると憎まれ口を利くから、お内儀かみさんも若旦那も此の二三日来ないから、私一人で看病するのだから実は困るよ、困るけれども其の代りには首尾がよくつて、種々いろく旦那に話して置いた事もあるのだからね、遺言状まで私は頼んで書いて貰つて置いたから、今能く寝付いて居るし、遊んでおいでな、揺ぶゆさつても病氣疲れで能く寝て居るから、茲こゝで何を云つても旦那に聞える氣遣きづかいは無し、他に誰も居ないから、真に差向いで話するがね、私は旦那に受出されて此処こゝへ来て、お前とは江戸に居る時分から、まア心こゝろ易やすいが、私の方で彼様あんな事を云出してから、お前も厭々ながらお内儀かみさん

まであゝ云う訳になつて苦勞さした事も忘れやアしないから、私は何処迄もお前に厭がられても縫りつく了簡だが、若しお前に厭がられ、見捨てられると困るが、見捨てないというお前の証拠が見度いわ」

新「見捨てるも見捨てないも実はお前己だつて身寄頼りもない身体、今は斯うなつて誰も鼻撮みで新吉と云うと他人は恐気を振つて居るのだ、長く此処に居る気もないから、寧そ土地を変えて常陸の方へでも行こうか、上州の方へ行こうか、それとも江戸へ帰ろうかと思ふ事も有るが、お前が此処に居る中は何うしても離れる事は出来ないが、村中で憎まれてるから土手に待伏でもして居て向臆でも引払われやアしねえかと心配で」

賤「私も一緒に行つて仕舞い度たいが、今旦那が死掛つて居るから、旦那が死んで仕舞えば行いかれるが、今直すぐには行けない、大きな声では云えないけれども、私は形見かたみわけ分の事も遺言状に書かして置いたし、お前の事も書かしてね、其処そこは旨く行つて居るけれども、旦那が癒なおればまだ五十五だもの、其様そんなにお爺さんでもないから、達者になりやア何時いつ迄も一緒に居て、ベン／＼とおん爺じいの機嫌を取らなければならぬが、新吉さん無理な事を頼む様だが、お前私を見捨てないと云う証拠を見せるならば今夜見せてお呉れ」

新「何どうしよう」

賤「うちの旦那を殺してお呉れな」

## 四十七

新「殺せつて其そん様な事は出来ねえ」

賤「なぜくなぜ出来ないの」

新「人情として出来ねえ、お前の執成とりなしが宜いから、旦那は己が

来ると、新吉手前てめえの様に親切な者はねえ、小遣こづけえを持って行け、独ひ

身とりみでは困るだろう、此の帯は手前に遣やる着物も遣ると、仮令たとえ着

古した物でも真に親切にして呉れて、旦那の顔を見ては何どうして

も殺せないよ」

賤「殺せませす、だから新吉さん、私はお前が可愛いと云じょうう情の

ない事を知つて居るよ」

新「情がないとは」

賤「情有るなら殺してお呉れよ」

新「情有るから殺せないのだ」

賤「何を云うのだね、じれったいよ、お出でつたらお出でよ」

然そうなると婦人の方が度胸の能よいもので、新吉の手を引いて病

間そへ窺そつと忍んで参りますと、惣右衛門は病氣疲れでグツスリと

寝入端ねいりばなでございます。ブルふるくふる慄ふるえて居る新吉に構わず、細ほそび

引きを取むつて向むの柱むこうへ結び付け、惣右衛門の側へ来て寢息うかを窺うかが

つて、起たるか起たきぬか試ためしに小声で、

賤「旦那だんなく」

と二ふた声こえ三み声こえ呼よんでみたが、グウぐう／＼といびぎが途断とぎれませんか

ら、窃そつと襟の間へ細引を挟み、また此方こちらへ綾あやに取つて、お賤は新吉に眼くばせをするから、新吉ももう仕方がないと度胸を据すえて、細引を手に捲まき付けて足を踏張ふんばる。お賤は枕を押えて、

賤「旦那えく」

と云いながら、枕を引く途端、新吉は力に任まかして、

新「うーム」

と引くと仰向に寝たなり虚空を掴んで、

惣「ウーン」

賤「じれつたいね新吉さん、グツと斯こうお引きよ、もう一つお

引きよ」

新「うむ」



と又引く途端新吉は滑つて後の柱で頭をコツン。

新「アイタ」

賤「ア、じれつたいね」

と有合せたありあわ小杉紙こすぎがみを台だいどころ処どころで二帖さんじょうばかり濡して来て、

ピッタリと惣右衛門の顔へ当てがって暫く置いた。新吉はそれ程の悪党でもないからブル／＼ふる慄ふるえて居ります。濡紙を取つて呼吸を見るとパツタリ息は絶えた様子細引を取つて見ると、咽喉のどくび頸のどくびに細引で縊くりました痕きずが二本付いて居りますから、手の掌ひらで水を付けては頻しきりに揉療治を始めました。すると此の痕は少し消えた様な塩梅。

賤「さアもう大丈夫だ、新吉さんお前は今夜帰つて、そうして

これくにするのだから、明日お前悟られない様に度胸を据えて  
来てお呉れよ」

といつて新吉を帰して、すっぱり跡方の始末を付けて、直に自  
分は本家へ跣足で駈込んで行きました

賤「旦那様がむずかしくなりましたからお出なすつて、まだ息  
は有りますが御様子が変つたから」

というと驚きまして、本家では悴惣二郎から弟息子の惣吉  
にお内儀さん村の年寄が駈けて来て見ると間に合いません間に合  
わない訳で、殺した奴が知らしたのでございますから。是非なく  
是から遺言状をとるので出して見ると、其の書置に、私は老  
年の病気だから明日が日も知れん、若し私が亡い後は家督相続は

惣二郎、又弟惣吉は相当の処へ惣二郎の眼識めがねを以て養子に遣つて呉れ、形見分かたみわけは是々、何事も年寄作右衛門と相談の上事を謀はかる様、お賤は身寄頼りもない者、無理無体に身請をして連れて来た者であるから、私が死ねば皆みんなに憎まれて此の土地にいられまいから、元々の通り江戸へ歸して遣つてくれ、歸る時は必ず金を五十両付けて歸してくれ、形見分はお賤に是々、新吉は折々見舞に来る親切な男なれども、お賤と中がよいから、村方の者は密通でもしている様に思うが、彼あれは江戸からの親ちかしい男で、左様な訳はない、親切な者で有る事は見抜いているから、己が葬式は、本葬は後あとでも、遺骸うづを埋めるのは内葬にして、湯灌ゆかんは新吉一人に申し付ける、外ほかの者は親類でも手を付ける事は相成らぬ。という妙

な書置でございませうが、田舎は堅いから、其の通りに先まずお寺様へ知らせに遣り、夜よに入り内葬だから湯灌に成りましても新吉一人、湯灌は一人では出来ぬもので、早桶を湯灌場に置いて、誰たれも手を付けては成らぬというのだから、

新「皆さん入らしつては困りますよ、遺言に背きますから」

「実にお前は仕しやわ合せだ」

と年寄から親類の者も本堂に控えて居る。是から早桶の蓋を取ると合掌を組んだなり、惣右衛門の仏様は斯こう首を垂れて居るのを見ると、新吉は現在自分が殺したと思うとおどくして手が附けられません。殊ことに一人では出来ないがと思つて居る処へ、土手の甚藏という男、是は新吉と一旦兄弟分に成りました悪わる漢。

甚「新吉く」

新「兄いか」

甚「一寸顔出しをしたのだが、本家へ行つたらお内儀かみさんが

泣いているし、誠にお愁傷で、惜しい旦那を殺した、え、此の位くれえ物の解わかつたあんな名主は近きん村そんにねえ善いい人だが、新吉、手前てめえ仕合せしやわだな、一人で湯灌を言付けられて、形見分もたんまりと、エおい、おつう遣っているぜ」

新「却かえつて有難迷惑で一人で困ってるのだ」

甚「困るたつて新吉、一人で湯灌は馴れなくつては出来ねえ、おい、それじゃアいかねえ、内所で己が手伝つて遣ろうか」

新「じゃア内所で遣つてくんねえ」

## 四十八

甚「弓張ゆみはりなぎア其方そつちの羽目へ指しねえな、  
 提ちようちん灯あかりをよ、盥たれえ  
 を伏せて置いて、仏様の腋わきの下へ手を入れて、ずうツと遣つて、  
 盥きわの際で早桶を横にするとずうツと足が出る、足を盥の上へ載せ  
 て、胡坐あぐらをかゝせて膝おせで押えるのだ、自分の胸の処へ仏様の頭を  
 おつおつつ押付けて、肋あばらほね骨ほねまで洗うのだ」

新「一人じゃア出来ねえ」

甚「己は馴れていらア、手伝つて遣ろう」

新「何う」

甚「何うだつて盥たれえを伏せるのだよ、  
提ちようちん灯そつちを其方へ、え、暗くれ  
え心しんを切りねえ、え、出しねえ、出た、オ、冷てえなア、お手  
伝いでござえ、早桶をグツと引くのだ」

新「何う」

甚「何うたつてグツと力に任して、え、気味を悪がるな」

新「あ、出た、」

甚「出たつて出したのだ、さア胡座あぐらをか、せな、盥たれえの上へ、宜よ  
しくそりや来た水を、水だよ、湯灌をするのに水が汲んでねえ  
のか、仕様がねえなア、早く水を持つて来きねえ」

と云うから新吉はブルブルふると慄ふるえながら二つの手桶を提さげて井戸  
端ゆへ行く。

甚「旦那お手伝でげすよ」

と抱上げて見ると、仏様の首がガツクリ垂れると、何う云うものか惣右衛門の鼻からタラ／＼と鼻血が流れました。

甚「おや血が出た、身寄か親類が来ると血が出るというが己は身寄親類でもねえが、何うして血が出るか、おゝ恐ろしく片方かたっほから出るなア」

と仰向にして仏様の首を見ると、時過たつたから前よりは判然はつきりと黒ずんだ紫色に細引の痕あとが二本有るから、甚藏はジーツと暫く見て居る処へ手桶を提げて新吉がヒヨロ／＼遣つて来て、

新「兄い水を持って来たよ」

甚「水を持って来たか此方こっちへ入れて戸を締めなよ」



新「な何だ」

甚「此処へ来て見やア、仏様の顔を見やア」

新「見たつて仕様がねえ」

甚「見やア此の鼻血をよ」

新「いけねえなア、其様なものを見たつて仕様がねえ、悪い悪い戯たずらアするなア」

甚「悪いわりたつて己がしたのじゃアねえ、自然ひとりに出たのだ新吉咽喉のどつくび頸に筋が出て居るな、此の筋を見や」

新「エ、筋が有つたつても構わねえ、水を掛けて早く埋めよう、おい早く納めよう」

甚「納められるもんかえ、やい、是りやア旦那は病気で死んだ

のじやアねえ変死だ、咽喉頸に筋があり、鼻血が出れば何奴か縊り殺した奴が有るに違えねえ」

新「何だなん人ひと聴きが悪いや、大きな声をしなさんな、仏様の為にならねえ」

甚「手前てまえも己も旦那には御恩があらア、其の旦那の変死を此の儘に埋めちやア済まねえ、誰か此の村に居る奴が殺したに違えねえから、敵かたきを捜して、手前も己も旦那の敵を取つて恩返おんげえしを仕なけりやア済まねえ、代官へでも何処どこへでも引張ひっぱつて行くのだ、本堂に若旦那が居るから若旦那に一寸ちよいとと云つて呼んで……」

新「何だなんな其様そのんな事をして兄あい困るよ、藪つを突付ついて蛇を出す様な事をいっちやア困らアな、今お経を誦あげてるから、エーおい

兄い、それはそれにして埋めて仕舞おう」

甚「埋められるもんかえ、それとも新吉、実は兄い私が殺したんだと一言云やア黙つて埋めて遣ろう」

新「何を詰らねえ事を、な何を、思い掛けねえ事をいうじやアねえか何だつて旦那を」

甚「手前が殺したんでなけりやア外に敵が有るのだから敵討をしようじやアねえか、手前お賤と疾うから深え中で逢引するなア種が上つて居るが、手前は度胸がなくなつても彼の女ア度胸が宜から殺してくれエといいい兼ねゝえ、キユウと遣つたな」

新「何うも、な何だつてそれは、何うも、エおい兄い外の事と違つて大恩人だもの、何ういう訳で思い違えて其様な事を、え、

おい兄あんにい」

甚「何をいやアがるのだ、手前てめえが殺さなけりやア殺さねえで宜いやア、手前と己は兄弟分の誼よしみが有るから打明けて殺したと云やア黙つて口を拭ふいて埋めるが、外に敵が有れば敵討だ、マア仏様を本堂へ持つて行こう」

新「これド、何どうも困るナアおい兄あんにい、え、兄い表向にすれば大變な事に成るよ」

甚「え、成つたつて宜いや、不人情な事をいうな、手前てめえが殺したなら黙つて埋うめるてえのだ、殺したら殺したと云いねえ、殺したか」

新「仕様がねえな、何どうも己が殺したという訳じやアねえが、

それは、困つて仕舞つたなア、唯だ一寸手伝つたのだ」

甚「なに手伝つた、じやアお賤が遣つたか」

新「それには種々訳があるので、唯繩を引張つたばかりで」

甚「それで宜しい、引張つたばかりで沢山だ、お賤が引くなア女の力じやア足りねえから、新吉さん此の繩を締めてなざア能く有る形だ、宜しい、よし／＼早く水を掛けやア」

とザブリ水を打掛けて其の儘にお香剃の真似をして、暗いうちに葬りに成りましたから、誰有つて知る者はございませんが、此の種を知っている者は土手の甚藏ばかり、七日が過ると土手の甚藏が賭博に負けて素つ裸体になり、寒いから犢鼻禪の上に馬の腹掛を引掛けて妙な形に成りまして、お賤の処へ参り、

甚「え、御免なせえ」

と是から強請ゆすりになる処、一寸一息吐きまして。

## 四十九

土手の甚藏がお賤の宅へ参りましたのは、七日も過ぎましてから、ほとぼりの冷めた時分行くのは巧たくみの深い奴でございます。丁度九月十一日で、余程寒いから素肌へ馬の腹掛を巻付けましたから、太輪ふとわに抱茗荷だきみょうがの紋が肩の処へ出て居ります、妙な姿なりを致して、

甚「へエ御免なせえ、へエこんにち今日はは」

賤「ハイ何方どなたえ」

甚「へエお賤さん御免なさえ、今日は」

賤「おや、新吉さん土手の甚藏さんが来たよ」

新「え、土手の甚藏」

新吉は他人ひとが来ると火鉢の側に食い客そうろうの様な風をして居るが、人が帰つて仕舞えば亭主ていしゅ振ぶつて居りますが、甚藏と聞くと慄ぞつとする程で、心の中うちで驚おどきました、眼をパチ／＼して火鉢の側に小さく成つて居りますと、

甚「誠に続いて好いい塩梅にお天気で」

賤「はい、さア、まア一服お喫あがりなさいよ」

甚「へエ御免なさえ、斯こういう始末でねえお賤さん、御本家へ

もお悔くやみに上ありましたが、旦那なくがお亡ななりで嘸さぞもう御愁傷ごでござい  
 ましよう、へ工わつち私も世話わに成つつた旦那で、平常ふだん優しくして甚藏や  
 悪い事をすると村へ置かかねえぞと、親切こづけえに意見をいつて、喧やかしい  
 事は喧いしいけれども、時々こづけえ小遣ももおくんなすつてね、善いい人で、  
 惜まれる人は早く死ぬと云うが、五十五じやア定じょう命みやうとは云わ  
 れねえ位くれえで嘸お前さんもお力落しで、新吉こ此こ処ゝに居るのか手前てめえ、  
 え、おい」

新「兄こ此ち方らへお上りなさい」

甚「お賤せんさん、新吉しんがお前まさんの処ゝへ来て御厄お介けで、家うちは彼様あん  
 な塩梅しんに成つつて此方こより外ほかに居る処ゝが無ねえから、宜いい事にして、  
 新吉しんが寝泊ねりをして居るというのだが、私わも新吉しんもお賤せんさんもお



互えどっこに江戸子こで、妙なもので、村の者じやア話しが合わねえから新吉きよよしと私は兄弟分えいぶんになり、兄弟分の誼よしみで、互たげえに銭がねえといやア、ソレ持つてけというように腹の中をサツクリ割つた間柄、新吉の事を悪くいう奴が有ると、何なんでえといつて喧嘩もする様な訳で、へエ有難う、カラもう何どうも仕様がねえ、新吉、物がへマに行つてな、此の通り人間が馬の腹掛を借りて着て居る様に成つちやア意気地いきぢはねえ、馬の腹掛で寒さを凌しのぐので、へエ有がとう、好いいお宅でげすねえ、私は初めて来たので」

賤そ「然そうですか、なに好い家うちを拵こしらえて下すつても仕方がござりませんよ、斯こう急に、且かつ那樣がお逝去かくれに成ろうとは思いませんでねえ、何いつ時までも此こゝ処こゝに住んで居る了簡で居りましたが、且かつ那なが

亡なられては仕方が有りません。他ほかに行く処ゆはなし、まア生れ故郷の江戸へ帰る様な事に成りますが、本当に夢の様な心持で、あゝ詰らないものだと考え出すと悲しく成つてね」

甚「そうでしょう、是は何どうも実になア、新吉お賤さんは何どの位くれえ力落だか知れやアしねえ、ナア、ヘエ有難いう良いお茶だねえ、此こ様な良い茶を村の奴のまに飲のしたつて分らねえ、ヘエ有難う、お賤さん誠に申し兼ねた訳でげすがねえ、旦那が達者でいらつしやれば黙つて御無心申すのだが、此の通りの始末で、からモウ仕様がねえ、何うかお願いでございませちつが些ばかと許こづり小遣けえをお貰もえ申てし度えが、何うか些と許けえり借金を返して江戸へでも帰けえりてえ了簡も有るのですが、何うか新吉誠に無理だがお賤さんに願けえつてねえ、姉さ

んお願いでげすが些とばかり小遣こづけえをねえ」

賤「はい困りますねえ、旦那が亡くなりましたして私は小遣こづかいも何もないのですが、沢山の事は出来ませんが、真ほんの志こころばかりで誠に少しばかりでございしますが」

甚「イ、エもう」

賤「真の少しばかりでお足たしには成りますまいが、一杯召上つて」

甚「へエ有難う、へエ」

と開けて見ると二朱金で二個ふたつ。

甚「是はお賤さんたった一分いちぶで」

賤「はい」

甚「一分や二分じゃア借りたつて私の身の行立つ訳は有りませ  
 んねえ、借金だらけだから些と眼鼻めはなを付けて私も何うか堅かたき気に成  
 りてえと思つてお願い申すのだが、それを一分ばかり貰つても法  
 が付かねえから、少し眼鼻の付く様にモウ些とばかり何うかね」  
 賤「おや一分では少ないと仰しやるの、そう、お気の毒様出来  
 ません、私どもは深川に居ります時にも随分ぜに銭ぜに貰もらいは来ました  
 が、一分遣れば大概帰りました、一分より余計たんとは上あげる訳にやア参  
 りません、はい女の身の上で有りますからねハイ、一分で少ない  
 と仰しやれば、身寄親類ではなし上げる訳は有りませんが、そう  
 して幾ほしら欲ほしいと仰しやるのでございますえ」

甚「幾ねだりらカクウてえお強請申すのでげすから貰う方で限りはね

え、幾ら多くつても宜いが、お賤さんの方は沢山遣りたくねえと  
いうのが<sup>あたりめえ</sup>当然の話だが、借金の眼鼻を付けて身の立つ様にして貰  
うにやア、何様<sup>どん</sup>な事をしても三拾両貰わなけりやア追付<sup>おっつ</sup>かねえか  
ら、三拾両お借り申してえのさ、ねえ何うか」

賤「何<sup>なん</sup>だえ三拾両呆れ返つて仕舞うよ、女と思つて馬鹿にして  
お呉れでないよ、何だエお前さんは、お前さんと私は何だエ、碌  
にお目に掛つた事も有りませんよ、女一人と思つて馬鹿にして三  
拾両、ハイ、そうですかと誰が貸しますえ、訝<sup>おか</sup>しな事をいつて、  
なん、なん、なん何をお前さんに三拾両お金を貸す縁がないでは  
有りませんか」

## 五十

甚「それは縁はない、縁はないがね、縁を付けりやア付かねえ事も有りますめえ、ねえ新吉と私は兄弟分わっち、ねえ其の新吉が此こちら方さま様へ御厄介に成つて居るもの其の縁で来た私さ」

賤「新吉さんは兄弟分か知りませんが、私はお前さんを知りません、新吉さん帰つてお呉んなさいヨウ、呆れらア馬鹿くしい、人を馬鹿にして三拾両なんて誰たれが貸す奴が有るものか、三拾両貸す様な私はお前さんに弱い尻尾しっぽを見られて居れば仕方がないが、私の家うちで情交いろの仲宿なかやどをしたとか博奕ばくちの堂敷どうじきでも為したなら、怖こいから貸す事も有るが、何もお前さん方に三拾両の大金を強請いたぶら

れる因縁は有りません、帰つてお呉れ、出来ませんよ、ハイ三文も出来ませんよ」

甚「然<sup>そ</sup>う腹を立つちやア仕様がねえ、え、おい、だがねえお賤さん、人間が馬の腹掛を着て来る位<sup>くれ</sup>えの恥を明かしてお前さんに頼むのだ、私<sup>わっち</sup>も此<sup>だい</sup>の大の野郎が両手を突いて斯<sup>こ</sup>んな様<sup>ざま</sup>アしてお頼み申すのだから能<sup>よく</sup>々の事、宜<sup>い</sup>いかね、それにたつた一分じやア法が付かねえ、私の様な大きな野郎が手を突いてのお頼みだね、此の身体を打毀<sup>ぶっこわ</sup>して薪<sup>まき</sup>にしても一分や二分のものはあらアね、馬の腹掛を着て頼むのだから、お前さん三拾両貸して呉れても宜<sup>よ</sup>かろうと思う」

賤「何が宜<sup>い</sup>いのだえ、何が宜<sup>い</sup>いのだよ、何もお前さん方に三拾

両の四拾両のと借りられる縁が有りません、悪い事をした覚えは有りません、博奕の宿や地獄の宿はしませんから貸されませんよ」

甚「じやア何う有つてもいけねえのかえ」

賤「帰つてお呉んなさい」

甚「そうか無理にお借り申そうという訳じやアねえ、じやア帰けえりましょう、新吉黙つて引込ひっこんで居るなえ此処こゝへ出ろ、借りて呉れ、ヤイ」

新「其様そんな大きな声をしてはいけねえやな兄あんにい仕方がねえな、

お賤さん仕方がねえ貸しねえ」

賤「何なんだえ、お前さんは心こゝろ易やすいか知りませんが、私は存じ

ません、何どん様な事が有つても出来ませんよ、帰つてお呉んなさい」



甚「何う有つても貸せねえつてもものア無理にやア借りねえ、じやア云つて聞かせるが、コレ女だと思ふから優しく出りやア宜い氣に成りやアがつて、太え事をしやアがつて、色の仲宿や博奕の堂敷が何程の罪だ、世の中に悪い事と云うなア人殺しに間男と盗賊だ」

賤「何をいうのだ」

甚「なに、何うしたも斯うしたもねえ、新吉此処へ出ろ、エ、おい、咽喉頸の筋が一本拾両にしても二十両が物アあらア」

新「マア黙つて兄い」

甚「何でえ籠棒め、己が柔和しくして居るのだから文句なしに出すが当然だ、手前等が此の村に居ると村が穢れらア、手前等

を此<sup>こ</sup>処<sup>け</sup>え置くもんか籠棒め、今に逆磔<sup>さかばりつけ</sup>刑にしようと思巻<sup>すまき</sup>にして  
 絹川へ投<sup>ほう</sup>り込<sup>こ</sup>むと己<sup>おのれ</sup>が口一つだから然<sup>そ</sup>う思<sup>おも</sup>つてろえ」

新「おい、其<sup>その</sup>様な事を人に」

甚「人に知れたつて構<sup>かま</sup>うもんかえ」

新「マア〜待ちねえ、知らねえのだお賤<sup>しん</sup>さんは、一件の事を  
 知らねえのだよ、だから己<sup>おのれ</sup>が何<sup>ど</sup>うか才<sup>さい</sup>覚<sup>かく</sup>して持<sup>も</sup>つて行<sup>い</sup>こう、今夜  
 屹<sup>きつと</sup>度<sup>ど</sup>三拾<sup>さんじゅう</sup>両<sup>りょう</sup>持<sup>も</sup>つて行<sup>い</sup>くよ」

甚「間<sup>ま</sup>拔<sup>ひ</sup>め、黙<sup>もく</sup>つて引<sup>ひ</sup>込<sup>こ</sup>んで居<sup>ゐ</sup>る奴<sup>やつ</sup>が有<sup>あ</sup>るもんか、そんなら直<sup>すぐ</sup>  
 に出<sup>い</sup>せ」

新「今は無いから晩<sup>ばん</sup>方<sup>ほう</sup>までに持<sup>も</sup>つて行<sup>い</sup>くよ」

甚「じゃア屹<sup>きつと</sup>度<sup>ど</sup>持<sup>も</sup>つて来<sup>こ</sup>い」

新「今に持つて行くから、ギヤア〜騒がねえで、実は、己が  
 まだお賤に喋らねえからだよ、当人が知らねえのだからよ」

甚「コレ、博奕の仲宿とは何だ、太え女あまつちよだ」

新「そんな大きな声を」

甚「屹度持つて来い、来ねえと了簡が有るぞ」

新「何ごと置いてても屹度金は持つて行くよ、驚いたねえ」

賤「おい新吉さん、何なんだつて彼奴あいつにへえつくもうつくするの

だよ、お前がへらくすると猶なお増長すらアね」

新「何どうしてもいけないよ、貸さなけりやア成らねえ」

賤「何なんで彼奴あいつに貸すのだえ」

新「何なんだつて、いけねえ事に成つて仕舞つた、旦那の湯灌の時

彼奴あいつが来やアがつて、一人じやア出来ねえから手伝うといつて、  
 仏様を見ると、咽喉のどつくび頸びに筋が有るのを見付けやがつて、ア屹きつと度殺  
 したろう、殺したといやア黙つてるが云わなけりやア仏様を本堂  
 へ持つて行つて詮議あらいかた方するといふから、驚いて否いやおう応おうなしに種  
 を明あかした」

賤「アレくあれだもの、新吉さん、それだもの、本当に仕方  
 がないよ、彼あれまでにするにやア、旦那の達者の時分から丹精した  
 に、彼の悪党あくどうに種を明して仕舞つて何どうするのだよ、幾ら貸した  
 つて役に立つものかね、側から借りに来るよ彼奴あいつがさ」

新「だけれども隠すにも何も仕様がない、本堂へ持つて行かれ  
 りやア直すぐに悪事あくじが露われるじやアねえか、黙つて埋めて遣るから云

えというので」

賤「本当に仕様がないうよ、何処へでも持つて行けと云えばいゝ

じやアないか」

新「然ういうと直に彼奴が持つて行くよ」

賤「持つて行つたつていゝじやアないか、何処までも覚えは有

りませんと私も云い張ろうじやアないか」

新「云い張れないよ、彼奴ア中々の奴でそれに彼アいう時は口

が利けないからねえ、脛疵だからお前のいう様な訳にやアいか

ねえ、金で口止めするより外に仕方はないよ」

賤「でも三拾両貸すと、ばんごとく来ては大きな声で呶鳴る

と、何で甚藏が呶鳴るか他人の耳にも這入り、目明が居るか

ら、おかしく勘付かれて、あいつが縛られて叩かれると喋るから、何の道新吉さん仕方がない、土手の甚藏を何うかして殺してお仕舞いよう」

## 五十一

新「何うして〜中々彼奴ア己より強い奴で、滅法力が有るか  
ら、彼奴は撲たれても痛くねえってえので、五人位掛らねえじゃ  
アおっ付かねえ」

賤「何うか工夫が有るだろうじゃアないか」

新「工夫が中々いかないよ」

賤「ちよいとく、新吉さん耳をお貸し」

新「エ、うんうん成程是は旨え」

賤「だからさア、それより外に仕方がないよ、悟られるといけない、悪党だから悟られない様に確かり男らしくよ」

と何か囁やき、新吉が得心して、旦那の短い脇差をさして、新吉が日が暮れて少したつて土手の甚藏の家へ来て、土間口から、

新「はい御免」

甚「サア上りやア、マア下駄を穿いたなりで上りやア、草履か、

構わねえ、畳がねえから掃除も何もしねえから其の儘上りや」

新「兄い、先刻の様に高声であんな事を云ってくれちやア困

るじやアねえか、己はどうしようかと思つた、表に人でも立つて

居たら」

甚「何故、いゝじやアねえか、己が面を出したら黙つて金を出すかと思つたら、まごゝくして居やアがつて、手前お賤に惚れていやアがる、馬鹿、彼女めいゝ氣に成りやアがつて、呶鳴り付けるから仕方なしに云つたんだ、此畜生金え持つて来たか」

新「彼れから後でお賤に話をして実は是々で明したと云つたら、それは濟まない事を云つた、知らなかつたから誠に悪い事を云つたが、甚藏さんに悪く思わねえ様に然ういつてくれというのだ」

甚「手前湯灌場の事を云つたか」

新「云つたよ、云つたら驚いてお賤は甚藏さんに濟まなかつた、然ういう訳なら何故早く私に然う云わないで、だが土手の甚藏さ



んに茲こゝで三拾や四拾や上げてても焼石に水で駄目だから、纏まとまった金を上げようから、何どうかそれで堅氣になり、此方こつちも江戸へ行つて小世帯こじよたいを持つから、お互たがひに此の事は云わねえという証拠かの書ききつけ付つけでも貰もらつて、たんとは上げられないが百両上げるから、百兩で堅氣に成つたら宜よろかろうと云うので、長ながく彼様あんなな事をしていても甚藏しんざうさんも詰つらねえじゃアないか、兄弟分けいだいぶんの友誼よしみで此の事はいいわないと達引たてひいて呉くれれるなら、生涯せいげ食くえる様に百兩遣しらうといいうのだ、百兩貰もらつて堅氣けんきに成りねえ」

甚しん「然しかうか、有ありがて難がたえ、百兩呉くれれば生涯せいげお互たがひえに堅氣けんきに成りてえ、己おれも馬鹿ばかは廢やめてえや」

新あらた「然しかう極きめてくんねえ」

甚「じやアまあ金さえ持つて来りやア」

新「今茲こゝにはねえ」

甚「何をいうんだ馬鹿」

新「マア人のいう事を聞きねえ、旦那が達者のうちお賤に己が死んだら食くい方かたに困るだろうから、死んでも食方の付く様にといつて、実は根本ねもとの聖しょう天山てんやまの手水鉢ちようずばちの根に金が埋めて有るか、それを以もつてと言付けて有るのだ、えゝ二百両あると思ひねえ、聖天山の左の手水鉢の側に二百両埋めて有るのだから、それを百両ずつ分けて江戸へ持つて行つて、お互に悪事は云わねえ云いますめえと約束して、堅気になつて、親類になろうじやアねえか」

甚「然うか、新吉、旦那もお賤にやア惚れて居たなア、二百両

という金を埋めて置いて是で食えよとなア、若旦那にもいわねえで金を埋めて置くてえのは金持は違わア」

新「早く堀らねえと彼処あそこの山は自然薯じねんじょうを堀りに行く奴やつが有るから、無暗むやみに遣やられるといけねえ」

甚「じやア早く」

新「鋤すきか鋤くわはねえか」

甚「丁度鋤あが有るから」

と有あり合あひの鋤あを担かついで是から二十丁もある根本の聖天山あがへ上あつて見ると、四辺あたりは森しん々と樹木が茂さかつて居り、裏手は絹川の流ながれはどうくくと、此この頃ごろの雨氣あまけに水増して急おとに落おす河水かみの音高く、月は皎々こうくと隈くまなく冴さえて流へ映る、誠に好よい景色だが、高い処は

寒うございますので、

甚「新吉此処こゝは滅法寒いナア」

新「なに穴を掘ると暖あつたかくなつて汗が出るよ、穴を掘りねえ」

甚「余計な事をいうな」

新「此処だ〜」

と差さ図ずを致しますから、

甚「よし〜」

といいながら新吉と土手の甚藏がポカ〜掘りまする、所が金  
は出ません、幾ら掘つても金は出ない訳もとで固もより無い金、びっし  
より汗をかいて、

甚「新吉金は無ねえぜ」

新「無いね」

甚「何をいうんだ、無駄ぼねつ骨おらを折しやアがつて金は有りやアし  
ねえ」

## 五十二

新「左と云つたが、ひよつとしたら向つて左かしら」

甚「何を云うんだ仕様がねえな此畜生咽喉のどが渴いて仕様がねえ、  
斯こんなにびつしよりに成つた」

新「己も咽喉が渴くから水を飲んでえと思つても、手水鉢からは殻ひしゃくはからくだが、誰もお参りに来ないと見えるな、うん

そうく、此方こつちへ来な、聖天山の裏手に清水の湧く処がある、社  
 の裏手で崖の中段にちよろく煙管きせるの羅宇らうから出る様な清水が溜  
 って、月が映っている、兄あにい彼処あそこの水は旨えなうめ」

甚「旨えが怖くつて下りおられねえ」

新「下りられねえつて何うかして下りられるだろう、待ちねえ  
 あの杉だか松だか柏かしわだかの根方に成つて居る処ところに藤蔓ふじつるに蔦つたや何  
 か縄の様になつてあるから、兄こいつい此奴こいつに吊下ぶらさがつて行けば大丈でえじよ  
 夫うぶだが己は行つた事がねえからお前行めえつてくんねえな」

甚「此奴ア旨え事を考えやアがつた、新吉の智慧ちえじゃアねえ様  
 だ、此奴ア旨え、柄杓は有るか」

と手水鉢の柄杓を口に啣くわえて、土手の甚藏が蔦つた蔓かつらに掴まつ

て段々下りて行くと、ちようど松柏の根方ねがたの匍はつてゐる処に足掛こしらりを拵こしらえて、段々と谷間たにあいへ下りまして、

甚「ア、斯こうやつて見ると高いナア、新吉ヤイ〜水は充分あらア」

新「早くお前めえ飲んだら一杯持つて来て呉んねえ」

甚「手前てめえ下りやアな、持つて行く訳にアいかねえ、ポタ〜柄杓が漏らア、カラ〜になつていたからナア、ア、旨うめえ〜甘露だ、いゝ水だ、ア、旨うめえ、なに持つて行くのは騒さわぎだよ」

新「後生だから、お願いだから少しでも手拭ひたに浸ひたして持つて来て呉んねえ咽喉のどが干ひつ付きそうだから」

甚「忌いめえましい奴やつだな、待ちヤア」

と一杯掬い上げて濡れない様に、平に柄杓の柄を啣えて、  
 蔓に縋り、松柏の根方を足掛りにして、揺れても濡れない様に  
 して段々登つて来る処を、足掛りの無い処を狙いすまして新吉が  
 腰に帯したる小刀を引抜き、力一ぱいにプツリと藤蔓  
 蔓を切ると、ズル／＼ズーツと真逆さまに落ちましたが、何  
 うして松柏の根方は張っているし、山石の角が出張つておりま  
 ずから、頭を打破つて、落ちまするととても助かり様はございませ  
 んが、新吉は側にある石をごろ／＼谷間へ転がし落しました、  
 其のうちむら／＼と雲が出て月が暗く成りましたから、それを幸  
 いに新吉は脇差を鞘に納めて、さっさと帰つて来て、

新「おゝ／＼お賤さん／＼明けてお呉れ／＼」



賤「誰たれだえ」

新「己おいらだよ」

賤「ア新吉さんかえ、能く帰つて来てお呉れだねえ、案じていたよさアお這入り」

新「ア、びしよ濡だ、何か斯こう単物ひとえものか何か着てえもんだ」

賤「裕あわせと単物と重ねて置いたよ、さア是をお着、旨く行つたかえ」

新「すつぱり行つた」

賤「私の云つた通り後あとから石を投やつたのかえ」

新「投つた〜、気が付いたから後から石を二つばかり投つた、

あれが頭へ当りやア直すぐに阿陀おだぶつ仏だ」

賤「いゝね、今脊中を拭くから一服おしよ、熱い湯で拭く方が  
 好いから」

と銅かなだら盥らいへ湯を汲んで新吉の脊中を拭いてやり、

賤「裕におなり」

新「大きにさばくした」

と其のうち此方こつちへ膳を持って来て酒の爛を付け、月を見ながら

一猪口ひとちよく始めて、

賤「もう是で二人とも怖い者はないよ」

新「何どうも実に旨うめえ事を考えて、一寸彼奴あいつも気が付かねえが、

藤蔓に伝わって下りろといった時に、手前てめえの智慧じゃアねえ様だ

といった時、胸がどきりとしたが、真ま逆ささまになつて落おちる上か

ら側に在<sup>あ</sup>った石をごろく、あの石で頭を打破<sup>ぶちわ</sup>つたに違<sup>ちげ</sup>えねえが、  
 彼奴は悪党の罰<sup>ばち</sup>だ。己<sup>うぬ</sup>が悪党の癖に」

是から二人で中<sup>なか</sup>好く酒盛をしているうち空は段々雲が出て来て  
 薄暗くなり、

賤「もう寝ようじやアないか」

というので戸締りをしに掛りましたが、

新「また曇つて来たぜ、早く仕ねえ」

賤「今お待ち」

と床を敷く間新吉は煙草を喫<sup>の</sup>んでいると、戸外<sup>おもて</sup>の処は細い土手  
 に成つて下に生<sup>いけ</sup>垣<sup>がき</sup>が有り、土手下の葎<sup>よしめし</sup>蘆<sup>あし</sup>が茂っております小溝<sup>こみぞ</sup>  
 の処をバリくくくという音。

新「何なんだか音がするぜ」

賤「お前まえ様は臆病だよ、少し音がすると」

新「デモ何だかバリく」

賤「なアに犬だよ」

新「何だか大変にバリ付くよ、何だろう」

と怖こわ々庭を見る途端に、叢むら雲が断きれて月がありくと照

り渡り、映さす月影で見ると、生垣を割つて出ましたのは、頭か髪は

乱れて肩に掛り、頭蓋あたまは打裂ぶつけて面こ部れから肩こへ血だらけになり、

素肌へ馬の腹掛を巻付けた形なりで、何ど処こを何どう助たかったか土手の甚

藏が庭に出た時は、驚おどきましたの驚おどきませんのではござりませぬ、

是から悪事露見という処、一寸一息吐きまして。

## 五十三

引続きお聴きに入れました新吉お賤は、我罪を隠そうが為に、  
 土手の甚藏あざむを欺あざむいて根本の聖天山の谷へ突つきおと落し、上から大石たいせき  
 を突転あざむがしましたから、もう甚藏の助かる気遣きづかいは無いと安心し  
 て、二人差向いで、堤どてした下の新家しんやで一口飲んで、是これから寝よう  
 と思つて雨戸を締めようという所へ、土手の生垣を破つて出たの  
 は土手の甚藏、頭脳は破れて眉間こから頤こへ掛けて血は流れ、素肌  
 に馬の腹掛を巻付けた姿なりで庭口の所へ斯こう片足踏出して、小座敷  
 の方を睨にらみました其の顔がんしよく色は実に二ふ夕眼とは見られぬ恐しい

怖い姿すがたでござりますから、新吉お賤は驚いたの驚かないの、ゾツと致しました。座敷へ上あがつてキヤア〜騒がれては大変と思いましたが、新吉はもとよりそれ程わるもの悪徒という程でも有りませんから、たゞ甚藏の見相けんそうに驚きふる〜慄ふるえているから、

賤「新吉さんお前こゝ爰にいてはいけないよ、どんな事が有つても詮方しかたがないから土手へ連れて行つて彼奴あいつを斬ぶ払ばつておしまいよ」  
新「斬ぶ払ばえたつて出れば殺される」

賤「大丈夫だよ、戸外おもてへ連れて行つて堤どての上で」

とぐず／＼云っているうちずか／＼と飛込んで縁側へ片足踏かけました甚藏は、出ようとする新吉の胸ぐらを把とつて

甚「己うぬ、いけツ太ぶえ奴、能くも彼の谷あへ突落しやアがったな、

お賤も助けちやア置かねえ能くも己おれを騙だましやアがったな、サア出ろ、いけツ太え奴だ、お賤あまの女も今見ていろ」

と堤の上へ引摺ひきずつて行ゆこうとする、此方こちらは出ようとする、向むこうは引くから、ずるくと土手下へ落ちたから、

新「ウム、後生だから助けて、兄あにい苦しい、己おれの持つている金みんなめえは皆お前に、これさ兄あにい、何も彼かもみんなお前にやるから何どうか堪忍こらして、然そういう訳じやアねえ、行間ゆきま違ちがいだから」

甚「糞くでも喰くらえ、なに痛いたえと、ふぎけやアがるな」

と力を入れて新吉の手を逆に把とつて捻ねじり、拳固げんこを振り上げてコツく撲ぶつたから痛いぶの痛くないのつて、眼から火の出るようぶでぶぎぎいます。

新「兄い助けて呉れ〜」

と喚わめきますのを、

甚「うぬ助けるものか、お賤のあまツちよも今後あとからだ」

と腰から出刃庖丁を取出して新吉の胸むなもと下を目懸けて突こうとすると、新吉は仰向に成つて、

新「己が悪かつた堪忍して、兄い後生だから助けてよう」

というも大きな声を出しては事が露顕しようと思ひますから、

小声で助けて呉んねえと呼ぶばかりでございます。すると何処どこか

ら飛んで来ましたかズドンと一発鉄砲の流それだま丸が、甚藏が今新吉

を殺そうと出刃庖丁を振り翳かぎしている胸元へ中あたりましたから、ば

ったり前へのめりましたが、片手に出刃庖丁を持ち、片手は土手



の草に取つき、ずーと立上ったが爪立つまだつてブルくつと反身そりみに成る途端にがらくくくと口から血反吐ちへどを吐きながらドンと前へ倒れた時は、新吉も鉄砲の音に驚き呆気あっけに取られて一向訳が分らないから、身分が殺された心がしましてたゞ南無阿弥陀仏くと申しましたが、暫くして漸ようやくに気が付き起上りまして四辺あたりを見廻し、

新「ア、何処から飛んで来たか鉄砲の流丸それだま、お蔭で己は助かつたが獵師が兎でも打とうと思つて弾丸たまが反それたか、ア、僥倖さいわい命いのちづよ強つよかつた、危ない処のを遁のがれた、誰たれが鉄砲を打つたか有難いことだ」

併しかし獵かり夫ゆうどが此の様子を見て居りはせぬかと絹川の方を眺め

ますれど、只水音のみでございまして往来は絶えた真の夜中でございます。此方こちらの庭の生垣の方からちらり／＼と火繩の火が見える様だから、油断をせず透すかして見ますると、寝衣帯ねまきおびの姿なりで小鳥を打ちまする種が島を持つて漸くに草に縋すがつて登つて来たのはお賤、

賤 「新吉さんお前に怪我は無かつたかえ」

新 「お賤、手前てまえはマア何どうした」

賤 「私はモウ途方に暮れて仕舞つて、お前に怪我をさしてはならないから何うしようかと思つても、女が刃物ざんまい三昧さんまいしても彼奴あいつには敵かなわないし、何うしようかと考えたら、ふいと気がついたんだよ、此の間ね旦那が鉄砲を出して小鳥をうつ時手前てまえもやつて見

ろツてんでね、やつと引金に指を当る事だけ教わつて覚えたの  
 で、時々やつて見た事がある、今も丸が込めて有る事を思い出し  
 たから、直に旦那の手箱の中から取出してね、思い切つて遣つて  
 見たんだけど、好い塩梅に近くで発しただけに狙いも狂わず  
 行つて、お前に怪我さえ無ければ私はマア有難い斯んな嬉しい事  
 は無いよ」

新「何しろ何うせ此の事が露顯せずにはいねえ、甚藏を撲殺  
 して仕舞つてお前と己と一緒に成つていられる訳のものじゃアね  
 えから、今のうち身を隠してえものだ」

賤「ア、私もね茲にいる気はさら／＼無いから、形見分のお  
 金も有るのだけれども、四十九日まで待つてはられないから、

少しは私の貯えたくわも有るから、それを持って二人で直すぐに逃げようじやアないか」

新「ウム、少しも早く今宵こよひの内に」

というので、是から衣類くすりょうや櫛笄くしづがひ貯えの金子までも一ひト風呂敷として跡くらを暗くらまし、明あけ近い頃に逐電して仕舞いました。また甚藏の死骸は絹川べりにありましたが、夜よが明けて百姓ひやくしやうが通り掛つて騒ぎ、名主へも届けたが、甚藏は平素ふだん悪にくまれもの、何うか死んで呉れ、ばい、と思つていた処、甚藏が絹川べりで鉄砲てつぽうで撃うち殺ころされているというのを村の人達が聞込んで、ア、是からは安心だ、甚藏が死ねば村の者が助かるまでよと歎び、其の儘名主様へ届けて法藏寺に葬つたが、投込み同様、生きている中うちの悪事の罰で、勿

論悪徒わるものですから誰の所業しわざと詮議して呉れる者も有りません。新吉お賤の逃去りましたのは固もとより不義淫いたずら奔はをしていて名主様が没なくなると、自分達は衣類や手廻りの小道具何や彼かやを盗んでいなく成つたに相違ない。彼は素あれより浮気もとをしていた者の駈落だから左もあるべしと、是も尋ねる者もないので何事も有りませんが、名主惣右衛門の変死は誰たれ有つて知る者は無い。肝腎の知っている甚藏が殺されましたから、惣右衛門は全く病死したのだと心得て居りますが、中には疑がつている者も有りまして、様々いうが、マア名主の跡目は倅惣次郎せがれ、誠に柔和温順の人でお父とつさんは道楽のみを致しましたが、それには引きかえ惣次郎は堅くつて内気ですか他たに出たことも無い人でございますが、或時村の友達に誘われ

まして水街道へ参つて、麴屋こうじやという家うちで一猪口ひとちよこやりました、其の時、酌しやくに出た婦人が名をお隅すみと申しまして、齡としは廿歳はたちですが誠に人柄よの好い大人しやかなの婦人でございます。

## 五十四

水街道あたりでは皆枕まくらつき附つきといひまして、働き女がお客に身を任せるが多く有りますが、此のお隅は唯無事に勤めを致し、余程人柄よの好い立振舞から物の言い様、裾すそ捌さばきばきまで一点の申分のない女ですから、惣次郎は麴屋の亭主を呼んで、是は定めし出の宜しい者だろうと聞合せますと、元は谷出たにでわ羽守のかみ様の御家来で、

神崎定右衛門かんざきさだえもんという人の子で、お父様とつさまと一緒に浪人して此の水  
 街道を通り、此の家に泊り合せると定右衛門が生憎あいにく病気で長く  
 煩わづらつて没ななり、後あとで薬くすり代しろや葬式料に困つて居ります故、宿  
あるじの主人が金を出して世話を致しましたから恩報じかた／＼此の  
 家に奉公致し、外ほかに身寄親類もない心細い身の上でございませうか  
 ら、何分願います、外の女とは違ひまして真面目に奉公を致して  
 居りますもの、鼻ひいき尻しりにして下さいというので、惣次郎の氣に入り  
 まして、度々たび遊びくに来る、其の頃の名主と申しては中々幅の利い  
 た者ですから、名主様の座敷へ出る時は、働き女でも芸げい妓しやでも、  
 まア名主様に出たよなどと申して見得みえにしたものでございませう。  
 惣次郎もお隅には多分の祝義を遣わし折節は反物たんものなどを持って

来て遣る事も有るから、男振といい気立きだてといい柔和温順で親切な名主様と、お隅も大切に致し、何どうも有難いと思ひ、或日の事、

隅「私は外に参る処もない身の上でございますから、何分御鼻  
眞なすつて下さい」

というので、惣次郎も近ちか々／＼来る中うちに、不図した縁で此のお

隅と深くまりました事で、今迄堅い人が急に浮うかれ出すとは是は又格

別でございまして、此の頃は家を外そとに致す様な事が度々でござい

ますから、お母様つかさんも心配する、弟おとうと御もございしますが、是はま

だ九歳で、何も役にたつ訳でもございませぬから、お母様も種いろ

々心配なさるが、常に堅い人だから、うっかり意見がましい事

もいわれませんので控えている。すると其の翌年かんせい寛政十年とな



り、大生郷村の天神様から左ひだりに曲ると法恩寺村ほうおんじという、其の法恩寺の境内に相撲が有ります。此の相撲場は細川越中守ほそかわえつちゆうのかみ様御免の相撲場ということで、木村權六きむらごんろくという人が只今もつ以て住んで居ります、縮緬ちりめんの幕張りを致して、田舎相撲でも立派な者で近郷からも随分見物が参ります、此処こゝに参っている関取は花車はなぐるま重吉じゆうきちという、先達私せんだわたくし古い番附を見ましたが、成程西の二段目の末から二番目に居ります。是は信州飯山いひやまの人で十一の時初めて羽生村へ来て、名主方に二年ばかり奉公している其うちの中に、力もあり体格もいゝので、自分も好きの処から、法恩寺村の場所へ飛入りに這入ると、若いにしては強い、此の間は三段目の角力すもうを投げたなど、賞ほめられましたから、自分も一層相撲に成ろうと、

其の頃の源氏山げんじやまという年寄の弟子となつたが、是より花車が来たといえは土地の者が鼻屑にして見物に来る。惣次郎も何時いつも多分の祝義を遣わしましたが、今度もお隅を伴つれて見物しようと思ひ、相撲は附けたり、お隅に逢いたいからそこく支度を致しなすど、母が心配して

母「アノ帰るなら今夜は些ちと早く帰つて貰もれ度てえ、明日あすは少し用が有るからのう」

惣次郎「少しは遅く成るかも知れませんが、若もし遅くなれば喜き右衛門もんどんなにかに何彼と頼んで置いたから御心配は無いが、万ひよつと一して花車も一杯やり度たいなど、云うと、些ちつとは私も遣り度い物も有りますから、又帰る迄に着物でも持たして遣りとうございますし、

そんな事で種々又相談も致しますから、若し遅く成りましたら、  
 何うかお先にお寝みなすつて下さいまし」

母「ハイ遅くならば先きに寝てもいゝだけれど、まあ此の頃は  
 他へ出ると泊つて来る事もあり、今迄旦那様が達者の時分にはお  
 前が家を明けた事はねえ、あんな堅え若旦那様はねえ、今の世は  
 逆さまだ、親が女郎を買つて子が後生を願うと云う唄の通りだ、  
 惣次郎様の様なあんな若旦那持ちながら、惣右衛門どんはいゝ  
 年いして道楽するなどと村の者がいうから、鼻が高えと思つたが、  
 旦那殿が死んで仕舞つて見ると、今ではお前の身代だから、まあ  
 家の為え思つてお前も今迄骨折つて呉れただが、去年あたりから  
 大分泊りがけに出かけるものだから、村の者も今迄は堅え人だつ

たが、何どう言う訳だがな泊り歩くが、役柄もしながらハアよくねえ事こつたア年老としとつた親を置いて、なんて悪口わるくちを利きく者もあるで、成なるだけ他人ひとには能く云わしたいが、是は親の慾だからお前の事だから間違まちげえはなかんべえが、成たけまア帰けえれるだら帰けえつて貰もれえてえだ心配しんぱいだからのう」

惣次郎「イエなに、然そう御心配なれば参らんでも宜しゆう、是非参り度たい訳ではありません、花車も来た事いさゝだから聊かでも祝義も遣り度たいと思いましたが、そういう訳なら参らんでも宜しいので、新右衛門しんえもんも同道する積りでしたが、左様なれば往いかないでも先方むこうで咎とがめるでもなし、怒おこりもしますまい、それでは止やめましよ  
う」

母「そういえばハア困るべえじゃアねえか、行くなアとはいわねえが、出れば泊りがけの事も有るし、帰らねえ事も有るから、それで私が案じるからいうので、行くなアとはいわねえ、行つても能から早く帰つて来うというのだ、お前は今迄親に暴え言をい

い掛けた事はねえが、此の頃は様子が異つて意見らしい事をい

ば顔色が違うからいうだ、私は段々年を取り惣吉はまだ子供なり、

役には立たねえから、お前も堅くつて今まで人に云われる事もな

かつただから、間違えはなからうけれども、若え者の噂にあんな

ハア美しい女子があるから家へ帰るは厭だんべえ、婆様の顔

見るも太儀だらうなどという者もあるから、そんな事を聞くと心

配で成んねえもんだから、少しも能く思わせてえのが親の慾で

ござらア、行くなという訳ではねえ往つてもいゝから帰れたら早  
 く帰けえつて来こうというきもと胆きもいれてそんなら往くめえなどと、年寄れ  
 ばハア然そうお前めえにまでいわれて邪魔になるかと思つて早くおつ死ち  
 度にてえなどと愚痴も出るもののう」

## 五十五

惣次郎「イエ左様なれば早く帰つて参ります、思わず言過ぎて  
 何どうも悪いことを申しまして今夜は早く帰つて参ります、大おおきに  
 余計な御心配を懸けまして誠に済みません」

母「然そうなれば宜しい、機嫌を直して往いくがよいよ、これく

多助たすけや

多「ハイ」

母「汝われ行くか」

多「へエ、関取が出るてえから行つて見ようと思つて」

母「汝口えらが苛いから人中へ入つて詰らねえ口利いては旦那様の顔に障るから氣イ付けて能く柔和おとなしく慎しんで往いてこようよ」

多「へエ、畏かしこまりました、私わしが行けば大丈夫でいじょうぶだ、そんなら往いつて参めえります、左様なら」

と、惣次郎は是から水街道の麴屋に行つて彼かのお隅を連れて、法恩寺村の場所に行こうと思つたが、今日は大たいした入りだということから、それよりは花車を他ほかへ招よんで酒を飲ました方が宜しい、そ

れに女おんなづれ連づれで雑沓ざつとうの中で間違でも有つては成らぬ、殊ことにお隅  
 を連れて行くは心配でもあり役柄をも考えたから、大生郷の天神  
 前の宇治の里という料理屋へ上あがり、此処こゝの奥で一猪口遣ひとちよこやつてい  
 と、間が悪い時は仕方のないもので、彼かのお隅にぞつこん惚かれて  
 口説はしいて弾はじかれた、安田やすだ一角いっかくという横曾根村の剣術家、自みづから  
 道場を建て、近きんそん村の人達が稽古に参る、腕前は鈍くも田舎者を  
 嚇おどかしている、見た処は強そうな、散髪を撫なで付けて、肩の幅が三  
 尺もあり、腕などに毛が生えて筋骨逞たくましい男で、一ちよつと寸見れば名  
 人らしく見える先生でございます。無反むぞりの小長こながいのを帯さし、襦まぢだ襦だ  
 高かの袴はかまをだびろツびろ広く穿き、大先生のように思われますが、賭博打ばくちうち  
 のお手伝でもしようという浪人者を二人連れて、宇治の里の下



座敷で一口遣つていると、奥に惣次郎がお隅を連れて来ている事を聞くと、ぐツぐツと癩に障り、何か有つたらかゝりあい関係を付けようと思つている。此方では御飯が済んだから帰り掛かけに花車いえの家に往ゆこうというので急いで出る、お隅も安田が来ているのを認めましたから気味が悪く早く帰ろうと思うので、奥から出て廊下へ来ると、何どうしても其処そこを通らなければ出られないから、安田はわざと三人の刀の鐙こじりを出して置きますと、長い刀の柄つかまえ前にお隅が躓つまびきましたのを見ると、

安「コレく待て、コレ其処へ行く者待て」

惣「へエく私わたくしでございますか」

安「手前何処どこの者か知らんけれども、人の前を通る時に挨拶し

て通れ、殊ことにコレ武士の腰こしに帯たいして歩く腰の物の柄前に足をかけて、鹿忽そこつでござると一ひとこと言の謝言わびごとも致さず、無暗むやみに参ることが有るか、必定心有つてのことだろう」

惣「へい頓とんと心得ませんで：お前疎忽そこつだからいけない、お武家様のお腰の物に足をかけて何なんのことだね、へい何どうも相済みませんでございました、つい取急ぎまして飛んだ不調法を致しました、当人に成代りましてお詫わびを申上げます、何分御勘弁を願います」

安「なに詫を申すなら何処どこの者か姓名も云わず、人に物を詫びるには姓名を申せ、白痴たわけめ」

惣「へエ、手前は羽生村の惣次郎と申す何も弁わきまえませぬ百姓でございます」

安「なに、羽生村の惣次郎、うむ名主だな、イ、ヤ名主だ、羽生村にて外ほかに惣次郎と云う名前の者は無い様だ、名主役をも勤むる者が人の前を通る時には御免なさいとかお先さききに参るとか何なんとか聊いさゝか礼儀会釈を知らぬ事も有るまい、小前こまえの分らぬ者などには理解をも云い聞けべき名主役では無いか、それが殊ことに武士の腰の物を足下そっかにかけて黙もくつて行いくと云う法が有るか、咎とがめたらこそ詫もするが、咎めずば此の儘ま行き過あぎるであろう、無礼至極の奴、左様ではござらんか仁村氏にむらつじ」

仁「是はお腹立の処ごもつと御尤も是は何も横合から指出さしでて兎や角いうではないが、けれども斯こういう席だから、何も先生だつて大したお咎をなさる訳でもあるまいが、今仰せの如く名主役をも勤むる

者が、少しは其の辺の心得がなくては勤まらぬ、小前の者が分らん事でもいう時は、呼寄せて理解をも云い聞けべきの役柄だ、然るにずんく行くという法はない、是は、イヤ先生御立腹御尤もだ是は幾ら被仰つても宜しい、お腹立御尤もの次第で」

惣「重々御尤もで相済みません、御尤至極でござります、どうか御勘弁を願います」

安「只勘弁だけでは済むまい、苟にも武士の魂とも云う大切な物、手前達は何か武士が腰に帯して居る物は人斬庖丁など、悪口をいうのは手前の様な者だろうが、人を無暗に斬る刀でないわ、え、戦場の折には敵を断切るから太刀とも云い、片手撲りにするから片刀ともいい、又短いのを鎧通しとも云う、武士たる

ものが功こうみよう名な手柄を致す処の道具、太平の御代に、一事一点間違を致せば直すぐにも切腹しなければならぬ大切の腰の物じゃ、それを人斬庖丁など悪口をいいおるから挨拶もせずに行つたのだ、それに違いなからう、ナア」

連の男「是は先生至極御尤も、怪けしからんこと、何なんだ、え、何どうもその、武士たるべき者の腰こしに帯たいするものを人斬庖丁など、はもつもつ以ての外ほかだ、太平なればこそよいが、若し戦場往来の時是をエ、太刀とも唱える、片刀ともいう、今一つ短いのは何なんでしたツけ、うむ鎧通しともいう、一事一点間違があれば切腹致すべき尊とうとい処の腰の物、それを何なんだ無礼至極、どの様に仰しやつても宜しい」

惣「重々恐入りましたが何分御勘弁になります事なれば、どの

様にお詫を致して宜しいか頓と心得ませんが」

安「刀を浄めて返せ、浄まれば許して遣わす」

惣「どの様に致せば浄まります事か、百姓風情で何も存じませんで」

安「知らんという事が有るか、浄めて返さんうちは勘弁罷り相成らぬ」

惣次郎もつく／＼困りましたが、お隅は平素から一角は酒の上が悪く我儘わがままなのを知っており、また女が出ると柔かやわらになる事も存じているから、却かえつて斯こう云う時は女の方が宜よかろうと思つて、後あとの方からつか／＼と進み出まして、

隅「先生誠に暫く」

安「何んだ」

## 五十六

隅「麴屋の隅でございませうが、只今私が旦那様のお供をして来て、つい例の麴忽者で駈出して躓きまして、足で蹴たの踏んだのという訳ではありませんが、一寸足が触りましたので、貴方と知っていれば宜しいのに、うっかり足が出ましたので、それ故先生様の御立腹で誠に私がお供に来て済みませんから、不調法でございませうが何卒御勘弁なすつて下さいな決して蹴たの踏んだのという訳でもなし、お供をして来て不調法が有つては、羽生村の

旦那様に済みませんし、あの私のわたくし、そ、ツかしやの事は先生も御存じで入らつしやいますから、お馴染なじみ甲斐に不調法の処は重々お詫を致しますから御勘弁を」

安「黙れ、なに馴染なじみがどうした、馴染なら如何いかに無礼致しても済むと思うか、手前には聊いさか祝義を遣わした事も有るが、どれ程の馴染だ、又拙者は料理屋の働はたらき女おんなに馴染は持たん、無礼を働いても馴染なら許して貰えると思うか、鼻を殺そぎ耳を斬つて馴染だから御免とそれで済むか無礼至極な奴、女の足に刀を踏まれでは猶なほ更さらけがけが汚れた、浄めて返せ」

仁「是は先生至極御尤、御尤もだが酒も何もままずくなつたなア、是はどう云う身分柄か知らんが馴染だから勘弁という詫の仕様は



ないが、誰かあゝお隅か妙な処でくわで出会したなア、先生く、麴屋の隅でございます、能く来たなア、え隅か、是は何どうも詫あやまれく、重々何うも済まぬ、先生くお隅でございます、貴公知らなんだ、あはゝゝゝどうも麴相そそうはねえ詫あやびるより外に仕方がない、詫あやびて勘弁ならんという事は無い、重々恐入ったと詫あやびろ、能く来た、あの先生、先生く勘弁してお遣りなさいお隅でござる」

安「な何を戯たわごと言、勘弁相ならん」

と猶更額に筋を出して中々承知しませんから、惣次郎もまさか其の儘に逃出す訳には往ゆかず、困り果てゝおりますと、奥の離座敷の方に客人に連れられて参つて居たは花車重吉、客人は至急の用が出来て帰りましたから、花車は遥はるかに此の様子を聞いて、惣次

郎とは固もとより馴染なり兄弟分の契約かためを致した花車でございませるか  
ら心配しております。

多「もし旦那様く」

惣「何なんだ」

多「関取がねえ奥に来ているだ、大きに心配しているだが、ち  
よつくら旦那にお目に掛りてえというが」

惣「なに花車が、それは宜よかつた関取に詫よをして貰おう、一寸」  
安「これく逃出す事はならぬ」

惣「いえ逃げは致しません、主意を立てましてお詫を申上げ  
ます暫く御免を」

というのでこそくと後あとにさがる。此ひまの際ひまに宇治の里の亭主手

代なども交る／＼詫びますけれども一向に聞入れがありません。

惣「関取は此方かえ」

花車「はい」

惣「誠にどうも此処で逢うとは思わなかつた」

花「え、今皆聞きました、何しろ相手が悪いがねえ、何か是には仔細があつてだアと鑑定しているが、何しろ筋の悪い奴で、是は私がねエなり代つて詫びて見ましよう」

惣「何卒、関取なら愛敬を売るお前だから厭でもあろうが、先の機嫌を直す様に」

花「案じねえでもいゝよ」

多「私イ宿を出る時に間違えでも出かすとなんねえから、名前

に掛るからつてお内儀かみぎんに言付かつて汝行われつて詰らねえ口い利いて間違え出かしてはなんねえと、氣い付けられたんだが、こうなつては私や出先で済まねえ事だから関取頼むぞえ」

花「心配しねえでもいゝよ、私が請合わしつた宜しい」

と落着払つて花車、齡としは二十八でありますが大形おがたの縮緬ちりめんの単衣ひとえものの上に黒縮緬の羽織を着て大きな鎖付たばこの烟草いれ入いれを握り、頭は櫓やぐら落おとしという髪あたま、一体角力すもう取とりの愛敬いとやうというものは大きい形なりで怖こわらしい姿で太い声の中に、何なんとなく一寸と愛敬のあるものでのさり／＼と歩いて参りまして、

花「はい御免なさい、先しえん生しえい今日は」

安なん「何なんだ、誰だだい」

花「はい法恩寺の場所に来ております花車重吉という弱い角力  
取で、何卒どうぞお見知り置おかれて皆様御贔屓に願います」

安「はい左様か、私わしは相撲は元来嫌いで遂ついぞ見に往つた事も無  
いが、関取なん何ぞ用でござるかい」

花「はい只今承りますれば、羽生村の旦那が、貴君方あなたがたに対し  
て飛んだ不調法をしたと申す事だが、何分にもお聞済みがないの  
で、私わしは馴染わしの事でもあるに由よつて、重吉手前は顔売る商売じゃ、  
なり代つて詫びてくれいつて頼まれました、見兼て中に這入りま  
したかねえ、重々御立腹でもございませうが、斯こういう料理屋  
で商売柄の処でごたくすれば、此家こちらも迷惑こまらなり、お互に一杯ず  
つも飲もうと思うに酒も旨うない、先しえんしえい生しえいも旨うない訳だから、

成り代つてお詫しますから、花車に花を持たせて御勘弁を願います」

安「誠にお気の毒だが勘弁は致されんて、勘弁致し難いがた訳があるからで、勘弁しないというは武士の腰こしのもの物を女の足下そつかに掛けるられては此の儘に所持もされぬから浄めて返せと先刻さつきから申して居るのだ」

花「それは然そうでありましょう、併しかし出来でない処を無理に頼むので、出来でにくい処をするが勘弁だ、然そうじゃありませんか」

安「無理な事は聴かれませんが、お前が仲に這入つては尚な更おさら勘弁は出来ぬではないか」

花「はア私わしが這入つて、なぜね」

安「花車重吉という有名なうての角力取が這入つては勘弁ならん、是  
 が七十八十になる水みずつばな鼻なを半分クツ垂たらして腰の曲つた水呑百姓  
 が、年に免じて何卒どうぞ堪かん忍にんして下されと頭を下げれば堪忍する事  
 も出来ようが、立派な角力取、天下に顔を売る者に安田一角が勘  
 弁したとあれば力士に恐れて勘弁したと云われては、今井田流の  
 表札に関わるから猶更勘弁は出来んからなあ」

花「それは困りますねえ、それじやア物に角が立ちます、先しえん  
 生しえいわし私は天下の力士でも何なんでもないわ、まア長袖の身の上で、皆  
 さんの鼻屑を受けなければならん、裸はだか体で、お前さん取まわし一  
 つでもつてから大勢様の前に出て、まア勝つも負まけるも時の運次第  
 でごろ／＼砂の中へ転がつて着物ほうを投つて貰もらい勝つたとか負けた

とかいう処が愛敬じゃア、然そうして見れば皆みなさん様の御鼻肩を受けなければならん、貴方が勘弁して下されば、それ花車彼奴あいつは愛敬者じゃア、先生が勘弁出来でない処を花車を鼻肩なればこそ勘弁したといえば、それで私は先生のお蔭で又売出します、然うじゃアございませんか、勘弁しておくんなさい」

安「堪忍は出来ぬ」

花「出来ぬでは困ります」

安「イヤ勘弁出来ぬ、武士に二言はないわ」

## 五十七



花車「そんな事云うて対手が武士か劍術遣なれば兎も角も、高が女の事だからよ、大概にしるよ」

安田「大概にしるよとは何だなん」

花「これは言損いいそこなつた、これは角力取はこういう口の利きよ  
うでうっかり云つた、勘弁しろよう」

安「勘弁しろよとは何だ」

花「ほいまた言損なつた」

安「勘弁しろよとは何だ、手前も大名高家の前こうけに出てお盃さかずきを頂  
く力士では無いか、挨拶の仕様を存ぜぬ事はない、大概にしるの  
勘弁しろよのという云い様があるか、猶更勘弁ならん、無礼至極  
不埒な奴だ」

と側にある飲のみ冷ざましの大おお盃さかずきを把とつてぽんと放ると、花車の顔から肩へ掛けてぴっしり埃だらけの酒を浴あびせました。

花「先しえん生しえい お前さん酒を打掛ぶっかけたね、じゃアどうあつても勘弁で出来ないけと極めたか、それでは仕方がないが、先生わし私も花車とか何とか肩書のある力士の端くれ、人に頼まれ、中に這入つて勘弁でならん、はアそうでございますかと指をくわえて引込ひっこむ事は出で来けぬ、私は馬鹿だ智慧が足りねえから挨拶の仕様を知らぬ、何卒どうかこうせいと教えて下せえ、お前のいう通り行やりましょう、ねえ、どうなとお顔を立てようから斯こうしろと教えて下せえ」

安「これは面白い、予の顔を立てる、主意を立てるなれば勘弁致す、無礼を働いたお隅と云う女は不届至極だから、彼あの婦人を

惣次郎から貰い切つて予に引渡して下さい、道場に連れて参つて存じ寄り通りにする」

花「それは出来<sup>で</sup>ない、彼<sup>あれ</sup>は御存知の水街道の麴屋の女中で、高い給金で抱えて置く女だ、今日一日羽生村の名主様が借<sup>かり</sup>て来たんだ、それを無礼した勘弁出来<sup>で</sup>ないといつて道場へ連れて行く<sup>ゆ</sup>、はいと云つて遣<sup>わ</sup>られぬ、私<sup>わし</sup>にしても然<sup>そ</sup>うです、道場へ引かれ、ば煮て喰うか焼いて喰うか頭から塩をつけて喰われるか知れねえものを、それは出来<sup>で</sup>ぬ、出来<sup>で</sup>ない相談、それじゃア仕様がねえわ」

安「それじゃアなぜ主意を立てるといつた、お前は力士、たゞの男とは違<sup>ちが</sup>う、一旦云つた事を反故<sup>ほご</sup>にする事はない、武士に二言はない、刀に掛けても女を貰<sup>もら</sup>いましょう」

花「是は仕様がねえ、じやア、まアお前さんが劍術遣だから刀に掛けても貰おうというだら私は角力取だから力に掛けても遣る事は出来ぬと極めた、それより外は出来ませんわ」

というと一角も額に青筋を張って中々聴きません。此の家へお飯を喫べに這入った人達も驚きました。が中には角力好で江戸の勇み肌の人も居りました、

客「どうだもう帰ろうじやアねえか、因業な武士だ彼の畜生」

客「ウム己達が彌平どんの処へ来るたつて深い親類でもねえが、場所中関取が出るから来ているのだが、本当に好い関取だ。なア、体格が出来て愛敬相撲だ一寸手取で、大概角力取が

出れば勘弁するものだが、彼奴め酒を打掛けやアがって酷い事しやアがる」

客「相手の武士は三人だ、関取がどつと起つて暴れると根太が抜けるよ」

客「斯うしようじやアねえか、折を然ういっても間に合うめえし残して往つても無駄だから、此の生鮭と玉子焼とア持つて行こう」

など、横着な奴は手拭の上に紙を布いて徐々肴を包み始めた。花「じやア先生、こうしましょう、此処の家でござりたいつた処が此の家へ迷惑かけて、外に客があるから怪我でもさしてはなりません、戸外に出て広々とした天神前の田甫中でやりましょ

う、私も男だ逃げ隠れはしません」

安「面白い出ろ」

というので三人づんと起たつた。

客「喧嘩だア〜」

と他の客はバラ〜逃げ出したが、代を払って行く者ゆは一人もない、横着者は刺身皿を懐に隠して持つて行く者ゆもあり、中には料理番の処へ駈込んで、生鮭を三本も持つて逃出す者もあり、宇治の里では驚きましたが、安田一角は二人の助けを頼みとして袴の股立ちを取つて、長いのを引抜き振ふり翳かざしたから、二人の武士も義理で長いのを引抜き三人の武士さむらいが長い閃きらつくのを持つて立並んでゐるから、近辺の者は驚きました。惣次郎は猶更心配でござ

いますから、

惣「関取お前に怪我をさせては親方に済まぬから」

花「いゝよ、親方も何も無い、お前さん彼方あっちへ行つて下せえよ、己が引受けたからは世間へ顔出しが出来ませんから退ひく事は出来ない、何卒どうか事なく遣る積つもりで、お前さんは心配をしねえでいゝよ、お隅さんおぐもさんを連れて構わず往つて下さい、多助さんたすけさんも行つて下さい、旦那様だんなさまが茲こゝにいては悪いから帰つて下さい」

惣次郎は帰れたツて帰られませんし、此の儘にはされず、怖さは怖しどうしようかとおどくして居ると、花車はスツと羽織はだかと単物ひとえものを脱ぎましたが、角力取の喧嘩は大抵裸体はだかのもので、花

車は衣服を脱ぐと下には取り廻しをしめている、ウーンと腹を揺ゆ

り上ると腹の大きさは斯様こんなになります、飴細工の狸みた様で、取廻あけしの処へ銀ぎんごしら拵しえの銅金どうがねの刀を帯さし白地の手拭むこうはちまで向鉢むこうはちま巻きをして飛下とびおりると、ズーンと地響ぢびきがする、腕うでなどは松まの樹きの様で腹を立ったから力は満ちて居る、スーと飛出すと見物人は「ワアー関取せきとしつかりしろ」という。安田一角は袴はかまの股立またたきを取つて、

安「サア来い」

と長いのを振上げている、此の中へ素裸すはだで、花車重吉が飛込むというところ、一寸一ト息吐いききまして。

## 五十八



引続きまして角力と剣術遣の喧嘩で、角力という者は愛敬を持ちました者でございまして、只今では開けた世の中でございまして、見識を取りませんで、関取衆が芸者の中へ這入つて甚句を踊り、或は錆声で端唄をやるなどと開けましたが、前から天下の力士という名があり、お大名の抱えでありますから、だんく承つて見ますると、菅原家から系図を引いて正しいもので、幕の内と称えるは、お大名がお軍の時、角力取を連れて入らしつて旗持にしたという事でございまして、旗持には力が要りますので力士が出まする者で、お見附などの幕の内には角力取が五人ぐらゐらずつ勤めて居ります。其の幕の内に居たから幕の内という、お弁

当を喫つかつて居るのが小結という、然そういう訳でもありませんが、見た処は見上げる様で、胸毛があつて膏こうやく薬の痕あとなぞがあつて怖こわらしい様であります。愛敬のあるものでございます。一寸起たつて踊りますと、重い身体からだで軽く甚句などを踊りますと姉さん達は、綺麗じゃアないか可愛いじゃアないか、踊る姿が好いい事、あれで角力を取らないと宜いい事などと、それでは角力でも何なんでもありません。芝居でも稲いながわ川秋津島など、いうとい、俳やくしや優が致します、極ごくむかし二段目三段目ぐらゐに立派な角力がありました、花車などは西の方二段目の慥たしか末すえから二三枚目におりました、其の頃愛敬角力で鬣はねもありませんが角力上手でございませうから評判が宜よい、今に幕の内に登るといふ噂がありました、花車重吉は誠に

固い男、殊ことには羽生村の名主うちの家に三年も奉公して、角力になりましてからは大たいして惣次郎も臍へしににして小さい時分からの馴染で、兄弟分の約束をして酒を飲み合つた事もありますから恩返しというので割つて中へ這入りましたが、劍術遣は重ね厚あつの新刀を引抜いて三人が大生郷の鳥居前の所へびらつくのを提さげて出ましたから、大概な者は驚いて逃げるくらいであります、逃げなどは致しません、ズツと出て太い手をつけて斯こう拳を握り詰めますと、  
 ちからこぶ  
 力 瘤とぶというのが腕一ぱいに満ちます、見物けんぶつは今角力と劍術遣との喧嘩けんぱが有るといので近村の者まで喧嘩を見に参る、田甫たんぽの処あぜみち畦道あぜみちに立つて伸上つて見ている。

花「先しえんしえい生せい此処こゝは天神前で、私わしはお前めえさんと喧嘩する事は、

斯<sup>こ</sup>うなつたからは私は引<sup>ひく</sup>に引かれぬから、お前さん方三人に掛<sup>か</sup>られた其の時は是非が無<sup>ね</sup>え事じゃが、御朱印付の天神様境内で喧嘩してもお前さんも立派な先生、私も角力の端くれ、事<sup>ことわけ</sup>訳知らぬ奴<sup>やつ</sup>じゃ、天神様の社内を穢<sup>けが</sup>した物を知らぬといわれてはお互に恥<sup>しにはじ</sup>じや、ねエ死<sup>し</sup>恥<sup>はじ</sup>かきたくねえから鳥居の外へ出なせえ」

是は理の当然で、

安「うん宜しい、よく覚悟して：鳥居外へ参ろう」

と三人出たから見物は段々後<sup>あと</sup>へ退<sup>さが</sup>る、抜刀<sup>ぬきみ</sup>ではどんな人でも退<sup>の</sup>る、豆蔵が水を撒<sup>ま</sup>くのは違<sup>ちが</sup>う、怖<sup>おっ</sup>かないからはらくと人が退<sup>の</sup>きます。

見物「何<sup>ど</sup>うだ本当に力士<sup>ど</sup>てえ者は感心<sup>かんしん</sup>じゃアねえか、たった一

人に三人掛りやアがつて、大概てえげえに彼奴勘弁あいつしやアがるが宜い、何だなんしと詫言わびごとしたら恥じやアあるめえし畜生ちきしよう、関取しつ確かりやつて、己おらアお前めえの角力を見に來たので、お前が喧嘩に負けると江戸へ帰けえれねえ、冗談じやアねえ劍術遣を踏ふみころ殺せ」

安なん「何だ」

見物「危険けんのんだ、確かりやつて呉れ」

花「逃げも隠れもしねえ、長崎へ逃げようと仙台へ逃げようと花車重吉駈落は出来ぬから卑怯な事はしねえが、茲こゝでお前めえさんに切られて死ねばもう湯も茶も飲めません、喧嘩ゆつは緩くゆつら出来ますから一服やる間暫らく待つて」

安「なに、これ喧嘩する端はなに一服やるなどと、何だ愚弄なんぐろうするな」

花「心配しんぺえありませんまつご末期の煙草だ、死んだら吞めませんワ、一服やりましょう、誰たれか火を貸しておくんなせえ」

見物の中から煙草の火をあてがう奴がある。パクリく脂やにさが下に吞んで居る。

花「まあ緩くり行やりましょう、エ先しえんしえい生逃いげ隠れはせぬぜ」とパクリくと吸やつて居る。見物は、

見物「気が長ながえじゃアねえか、喧嘩の中で煙草を吞んで沈おちつ着いて居る豪えれえじゃアねえか」

見物「豪えばかりでねえ、己おれが考えじゃア関取は怜りこ惻だから、対あいて手は剣術けんじゆつつかい者遣で危ねえから怪我アしても詰らねえ、関取が手間取っているうち、法恩寺村場所へ人を遣つたろうと思う、若も

し然うだと二拾人も角力取が押おして来れば踏潰ふみつぶしてしまう、然うだ  
ろうよ」

花「サア先しえんしえい生喧嘩致きりあいしますが、私わしも一本帯さしているから劍  
術は知らぬながらも切きり合あいを致すが、私わしが鞆さやを払はつてからお前めえさ  
様方んがた斬いつてお出いでなせえ」

安もつと「尤も左様だ、卑怯はしない、サア出ろ」

花「へエ出ます、まア私わしも此の近辺おいたで生立おいたつた者じゃアが、此  
の大生郷の天神様の鳥居といつたら大きな者じゃア」

と見上げ

花「これまア私わしが抱かえても一抱えある鳥居、此の鳥居も今日が  
見納めじゃア」

と鳥居を抱えて、

花「大きな鳥居じやアないか」

と金剛力を出して一振ひとふりすると恐ろしい力、鳥居は笠木かさぎと一いち

文字んじが諸もろにドンと落ちた。劍術遣が一刀を振上げて居る頭の処

へ真一文字に倒れ落ちたから、驚きましたあの驚きませんのと、胆きも

を挫ひしがれてパツと後あとへ退さがる。見物はわいゝゝいう。其の勢いに驚

き何どのくらいにげの力かと安田は迎とても敵かなわぬと思つて抜刀ぬきみを持つてば

らく逃にげると、弥次馬に、農業を仕掛けて居た百姓衆おのくすきが各々鋤

鋤くわを持つて、

百姓「撲殺ぶちころしてしまえ」

とわいゝ騒ぐから、三人の劍客者は雲霞かすみと林くぐを潜つて逃げま



した。

## 五十九

花車「ハ、逃げやアがった弱<sup>よわ</sup>え奴だ、サア案じはねえ、私<sup>わし</sup>が送<sup>ゆ</sup>つて行きましよう」

と脱いだ衣服を着て煙草入を提げ、惣次郎を送つて自分は法恩寺村の場所へ歸つた。角力は五日間首尾能く打つて歸る時に、

花「鳥居の笠木を落<sup>おと</sup>したから、旦那様鳥居を上げて下さらんで  
は困る」

と云うので惣次郎が金を出して鳥居を以前の通りにしました、

其の鳥居は只今では木なれども花車の納めました石の鳥居は天神山に今にあります。場所をしまつて花車は江戸へ帰らんければならんから、帰つてしまつた後は惣次郎は怖くつて他へは出られませんが、安田一角は喧嘩の遺恨、衆人の中で恥を搔いたから惣次郎は助けて置かぬ、などと嚇しに人に逢うと喋るから怖くつて惣次郎は頓と外出を致しません、力に思う花車がないから村の者も心配しております。余り家に許り蟄しておりますから、母も心配して、惣次郎が深く言交した女故間違も出来、其の女の身の上はどうかと聞くに、元武士の娘で親父もろ共浪人して水街道へ来て、親の石塔料の為奉公していると聞き、其の頃は武士を尊ぶから母は感心して、然ういう者なれば金を出して、当人が気に適つ

たならどうせ嫁を貰わんではならんから貰い度いと、水街道の麴  
 屋へ話してお隅を金で身受して家へ連れて来てまず様子を見ると  
 しとやかで、器量といい、誠に母へもよく事えます故、母の氣に  
 も適つて村方のものを聘んで取極をして、内祝言だけを濟  
 まして内儀になり、翌年になりますと、丁度この真桑瓜時分下  
 総瓜といつて彼方は早く出来ます。惣次郎の瓜畑を通り掛つた  
 人は、山倉富五郎という座光寺源三郎の用人役であつて、放蕩無  
 頼にして親には勘当され、其の中座光寺源三郎の家は潰れ、常陸  
 の国に知己があるから金の無心に行つたが当は外れ、少しでも金  
 があれば素より女郎でも買おうという質、一文なしで腹が空つて  
 怪しい物を着て、小短いのを帯して、心の出た二重廻りの帯を

しめて暑くて照り付くから頭へ置手拭をして時々流れ川の冷たい水で冷ひやして載せ、日除ひよけに手を出せば手が熱くなり、腕組みをすれば腕が熱し、仕様がなくなぐらりくくと参りました。

富「あゝ、進退茲こゝに谷きわまつたなア、どうも世の中に何がせつないといつて腹の空るくらいせつない事はないが、どうも鳥ちやうもく目めがなくなつて食えないと猶更空るねえ、天草の戦いくさでも、兵糧責では敵かなわぬから、高松の水責いえどと雖も彼も兵糧責、天草でも駒木根八兵衛べえ、鷺塚忠右衛門わしづかちゆうえもん、天草玄札あまくさげんさつなどという勇士がいても兵糧責には叶かなわぬあゝ大きな声をすると腹へ響ける、大層真桑瓜たまがなつているなあ、真桑瓜は腹すの空いた時の凌しのぎになる腹たまに溜る物だが、うっかり取る処を人に見られゝば、野暴のあらしの刑で生埋いきうめにす

るか川に簀巻すまきにして投り込まれるか知れんから、一個揉ぎつて食はう  
 う事も出来ぬが、大層なつて熟しているけれども、真桑瓜を黙つ  
 て持つて行くはよろしくないというが、一寸此処こゝで食う位ぐらいの事は  
 何も野暴のあらしでもないからよかろう、一つ揉ぎつて食おうか」  
 と怖こわ々／＼、四辺あたりを見ると、瓜番小屋に人もいない様だから、ま  
 ア好いい塩梅と腹が空へつて堪たまらぬから真桑瓜を食しましたが、庖丁  
 がないから皮かごと喫かり、空腹だから續けて五個いっつばかり喫たべ、それ  
 で往いけば宜しいのに、先へ行つて腹が空へつてはならんから二つ三  
 つ用意に持つて行こうと、右袂こちへ二つ左袂こちへ三つ懐から背中へ突つ  
 込こんだり何かして、盗たんだなりこう起たつと、向むの畑の間から百姓  
 がよこりと出た時は驚おどきました。

百姓「何なんだか、われは何んだか」

富「へエ、誠にどうも厳しい暑さでお暑い事で」

百「此の野郎め、まア生なまぞらつか空遣やアがって、此処こゝを瓜の皮だらけにしやアがった、われ 汝瓜食ったな」

富「どう致しまして、腹痛でございませうから押えて少し屈こゝんでおりましたが、暑しよき氣あたに中あたつておりますので、先せんから瓜の皮はあります、取りは致しませぬて」

百「此の野郎懐へ入れやアがって、生空つかやアがって、瓜盗んでお暑うございませうなどと此の野郎」

ポカリ撲はりたお倒たおしますと、

富「あ痛いたたゝ」

と躑よろける途端たもとに袂たもとや懐たもとから瓜が出る。其の内に又二三人百姓が  
 出て来て、忽たちまち山倉は名主へ引かれ、間が悪い事に名主の瓜畑だ  
 から八釜やかましく、庭へ引かれ、麻縄で縛られますと、廃よせばよいに  
 名主惣次郎は情深い人だから縁側へ煙草盆を持ち出して参つて、

惣「此こいつ奴かノ真桑瓜を食つたのは」

男「へエ此の野郎で、草むしりに出ておりますと、瓜畑の中か  
 らによこりと起たちアがったから、何するといったら厳しいお暑さ  
 なんてこきアがつて、誰たれもいやすめえと思つて、瓜の皮があるか  
 ら盗んだんべえと撲ぶつと懐たもとからも袂たもとからも瓜が出たゞ何ど処この者か  
 江戸らしい言葉だ」

惣「お前が真桑瓜を盗んだか」

## 六十

富「へエく、恥入りました事で、手前主名しゆめいは明あかし兼ねまするが、胡乱うろんと思召おぼしめすなれば主名も申し上げますが、手前事は元千百五十石を取った天下の旗はたもと下の用人役をした山倉富右衛門せがれの悴富五郎と申す者主家しゆか改易になり、常陸しるべに知己しるべがある為是へ金才覚しるべに参つて見るに、先方は行方知れず、余儀なく、旅費を遣い果してより、実は食事も致しませんで、空腹の余り悪い事とは知りながら二つ三つ瓜を盗みたべました処をお咎とがめで、何なんとも恥入りました事で、武士たる者が縄に掛り、此の上もない恥で、どうか憫ふ



然びんと思召してお許し下されば、此の後は慎ごみまする、どうかお情をもつてお許しを願いたく存じます」

惣「真桑瓜を盗んだからといって何も殺しはしない、真桑瓜と人間とは一つにはならん、殺しはせんが、茲こゝで助けても、是から何処どこへ行きゆなさる、当所あてどがありますかえ」

富「へエ、何処どこといつて当も何もないので、といつてすぐく江戸表へ立帰るかよう了簡もございません、空腹の余り悪いと知りながら斯様かようなる悪事をして恐れ入ります」

惣「じゃア茲で許して上げてわきも他へ行つて腹が空ると、また盗まなければならん、私わしの村で許しても外ほかでは許さぬ、今度は簀巻にして川へ投げ込むか、生埋にするか知れぬから、私が茲で助け

ても親切が届かんで詰らん、お前さんの言葉の様子では武家に相違ない様だが、私の処は秋口で書物かきものなどが忙がしいが、どうだね、許して上げますが、私の家うちに恩報おんがえしと思つて半年ばかり書物の手伝いをしていて貰い度たいがどうだね」

富「へエどうも恐れ入りました事で、斯様なるどうも罪を犯した者をお助け下さるのみならず、半年も置いてお養い下さるとは、何なんともどうも恐れ入りました、此の御恩は死んでも忘却は致しません、何どの様なる事でも実に寝る眼も寝ずに致しますから、何卒どうかお助けを願います」

惣「よろしい、縄を解け」

と解かしまして、

惣「お腹なかが空すいたろう、サア御膳をお喫あがり」

とサア是から富五郎が食つたの食わないのつて山盛にして八杯ばかり食くい置おきをする気でもありませんまいが沢山食べました。書物を遣らして見ると帳面ぐらいはつけ、算盤そろばんも遣り調法でべんちやらの男で、百姓を武家言葉で嚇おどしますから用が足りる、黒の羽織なぞを貰い、一本帯さして居る、其のうち

富「古い袴はかまが欲しい、小前こまえの者を制しますには是でなければ」  
などとべんちやらをいう。惣次郎の顔があるから富さんくと大事にする。段々臀しりが暖まると増長して、素もとより好きな酒だから幾やら止めるといっても外そとで飲みます。すると或日あるひの事で、ずぶろくに酔つて帰ると、惣次郎はおりません。母は寺参りに往つてお

隅が一人奥で裁縫しごをしている。

富「只今帰りました」

隅「おやまア早くお帰りで、今日は大層酔つて何処へ」

富「へエ、水街道から戸頭とがしらまで、早朝から出まして一寸帰

りに水街道の麴屋へ寄りましたら能く来たというので、彼の麴屋あの

亭主が一杯というので有物ありもので馳走おほになりました遅くなり

ました」

隅「大層真赤に酔つて、旦那様はまだお帰りはありますまい、

お母様つかさまは寺参りに」

富「左様で、御老体になりますとどうもお墓参りより外楽たのしみは

ないと見えて毎日いらつしやいますますが恐入ります、また旦那様の

御様子てえなねえ、誠にド、どうも恐入りますねえ、あんたはおうちおとな家で柔和しやかに裁縫しごとをなすつていらつしやるは、どうも恐入りますねえ、ド、どうも富五郎どうも頂きました」

隅「大層真赤になつて些ちつとお寝やすみな」

富「中々寝度ねたくない、一服頂戴、お母様はお寺参り、また和尚さんと長話し、和尚様はべら／＼有難そうにいいますね、だが貴方あなたが裁縫姿しごとの柔和おとなしやかなるは実に恐れ入りますねえ」

隅「少しお寝みよ、富さん」

富「へエ／＼寝度ねたくないので、貴方は段々承ると、然しかるべき処の、お高も沢山お取り遊ばしたお武家の嬢様だが、御運悪く水街道へいらつしやいまして、御親父様ごしんぷさまがお歿かくれになつて、余儀なく

斯こういう処へ入らして、其の内あ彼あいう杜漏ずろうな商売の中にいて貴あ  
 方んたが正しく私は武士さむらいの娘だがという行いを、当家の主人がちゃん  
 と見上げて、是こそ女房おんなという訳で、此方こちらへいらしたのだが、  
 貴方あなただつてもまア、私わたくしの考えが間違つたか知れんが、武士たる者  
 の娘が何も生涯という訳ではなし、此の家うちは真ほんの腰掛で、詰らん  
 といつては濟みませんが、けれども貴方生涯こゝ此家こゝにいる思おぼしめし召し  
 はありますまい、手前それを心得て居るが、拙者も止むを得ず此こ  
 処ゝにいる、致し方がないから、半はん年ねんも助すけろ、来年迄いろよ、有  
 難うと御主命ごしゅめいでね、長く居る気はありません、貴方ほんも真ほんの当座の  
 腰掛こしでいらつしやるが口に出せんでも心中こころに在あるね、内祝ないしゅうげん言げん  
 は濟んでも別に貴方ひろめの披露ひろめもなし披露ひろめをなさる訳もない、貴方も

故郷こきょう懐しゆうございましょう、故郷忘じ難し、御府内で生れた者はねえ、然そうではございませんかね」

隅「それはお前江戸で生れた者は江戸の結構は知っているから、江戸は見度みたいし懐かしいわね」

富「有難い、其のお言葉で私わたくしはすっかり安心してしまった、それがなければ詰らんで、ねえ武士さむらいの娘、それそこが武士の娘、手前しやうろくものども少禄者しやうろくものだけでも、此処こゝにへえつくしているが世が世なればという訳だが：お母様はまだ：法蔵寺様へお参りに入いらしたので：ですがねえ貴方、此家こゝにこう遣つて腰掛けで居るは富五郎心得ております、故郷は忘じ難し、江戸は懐かしゆうございましょう」

隅「あいよ、懐かしいは当あたりまえ然だわね」

## 六十一

富「ド何どうも有難い、それさえ聞けば私わたしは安心致すが、誰でも然そうで私も早く江戸へ行き度ゆたいが、マアお隅さん私が少し道楽をして出まして、親類もあるけれども、私が道楽やを行つたから私の身の上が定まらんでは世話は出来ぬというので、女房でも持つて、斯こういう女と夫婦になつたと身の上が定まれば、御家人ごけにんの株位は買つてくれる親類もあるが、詰らん女を連れて行つては親類では得心しません、是はこうくさむらいいう武士の娘、こういう身柄で今



は零落おちぶれて斯う、心底しんていも是々というので、私が貴方の様なる方と一緒に何なんすれば親類なんでも得心ごころ致します、お前さんの御心底から器量は好よし、こういう人を見立てゝ来る様になつたら富五郎も心底は定まった、然うなれば力になつて遣やらうというので、名主株位買つてくれますよ、構わずズーツと」

隅「何処どこへ」

富「何処どこつて、だが、貴方ア腰掛で居る、故郷は何どうしても懐かしゆうございましょう」

隅「何なんだか分りません、一つ言ことをいって故郷の懐かしい事は知れて居ります」

富「まあ、宜しい、それを聞けば宜しい一寸く」

隅「何なんだよ」

富「いゝじやアありませんか二人でズーツと」

隅「いけないよ、其そん様な事をして」

富「それ、然そういうお堅いから二人で夫婦養子にどんな処へでも可かなり高たかのある処へ行けます、お隅さん」

と何なんと心得違ないしたか富五郎、無闇にお隅の手を取ひげつて鬚ひげだらけの顔を押付ける処へ、母が帰つて来て、此この体ていを見て驚おどきましたから、傍そばにある鹿そだ朶だを取いつて突いきなり然ぜんポンと撲ぶつた。

富「これは痛い」

母「呆おろれかえつた奴やつだ」

隅「よくお帰りでございまして」

母「今いま帰かえつて来たきが、彼の野郎あふざけ廻まわりやアがつて、富五郎こい茲こゝへ出いろ」

富「へエ、これは恐おそ入いりました、どうも些ちつともお帰かえりを知らんで、前後ぜんご忘わす却かえ致しし、どうも何なんとも誠まことにどうも、何なんで御打擲ごちようちやくですか薩張さつぱり分わりません」

母「今見ていれば何なんだお隅すみにあの拳動まねは何なんだ、えゝ、厭いやがる者を無理無理にかじり付ついて、髯ひげだらけの面つらを擦こすり付つけて、お隅すみをどうしようというだ、お隅すみは何なんだえ、惣次郎そうじろうの女房にようばうという事ことを知らずにいるか、汝われ知しっているか、返答こたへぶて」

富「どうも、私わたくし前後ぜんご忘わす却かえ致しし、酔よつておりまして、はつというとお隅すみさんで、恐おそ入いりました、無暗むやみに御打擲ごちようちやくで血ちが出来ます」

母「頭ア打碎ぶつくだいても構わねえだ、汝恩われを忘れたか、此の夏の取と  
りつけ付に瓜畑へ這入へえつて瓜イ盗んで、生理にされる処うちを、家の惣次  
 郎が情ぶけけ深えから助けて、行く処もねえ者に羽織はかまイ着せたり、袴  
 ア穿かして、脇へ出ても富さんくといわれるは誰がお蔭みんなか、皆  
 惣次郎が情なさけぶけ深えからだ、それを惣次郎の女房からかに対して調戲つ  
 て縋すがりつ付いて、まア何なんとも呆れて物ういわれねえ、義理も恩も知  
 らねえ、幾ら酔よっぱらつたつて親の腹へ乗る者ねア無えぞ呆れた、酒  
 は飲むなよ好よくねえ酒癖よだから廃よせというに聴かねえで酔よぱらつ  
 ては帰けえつて来きやアがつて、只たつ今逐出おいだすから出るえ、怖おっかねえ、お  
 前の様な者まちげえア間違まちげえを出かします、こんな奴は只たつ今出ゆて行け」  
 富「お腹立様なんでは何なんですが、お隅さん様に只今の様な事をしたは富

五郎本心でしたと思召しての御立腹なれば御尤もでございます」

母「尤もと思うなら出て行け」

富「わたくし私は大變酔つてはおりますが富五郎も武士ぶしでげす、御当家の旦那様に助けられた事は忘却致しません、あゝ有難い事であゝ簀巻にして川へ投り込まれる処を助けられ、斯かくの如く面倒を見て下さつて、江戸へ帰る時は是々すると仰しやつて、実に有難い事で、江戸へ行つても御当家の御恩報じお家いえの為になる様心得ております」

母「そう心得ておるなればなぜお隅にあゝいう挙動まね工する」

富「そこ其処を申します、其処が旦那様のお為を思う処、旦那様は世間見ずの方、江戸へも余り入らしつた事もない、殊ことにはあなた

様は其の通り田舎氣質かたぎの結構な方、惣吉様は子供衆で仔細ないが、お隅様も結構な方でございますが、前々承れば、水街道の麴屋で客の相手に出た方、縁あつて御当家へいらつしやつたが、お隅様のまえで申しては済みませんが、若しお隅様が不実意な浮気心でもあつては惣次郎様のお為にもならぬと思つて、どういふ御心底か一寸只今氣を引いた処、どうもお隅様の御心底是には実に恐れ入りました、富五郎安心しましたが、処をどうも薪まきでもつてポンと頭をどうも情なさけない思召しと思う」

母「あゝ云う言いひぬけ拔こを吐きやアがる、氣ひい引ひいて見たなど、猶更置く事は出来ねえから出て行け」

隅「お母様お腹立でございましょう、御氣性だから、富さん、

お前は酒が悪いよ、お酒さえ慎めば宜しい、旦那様のお耳に入れない様にするから」

富「エ、もう飲みませんとも」

母「まあお前そつち彼方ひきこへ引込んで、私わしが勘弁出来ぬ、本当なればお隅が先へ立つて追出すというが当然あたりまいだが、こういう優しげな気性だから勘弁というお隅の心根工聞けば、一度は許すが、今度彼様あんな挙動まね工すれば直ぐ追出すからそう思え」

富「恐入りました」

と是からこそ、部屋へ這入って、と見ると頭に血が染にじみました。

富「お隅は万まんざら更さらでもねえ了簡であるのに、あゝ太ふてえ婆アだ」

なに自分が太い癖に何卒<sup>どうか</sup>してお隅を手に入れ様と思いうち、ふ  
 と思ひ出して胸へ浮んだのは、噂に聞けば去年の秋大生郷の天神  
 前で、安田一角と花車重吉の喧嘩の起因<sup>もと</sup>はお隅から、よし彼奴<sup>あいつ</sup>を  
 力に頼んでと是れ<sup>こ</sup>からべらくの怪しい羽織を着て、ちよこく  
 横曾根村へ来て安田一角の玄関へ掛り、

富「お頼み申すく」

## 六十二

門弟「どうーれ、何方<sup>どちら</sup>から」

富「手前は隣<sup>りんそん</sup>村<sup>お</sup>に居る山倉富五郎と申す浪人で、先生御在宅



なれば面会致し度態々たくわざく参りました、是は此方様へほんのお土産で」

門「少々お控えなさい、先生」

安田「はい」

門「近村の山倉富五郎と申す者が面会致し度いと、是は土産で」

安「山倉とは知らぬが、此方へお通し申せ」

門「此方へお通りなすつて」

富「成程是は結構なお住居すまいで、成程是は御道場でげすな…：ようがすな御道場の向うが…：丁度是から畑の見える処が…：是はどうもまた違いますな」

安「さアくはへ、何卒、是はく」

富「えゝ、山倉富五郎と申す疎<sup>そこ</sup>忽<sup>つ</sup>者此の後とも御別懇に」

安「拙者が安田一角と申す至つて武骨者此の後とも、えー只今はお土産を有難う」

富「いゝえ詰らん物で、ほんのしるしで御笑納下さい、大きに冷氣になりましたが日<sup>に</sup>中<sup>ちゆう</sup>は余程お暑い様で」

安「左様で、今日<sup>こんにち</sup>はまた些<sup>ちつ</sup>とお暑い様で、よくお出<sup>い</sup>でゝ、えー何か御用で」

富「はい少々内<sup>ない</sup>々々で申し上げ度<sup>た</sup>い事が有つて、彼<sup>あ</sup>の方は御門弟で」

安「はい」

富「少々お遠ざけを願います」

安「はい、慶治御内談があつて他聞を憚ると仰しやる事だから、彼方へ行つておれ、えー用があれば呼ぶから」

慶「へえ左様で」

富「え、もうお構いなく、先生お幾歳でげす」

安「手前ですか、もういけません、何で、四十一歳で」

富「へえお若うげすね、御氣力がお慥かだからお若く見える、

頭髮の光沢も好し、立派な惜しい先生だ、此方に置くのは惜しい、

江戸へ入らつしやれば諸侯方が抱えます立派なお身の上」

安「何の御用か承り度い」

富「手前打明けたお話を致しますが、只今では羽生村の名主惣

次郎方の厄介になつておる者でござるが、惣次郎の只今女房とい

う訳でない、まア妾同様の<sup>あれ</sup>お隅と申す婦人、彼は御案内の水街道の麴屋に奉公致した<sup>しやくとりおんな</sup>酌取女、彼の隅なるものに先生<sup>おほしめ</sup>思召し

召があつたのでげすな、前に惚れていらしたのでげすな貴方」

安「これは初めてお出でゞ、他人の女房に惚れているなどいや挨拶の仕様が<sup>ひっぱ</sup>ない、麴屋にいた時分には鼻屑にした女だから祝儀も遣つて随分引張つて見た事もあるのさ」

富「恐れ入つたね、それが然<sup>そ</sup>う云えぬもので恐入りました、其<sup>そ</sup>処が大先生で、えーえらい」

安「何しにお出でなすつた、安田一角を<sup>ちようろう</sup>嘲<sup>な</sup>咲<sup>さ</sup>りにお出でなすつたか、初めてお出でゞ左様なる事を仰しやる事がありま<sup>す</sup>か」

富「御立腹ではどうも、中々左様な訳ではない、手前剣道の師とお頼み申し、師弟の契約をしたい心得で罷り出ましたので、実は彼のお隅と申すは同家にいるから、段々それまア江戸子同士で、打明けた話をするとお前さん此処に長くいる気はあるまい、此処は腰掛だろう、故郷忘じ難かろう、私と一緒に江戸へ、というとは、私も実は江戸へ行き度い、殊に江戸には可なりの親類もあり、仮令名主でも百姓の家へ縁付いたといわれては親類の聞えも悪い、然うなればと云つて御新造という訳ではなし、へえく云つて姑の機嫌も取らなければならんから実は江戸へ行き度いというから、然うなれば何故一角先生の処へいかぬ、向は何でも大先生、弟子衆も出這入り、名主などは皆弟子だから、彼処へ行つて御新造に

なれば江戸へ行つても今井田流の大先生、彼処の御新造になれば結構だになぜ行かぬというと、夫それには種々いろく義理もあつて、親父の借金も名主惣次郎が金を出してくれた恩もあるから、先生の処へ行かれもしないというから、それなら先生が斯こうと云つたらお前行く気があるかと云つたら、私は行き度いが、先生には色々綾があるから行ゆかれないというから、然そうなれば私わしが行つて話し、私も江戸へ帰る土産に剣道を覚えて帰り度い、よい師匠を頼もうと思つていた処だというので、然そうなればと頼まれて参つたので、先生彼あれを御新造になさい、どうでげす」

安「お帰んなさい、何なんだお前は、これ汝てまえは何だ、惣次郎方の厄介になつている者なれば、惣次郎がどうかして安田を馬鹿にして

遣れといふので来たな、初めて逢つて他人の女房を貰えなどと、はい願いますと誰たれがいう、殊ことに惣次郎には、去年の秋聊いさゝかの間違たがひで互たがひに遺恨もあり、私も恨みに思っている、其の敵かたき同士の処へ来て女房に世話をしましうなどと、はい願いますと誰たれがいう、白痴わけめ、帰れく」

富「成程是は至極御尤も、どうもお氣分に障るべき事を申ししたが、まア」

安「騒々しい、帰れつたら帰れ」

富「まアくゝ重々御尤も、是には一つの訳がある、ようがすか、手前が打明けた話を致しましょう、手前も武士で二言はない手前は本所北割下水で千百五十石を取つた座光寺源三郎の用人山倉富

右衛門の悴富五郎、主人は女太夫を奥方にした馬鹿ですから家は改易、仕方なし、手前は常陸に知己しるべがあるから参つたが、ふとした縁で惣次郎方の厄介、処が惣次郎人遣いを知らず、名主というを権けんにかつて酷ひどい取扱いをするは如何いかにも心外で、手前は浪人でも土民どみんなぞにへえつくする事はない、残念に心得ているが、打明話を致すが、江戸に親類ども、ある身の上、江戸へ帰るにも何か土産がないが、実は今まで道楽をして親類でも採とり上げませんから、貴方の内弟子になつてお側で剣道を教えて頂いて、免許目録を貰つて帰ると、親類でも今まで放蕩をしても田舎へ行つて、是々いふ先生の弟子になつてと書かき付つけを持って帰れば、それが価値ねうちになつて何処どこへでも養子に行かれる、処が、御門人にといても、月



々の物を差上げる事も出来ません身の上でございませうが、それを承知で貴方の弟子に取って下さるなれば、私は弟子入の目録代りに、御意ぎよいに適かなつたお隅を、御新造に、長熨斗ながのしを付けて持つて来ませう

## 六十三

安田「是は面白いぞ、惣次郎という主ぬしのある者をどうして持つて来られます」

富「惣次郎が有つてはいけません、惣次郎をひ一かた刀なに斬つて下さい」

安「黙れ、馬鹿をいうな、帰れ、帰れ、汝は惣次郎と同意して  
手前の氣を引きに来たな、うゝん帰れく」

富「これは成程、至極御尤もですが、まア」

安「騒々しい行けく」

富「じゃア有ありてい体に申します、正直なお話を致しますが、貴方

の遺恨ある角力取の花車重吉が来て、法恩寺村の場所が始まるの  
で、去年の礼というので、明晩になりますと、惣次郎が金かね三十兩

遣ると、ようがすか、用をしまうのは日の暮方まで掛りましょう、

帳ちようあい合あなどを致しますからな、用が終つて飯を食つてはどうし

ても夜よの六つ過すぎになります、其処そこで三拾兩持つて出掛ける、富五

郎がお供でげす、ずうつと河原へ出て、それから弘行寺ぐぎようじの松の

林の処へ出て黒門の処までは長い道でございますから其処へ出て  
 来ましたら、貴方は顔を包んですゝきだゝみ芒す 疊だゝみの影に隠れていて、手前  
 が合図に提ちようちん 灯を消すと、途端に貴方が出でずぷりと遣り、惣  
 次郎を殺すと金が三十両あるから持つて宅うちへ帰り、構わず寝て入  
 らつしやい、まアさお聞きなさい、手前は面部きずへ疵を付けて帰つ  
 て、今狼藉ろうぜきもの者が十四五人出て、旦那も切合つて私も切合つたが、  
 多勢ぶぜいかなに無勢敵むぜいかなわぬ、早く百姓をといたので大勢来て見ると、貴方  
 は宅へ帰つて寝て居る時分だから分らぬてえ、氣の毒などいって  
 死骸を引取り、野辺送りをしてしまつてから、ようがすか、其の  
 後ごは旦那様が入らつしやりませんでは私がいても済みません、殊こと  
 には彼あアいう処へお供をして、旦那が彼アなれば猶更どうも思い

出して泣く許りばかでございますから、江戸表へという、惣次郎が死ねばお隅さんも旦那様がいなければ此の家うちにいても余計者だから私わたくしも江戸へ帰るといふ、江戸へ行くゆなれば一緒にといふので、お隅を連れて来てずうつと貴方の処へ長熨斗を付けて差上げる工風くふう、富五郎の才覚、惚れた女を御新造にして金を三拾両只取れるといふ、是迄種を明あかしてこれでも疑念おぼしめに思召すか、え、どうでげす」

安 「成程是は面白い、それに相違ないか」

富 「相違あるもないも身の上を明してかくお話をして、是をどうも疑念てえ事はない、宜しい手前さむらいも武士きんちようで金打致します：今日はいけません：木刀を帯さして来たから今日は金打は出来ませんが、外ほかに何どの様なる証拠でも致します」

安「じやア明晩酉刻むつといふのか」

富「手前供を致します、彼処あそこは日に中ちゆうも人は通りませんから、

酉刻を打つて参り、ふツと提灯を消すのが合図」

安「よろしい、相違なければ」

と約束して帰りました。安田一角は馬鹿でもない奴なれども、

お隅にぞつこん惚れているから、全く然そういう了簡したくで連れて来る

のではないかと思ひ、是から胸に包んで翌日仕度したくをして早くから

家を出て、諸方を廻つて、夜よに入いつて弘行寺の裏手林芒しやが置へ蹲しゃがん

で待っている事とは知りません、此方こちらは富五郎が、お隅を手に入

れるに惣次郎が邪魔になります、惣次郎は劍術も心得ておりま

すから、自分に殺す事が出来ぬから、一角を欺だまして惣次郎を殺さ

せて後、<sup>のち</sup>お隅を連出して女房にしようという企で<sup>たくみ</sup>ございます、実に悪い奴もあるものでございます。富五郎は書物<sup>かきもの</sup>が分りませんから眼を通してと、惣次郎へ帳面を見せ、態<sup>わざ</sup>と手間取るから遅くなります。是から夜食を食べて支度をして提灯<sup>つつ</sup>を点けて出かけようとする、何か虫が知らせるかして母親もお隅も遣<sup>や</sup>りたくない、隅「何<sup>なん</sup>だか遅いから、明日<sup>あしたむこう</sup>先方から参りますから今日はお止<sup>や</sup>めなさいな」

惣「なアに直ぐ帰るから」

隅「そうでございますか、富五郎お前一緒にどうか気を付けておくれよ」

富「へエ大丈夫、どんな事があつても旦那様にお怪我をさせる

様な事はございませぬ、手前も剣道を心得ておりますから」

と空そらを遣つかつて惣次郎の供をして出掛けましたが、笠阿弥陀を横に見て、林の処へ出て参りますと、左右は芒畳で見えませんが、左の方の土手向うは絹川の流れドウくとする、ぽつりくと雨が顔にかゝつて来る。

惣 「富五郎降つて来たようだ」

富 「大した事ありません、恐れ入りましたが一寸小用こようを致しますから」

惣 「小便ちようずをするなれば提灯は持ていて遣る、これくと何処どこへ行く提灯ゆを持って行つては困る」

という中富うち五郎はふつと提灯を吹消しました。

惣「提灯が消えては真暗まっくらでいかぬのう」

富「今小用致しますから」

という折から安田一角は大松おおまつの蔭に忍んでおりましたが提灯が消えるを合図にスツクと立って透すかし見るに、真暗ではございませぬが、晃きらつく長いのを引抜いてこう透して居ります。

惣「富や、おい富く、何なんだかこそくして後うしろにいるのは、富やく」

という声を当あてにして安田一角が振被ふりかぶる折から、向むこうの方から来る者がありますが、大きな傘を引担ひっかついで、下駄も途中で借りたと見えて、降る中を此処こゝに來合わせましたは、花車重吉という角す力取もつとりでござります。是からは芝居なればだんまり場ばでございま



す。

## 六十四

引き続きお聞きに入れまするは、羽生村の名主惣次郎を山倉富五郎が手引をして、安田一角と申す者に殺させます。是は富五郎が惣次郎の女房お隅ぞつこんに心底惚いっれておりまして、惣次郎があるので邪魔になりますから、寧いっそかたづけて自分の手に入れようという悪心でござりますが、田舎にいて名主を勤めるくらいであるから惣次郎も剣術の免許ぐらい取つて居ります。富五郎は放蕩無頼で屋敷を出る位で、少しも剣術を知りませんから、自分で殺す事は

出来ません、茲こゝで下手でも安田一角という者は、劍術の先生で弟子も持っているから、丁度お隅に惚ほれているのを幸い、一角を＊おいやつて惣次郎を殺し、惣次郎の歿ない後のちにお隅を無理に口説いて江戸へ連れて行って女房にしようという企たくみを考え、やまで嚇おどして上手に見えるが田舎廻りの劍術遣だから、安田一角が惣次郎より腕が鈍くて、若もし惣次郎が一角を殺すような事になれば、此の企は空しくなるというので、惣次郎が常に帯さして出ます脇差の鞘を払って、其の中へ松まつ脂やにを詰めて止めを致して置きました、実に悪い奴でございます。惣次郎は神ならぬ身の、左様な企を存じませんから富五郎を連れて、彼かの脇差を帯して家を出て、丁度弘行寺の裏林へ掛りますと、富五郎がこそくは匍はって行くようです

から、なぜかと思つて後うしろを振り返える、とたんに出たのは安田一角、面部を深く包み、端折はしよりを高く取つて重ね厚あつの新刀を引き抜き、力に任せてプスーリいっとう一刀あびせ掛けましたから、惣次郎もひらりと身を転じて、脇差の柄に手を掛け抜こうとすると、松脂をつぎ込んでから一日たつて居るので粘つて抜けない、脇差の抜けませんのにいら立つ処まを又たひとかたな一刀バツサリと骨を切れるくらいに切り込まれて、向むこうへ倒れる処を、又ひとかたな一刀あびせたから惣次郎は残念と心得て、脇差の鞘ごと投げ付けました、一角がツと身を交かわすと肩の処すゝきをすれて、薄うすの根方ねがたへずぽんと刀が突立つたつたら、一角は血のりを拭いて鞘に収め、懐中へ手を入れて三十両の金を胴巻ぐるみ盗んで逃げようとすると、向の方から蛇の目の傘を指さ

し、高足駄たかあしだを穿あいて、花車重吉という角力が参りました時には、  
 一筋道ひとすじみちで何処どこへも避さけることが出来ません、一角は狼うろたえて後あとへ  
 帰ろうとすれば村が近い、仕方がないからさっさと側の薄畳の  
 蔭の処へ身を潜め、小さくなって隠れて居ります。此方こちらは富五郎  
 はバツサリ切つた音を聞いて、直すぐに家へ駈うちけて行く、其の道すが  
 ら茨いばらか何かで態わざと蚯蚓腫みみずばれの傷を拵こしらえましてセツ／＼と息を切つ  
 て家うちへ帰り

\* 「けしかけるおだてるそゝのかす」

富「只今帰りました」

という。処が富五郎ばかり帰つたから恟びつくりして、

隅「おや富さんお帰りかい何どうかおしかえ」

富「へエもう騒動が出来ました、あの弘行寺の裏林へ掛つたら  
わるもの悪漢が十四五人でで出まして、二人とも懐中の金を出せ身ぐ  
るみ脱いで置いて行けと申しましたから、驚いて旦那に怪我をさ  
せまいと思ひまして、松の木を小楯にこだて取りまして、不埒至極な奴  
だ、旦那を何と心得る、羽生村の名主様であるぞ、粗相をすると  
許さんぞという、大勢で得物えものをくを持って切つて掛るから、手  
前も大勢を相手に切り結び、旦那も刀を抜いて切り結びまして、  
二人で大勢を相手にチョンく切結んでおりましたが、何分多勢  
に無勢旦那に怪我があつてはならぬと思つて、やつと一方を切り  
抜けて参りました、此の通り顔を傷だらけにして：早くおわか若かし  
衆ゆ早くく」

と誠しやかにせえく息を切つていいいますから、お隅は驚いて、それ早くくというので、村の百姓を頼んで手分てわけをして、どろ／＼押して参りましたが、もう間に合いは致しません、斬つた奴はとうとうち疾しゆに家へ歸つて寝ている時分、百姓衆が大勢行つて見ると、情ない哉かな惣次郎は血に染つて倒れておりますから、百姓衆も氣の毒に思ひ、死骸を戸板に載せて引き取り、此の事を代官へ訴え、先まず検視も済み、仕方なく野辺送りも内葬の沙汰で法蔵寺へ葬りました。是程の騒さわぎで村の者は出掛けて追おいはぎ剥はの行方を詮議致し、又四方八方八州の手が廻つたが、殺した一角は横曾根村に枕を高く寝ておりまするので容易に知れません。惣次郎と兄弟分になつた花車重吉という角力は法恩寺村にいて、場所を開こうという処へ

此の騒ぎがあるのに、とんと悔くやみにも参りませんから、母も愚痴うぢが出て

母「あゝ家うちの心しんぼう棒ぼうがなくなれば然そうしたもんか、情なさけないもの」と愚痴うぢたら／＼。そうこうすると九月八日は三みな七日のかでござります、花車重吉が細長い風呂敷ふろしきに包くるんだ物を提ひげて土間どまの処ところから這入はいつて参まりまして、

花「はい御免ごめんなせい」

多「いやお出ででなさえまし」

花「誠まことに大分だいぶ御無沙汰ごむさた致いたしました」

多「家うちでもまア何どうしたかつてえねえ、一寸いちずん知らせるだつたが、家うちがまア忙せわしくつて手が廻まわらないだで、まア一人で歩いてること

も出来なえから誠に無沙汰アしましたが、旦那様ア殺された事は  
 貴方あんだ知つて居るだね」

花「誠にまア何なんとも申そう様ようはございませぬ、知つて居りまし  
 たが旦那わしと私とは別懇の間柄だから、私が行つて顔を見ればお母  
 様かさまやお隅なげさんに尚更なげ歎なげきを増させるような者だから、夫それゆえ故ゆえま  
 ア知つていながら遅くなりました、多助さん、飛んだ事になりま  
 したね」

多「飛んだにも何なんにも魂たまげ消なげてしまつてね、お内儀かみさん様はハア年い  
 取つてるだから愚痴なげイいうだ、花車は内に奉公をした者で、殊に  
 角力になる時前の旦那様の御丹精もあるとねえ、惣次郎とは兄弟  
 じゃアねえか、それで此の騒なげぎが法恩寺村迄知んねえ訳なげア無なげえ、



知つて来ないは不実だが、それとも知んねえか、江戸へでも帰つた事かとお内儀かみさんあんたの事をば云つて、ただ騒いでいるだ、どうか行つて心が落ち着くように気やすめを云つて下さえ、泣いてばいいるだからねえ」

花「はい、来たいとは思ひながら少し訳があつて遅く参りました、まア御免なせえ」

多「さア此方こつちへお這入り」

というので風呂敷包を提げたなり奥へ参ります。来てみると香こ花うはなは始終絶えませぬから其処そこらが線香臭くそうございます。

多「お内儀さん法恩寺の関取が参りましたよ」

母「やア花車が来たかい、さア此方こつちへ這入つておくんなせえ」

花「はい、お内儀さん何とも此の度は申そう様もございません、さぞ御愁傷様でございましょう」

## 六十五

母「はい只どうもね魂消たまげてばいいいます、お前も知っている通りちい小せえ時分から親孝行で父様とっさまアとは違つて道楽もぶたなえ、こんな堅い人はなえ、小前こまえの者にも情なさけを掛けて親切にする、あゝいう人がこんなハア殺され様をするといふは神も仏もないかと村の者が泣いて騒ぐ、私もハア此わしの年になつて跡目相続をする大事な悴しにわかにはア死別わかれ、それも畳の上で長なが煩わずらいして看病をした上

の臨終でないだから、何<sup>なん</sup>たる因果かと思えましてね、愚痴い出て泣いてばいいます、それにお隅は自分の部屋にばい這入つて泣いて居るから、此<sup>こねえだ</sup>間もお寺へ行つたら法蔵寺の和尚様ア因果経というお経を読んで聴かせて、因果という者アあるだから諦めねばなんねえて意見をいわれましたが、はアどうも諦めが付かなえで、只どうも魂消てしまつて、どうかまアこういう事なら父<sup>とっつ</sup>アんの死んだ時一緒に死なれりやア死にたかつたと思えますくらいで」

花「はい、私<sup>わし</sup>もねえお寺詣りには度々<sup>たびく</sup>参ります、それも一人で、実は人に知れない様に参りました、是には深い訳のあることで、私が不実で来ないと思つて定めて腹を立て、お出でなさるとは知つていますが、少し来ては都合の悪い事があつて来ませぬ、お前

さん私は今まで泣いたことはありません、又大きな身体なりをして泣くのは見つともねえから、めろ／＼泣きはしませんけれども、外ほかに身寄兄弟もなし、重吉手前とは兄弟分となつて、何なんでもお互に胸にある事を打ち明けて話をしよう、力になり合おうといつておくんなさいました、其のお前さん力に思う方に別れて、実に今度ばかりは力が落ちました、墓場へ行つて花を上げて水を手向たむけるときにも、どうも愚痴の様だけれども諦めが付かないでついはい泣きます、まあ何んともいい様がありません、嘸さぞお前さんにはひ一と通りではありませんまい、お察し申しております、お隅さんも嘸御愁傷でしよう」

母「はい私わしの泣くのは当り前のことだが、あのお隅は人にも逢

わなえで泣いてばいおるから、そう泣いてばいいると身体に障るから、些ちつと氣い紛まぎらすが宜ええ、幾ら泣いても生いき返けえる訳でなえと  
 いうけれども、只彼あすこ処こへ蹲つくんで線香を上げ、水を上げちやア泣いてるだ、誠にハア困ります」

花「はいお隅さんを一寸こゝ茲こゝへお呼びなすつて下さい」

母「お隅やちよつくり此こゝ処こゝへ来こうや、関取が来たから来うや」

隅「はいく」

母「さア此こけ処けへ来きや、待つてるだ」

隅「関取おいでなさい」

花「はいお隅さんまア何なんとも申そう様はありません、とんだ

ことになりました、嘸さぞお力落しでございましょう」

隅「はい、もうね毎日お母つかさんと貴方の噂ばかり致しまして、  
どうしておいでなさいませんか、何かお心持でも悪いことがあり  
はしまいか、よもや知れない事もあるまいが、何か訳のある事だ  
ろうと、お噂を致しておりましたが実に夢の様な心持でございま  
してねえ、それは貴方とは別段に中が好よくつてねえ、旦那が毎いっも  
疝かん癩しゃくを起しておいでなさる時にも、関取がおいでなさいませ  
と、直すぐに御機嫌が直つて笑い顔をなさる、こうやつて関取が来て  
も旦那様がお達者でいらしたら嘸お喜びだと存じまして、私は  
旦那の笑顔が目に付きます」

母「これ泣かないが宜ええ、そう泣かば病に障るからというのに  
聞かなえで、彼のあ様に泣いてばいいから、汝われが泣くから己おらがも

共に悲しくなる、泣いたって生返いきげえる訳工なえから諦めろというだ、ねえ関取」

花「へエ、御愁傷の処は御尤でございませうが、お隅さん、旦那をば何者が殺したという処の手掛てがかりは些ちつとはございませうか」

隅「もう関取の処へ早く行き度ゆたいというのが、御用があつて二日ばかり遅くなりましたから、是から富五郎を供に連れて関取にお目に掛りに参ると仰しやるから、今日は大分だいぶん遅いから明日あすになすつたら好よかろうといつても、是非今日はといつて、何どういう事か大層せ急せいてお出でになりました、処が丁度弘行寺の裏林へ通り掛りますと、十四五人の狼藉ろうぜきもの者が出まして、得物とくぶつくゝを持って切り付けましたから、旦那はお手利てきりでございませうから直すくに脇差を

抜いて向うと、富五郎も元は武士で劍術も存じておりますから、二人で十四五人を相手に切り結んだけれども、幾ら旦那が御手ごしゅれ練でも向は大勢むこうたいぜいでございますから、仕方なく、富五郎が旦那にお怪我をさしてはならぬとやっと切り抜け駈けて来ましたが、直すぐに村の若い衆しゅもお勢おおぜい参りましたけれども、其の甲斐もなくもう間に合いませんで、誠に情ないことでございます」

花「じゃア富五郎さんが一緒に附いて行つて弘行寺の裏林へ掛つた処が十四五人狼藉者が出て取巻いたから、旦那も切結び、富五郎も切り合つたという処を誰も見た者はないので、富五郎が帰つて其の事を話したのですね」

隅「左様でございます」



花「うん、富五郎という人は内におりますか」

隅「お母さん、今日は富五郎は何処かへ使いに参りましたか」

母「今何まで使に遣つたゞ、何処まで行つたかのう、又水街道の方へ廻つたか知んなえ、じき横曾根まで遣つたがね」

花「御新造さん、留守かえ、そんなら話をしますが、あの富五

郎という奴は、べちやくちや世辞をいう口前の好い人だね、実

は私わしはね、人には云わないが旦那の殺されたばかりの処へ通り掛つた処が、丁度廿五日で真暗まつくらだ、私がずんく行くと、向から

頭巾を被かぶつた奴が来やアがる様子だから、はて斯こんな林に胡散うさんな

奴がおる、ことに依よつたら盗賊かと思つたから、油断せずすかに透し

て見ると、其奴そいつが脇道へ曲つて、向むこうへこそく這入つて行くから、

何でもこれは怪しいと思うて、急いで来ると、私の下駄で蹴付け  
たのは脇差じゃ、はて是は脇差じゃが何うして此処に在るかと思  
うて、見ると向からワイ〜とお百姓が来まして、高<sup>たか</sup>声<sup>こゑ</sup>上げて、  
あゝ情ないもう少し早かつたらこんな事にはならぬ、無惨なこと  
をした、情ないことをしたというから、こいつしまった、そんな  
ら頭巾を被った奴が旦那を殺したと思つて、其の事を皆の中で話  
をしようかと思つたが、旦那と深い中のことは知つて居るし、  
若<sup>も</sup>し角力が加勢をすと思つて、遠く逃げてしまわれたら手掛り  
はないから、是は知らぬ積りで家へ歸<sup>うち</sup>つたが好いと思つて、其の  
脇差を提<sup>さ</sup>げて歸つてからは何処<sup>どこ</sup>へも出<sup>で</sup>ず、外<sup>ほか</sup>の者にも黙<sup>も</sup>つてろ知  
らぬ積りでいろといひ付けて来<sup>こ</sup>ずにいましたが、今日は斯<sup>こ</sup>うして

脇差を持って来ました」

母「あれやまア、どうも不思議なこんだ、殺された処へ通り掛つて脇差い拾つたつて、其の斬つた奴は何様どんな奴だかね」

花「お隅さん、それはね此の脇差はどうしたのか知れないが、

ちよつくり抜けない、私わしの力でもちよつくり抜けない、何でも松ま

脂つやにか何か附いてると見えて粘ねばくくしてるから、ひつついて抜

けないが、これは旦那の不断差す脇差で私も能く知っております」

母「あれやまアどうも、お前が知つてるのが手に這入るのは不思議だねえ」

## 六十六

隅「お母様つかさん、もう少し関取が早かつたら助かりましたものを」

花車「此の通り抜けない、抜けないから脇差を投ほうり付けたのを盗どろぼう賊が置いて行つたか、其処そこは分らんが、今富五郎が私わしも切り合あひ旦那も切合つたが、相手が大勢で敵かなわんといふので駈付けて来て知らしたといふのは、それはどうも私は胡散なことと思う、たとえ仮令相手が多かろうが少なかろうが、旦那様さんが危あぶないのを一人措おいて逃げて来るといふ訳はないねえ、然そうじゃないか、大切な主人と思えばどこ迄も助けるには側にいなければならぬ、それを措いて来るとは、怖いから逃げたと思えない、旦那が脇差を抜いて切合つたというが抜けやしない、ねえ、どうしても抜けない刀

を抜いて切合ったという道理がないから、どうも富五郎という奴が怪しい、という訳は、お隅さん、去年の秋大生郷の天神前で喧嘩を仕掛けた奴がお隅さんが麴屋に居た時分お前さんに惚れて居て冗談をいった奴がある、処がお隅さんは堅いから、いう事を聞かんで撥付けたのを遺恨に思っているということを知っている、事に依つたら安田一角が旦那を切つて逃げやアしないかと考えた、就ては山倉富五郎という野郎は、口前は好い奴だが心に情のない慾張った奴だから、事に依つたら一角にお出でくをされて鼻薬を貰うて、一角の方に付いて、彼奴が手引をして殺させやアせんかと思う、それ此の通り抜けぬのに抜いて切合ったというのが第一おかしいじゃないか」

母「あれやまア其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>らには気が付かんで、只まア魂消てばいいました、ほんにそうかもしんねえよ、其の頭巾冠<sup>かぶ</sup>つたのはどんな恰好だつきやア」

花「それは暗<sup>やみ</sup>だから確<sup>しつ</sup>り分らんが、一角じやないかと私<sup>わし</sup>の心に浮<sup>う</sup>んだ、斯<sup>こ</sup>うしておくんない、私は黙<sup>もく</sup>つて帰るが、富五郎が帰つたら、今日花車が悔<sup>く</sup>みに来て種<sup>いろく</sup>々取<sup>とり</sup>こんだ事があつて遅くなつた、就<sup>つ</sup>ては他<sup>わ</sup>へ二百両ばかり貸したが、どう掛合つても取れないから、どうかして取ろうと中へ人を入れたが、何<sup>なに</sup>分<sup>ぶん</sup>取れないが、若<sup>も</sup>し富五郎さんが間へ這入つたら向<sup>む</sup>の奴も怖いから返すだろ、若しお前の腕から二百両取れたら半分は礼に遣るが、どうか催促の掛合に往つてくれまいかと、花車が頼んだが行つて遣らん

かといえ、慾張よくばつているから屹度遣きつとつて来るに違ちがいない、法恩寺村の私の処へ来たら富五郎さんくゝというて富五郎を側に寄せ、腕を押えてさア白状しろ、一角に頼まれて鼻薬を貰つて、惣次郎さんを殺したと云え、どうだくゝいわなけりやア土性骨どしようぼねを殴どやして飯を吐かせるぞ、白状すれば、命は助けて遣ると言うたら、痛いから白状するに違ちがいない、実は是れくゝくゝくゝであると思つたら旨いもんで然そうしたら富五郎はくりくゝ坊主にして助けても好よし、物置ものへ投ほうり込んでも好いいが、愈々いよく一角と決つたらお隅すみ様は纖細かほそい女、お母様つかさんは年を取つて居り、惣吉さん様はまだ子供だから私が先へ行きます、一角の処へ行つて、偕さて先生大生郷の天神前で、飛んだ不調法を致しましたが何卒どうか堪忍しておくんないといひたすら只管

詫びる、然そうすれば斬ることは出来ぬからうっかり近寄る近寄つたら両方の腕を押えて動かさぬ、さア手前てめえが惣次郎を殺した事は富五郎が白状した、敵かたきを取るから覚悟をしると腕を押えた処へ、お前様さんが来て小刀こがたなでも錐きりでも構わぬからずぶく突つついて一角を殺すが好いいどうじゃ」

隅「本当に有難いこと、嘸旦さこそ那樣が草葉の蔭でお喜びでございましょう、関取私は殺されてもいゝから旦那かたき様の敵を取つて」

母「何分にもよろしくねがえます」

花「余り敵くと云わないがいゝ、私わしは先へ帰りますから」

と脇差を元の如く包んで帰りました。後あとへ入いり替つて帰りましたのは山倉富五郎、



富「へエ只今帰りました」

母「富や、大層けえ帰りが遅かったね」

富「なに帰り掛けに法蔵寺様へ廻りまして、幸いいい花がありましたからお花をたむ手向けしましたが、お墓に向いましてなア、実に残念でございまして、何なんだか此間こないだまで富くと仰しやったお方がまアどうも、石の下へお這入りなすつたかと存じましたら胸が痛くなりまして、嫌な心持で、又家うちへ帰つて貴方がたのお顔を見ると、胸が裂さける様な心持、仏間に向つて御回ごえこう向致しますると落らくる涙いするばかりで、誠にはや何なんとも申そう様はありません」

母「まア能く心に掛けて汝われが墓はかめえ参りするつて、嘸さぞ草葉の蔭で喜んでゐるべエ」

富「どうも別に御恩返しほかの仕方がありませんから、お墓参りでもするより外仕方がありません、仏様にはお念仏や花を手向けるくらいで、御恩返しにはなりません、それより外に仕方がありません、へエ」

隅「あの富さん先刻さつき花車関が悔みに参りましたよ」

富「おや／＼／＼左様でござりましたか、へエ成程ど何うなすつたか、御存じないのかと思いましたが」

母「ナニ知ってたてや、知ってたけれども早く来て顔を見せたら、深ふけえ馴染おめえだの中だなげで思かゝさま出して歎なげきが増えて母様かゝさまが泣くべえ、それに種々いろく用があつて来きねえでいたが悪く思つてくれるなつて、でか大きい身体アして泣いただ」

富「それでげしよう、兄弟の義を約束した方でございますから  
さぞ嘸御愁傷でげしようお察し申します」

母「就ついてねえ、あの関取が他わきへ金え二百両貸した処が、向むこうの奴  
 がずりい奴で、返さなえで誠に困るから、どうか富さんを頼んで  
 掛合もれつて貰えてえ、富さんの口前で二百両取れたら百両礼をする  
 てえいうだ、どうだい、帰けえつたばかりで草くたびれ臥ふて居るだろうが、  
 行やつて遣やつてくんろよ」

富「へエ成程関取が用立すつた処が向の奴が返さんのですか、な  
 に直すぐ取すつて上げましょう、造作ありません、百両……百両……  
 ……なアに金なんぞお礼に戴かぬでも御懇意の間でげすから直ぐに  
 行すつて参ります」

と止せばよいのに黒い羽織を着て、一本帯さして、ひよこく遣つて来ましたのが天命。

富「はい御免なさい、関取のお宅うちは此方こちらでげすか、頼みます／＼」

弟子「おーい此処こゝだい」

花「これく一寸此処へ来い、富五郎という人が来たら奥へ通して己が段々掛合かあひになるのだから、切迫せっぱ詰つて彼奴あいつが逃げ出すかも知れないから、逃げたらば表に二人も待つて、逃にげやがったら生捕いけどつて逃がしてはならぬぞ、え、初めは柔和な顔をして掛合かあひうから」

弟子「逃げたら襟首を押えて」

花「こうく／＼そんな大きな声を、此方へお這入りなさいといえ」

## 六十七

弟子「此方へお這入んなせい」

富「御免を蒙ります」

花「さア富さん此方へ、取次も何もなしにずか／＼上つて好い  
じやないか、さア此方へ来て下さい」

富「えー其の後は存外御無沙汰を、えー毎も御壮健で益々御  
出精で蔭ながら大悦致します、関取は大層評判が好うげすか  
ら場所が始まりましたら、是非一度は見物致そうと心得ていまし

たが、御案内の通りさん／＼の取込で、つい一寸の見物も出来  
 ません、併し御評判は高いものでござります、昨年から見ると大  
 した事で、お羨しゆう、実に関取は身体も出来て入っしやるし、  
 殊には角力が巧手で、愛敬があり、実に自力のある処の関取だ  
 から、今に日の下開山横綱の許しを取るのはあの関取ばかりだ  
 といつて居ます」

花「余計な世辞は止して下せい、私は余計な世辞は大嫌いだか  
 ら」

富「いや世辞は申しません、これは譬えの通り人情で、好きな  
 ものは一遍顔を見た者には、知らぬ人でも勝たせたいと思うのが  
 人間の情でげしよう、況して旦那とは兄弟分でこうやって近

々、拝顔を得ますから、場所中は、どうか関取がお勝になる様にと神信心をしていますよ」

花「それは有り難い、たとえうそ仮令虚言でも日の下開山横綱と云つて貰えば何となく心嬉しい、やア、お茶を上げろよ、さア此方へ」

富「関取、さぞ御愁傷で」

花「やアお互のことで、さぞ嘸お前さんもお力落しでございませう」

富「イヤ此度こんどは実に弱りまして、只もうどうも富五郎はふたおや両親に別れたような心持が致しますなア」

花「然そうでございませう、わし私も実は片腕もがれた様だといましようか」

富 「然うでげしよう、私も実に弱りましたね」

花 「就ついて富さん、お前さんが供に行つたのだとねえ」

富 「左様」

花 「どんな奴でございますえ、切つた奴は」

富 「それはもう何なんとも残念千万、弘行寺の裏林へ掛ると、面部を包んで長い物をぶち込んだ奴が十四五人でずっと取り巻いて、旦那が金を三十両持っているのを知つて、出せ身ぐるみ脱いで置いてけというから、旦那に怪我をさせまいと思つて、旦那を何なんと心得る、旦那は羽生村の名主様だぞ、若もし無礼をすれば引縛ひっくつて引くから左様そ心得ろというと、なに、と突いきなり然竹槍をもつて突いて来るから、私も刀を抜いて竹槍を切つて落し、杉の木を小楯



に取つてちよんくくくく暫く大勢たいぜいを相手に切合いました、すると旦那も黙っている気性でないから、すらり引抜いて一生懸命おおぜいに大勢を相手にちやんく切合いましたから、刀の尖とっさき先から火が出ました、真に火花を散すちらとはこの事でしょう、けれども多勢に無勢と云う譬えの通りで、逆とても敵かなわぬから、旦那に怪我があつてはならぬと、危うい処を切抜けて駈込んで知らせたから、それから早くというので大勢の若い衆しゅがどつと来て見ましたが、間に合いません、実に残念で、どうも」

花「お前さん供をしたから、嘸さぞ残念だつたらうねえ」

富「実にどうも此の上ない残念で」

花「そこで、何なんですかい、向は十四五人で、其の内一人か二

人捕つかまえるとよかつたね」

富「処おが向おが大勢おぜいでげすから、此方こつちが剣術を知つていても、大勢で刃物を持つて切付けるから敵かないません」

花「じゃア旦那が刀を抜いて切合つた処をお前さんは見ただろ  
うねえ」

富「そりやア見ましたとも、旦那はお手利てきでげすからちよん／＼  
切合きあいました」

花「それに相違ないねえ」

富「相違も何もありません、現在私わしが見ておつたから」

花「うん然そうかえ、富さん、もつと側へお出でなさい、今日は  
一杯飲みましょう」

富「それは誠に有難いことで、時に何かお頼みがあるという事で、  
 ですけど早速取立てましよう、なに造作もないことで」

花「それに付いて種々いろく話があるのだがもつと側へ」

富「じゃア御免を蒙こうむつて」

花「さて富さん、人と長く付合うには嘘を吐ついてはいかないねえ」

富「それは誠に其の通り信がなくてはいけませんねえ」

花「今お前のいったのは皆嘘と考えて居る、旦那様が脇差を抜  
 いてちよんく切合い、お前も切結んだと、そんな出鱈目でたらめの事を  
 いわずに正直なことをいってしまいいねえ」

富「な何なんだ、これは恐入おそったね、どうも怪けしからん事を、ど、

どういふ訳でな何んで」

花「やい、それよりも正直に、慾に目が眩くらんで一角に頼まれて  
 恩人の惣次郎を私わしが手引で殺させましたといつちまいねえ」

富「これは怪しからん、怪しからん事があるものだね、関取外  
 の事とは違わいます、私わしは一角という者は存じませぬ、知りもしな  
 い奴たに假令たとえどの様な慾があつても、頼まれて旦那様を殺させたる  
 うという御疑念は何等なんらの廉かどを取つて左様なことを仰しやる、と関  
 取で無ければ捨置けぬ一言いちごん、手前も元は武士でござる、何を証拠  
 に左様な事を仰せられるか、関取承りたいな」

花「嘘そらつくくない、正直にいつてしまいな、手前てめえが鼻薬ばかを貰つて、  
 一角に頼まれて旦那を引き出したといつてしまえば、命許ばかりは助

けてやる、相手は一角だから敵かたきを打たせる積りだが、何処迄も隠どこまでせば、抛よんどころなくお前の脊骨めえを殴どやして飯を吐かしても云わせにやならん」

富「これはどうも怪しからん、関取の力で打たれりやア飯も吐きましようが、ど、どういう訳で、怪しからん、なな何を証抛さに」  
花「そんなら見せてやろう、是は其の時旦那さの帯して行つた脇差だろう、これを帯して出た事は聞いて来たのだ、さどうだ」

富「左様どうして是を」

花「是は手前てまえが刀を抜いてちよん／＼切合つたという後あとで丁度其の側を通り掛つて此の刀を拾うたが、些ちっとも抜けない、此の抜けない脇差をどうして抜いて切合つたかそれを聴こう」

富「それア、それア私が転倒致した」

花「何が転倒した」

富「それは私は私は大勢を相手に切結んでおり、夜分でげすから能く分りませぬが、全く鞘の光を見て拔身と心得ましたかも知れませぬが、私が手引をして：是は怪からん事でげす、どうも左様な御疑念を蒙りましては残念に心得ます」

花「そらく手前のいうことは皆間違つていらア、鞘の光を見て拔身で切合つたと思つたというが、鞘ごと切れば鞘に疵がなけれアならねえ、芒きつさき尖から火花を散したというが鞘ごと切合つてどうして火花が出るい」

富「じやア全く転倒致したのでげす、全く向同士むこうちちよんく切

合つて火花が出たのでげしよう、大勢の暗撃やみうちで向同士…どうも左様な手引をして殺したという御疑念は手前少しも覚おぼえがございません」

花「なに云わなけりやア脊骨を殴どやして飯を吐はかせても云わせるぞ」

富「ア、痛い〜痛いござります、ア、痛い、腕が折れます、ア痛い」

花「さ、云つて了しまえ、云わなければ殴うすぞ」

富「ア、痛うござります」

花「やい能く考えて見ろ、実は大恩があるのに濟みませぬが、

旦那は私わしが手引をして殺ころさせました、其の申もうしわけ訳わけの為に私は坊主かみさんになつて旦那の追善供養を致しますといえ、お内儀いのち様に命

乞ごいをして命だけは助けて遣るから、一角が殺したと云つてしまえよ」

富「云つて了しまえと仰しやつても、あゝ痛い痛うございます、だから私わしは申しますがね、あ痛い是はどうも恐入ったね、あゝ痛い、腕が折れます、あゝ申しますく、申しますからお放し下さい然そう手をぐつと関取の力で押えられると骨が折れてしまいますから、ア、痛いどうも情ないとんだ災難でげす、無実の罪という事は致し方がないなア、関取能くお考えください、私わたしは恥をお話し致しますよ、昨年夏の取付とっつきでげしたが、瓜畑を通り掛りまして、真桑瓜を盗んで食いまして、既すでに縛られて生理になる処を、旦那様が通り掛つて助けて家うちに置いて下さるお蔭もつで以て、黒い羽織を着



て、村でも富さんくといわれるのは全く旦那の御恩でげす、其の御恩のある旦那を、悪心ある者の為に手引をして殺させるという様な事は、どの様なことがあつても覚えはござりませぬが、ア痛たゝゝア、痛うござります、腕が折れてしまいます」

花「なに痛いと、腕を折ろうと脊骨を折ろうと己の了簡だ、己が兄弟分になつた旦那を、殺した奴を搜して敵を討たにやならぬ、手前一人に換えられないから云わなければ殺してしまう、それも殺させたといえば助けて遣るが、云わないか此の野郎」

と松の木の様な拳を振上げて打とうと致しました時には、実に驚に捕まった小鳥の様なもので、逃げるも退くも出来ません、此の時に富五郎がどう言訳を致しますか、一寸一息つきまして。

## 六十八

富五郎が花車に取つて押えられましたは天命で、己おのれが企たくみで、惣次郎の差さしり料ようの脇差へ松脂を注つぎ込んで置きながら、其の脇差を抜いて惣次郎がちよん／＼切合つたという処から事が顛あられ、富五郎は何なんといつても遁のがれ難がとうございます。殊ことに相手は角力取り、富五郎の片手を取つて逆に押えて拳を振上げられた時には、どうにもこうにも遁にげ途どがありません、表の玄関には二人の弟子とりてきが張番をしていて、若もし逃げ出せば頸くびを取つて押えようと待つておりますから、此の時は富五郎が真ま青つさおになつて、寧いそ白状しよ

うかと胸に思いましたが、其<sup>そこ</sup>処<sup>もと</sup>は素より悪才に長<sup>た</sup>けた奴。

富「関取、御疑念の程重々御尤も、もうこうなれば包まず申します、申しますからお放し下さい」

花「申しますと、云つてしまえばそれでよい」

富「云つてしまいます、是迄の事を残らずお話し致します、致しますが関取、そう手を押えていては痛くつてく喋<sup>な</sup>ることが出来ません、こうなつた以上は遁<sup>に</sup>げも隠れも致<sup>あ</sup>りませぬ、有<sup>あり</sup>体<sup>てい</sup>に申すから其の手を放して下さい、あゝ痛い」

花「云つてしまえばよい、さア残らず云つてしまえ」

と押えた手を放しますと、側に大きな火鉢がありまして、かんく<sup>おこ</sup>と火が起<sup>おこ</sup>つております。それに掛<sup>か</sup>つている大<sup>お</sup>薬<sup>お</sup>罐<sup>やかん</sup>を取<sup>と</sup>つて、

富「申上げまする」

といいなひつくりかえながら顛覆ひつくりかえしましたから、ばつと灰神樂はいかぐらが上りまあがして、真暗まっくらになりました。なれども角力取等らは大様おおようなもので、  
胡坐あぐらをかいたなり立上りも致しません。

花「何をするぞ」

という内に富五郎は遁出にげだしましたが、悪運の強い奴で、表へ遁でしげれば弟子が頑張すくっているから直に取すくつて押えられるのでござい  
ますが、裏口の方から駈出し、畑を踏んで逃げたの逃げないの、  
一生懸命になつてドンくくくく遁すくげましたが、羽生村へは逃  
げて行かれませぬから、直に安田一角の処へ駈込んで行つて、

富「ハ、ハ、先生く」

安「なんだ、サア此方へ」

富「は：ア水を一杯頂戴」

安「なんだ、ナニ水をくれと、どうしたんだ、喧嘩でもしたか」  
富「いいえ、どうも喧嘩どこではございませぬ、脊骨をどやして飯を吐かせるて、実にどうも驚きました」

安「誰れが飯を吐いたか」

富「なに私が吐くので、先生運好く此処まで逃げたが、もう此処にもおられぬので、直に私は逃げますから、路銀を二三十金拝借致し度い」

安「どうしたか、そう騒いではいかない」

富「どうも先生、これくでげす」

と一部始終の話をしますると、相手は角力取ですから一角も不  
 気味きびでございませうが、

安「然そうか、驚くことはない、私わしが殺したという事を云いはし  
 まい」

富「何なんで：それはいいませぬ、足下そつかとちやんとお約束を致した  
 廉かどがありますから、仮令たとえ脊骨をどやさされて骨が折れてもそれは云  
 わん、云わぬに依よつてこんな苦しい目を致したから、可哀そうと  
 思つて二三十金ください、直わしに私は逃げますから」

安「何なんだ、何んにも怖いことはない」

富「怖いことはないと仰しやるが、足下知らないからだ、何どう  
 も彼奴あいつの力は無法な力で、只握られたばかりでもこんなに痣あざにな

るのだもの」

安「じゃア貴公に路銀を遣るから逃げるがよい」

富「足下も早く、直に跡から遣つて来ますよ」

安「遣つて来ても云いさえせんければ宜しい」

富「理不尽に……」

安「幾ら理不尽でも白状せぬのに踏ふんご込んでどうこうという訳に

はいかぬ」

富「無法に打ちぶますよ」

安「なに打たれはせぬ、仔細ない」

富「仔細ないと仰しやるが、私わしの跡を追掛おっかけて来て富五郎はい

るか、慥かくまったろう、イエ慥かくまわぬ、居ないといえはじゃア戸棚

に居ましようというので捜しましよう、それで無いにしても表で暴れて家を揺ると家が潰れるでしよう、奴の力は大した者だから、やアというと家に地震が揺つて打潰されて了います、何にしても家にいると面倒だから逃げて下さい、え、先生」

安「じゃア路銀を遣るから先へ逃げな」

富「逃げるなら一緒に逃げたいものです」

安「一緒に逃げては人の目に立つてよくない、己が手紙を一本付けるから之を持って、常陸の大方村という処に私の弟子があるから、其処へ行つて隠れておれば知れる訳は無いから、ほとぼりが冷めたら又出て来い、私は一足後から、十二暴れても仔細ない、逢い度いといえは余義ない用事が出来て上総へ行つたとか、



江戸へ行つたとか、出鱈目を云つておれば取り附く島が無いから仕方が無い、貴公は先へ行きな」

富「じゃア路銀を頂戴、私はわしすぐゆ行きます」

安「そう急がずに」

と落着いて手紙一本書いて、路銀を附けて遣ると、富五郎は其の手紙を持って人に知れぬ様に姿を隠し、間道かんどうくと到頭とうとう逃げ遂おおせて常陸へ参りました。安田一角も引続いて逃げる、花車重吉は、

花「おのれ逃げやアがったか」

と直すぐに後あとを追掛けましたけれども、羽生村では此方こつちへは来ないというから、サテ怪しいと諸方を尋ねたが何分手掛りがありません

ん。一角の様子を聞くと是は私用があつて上総まで出たというので、頓とんと手掛りが無い、風を食くらつて二人とも逃げてしまつたから、もう帰る氣遣いはないが、安田一角の家は其の儘うちになつて弟子が一人留守番に残つている。どういう訳なんか分らぬが何でも怪しいから取とつて押えんければならぬが、それには先まず第一富五郎をどうかして押えなければならぬと心得、

花「残念な事をしました、これ〜これ〜で押えた奴を逃げられました」

というと、お隅も母も残念がつて歎きますけれども致いたしかた方がない。翌よくげつ月の十月の声を聞くと、花車は江戸へ参らなければならぬから、花車重吉が暇いとま乞こいに来て、

花「私はこれくで江戸へ参りますが、何事があつても手紙さえ下されば直に出て来て力に成つて上げますから、心丈夫に思つてお出でなさい」

と二人にいい聞かして、花車重吉は江戸へ帰りました。跡方は惣吉という取つて十歳の子供とお隅に母親と、多助という旧来此の家にいる番頭様の者ばかりで、何と無く心細い。十一月の三日の事で、空は雪催しで、曇りまして、筑波下しの大風が吹き立て、身を裂れるほど寒うございます。

母「あゝ寒いてえ、年イ取ると風が身に泌みるだ、そこを閉つてくんろよ、何んだか今年に成つて一時に年イ取つた様な心持がするだ、酷く寒いのを、多助やぴったり其処を閉つてくんろよ」

多「なにあんた、そんなに年イ取った〜といわなえがい、  
 若<sup>わけ</sup>え者<sup>もん</sup>でも寒いだ、何<sup>なん</sup>だかハア雪イ降るばいと思う様に空ア雲つ  
 て参<sup>めえ</sup>りました」

母「其<sup>そこ</sup>処を閉つて呉んろよ、お隅は何<sup>どこ</sup>処へか行つたか」

隅「はい」

と部屋から着物を着換え、乱れた髪を撫付けて小包を持って参  
 りましたから、

母「このまア寒いのに何<sup>ゆ</sup>処へか行くかい」

隅「はい、改めてお願いがござります」

## 六十九

隅「不思議な御縁で、水街道から此方こちらへ縁付いて参りました処が、旦那様もあゝいう訳でおかくれになりました、旦那がおいでならお側で御用を達たして、仮令たとえ表向の披露ひろめはなくとも、私も今迄は女房の心持で働いておりましたけれども、斯様こうなつて旦那のなのちい後は余計者で、却かえつて御厄介になる許ばかりでございますし、江戸には大小を帯さす者も親類でもございますから、何卒どうか江戸へ参り度たいと思ひまして、私もべんくと斯こうやつても居おられませんか今の内なら、何どうか親類が里になつて縁付かたづく口も出来ましようと思ひまして、私は江戸へ帰りますから、どうか親子の縁を切つて、旦那はいなくつても貴方の手で離縁に成つたという証拠を戴きませ

ぬと、親類へも話が出来ませぬから、御面倒でも一寸お書きなすつて、誠に永々ながくお世話さまになりました」

母「それアはア困りますな、今お前めえに行かれてしまうと心こころほ

細せえばかりでなく、跡が仕様が無ねえだ、惣吉は年イ行かなえで、惣次郎のなえ後のちはお前めえが何も彼かもしてくれただから任して置いて、己おらアまア家内うちの勝手も知んなくなつたくれえだね、何どうかまアそんなことを云わずに、どうかお前めえがいてくれねえば困りますから」

隅「有難う存じますすけれども、どうも居いられませぬ、居たつて仕方がありませんもの、ほんの余計者になりましたから、どうか御面倒でも：今日直ぐと帰ります、水街道の麴屋に話をして帰りますから」

母「そりやアハア間違つた訳じやアねえか、お前は今迄めえア外ほか  
 の女と違つて信実な者もんで、己おらア家うちへ縁付かたづいても惣次郎を大切でえじにし  
 て、姑しゅうとへは孝行尽し、小前こめえの者もんにも思おもわれる位くれえで、流石さすがお武さむれ  
 家えさんの娘だけ違つたもんだ、婆様ばあさまア家は好いい嫁よめえ貰うつたつて  
 村もんの者もんが誰も褒ほめねえ者もんはなえ、惣次郎が無なえ後のちも僅わずかハア夫婦  
 になつた許ばかりでも、亭主ていしゆと思おもえば敵かたきイ打ぶたねえばなんなえて、流  
 石さむれえ侍さむらいの娘は違ちがつた者もんだと村もんの者もんも魂たまげ消けて、なんとまア感かん心しんな心掛  
 けだつて涙なみだア溢こぼして噂こぼアするだ、今いまに富五郎や安田一角の行方は  
 関取せきとが探たづねしてどんな事ことをしても草くさア分わけて探たづねし出して、敵かたきイ打ぶ  
 せるつて是迄丹精たんせいしたものを、お前めえがフツと行いつてしめえば、跡  
 は老としより人と子供こどもで仕様しやうがなえだ、ねえ困こるから何どうか居いてくんな

よ」

隅「嫌いやですねえ、江戸で生れた者がこんな処に這入って、実に夫婦の情でいましたけれども、斯こうなつて見ると寂しくつていられませぬもの、田舎といつても宿場と違つて本当に寂しくつて居いられませんかからねえ、何卒どうかすぐ直に遣つて下さいな、此こゝ処に居たつて仕方が有りません、江戸へ行ゆけば親類は武士でございますから、相当な処へ縁えんづ付けて貰います、私も未まだそう取る年でもございませぬから、何時いつまでもべんくとしてはいられませぬ、お前さんはどうせ先へ行ゆく人、惣吉さんは兄弟といった処が元をいえば赤の他人でございますからねえ、考えて見ると行ゆくすえ末の身が案じられますから」



母「じやアどうあつても子供や年寄が難儀イぶつても構わなえで置いて行くといふかい、今迄敵イ討つといふたじやアなえか、今それに敵イ討たなえで縁切になつて行くとア訝しかんべい、敵イ討つといふた廉がなえといふもんじやア無えか」

隅「初りは敵を討とうと思ひましたけれども、誰が敵だか分からぬじやアありませんか、善々考へて見ますと、富五郎を押えて白状さして、愈々一角が殺したと決つたら討とうというのだが、屹度富五郎、一角ということも分らず、それも関取が附いていればようございませぬが、関取もいず、して見れば敵が分つても女の細腕では敵に返討になりませぬからねえ、又それ程何方にも此方様に義理はありません、漸く嫁いて半年位のとて、命を捨て、

敵を討つという程の深い夫婦の間柄でもありませんから、返討にでもなつては馬鹿くしゆうございますから、敵かたきうち討やめはお止やめして江戸へ帰ります」

母「魂たまげ消たなア、それじゃ何なんだア今迄敵ぶイ討つと云つたことア水街道の麴屋でお客に世辞をいう様に、心にもなえ出鱈でたらまえをいつたのだな、世辞だな」

隅「いゝえ世辞ではない、関取を頼みにして大丈夫と思つていしましたが、関取もいなければ私は厭いやだもの、そんな返討になるのは詰りませぬからねえ」

母「呆れたよまア、何なんと魂消たなア、汝われがそんな心と知んなえで惣次郎がでか大金え使つて、家うちい連れて来て、真実な女と思つて

魅まされたのが悔くしいだ、そういう畜ちき生しやうの様ような心こころなら只ただ今いま出でて行ゆけやい、縁切状きりじやうを書きえてくれるから」

隅「出て行かなくて、当り前だアね」

多「お隅さんまア待つておくんなさえ、お内儀かみさん貴方あんた人が善いいから直じき腹はらア立つがお隅さんはそんな人でなえ、私わしが知しつてい  
るから、さてお隅さん、此処こゝなア母様ははさまア江戸を見みたこともなし、  
大生の八幡はちまんへも行いつたことアなえという田舎氣質かたぎの母様だから、  
一々いっさ氣きに障さまたる事ことアあるだろうが、実はこういふ事ことがあつて氣色きしきが  
悪いとか、あゝいふ事をいわれてはならぬという事ことがあるなら、  
私わたしがに話わいしておくんなさえ、まア旦那だんなが彼あアなつてからは力ちからに  
思おもうのはお前まへ様の外ほかに誰たれもないのだ、惣そう吉きち様さんだつて彼あの通とほり真まと

実うの姉様さんか母様かゝさまアの様に思おもつて縋すがつてゐるし、敵たかの行方ゆくゑは八州へも頼たのんでえたから、今いまに関取せきとが出て来きれば手分てわけえして富五郎を押おえて敲たたいたら、大概たいがい敵たかは一角いちがくに違ちがえねえと思おもつてゐるくらいだから、機嫌きげんの悪い事ことが有あるなら私わたしにそういつて、どうか機嫌きげん直ただしてくださえ、ねえお隅ぐもさん」

隅ぐも「何をいうのだね、お前は何も氣きを揉もむことはないやね、お母つかさんも呆あれて出て行いけというから離縁りえん状じやうを貰もらつておくんなさい、私わたしは仇あだうち打うちは出来きません、仕方しかたなしに仇あだを打うちつと云いつたので実じつは義理ぎりがあるからさ、よくよく考かんえて見みれば馬鹿ばかげている、それ程ほど深い夫婦ふうふでもありませんねからねえ」

多おほ「それじゃアお隅ぐもさん、本ほん当とうに旦那だんなの敵たかい打ぶつてえ考かんえもな

え、惣吉さんもお母様つかさまも置いて行くゆというのかア

隅「左様さ」

多「魂消たね本ほん当とかア」

隅「嘘にこんなことがいえるものか、今日出て行ゆこうというのだよ」

多「呆れたなア、そんだら己えいうが」

隅「何をいうの」

## 七十

多「旦那が麴屋へ遊びに行った時酌しやくに出て、器量えいりやうは好えいし、人柄



隅「何なんだい狸阿魔とは、失礼な事をお云いで無い、そりやア頼  
 みもしましたから恩も義理もあるには違ちがいなければども、それだ  
 けの勤めをして御祝義を戴いたので、あたりまえ当あた然ぜんの事だアね、それか  
 ら私を貰い切つて遣るから来い、諾はいといつて来ただけの事だから、  
 旦那ひろめが殺されたつて、敵を討つ程の義理もないじゃアないか、表  
 向披露ひろめをした女房というでもなし、いわば妾も同様だから、旦那  
 がいなけりやア帰りますよ」

多「此の阿魔どうも助けられなえ阿魔だ、打ぶつぞ、出るなら出  
 ろ」

隅「なんだい手を振上げてどうする積りだい、怖い人だね、さ  
 打ぶつなら打つて御覽、是程の傷が出来ても水街道の麴屋うっちゃが打捨

つては置かないよ」

多「十二麴屋……金をくれた事アあるけど麴屋がどうした」

隅「此の間お寺へ行くといつて、路銀を借りようと思つて麴屋へ行つて話をして、江戸へ行けば親類もありますから、江戸へ行きたいと思ひますが、行くには少し身装みなりも拵こしらえて行きたいから、まア此こゝで、三年も奉公して行きますからお願ひ申しますといつて、証文の取極めをして、前ぜん金きんも借りて来てあるのだから、是から行つて麴屋で稼かせぎ取りをして行こうと思ふのだ、もう私の身体は麴屋の奉公人になつているのだから、少しでも傷が附つけば麴屋で打捨ぶつておかないよ、願つて出たら済すむまい、さ、打ぶつなら打つて御覽」



多「呆れたア、此奴何うも、お内儀様此間お寺へ墓参りに行く振ゆふりいして麴屋へ行つて証文ぶつて来たてえ、此の阿魔こりやア打ぶてねえ、えゝ内儀様かみさま、義理も人情も、あゝこれエ本当に何うも打てねえ阿魔だ」

母「やア、もう宜いいワイ、恩も義理も知んなえ様な畜生と知らずに、惣次郎が騙だまされて命まで捨すてる事になつたなア何なんぞの約束だんばい、そんな心なら居て貰つても駄目だから、さア此処こえ来こう、離縁状書えたから持たしてやれ」

多「さア持つてけ、此の阿魔ア、これエ打てねえ奴だ」

隅「持つてかなくつてどうするものか」

とお隅は離縁状を開ひらいて見まして、苦笑にがわらいをして懐へ入れ、

隅 「有難い、ア、これできつぱりした」

多 「ア、さつぱりしたと云やアがる、どうも悪いにく口い敲きやアがるなア此の阿魔」

隅 「なんだねえ、ぎやアくおいでない、長々御厄介様になりました、お寒さの時分ですから随分御機嫌よう」

多 「えゝぐずゝ云わずにサツサと早く行かなえかい」

隅 「行かなくつて何どうするものか、縁の切れた処にいろつても居やアしない」

と悪あつこう口をいいながらつかくと台所へ出て来ますと、惣吉は

取つて十歳、田舎育ちでも名主の息子でございますから、何ど処か人じんぴん品が違います、可愛がつてくれたから真実の姉の様に思つて

おりますから、前へ廻つてピツタリ袂たもとに縋すがつて、

惣「姉様ア、お母つかアが悪ければ己があやまるから居てくんなよ、多助があんなこと云つても、あれは誰がにもいう男だから、己があやまるから、姉あねさん居てくんなえ、困るからヨウ」

隅「何なんだい、其方そっちへお出でよ、うるさいからお出でよ、袂へ取ツつかまつて仕ようが無いヨウ、其方へお出でツたらお出でよ」

多「惣吉さん、此方こっちへお出でなさえ、今迄ぼう坊ちゃんを可愛がつたなア、世辞で可愛がつた狸阿魔だから、側へ行かないが好ええ」

母「惣吉や、此処こけえ来こう、幾ら縋つても皆みんな世辞で可愛がつたでえ、心にもない世辞イいつて汝われがを可愛がる振ふりいしたゞ、それでも子供心に優しくされりやア、真実姉と思つて己があやまるから

居てくんろというだ、其<sup>そ</sup>処<sup>け</sup>えらを考えたつて中々出て行かれる訳  
 のものでアなえ、呆れた阿魔だ、惣吉此<sup>こ</sup>処<sup>け</sup>え来い」

多「此<sup>こ</sup>方<sup>ち</sup>いお出でなさえ、坊<sup>ぼう</sup>ちゃん駄目だから」

隅「来いというから彼<sup>あ</sup>方<sup>ち</sup>へお出でよ、今までお前を可愛がった  
 のもね、お母<sup>つ</sup>さん<sup>か</sup>のいう通<sup>よ</sup>り<sup>ん</sup>抛<sup>ど</sup>なく兄弟の義理を結んだからお世  
 辞に可愛がったので、皆<sup>み</sup>本<sup>ん</sup>当<sup>な</sup>に可愛がったのじゃアないよ、彼方  
 へお出で、行つておくれ、行かないか」

多「あれ坊<sup>ぼ</sup>つちちゃんを突き飛<sup>と</sup>し<sup>ば</sup>やアがる、惣吉さんお出でな  
 え：此<sup>こ</sup>奴<sup>いつ</sup>ア：又打てねえ：さつくと行けい」

隅「行かなくつてどうするものか」

とお隅は土間へ下<sup>お</sup>り、庭へ出まして門<sup>か</sup>の榎<sup>え</sup>の下<sup>き</sup>に立つと、ピユ

ーピューという筑波風おろしが身に染みます。

隅「あゝもう覚悟をして思い切つて愛想づかしを云わなけりやア為にならんと思つて彼迄あれまでにいって見たけれども、何も知らない惣吉が、私の片袖に縫つて、どうぞ姉さんあね私があやまるから居ておくれ、坊が困るといわれた時には、実はこれ〜と打ち明けて云おうかと思つたが、※なまじい云えばお母さんつかや惣吉の為にならんと思つて思い切つて、心にもない悪体あくたいを云つて出て来たが、是まで真実に親子の様に私に目を掛けておくんなすつた姑しゅうとに対して実に濟まない、お母さん、其のかわり屹度きつと、旦那様の仇あだを今年うちの中に捜し出して、本望ほんもうを遂とげた上でお詫びいたします、あゝ勿体ない、口が曲ります、御免なすつてください」

と手を合せ、耐え兼てお隅がわつと声の出るまでに泣いております。

多「まだ立ってやアがる、彼処あそこに立って悪体口をきいていやアがる、早く行け」

隅「大きな声をするない、手前の様な土百姓どびやくしやうに用はないのだ、漸やつとサバくした」

と故意わざと口穢くちぎたないことを云つて、是から麴屋へ来て亭主に此の話をすると、

亭「能く思い切つて云つた、よし、己がどこ迄も心得たから、心配するな、先まず手拭でも染めて、すぐ披露ひろめをするが好よい、これこしらへて」

というので、手拭等とつを染めて、残らず雲助や馬方に配りました。  
 亭「今までとは違つてお隅よんどころは扱よない訳が有つて客を取らなくつ  
 ちやアならん、皆みんなと同じに、枕付で出るから方々へ触れてくれ」  
 というと、此の評判がぱつとして、今までは堅い奉公人で、殊こと  
 に名主の女房にもなつた者が枕付で出る、金さえ出せば自由にな  
 るというので大層客がありまして、近在の名主や大だい尽じんが、せつ  
 せとお隅の処へ遊びに来ますけれども、中々お隅は枕かわを交かしませ  
 ん。お隅の評判が大変になりますと、常陸にいる富五郎が、此  
 の事を聞きました、

富「しめた、金で自由になる枕付きで出れば、望みは十分だ」  
 と天命とはいいいながら、富五郎が浮うかく々々とお隅の処へ遊びに参

るといふ、これから仇打あだうちになりするが、一寸一息。

## 七十一

お隅は霜月の八日から披露ひろめを致しまして、客を取る様になりました。なれどもお隅は貞心ていしんな者でございますから、能いいように切り脱ぬけては客と一つ寝をする様なことは致しません、素もとより器量は好よし、様子は好し、其の上世辞がありますので、大して客がござります。丁度十二月十六日ちらく雪の降る日に山倉富五郎が遣やつて参りましたが、客が多いので何時いつまで待つてもお隅が来ません、其の内に追々と夜よが更けて来ますが、お隅は外の客で



来ることが出来ませぬから、代りの女が時々来ては酌をして参り、  
 其の間には手酌で飲みましたから、余程酒の廻っている処へ、隔へだて  
 の襖ふすまを明けて這入った人の扮装なりはじやがらつぽい縞しまの小袖にて、  
 まア其の頃は御召縮緬おめしちりめんが相場で、頭髮あたまは達磨返しに、一寸した  
 玉の附いた簪かんざしを挿し散斑ぼらふの斑ふのきれた櫛くしを横の方へよけて挿して  
 おり、襟こっには濃こっくり白粉おしろいを付け、顔は薄化粧の処へ、酒の相手  
 でほんのりと桜色になっております、帯がじだらくになりました  
 から白縮緬の湯巻がちらくく見えるという、前ぜんとはすっぱり違つ  
 た拵こしらえで、

隅「富さん」

富「イヤこれはどうも、どうも是は」

隅「私やアね富さんじゃないかと思つて、内々ないく見世で斯うこ／＼いう人じゃアないかというそと然うだというから、早く来度きたいと思ふけれども、長ツ尻ちりのお客でねえ、今やつと脱ぬけて来たの、本當に能く来たね」

富「これはどうも、甚はなはだ何うも御無沙汰を、実は其の不慮の災難で御疑念を蒙まりました、それ故お宅へ参ることも出来ない、こんな詰らぬ事はないと存じて、存じながら御無沙汰を、只今まで重々御恩になりました貴方が、御離縁になつて、此方こちらへ入らつしやつた事を聞いて尋ねて参りました、どうも妙でげすねえ、御様子がずうツと違ちがいましたね」

隅「お前さんも知つてる通りべんくとあゝやつていたつても、

先の見当みあてがないし、そんならばといつて生涯樂に暮せるといった  
 処が、あんな百姓家やで何なんにも見る処も聞く事もなし、只一生樂に  
 暮すというばかりじゃア仕様がなから、江戸へ行こうと思つて、  
 江戸には親類が有つて大小を帶さす身の上だから、些ちつとも早く頼ん  
 で身を固め度たいと思つて離縁を頼むと、不人情者だつて腹を立つ  
 て、狐阿魔だの狸阿魔だのというから、忌いま々しいから強情に無理  
 無体に縁切状を取つて出て来ましたの、江戸へ行くにも、小遣が  
 ないもんだから、こんな真似をして身装みなりも拵こしらえたり、金の少しも  
 持つて行き度いと思つて、遂ついに斯こんな処へ落ちたから笑つておく  
 んなさい」

富「笑う処か誠にどうも、なに必ず私は買ひに来たという訳で

はありませんから、決して御立腹下さるな、そんな失敬の次第ではないが、何うどいう訳で羽生村をお出遊でばしたかと存じて御様子をおおうと思つて参つた処が、数すうこん献傾けて大酪酩おおめいてい」

隅「まア是から二人で楽々と一杯飲もうじやアないか、早く来て久振りで、昔話をしたいと思つても、長ツ尻のお客で滅多に帰らぬからいろく心配して、やつとお客を外して来たの、まア嬉しいこと、大層お前若くなつたことね」

富「恐入ります、あなたの御様子が変わつたには驚きましたねえどうも、前とはすっかり違いましたねえ」

隅「さお酌致しましょう」

富「これはどうも、まア一寸一杯、左様ですか」

隅「私は大きな物でなくっちゃア酔わないから、大きな物でほつと酔つて胸を晴したいの、いやな客の機嫌きげん気き褻まを取つて、いやな気分だからねえ、富さん今夜は世話をやかせますよ」

富「大きな物で、え湯呑で上りますか、御酒は些ちつとも飲あがらなかつたんですが、血に交われれば赤くなるとか、妙でげすなア、お酌を致しましょう、これは妙だ、どうも大きな物でぐうと上れるのは妙でげすな、是は恐入りましたな」

隅「私は酔つて富さんに我儘な事をいうけれども、富さんや聞いておくれな」

富「うゝんお隅さん必ず御疑念はお晴しなすつて、惣次郎さんを私が手引して殺させたというので花車の関取が私の背中をどや

して、飯を吐はかせるというから、私は驚いて、あの腕前では逆とても叶かなわぬから一生懸命逃げたんだが、あのくらい苦しいことはありません、それ故御無沙汰になって、あなたが枕前で客をお取りになるといふ事を聞いて、今日口を掛けたのは相済みませぬが、実はどういう訳かと存じて只御様子を伺いたいというので参つただけで」

隅 「まアそんな事は好いいじゃアないか、今夜私は酔うよ」

富 「お相手をいたしましたしょう」

隅 「お相手も何もいるものか」

と大きな湯呑に一杯受けて息も吐つかずにくつと飲んで、

隅 「さア富さん」

富「私はもう数献すこん：えお酌しやくでげすか、置注おきつぎには驚おどろきましたね  
 …それだけは…妙なものでげすな、貴方はお酒はもとから上りま  
 したか」

隅「なに旦那の側にいる時分には謹こんで飲のまなかつたんだが、  
 此家こゝへ来てから戴かぶく様ようになりました」

富「へえ有難ありがたう、もう…：お隅さんどうか御疑念ごぎねんをね…これだ  
 けはどうか：私は詰つらん災難さいなんで、私わたくしが何なんぼ何なんでも、一角は知らな  
 い奴、逢あつた事こともない奴やつに何なんで此こゝの如ごとく、な、御疑念ごぎねんが掛かるか、  
 私も元は大小たいを帯たいした者、此の儘ままには捨置すてけぬと、余程よつほど争まいま  
 したが、関取せきとが無暗むやみに打ぶつというから、あの力で打たれては堪たら  
 ぬから逃にげると云う訳で、実に手前詰てまへらぬ災難さいなんでげして…：」

隅「好いいじゃ無いか、私に何も心配はありやアしないやね、羽生に居る時分には、悔しい、敵かたきうち打うちをするというから私も連れて然そういったけれども、もう彼あそこ処こを出てしまやア、何なんにも義理はないから私に心配はいらないが、只聞きたいのは富さん忘れもない羽生にいる時、お前が酔つて帰つたことがあつたらう、其の時お前が旦那のいない所で私の手を掴まえて、江戸へ連れて行って女房にして遣らう、うんといえれば私が身の立つようにするが、江戸へ一緒に行つて呉れぬかと云つておくれの事があつたねえ、あれは本当の心から出て云つたのか、私が名主の女房になつたから、お世辞に云つたのか聞きたいねえ」



## 七十二

富「これは恐れ入りました、こりやア何うも御返答に差支さしつかえ  
る……こりやア恐入ったね、富五郎困りましたね………おやノ  
ノまたいっぱいになった、貴方そばから置き注ぎはいけません……  
……余程酔よほどつて居るからもう御免なさい……あれはお隅さん、貴  
方が恩人の内ないほう宝たからになつてゐるから、食いそ客せうろうの身として、酔つ  
たまぎれで、女房になれ……江戸へ連れて行こうといつたのは実  
に濟まない……濟まないが、心こころにないことは云われん様な者で、  
富五郎深く貴方を胸むねに思つてゐるから酔つた紛れまぎれに口に出たので、  
どうも実に御無礼を致いたしました、どうか平ひらに御免を……」

隅「あやまらなくつても宜いじやアないか、本当にお前が心に  
思つてくれるといえば嘘にも嬉しいよ、富さん、私もね、何時ま  
でもこんな姿なりをしていたくない……江戸へ知れては外聞が悪いか  
らねえ……江戸へ行くつたつて親類は絶えて音信いんしんがないし、真ほん  
実まことの兄弟もないから何なんだか心細くつて、それには男でなければ  
力にならぬが、こういう汚けがれた身体になつたから、今更いけない、  
いけないけれどもお前がねえ、私の様な者でも連れて行つて女房  
にすると云つておくれなら、私も親類へ行つて、この人も元はこ  
れ〜のお侍でございましたが、運が悪くつてこういう訳になつ  
たからといつて頼むにも、二人ながら武士の家に生れた者だから、  
親類へも話が仕し好いい、よう富さん、本当にお前、私がこういう処

へ這入ったからいけないかえ……前にいったことは嘘かえ」

富「こりやアなんとも恐れ入ったね……旨いことを仰しやるなア……又一ぱいになった、そう注いじやあいけない……えゝ……本当にそんな事をする氣遣いは無いで……どうか御疑念の処は……私は困るよ……どうも理不尽に私を疑つて、脊骨をどやすというから、驚いて、言訳する間はま無いから逃げたのだが、神かけて富五郎そんな事はないので……」

隅「そんな心配は無いじやアないか、何なんだねえ、お前、私がこんな身の上になつていても、敵とか何なんとか云つて騒ぐと思つてるのかえ、私は表向き披露ひろめをした訳でもなし、敵を討つという程な深い夫婦でもない、それ程何も義理はないと思うから、悪体を吐つ

いて出たのだもの」

富「そりやア義理はありましようが、私はあなたが、あんな愚痴婆ばあの機嫌を、よく取ってお在いでなさると思つていました。あなたがこれを出るのは本当でげす、御尤もでげすねえ」

隅「だからさ、お前がいやなら仕方がないけれども、本当なら、お前の為にどんな苦勞をしても、いやな客を取つても、張合があると思つているのさ、それには、判はん人にんがないといけないから、お前が判人になつて、そうして私が稼いだのをお前に預けるから、私を江戸へ連れて行つておくれな」

富「本当ですか」

隅「あら本当かつて、私が嘘をいうものかね、悪にくらしいよ」

富「あゝ痛い、捻つねつてはいけない、そういう……又充いっばい溢ばいになつてしまった……いけないねえ……だが、お隅さん、本当に御疑念はお晴らしてください、富五郎迷惑至極だてねえ」

隅「どうも、うるさいよ、未まだ何どこ処こまで疑うたぐるのだね、そんなに疑るなら証拠を出して見せようじゃないか、そら、是が羽生村から取つて来た離縁状と、是はお客に貰つた三十両あるのだよ、お前が真実女房に持つてくれる気なら、此のお金と離縁状を預けるがお前も確たしかな証拠を見せておくれよ、富さん」

富「本当ですか、本当なら私だつて、親類もあるから、お前さんと二人で行つて、話しをすればすぐだね、そりやア、小さくも御家人の株ぐらいは買つてくれるだろう、お隅さん本当なら、生

涯嘘はつかないねえ」

隅 「まあ嬉しいじやアないか、富さん本当かい」

富 「そりやア本当」

隅 「有難いねえ、じやア証拠を見せておくれな」

富 「別に証拠はない」

隅 「だから悪らしいよ」

富 「悪らしいってあれば出すけどもないもの、じやア外に仕方がないから斯うしよう、そう話がきまれば、此処に永く奉公させていただきますからね、どこまでも金の才覚をして早く江戸へ行こう、富五郎浪人はしていても、百や二百の金は直に出来るから」

隅 「そう、そんなに入らないが、路銀と土産ぐらい買って行き

たいねえ」

富「こうしよう」

隅「だって急にお前に苦労させては済まないから、此処で私が二年も稼いでから」

富「なに宜い、いゝから、斯うしよう、一角を騙して百両取ろう」

隅「おや一角さんは何処どこにいるの」

富「うん、まあいゝや、お隅さん本当に御疑念の処は」

隅「又そんなことを、本当にお前は悪らしいよ、じゃアお前は一角となれあつて殺したことがあるから、私がどこまでも仇かたきを狙つていと疑るのだろう、そんな疑りがあつて、私を女房にしよ

うというのは余程よっぽど分らない、恐い人だね、もう止しましょう、  
書付かきつけまで見せて、生涯身を任して力になろうと思う人がそう疑  
つてはお金も書付も渡されないから。止しにしましょう」

富「そういう訳ではない、決して疑る訳ではない、決して疑る  
訳では無いがね」

隅「だからさ疑る心が無ければ、一角さんは何処どこにいと云つ  
たつて好いいいじゃないか、どうして騙だまして金を取るのか、それをお  
云いよ」

富「うーん、それは一角がお前に惚れているのだから」

隅「そうかい」

富「前から惚れてる、それだから一角の処へ行つて、お前がこ



う／＼でございますから貴方御新造にしてお遣りなさい、就つては  
ないしよう内証に百両借金がありますから、之を払って遣れば直すぐに此処  
 へ来られる訳だ、出して下さいといえは是非金を出す：いゝえ出  
 るに極こっているのだから、出したら借金を払ってお前と二人で、  
 ねえ、江戸へ行こう、こいつが宜いいじゃないか」

隅「どうも嬉しいことねえ、一角さんは何処どこにいるの」

富「うーん、それ」

隅「おかしいねえ、もう夫婦になつてお前は亭主だよ、添つつて  
 しまつて、今夜一晩でも枕を交せば大事な生涯身を任せる亭主だ  
 もの、前の亭主の敵かたきといつて、刃やいばが向けられますか、私も武士の  
 娘、決して嘘はつきませぬよ」

## 七十三

富「こりやア驚いた、流石さすがは武士の御息女、嬉しいな…又充いっぱ溢いになつてしまつた…こりやア有難い、それじゃア云おうねえ、実は私は、お前にぞつこん惚れていたが、惣次郎があつては仕様がな、邪魔になるといつても、富五郎の手に負いない、所が幸い安田一角がお前に惚れているから、一角をおいやつて弘行寺の裏林で殺させて置いて、顔に傷を拵こぎえて家うちへ駈う込んだが、あの通り花車が感付きやアがつて、打ぶつというから、此方こつちは殺されたまては堪たらぬから、逃げてしまつた、全く一角が殺しは殺したんだ

が、実は私がおいやつて遣らしたのだ」

隅「私もそう思つてたけれどもね、羽生にいる時は義理だから敵といつていたけれども、こう出てしまえば義理も糸瓜へちまもない他人だアね、あんな窮屈な処にいるのはいやだと思つて出たんだが、富さんこうなるのは深い縁だねえ、どうしても夫婦になる深い約束だよ」

富「是は妙なもんだね、不思議なもので、羽生村にいる時から私が真に惚れゝばこそ色々な策をして、惣次郎を討うたせたのも皆みんなお前故だねえ」

隅「一角さんは何処どこにいるの」

富「一昨日おとといの晩三人で来て前の家は策で売らしてしまつたから、  
うち

笠阿弥陀堂かさあみだどうの横手に交遊庵こうゆうあんという庵室あんしつがありましよう、二間ふたま室まがあつて、庭も些ちつとあり、林の中で人に知れないからというので其処そこを借りていて、今夜私に様子を見て来いというので、私が来たのだから、こうくといえ、えゝというので百両出す、なに大丈夫だ、其れで借金を片付けて行つて了しまやア彼奴あいつは何なんともいえない、人を殺した事を知つて居るから何ともいえずやアしないから、烟けふに巻かれてしまわア、追掛おっかけようといつても彼奴江戸へ出られる奴でないから大丈夫」

隅「そう、本当に嬉しいねえ、真底お前の了簡が知れたよ」

富「これ程お前を思つてるのに其れを疑ぐるといふことはない、誠に詰らぬこと……」

隅「此処こゝで寝るといけないから彼方あつちへおいでよ、彼方に床が取つてあるから、さ此のお金と書付を」

富「やアそんなもの」

隅「落おっことすといけないからお出し」

と、金と書付を引ひたくつて、無暗むやみに手を引いて、細廊下の処とを連れて行くと、六畳ばかりの小間こまがありまして、其処そこに床がちやんと敷いてある。

隅「さ、お寝と云つたらお寝、あら俯伏つっぷしちやいけないから仰向けにお成り」

と仰向に寝かし、枕をさして、

隅「さ、寒いから夜具これを」

富「あゝ有難い、こつちイ這入つて寝なよ」

隅「今寝るが、寒いから搔かいまき卷を」

富「好いいいよ、雪は何どうしたえ」

隅「なに雪は降っているよ、夫婦の固めに雪が降るのは縁が深いとかいう事があるねえ」

富「うーん、そりやア深雪みゆきというのだ」

隅「富さん、私という事があるよ」

富「どう」

隅「あら顔を見られると恥かしいから被かぶつておいでよ」

とお隅は搔卷を富五郎の目の上まで被せて其の上へ乗りました。  
隅「私は馬乗りに乗るわ」

富「何をするのだ、息が出なくって苦しい、何をする、切ないよ」

隅「本当に富さん不思議な縁だね」

といいながら隠してあつたあいくちヒ首を抜いて、

隅「惣次郎を殺したとは感付いていたけども、お前が手引で：一角の隠れ家まで：こういう事になるといふのは神仏のお引合せだね」

富「実に神の結ぶ縁だねえ」

隅「こ斯ういう事があるうと思つて、私は此の上ない辛い思いをして、恩あるしゆうと姑や義理ある弟にあいそづか愛想尽しを云つて出たのも全くお前を引寄せる為、亭主の敵罰かたきはちあた当りの富五郎覚悟しろ、亭主の

敵

と富五郎の咽喉のどへ突込つっこむ。

富「うーん」

というのを突込んだなり呑口を明ける様にぐツぐツと抉えぐると、天命とはいいながら富五郎はばたく苦しみまして、其の儘うーんと呼吸いきは絶えました様子。お隅はほつと息を吐つき、ヒ首のりの血を拭ぬぐつて鞆たもとに納め、

隅「南無阿弥陀仏く」

と念仏を唱え、惣次郎の戒名を唱えて回向えこうを致します。お隅は沈着おちついた女で、直すぐに硯すざりばこ箱ばこを取出し、事細かに二通の書置したくを認

めて、一通は花車へ、一通は羽生村の惣吉親子の者へ、実は旦那



の仇あだを討ち度たい許ばかりで、心にもない愛想尽しを申して家うちを出て、  
 麴屋へ参つて恥かしい身の上になりましたが、幸いに富五郎が来  
 て、これくゝの訳と残らず自分の口から申して、一角の隠かくれ家がも  
 これくゝと知れましたから、女ながらも富五郎は首尾能く打留うちとめ  
 たから、今夜直ぐに一角の隠家へ踏込んで恨みを晴し、本望ほんもうを  
 遂とげる積り、なれども女の細腕、若もし返り討になる様な事があつ  
 たならば、惣吉が成人の上、関取に助太刀を頼んで旦那と私の恨うらみ  
 を晴らして下さい、敵かたきは一角に相違ない事は富五郎の白状きまで定り  
 ましたという、関取と母親の方へ二通の書置を残して傍そばに掛つて  
 いる湯沸しの湯を呑み、懐へ匕首を隠して庭の方の雨戸を明ける  
 と、雪は小降になつた様でもふツくくと吹っかける中を跣足はだしで駈

出して、交遊庵という一角の隠家へ踏込みますというお隅あだう仇ち打のお話を次回に。

## 七十四

申し続きまする累ヶ淵のお話で、お隅が交遊庵という庵室に隠れている一角の処へ斬り込みますという、女ながらもお隅は一生懸命でござりまして、雪の降る中を傘もなしに手拭かぶを冠かぶりまして跣足はだしで駈けて参つて、笠阿弥陀堂から右に切れると左右は雑木山でござりませぬ、此の山の間を段々と爪先あが上りに登つて参りますると、裏手は杉檜などの樹木がこうくと生い茂つて居ります

処へ、門の入口の処に交遊庵の三字を題しました額が掛っております。門の締りは嚴重になつておりまするなれども、家へは近うござります、何処か外から這入口はなかるうかと横手に廻つて見ても外に入口はない様子、暫く門の処に立つて内の様子を窺つてみると、丁度一角が寝酒を始めて、貞藏という内弟子を相手にぐびぐびと遣りましたから、門弟も大分酩酊致しております様子。

隅「御免なさいまし、御免なさいまし、一寸此所を明けて下さいまし、あの、先生は此方にいらつしやいますか」

という戸締りは嚴重にしてあり、近いといつても門から家までは余程隔つて居りますが、雪の夜で肅然としているから、遙に

聞える女の声。

安「貞藏く、誰か門を叩いている様子じゃ」

貞「いや大分雪が降って参りました、私先程台所を明けたらぶつと吹込みました、どうして中々余程の雪になりましたから、此の夜やちゆうごと中殊せつちゆうに雪たれ中に誰も参る筈はございませぬ」

安「でも、それ門を叩く様子じゃ」

貞「いゝえ大丈夫」

安「いや左様でない：それぞれ見ろ：あの通り：それ叩くだろう」

貞「へえ成程え、見て参りましょう、え、少々御免遊ばして、大層酩酊致しました、ひよろく致して歩けませぬ、え、少々：

なに誰だだれい、誰か門を叩くかい…誰だだれい」

隅「はい、あの安田一角先生は此方こちらにいらつしやいますか」

貞「安田と、安田先生ということを知つて来たのは誰だだれい」

隅「はい私は麴屋の隅でございますが、一寸先生にお目に掛り度たいと存じまして、わざく／＼雪の降る中を参りましたが、一寸此こ処ゝをお明け遊ばして下さいませんか」

貞「あ、少々控えていな」

とよろよろしながら一角の前へ来て、

貞「へえ先生」

安「来たのは誰だ」

貞「麴屋のお隅が、先生にお目に掛けてお話し申し度い事があ

つて、雪の降る中を態々わざく参つたといひます」

安「隅が来たか、はて、うっかり明けるな、え、彼は此の一角かねを予て敵と附狙かたきつけねらうことは風説にも聞いていたが、全く左様と見える、うっかり明けて、角力取すもうとりなどを連れてずか／＼這入られては困るから能く気を附ける、え、全く一人か、一人なら入れたつても好いが」

貞「これ、お隅、何かえ、お前誰か同伴つれがありますかい、大勢連れてお出でかい、角力取は来ましたのかい」

隅「いゝえ私一人でございます、一寸此処ちよいとこを明けて下さいませんか、お前さん貞藏さんじゃありませんか」

貞「なに貞藏、己の名を知ってるな、うん成程知ってる訳だ、

私わしが水街道へ先生のお供にいった事があるから、今明けるよ、妙なもんだなア、おう好よい塩梅にこれ雪が上つて来た、大層積つたなア、おゝおゝ、ふツ、足の甲までずかゝ踏み込む様だ、待ちな今明けるぞ、待ちな、門かぬきがかって締りが嚴重にしてあるから、や、そら、おや一人で傘なしかい」

隅「はい少しは降っておりましたが、気が急せきましたから、跣は足だしで参りました」

貞「おゝゝ私わしはやつと此処こゝまで雪を涉わたつて来たのだが、能く夜中やちゆうに渡しの船が出たねえ」

隅「はい、あの、船頭は馴染でございますから、頼んで渡して貰やっつて、漸やっとのことで参りました」

貞「それはえらい、さア此方こつちへ、先生たった一人で渡を渡つて  
 跣足で参つたと云うので」

安「それは思い掛けない、なに傘なしで、それはそれは、雪中  
 といい、どうも夜中といい、一人でえらいのう、誠にどうも、さ  
 ア此方こつちへ」

隅「先生誠に暫くお目に掛りませんで」

安「いや誠にこれは、うーん己は無沙汰をしております、暫く  
 常陸へ参つた処あちらが、彼方ちつで些と門弟も出来たから、近郷の名主庄  
 屋などへ出稽古を致して、久しく彼方にいて、今度又此方こつちへ来た  
 処せんが、先に住すまつた家は人に譲つたから、まア家の出来るまで、当  
 期此の庵室におる積りで、だが手前能く尋ねて来たねえ」



隅「誠にどうも御無沙汰を致しまして」

安「此の夜中雪の降る中を踏分けて何うして来た」

## 七十五

隅「あの今日富五郎が来ましてね、何か先生に頼まれた事があ  
ると云つて、私の処へ客になつて来まして、お酒に酔つて何だか  
種々いろいろな事を云いますの、けれども其の様子がさっぱり分りませ  
んから、其の事に付いて先生にお目に掛らなければ様子が分りま  
せんから」

安「それはどうも、富五郎が行つたかい、貞藏、富五郎が往つ

たつて」

貞「だから私が先生に申上げて置きました、彼奴あいつは誠にあゝいう処ばかり遊びに参るのが好きでげす、全体道楽者でげすからなア、彼奴余よっぼど程ずき婦人好ずきでげすよ」

安「で、富五郎が往つて何うどいう話し振の、まア一杯飲め」

隅「有難うございます、まアお酌を」

安「イヤ一杯飲め」

隅「左様でございますか、貞藏さん、お酌を、恐れ入ります」

貞「いや久し振りでお酌をする、私わしの名を心得ているから妙でげすな、久しい前に一度先生のお供を致しましたが、其の時逢つた一度で私の名まで覚えていたというのは、商売柄は又別なもの

でげす、お隅さん相変らず美しゆうございますな」

安「これお隅、手前名主の手を切つて麴屋の稼ぎ女になつたとか、枕附で出るとかいう噂があつたが嘘だらうな」

隅「いゝえ嘘ではございません、誠にお恥かしゆうございますけれどもべんくとあゝ遣つてもいられませんから、種々いろく考えました処が、江戸には親類もありますから、何卒どうぞ江戸へ参り度いと思ひまして、故郷こきようが懐かしいまゝ無理に離縁を取つて出ましたが、手振りあみがさ編笠しゆうと、姑が腹を立てて追出すくらいでございますから、何一つもくれませぬ、それ故少しは身形みなりも拵こぎえたり、江戸へ行くには土産でも持つて行かなければなりません、それには普通の奉公では埒らちが明きませんから、いやゝながら先生お恥かし

い事になりました」

安「オ、左様か、じゃア自ら稼みずかいで苦しみ、金を貯めてなにかい身形を拵えて江戸へ行いこうと云う訳か、どうも能く離縁が出たのう」

隅「それが向むこで出さないので此方こつちから強情に取りましたので、先生誠に久し振でございませぬえ」

安「ウンそれは妙だなア」

貞「これは先生妙でげすな、貴方の方で呼び遊ばさぬのにお隅さんが此の雪の降る中を尋ねて来るなんて、自然にどうも貴方の：実に感服でげすなア」

安「なにそう云う訳でもなからう、何か是には訳があつて来た

んだらう、なにかい富五郎がどういふ事を云つたい」

隅「はい、富さんの云うには、べん／＼とこんなア卑いやしい奉公をするよりも、一角先生の御新造にならないかといひますから、馬鹿なことをお云いでない、一旦名主の家うちへ縁付かたづいたのだから、披露ひろめはしないで、今度行ゆけば再縁をする訳じやアないか、それだから先生は決して御新造になさる訳はない、妾おかにすると仰しやればまだしもの事だけれども、御新造にというのは訝おかしいじやアないかという、いゝえ全くお前さえよければ先生は御新造になさる思召おぼしめしがあるのだから、お前がたつて：頼たのみたいと思ふなら、骨を折つて宜よいように執成とりなすから了簡を決めろといひますから、それは誠に思掛おもいがけない有難いこと、私の様な者を先生が仮令たとえ妾

にでもなすつて下さるなら、私は本當に浮ぶ訳で、べんく〜とこんな処にいたくないから、屹度執成きつとりなしておくれかというところ、お酒が始まつて、すると彼の人の癖あで直すぐに酔つてしまつて、まア馬鹿らしいじゃアありませんか、先生に取持つ代りにおれの云う事を聞けといつて口説き始めたんでございますよ」

安「こりア怪けしからん奴だ、どうだい貞藏」

貞「でげすから彼は先生いけませぬ、先生は彼奴あいつを御鼻屣あになさいます、全体よくない奴で、そういう了簡違いな奴でげすかなア、一体先生が余り鼻屣あになさり過ぎると思つていました、どうも御新造に取持つとうという者、いわば仲人なこうどが一旦自分のいう事をきかして、それから縁付かたづけると、そんな事がありましたよ

か、だから彼れはもう、お置きなさらん方が宜い、お為になりませぬからなア、彼奴が来てから私は彼奴に使われるような訳で、先生もう彼奴はお止し遊ばした方がようございますよ」

安「お隅、それからどうしたい」

隅「それで、私が馬鹿な事をおいいでないと云うと、そんな詰らんことを云わんでも宜いじやアないかといえますから、宜いじやアないかって、お前さんのいう事を聞いた上で先生の処へ妾に行けるか行けないか考えて御覧、富さん酔うにも程がある、冗談は大概におしよと云つて居りましたら、終には甚く酔つて来まして、短かいのを抜いて、いう事を聞かなければ是だと嚇し始めましたから、私も勃然として、大概におしなさい、お前は腕ずくで

強<sup>ごう</sup>淫<sup>いん</sup>をする積りか、馬鹿な事をする怖い人だ、いやだよと云つて行<sup>ゆ</sup>こうとすると、そうはやらぬと私の裾<sup>すそ</sup>を押えて離さない処へ、お兼<sup>かね</sup>さんやお力<sup>りき</sup>さんが出て参りまして取押える拍子に、お兼さんが指に怪我をするやら、金どんも親指に怪我をしまして、漸<sup>ようや</sup>くの事で宥<sup>なだ</sup>めて刃物を抉<sup>もぎと</sup>取つたんでございますが、全く先生の処から来たのなら、明日<sup>あす</sup>の朝先生が入らっしやるであろう、其の上当人も酒が醒<sup>さ</sup>めるだろうから、まア縛<sup>ばく</sup>つて置くが好<sup>い</sup>いといひるので縛<sup>ばく</sup>つて置きました」

## 七十六



安「こりやアどうも怪しからん、白刃はくじんを振ふるつておどすなぞとは、えゝ貞藏」

貞「どうも怪しからん、彼奴あいつはいけません、彼奴一体そういう質たちの奴でげす、何どうも怪しからん、抜刀ぬきみで口説くわくなんて、実に詰らん訳でげすなア、だから先生もう彼奴はお止しなすつて家うちに置かぬ方が宜しい、何どうもそういう……」

安「お隅、貴様はなにか主人に話をして来たか」

隅「はい何なんともいいませんけれども、お力さんに頼んで置きまして、何しろ先生の御様子を聞かなければ分らない、誠に恥かしいことでございますけれども、先生の処へ行つて御様子を聞いて、そうして先生に宥なだめて戴たき度いと思つて出て参りました」

安「左様か、雪の夜ではあるし、是から行くといつても大変だがあんな馬鹿にからかわないが宜いよ」

隅「なにもう明日あしたでも宜ようございますけれども、私は是から一人ひとで帰るのは辛くるくつて、参る時は一生懸命で来ましたが、帰るとなると怖おそくつていけません、どうかお邪魔様でも今夜一晚泊とまりめて下さる訳にはいきますまいか」

安「うん、それは宜よい、泊とまりつて往いくなら、なア貞藏」

貞「是は先生御恐悦おそえつでげすなア、お隅さんの方から泊とまりつて宜いいかと云うのは、こりやア自然のお授かりでげすな」

安「なにお授おづかりな事があるものか、のうお隅、だが貴様には何どうも分わらぬことが一つある、というのは惣次郎の女房になつて

何ういう間違いかは知らんけれども、安田一角が惣次郎を殺害致したといふので、私を夫の敵と狙つて、花車重吉を頼んで何処までも討たんければならぬと云つて、一頻り私を狙つて居るといふ事を慥に人を以て聞いたそう云う手前が心で居たものが、又た此処に来て、一角の女房になろうとは些と受取れぬじやないか、のう貞藏」

隅「いゝえ、ねえ貞藏さん考えて御覽、羽生村に居るうちは義理だから敵を討つとか何とか云いましたけれども、なにもねえ元々私が麴屋に奉公をして居て、あの時分枕付ではありませんが、彼の名主に受出されて行つて、妾同様表向の披露をした訳でもなし、ほんの半年か一年亭主にしただけでございますから、母親

の前や村の人や角力取の前で義理を立つて、敵を討つといいは云  
いましたが、よくよく考えてみた処が、貴方が屹度きつと殺したとい  
ことが分りもしない、こんなあて的もないのに敵を討つといつたつて  
も仕方がない訳だから、寧いっそ敵かたきうち討やという事は止めてしまおう、  
それにしては何時いつまでもべんくとしてもらえませんから、思  
い切つて暇を貰つて出たのでございますから、もう今になれば些ちつ  
ともそんな心は有りやアしません、ねえ、貞藏さん」

貞「成程是こりやア本当でげしよう、先生は人を殺す様な方でな  
いし、只お前さんへ執心が有つた処から角力取と喧嘩、ありやア  
一体角力の方がいけないよ、変に力が有つてねえ、あれだけは先  
生ひど甚やく野暮ぼになりますな」

安「詰らん疑念を受けて飛んだ災難と思つたが、此方に居ては面倒だから暫く常陸へ行つて居たんだが、手前全くか」

隅「本当でございますから疑りを晴して一献戴きましよう」

安「手前飲めるか」

隅「はい、何だか寒くつていけません、跣足で雪の中を駈けて来たもんですから、足が氷の様になつていますもの」

安「うーん中々飲める様になつたのう」

隅「勤つとめをして居て仕方なしに相手をするので上りましたよ」

安「ふん妙だのう貞藏」

貞「是はくお隅さん貴方御酒を飲あがりますか、お酌を致しまし

よう」

隅「はい有難うございます」

と大杯たいはいに受けたのをグイと飲んで、

隅「貴方何なんだか真面目でいけないから、私がお酌を致しましてよ  
う」

と横目でじつと一角の顔を見ながら酌をする。一角は素もとより惚  
れている女が酌をしてくれるから快く大杯で二三杯傾けると、下  
地の有った処でござりますからグツスリ酔えいが廻まわつて来ます、貞藏  
も大変酩酊致しまして、

貞「私わたくしもう大層戴きました、お隅さん私わたしは御免ごうむを蒙まかりまして、

長く斯こういう処にいるべきものでありませんから、左様なら先生  
御機嫌よう」

隅「まあお待ちなさいよ、先生がお酔いなすったから、おやゝ次の方に床が取つてありますねえ」

貞「いゝえ私床わたくしを取つて置いて、先生がぐつと召上つてしまふと直すぐにお寝やすみという都合にして置きました、えゝ誠に有難う」

隅「じゃア先生一寸貞藏さんを寝かして来ますからお床の中に居てねえ、寝てしまつてはいけませんよ」

安「なに貞藏などは棄てゝ置けよ」

隅「いゝえ、そうで有りません、ひよつとして貴方が私の様な者でも娶よんで下さいますと、禍わざわいは下からしもといつて、あゝいう人に胡麻を摺たまられると堪たまりませんからねえ」

安「なに心配せんでも宜よい、じゃア己こ此こ処いに、なに寝やあせん

よ、おゝ酔つた、貞藏隅が送つて遣るとよ」

貞「いや是は恐れ入ります、じやア先生御機嫌よう、お隅さんようございます」

隅「いゝえ、よくないよ、そらくゝ危ない、何処どこへ、彼方あっちがお台所だいどころかえ」

と踏よろける貞藏の手を取つて台所だいどころの折廻おりまわつた処の杉戸を明けると、三畳の部屋がござります。

隅「さ、貞藏さん此処こゝかえ、おやくゝお床が展のべてあるの」

貞「いゝえ私の床は参つてから敷しきつぱなしで、いつも上げたこととはないから、ずっと遣るところ潜り込むので、へえ有難う」

隅「恐ろしい堅そうな夜具ですなえ」



貞「えゝなに薄つぺらでげすが、此の上へ布団を掛けます、寒  
けりやア富五郎のが有りますから其れを掛けてもいゝので、へえ  
有難う」

隅「さア仰向におなり、よく掛けて上げるから」

貞「是は恐れ入ります、へえ恐れ入ります、御新造に掛けて戴  
いて勿体至極もない」

隅「さ、掛けますよ、寒いから額まですつかり掛けますよ、そ  
う見たり何かすると間が悪いわね、さ、襟の処とこを」

貞「あゝ有難う」

隅「どうも重たいねえ」

貞「へえ有難うあつた暖かでげす」

隅「何だか寒そうだこと、何か重い物を裾の方に押付けると暖かいから」

というので台所を捜すと醤油樽がある、丁度昨日取ったばかりの重いやつを提げて来て裾の方に載せ、沢庵石と石の七輪を掻巻の袖に載せると、

貞「ア、有難う、大層暖かで、些と重たいくらいでげす」

といったが是は成程重たい訳、石の七輪や沢庵石や醤油樽が載っておりますから、当人は押付けられる様な心持。

貞「へえ有難う、暖かでげす」

といったぎりぐうくと好い心持に寝付きました。

## 七十七

お隅はそつと奥の様子を見ると、一角が蹠よろけながら、四畳半の床の上に横になつた様子でございますから、そつと中仕切なかじきりの襖ふすまを閉たつて、台所の杉戸を締め、男部屋の杉戸を静しずかに閉つて懐中から出して抜いたのは富五郎を殺せつがい害して血に染まつた儘なりのヒ首あいくち、此の貞藏があつては敵討の妨げをする一人だから、先まず貞藏これから片付けようというので、仰向に寝て居る貞藏の口の処へどんと腰を掛けながら、力任せに咽喉のどを突きましたから、

貞「ワーツ」

といったが搔卷と布団が掛つて居りますから、苦くるしむ声が口籠くちごも

つて外へ漏れませぬ。一 抉り抉ると足をばた／＼とやった  
きり貞藏は呼吸が絶えました。お隅はほつと息を吐いて搔卷の袖  
でヒ首の血を拭つて鞆に納め、そつと杉戸を明けて台所へ来て、  
柄杓で水をぐつと呑み、はツはツという息づかい、もう是れで  
二人の人を殺しましたなれども、夫の仇を討とうという一心でござ  
りますから、顔色の変わったのを見せまいと、一角の寢床へそつ  
と来て、顔を横に致しまして、

隅 「先生／＼もうお寝みなすつたか」

安 「うーん貞藏は寝たか」

隅 「はい能く寝ました、大層酔いましてねえ」

安 「酔つても宜いから、あんな奴に構うな、寝ろよ」

隅「寝ろつて夜具がありません、私は食いそろう客でございますから此処こゝに坐つています」

安「そんな詰らぬ遠慮にはおよばぬ、全く疑念が晴れて、己の女房になる気なら真実可愛いと思うから、手前に楽をさして真実つく尽すぞ」

隅「誠に有難いこと、勿体ないけれども、そんなら此の搔卷の袖の方から少し許ばかり這入りました」

安「いや少し許りでなくつて、たとと這入れ」

隅「それじゃア御免なさいまし」

と夜着よぎの袖をはねて、懐中から出したヒ首を布団の下に挿はさんで、足で踏んで鞆を払いながら、

隅「じゃア御免遊ばせ、横になりますから」

安「さア這入れ」

と一角が夜着の袖を自ら揚げる処を、

隅「亭主の敵」

と死物狂いに突掛るといふ。お話二つに別れまして麴屋では更

に斯様な事は存じません。暁方になつてお隅がない処から家

ちじゆう

中 捜しても居ない、六畳の小間が血だらけになつてゐるから

搔卷を撥ると、富五郎が非業な死に様、傍の処に書置が二通あつ

て、これにお隅の名が書いてあるから、亭主は驚きまして、直に

是を開いて読んで見ると、富五郎の白状に依つて夫の敵は一角と

定まり、女ながらも富五郎は容易く仕止めたから、直に一角の隠

れ家交遊庵へ踏ふんご込んで、首尾よく往けば立歸つて参りますが、女  
 の細腕、若もし返り討になりました時は、羽生村へ話をして此の書  
 置を遣り、又関取へもお便りなすつて、惣吉成人の後のち関取を頼ん  
 で旦那と私の敵を討たして下さい、証拠は富五郎の白状に依つて  
 手引をした者は富五郎、斬つた者は一角と定まりました、夫それゆえ故  
 に今晚交遊庵に忍び入ります、永ながく々お世話様になりました、有  
 難い。という重ね／＼の礼まで書残してあるから、それツとい  
 うので、麴屋の亭主は大勢の人を頼んで恐こわ々ながら交遊庵に  
 参つたのは丁度夜のよ暁あけ方がた、参つて見ると戸が半ば明いて居りま  
 す、何事か分りません、小座敷には酒肴さけかなが散ちらかつて居り、四畳半  
 の部屋に来て見ると情ない哉かなお隅は返り討に逢つて非業な死ように様。

主「あゝ気の毒なこと、可哀そうに、でも女一人で往くのは実に不覺であつた」

もう今更どうも仕方が無いが一角はというと、一角は此処を遁れて行方知れず二畳の部屋を明けて見ると沢庵石だの、醤油樽だの七輪の載せてある夜具の下に死んで居る者が一人ござりますから、是から直に麴屋から慥に証拠があつて敵討をしようと思つて返討に成つたという事を訴えになり、直にお隅の書置を羽生村へ持たせて遣りました時には、母も惣吉も多助も

「ア、左様とは知らずに、犬畜生の様な恩知らずの女と悪んだのは悪かつた、あゝいう愛想尽しをいったのも、全く敵が討ちたいばかりでお隅が家を出たのであつたか、憫然なことをした



が、お隅が心配して命を棄てたばかりに敵は一角と定まり先ず富五郎は討止めたが、一角の為に返り討になつて死んだといえは悪いは一角、早く討ち度い」

と思ひますが、何しろ年を取つた母と子供の惣吉許りでございますから、関取を頼んでと、もう名主役も勤まりませんから、作右衛門という人に名主役を預けて置き、花車重吉が上総の東金の角力に往つたということを聞きましたから、直に其所に行こうというので旅立の支度を致し、永く羽生村の名主を致して居りましたから金は随分ござります、これを胴巻に入れたり、襦袢の襟に縫附けたり、種々に致して旅の用意を致します、其の内に荷拵えが出来る、これを作右衛門の蔵へ運んで預ける

と云う訳で、只今まで名主を勤めて盛んであつたのが、ぱったり火の消えた様でござります。

## 七十八

母「多助や」

多「へエ」

母「作右衛門が処<sup>とけ</sup>え行つて来たかい」

多「へエ行つて参<sup>めえ</sup>りました、蔵の方にや預かる者があるから心配<sup>んぺい</sup>しなえが好<sup>え</sup>え、何時<sup>いつ</sup>でも帰<sup>けえ</sup>つたら直ぐに出すばいて、蔵の下は湿<sup>しけ</sup>るから湿なえ高<sup>たけ</sup>え処<sup>とこ</sup>に上げて置くばいといってね、作右衛門

どんも 旧きゆう来うれえの 馴染ではア何どうか止め度たいと思うが、敵を討ち  
 に行くてえのだから止められねえツて名残なごりイ惜おしがつてるでがんす、  
 村の者もねえ皆御恩みんなになつたゞから 渡わた口しぐちまで送り度てえといつ  
 てますが、あなたそういうから年い取つた者ア来ないで好ええとい  
 って置きました、私わしだけは戸とがしら頭まで送り度てえと思つて支度ウ  
 しました」

母「汝われも送らなえで好えいから若わけえ者もんを止めて呉えんろよ、汝われが送  
 ると若え者も義理だから戸頭まで送りばいと云つて来るだ、そう  
 すりやア送られると送られる程名残なごりい惜おしいから、汝も送らなえで  
 も好えいよ」

多「だけんどもはア村の者もんは兎も角も私わしはこれ十四歳の時から

御厄介ごやつけえになつて居りまして、お前様めえさんのお蔭でこれ種々いろく覚えた

り、此の頃じやアハア手紙の一本位ぐれえ書ける様になつたの了前めえの旦

那の御厄介ごやつけえでがんですから、お家うちがこうなつて遠い処とけえ行くてえ

事こつたら私も附わしいて行かないばなんねえが、婆様ばあさま塩梅あんべいが悪うござえ

まして、見棄てちやアなんねえというから、あなたのお心へ任し

て送りはしねえが、切せめて戸頭まで送りてえと思つて居ります、

塚前つかさきの彌右衛門やえもんどんは死んだかどうか知んねえが、通り道から

少し這入へいるばかりだから、ちよつくり塚前へも寄つたが宜えい」

母「それもどうするかも知んなえが、汝われは送らなえが好えいよ」

多「でも戸頭まで送るばいと思つて居ります」

母「送らんで宜えいというに何故そうだかなア、汝われア死んだ爺とつき

様の時分から随分世話も焼かしたが家の用も能く働いたから、  
 何ぞ呉れ度えと思ふけれども何も無えだ、是ア惣次郎が居る時分  
 に祝儀不祝儀に着了紋もんつき附だ、汝も是れから己おら家が無くなれば  
 一人前の百姓に成るだから、祝儀不祝儀にやアこういう物も入る  
 から、此の紋附一つくれまいと云う訳だよ、それから金も沢山呉  
 れ度えが、茲こゝに金が七両あるだ、是ア少し訳があつて己おらが手許に  
 あるだから是を汝がにくればい、此のつむぎ細じま縞あんまア余り良くなえが  
 丹精して捻よりをかけて織らした細縞で、ちよくく阿弥陀様へお参めえ  
 りに往つたり寺てら参らめえりに着て往つた着物だから、是を汝がに呉れ  
 るから仕立直して時々出して着るが好え、三日でも旅という譬たとえ  
 があるが、子供を連れて年寄かたきぶちが敵討かたきぶちに行くだから、一角の行方が

知んなえは何時いつ帰けえつて来るか知んなえ、長ながえ旅で死しななえともい  
われなえ、是ア己が形見だから、己が無なえ後のちも時々これを着て己  
がに逢う心持で永く着てくろ、よ」

多「はい、私わし戸頭まで送るばいと思つたに：どうも是これいりま  
せん：形見……形見なんて心こころ細ほせえこといわずにの、あんたも

惣吉さんも達者で帰けえつて、もう一度名主役を惣吉さんが勤めなえ  
ば私の顔が立ちませんから、どうか達者で帰けえつておくんなさえよ、  
惣吉さん今迄とア違うから、母かゝ様さまに世話ア焼やかせねえ様に、母かゝ様さま  
ア大事でえにしなえばなんねえよ、惣吉さん、好いいかえ、今迄の様な  
だだいつちやアなりませんよ、いゝかえ、どうか私は戸頭まで」

母「送らんで好ええというに汝われが送るてえみん皆ね若もえ者も送りたが

るから、誰か来たじやなえか」

作「へエ御免」

多「やア作右衛門どんが」

母「さア此方こつちへお這入りなさえ」

作「誠にどうも、魂消たまげて、どういふ訳で急に立つことになつた

か、村の者もどうか止め度てえというから、馬鹿ばかいうな、止めら

れるもんか、今度ア物見遊山かたきぶちでなえ、敵討かたきぶちに行くだというと、成

程それじゃア止められねえが、まア名残なごりい惜おしいつてね、若わえ者もんば

皆恩おんになつてゐるだから心しん配べぶつております、留守中留守中は役にア立

たないがお帰りけえりまでたしかア慥たしかに荷物みんなは皆蔵みなへ入れて置おきましたが、何ど

卒うかまア早けえく帰けえつてお出ねげでなてさる様ねげに願てえ度てえもんで」

母「はい、お前方も旧い馴染でがんしたけんども、今度が別れになります、はい有難うござえます、多助や誰か若え者が大勢来たよ」

多「やア兼か、さア此方へ這入れ、お、太七郎此方へ」

太「はい有難う、誠にまアどうも明日立つだつて、魂消て来たでがんす、どうもこれ名残い惜くつて渡口まで送るといふ者が沢山ござえます」

母「ありやまア、送らねえでも好えよ、用がえれえに」

太「なに用はなえだから皆送り度えと思えまして、名残い惜いが寒い時分だから大事にしてねえ」

母「はい有難う、又祝いの餅い呉れたつて気の毒なのう、どう



か婆様ばあさまア大事だいじにして」

太「へエ婆ばアもどうかお目に掛り度てえといつております」

母「おゝ誰たれだい、さア此方こつちへ這入りな」

甲「へエ、誠にはア、魂消まして、どうかまア止め度てえといつたら止めてはなんねえって叱られた、随分道中を大事だいじに」

九「へエ御免」

母「誰たれだい」

九「九八郎で、誠まことにどうもさっぱり心得こころえませんで、急にお立たたと云うこつて、お名残なごりい惜おしゆうござえます」

母「おやく／＼上かみの婆様ばあさま、あんた出で来きなえで好ええによ」

婆「はい御免ごめんなさえ、誠まことにまアどうも只お名残なごりい惜おしいから、ど

うぞ碌に見えない眼だが、ちよつくりお顔を見てえと思つてお暇いとまとまごえ

乞めえに参りました、明日あした立つだツて、なんだかあつけなえこつ

たつて、私の嫁わしなんざア泣ねえてばいいるだ、随分でえじ大事になえ」

母「はい有難うござえます、お前めえも随分でいじ大事にして、毎いっも丈夫

で能くねえ」

乙「へエ誠にどうもお力落しでがんす」

丙「おい／＼何なんだつてお力落しなんていうんだ」

乙「でも飛んだ事だと云うじゃアなえか」

丙「馬鹿かたきぶちいえ、敵討かたきぶちにお出でなさるのに力落しという奴がある

か」

乙「へエ誠にそれはアお目出度めでてえこつて」

丙「これ〜お目出度えでなえ」

乙「なんでも好いじやアなえか」

という騒ぎで、村中餅を搗きましたり、蕎麦を打ったり致して一同出立を祝するという、惣吉仇討あだうちに出立の処は一寸一息。

## 七十九

さて時は寛政十一年十二月十四日の朝早く起きまして、旅仕度を致しますなれども、三代も続きました名主役、仮令小村たとえこむらでも村方を離れて知らぬ他国へ参りますものは快くないもので、殊ことには年を取りました惣右衛門の未亡人びぼうじんが、十歳になる惣吉という子

供の手を曳いて 敵かたきうち討うの旅立でありますから、村方一同も止める事も出来ず、名残を惜んでおります、皆小前の者がぞろ／＼と大勢川端まで送つて参ります。

母「さア作右衛門さんこれで別れましょうよ、何処どこまで送つても同じ事ことだからこれで」

作「だけんども船へ乗るまで送り申し度ていと皆こういつている」  
 母「だけんども却けえつて船に私わし乗つかつて、皆みんなが土手の処ところにいかい事皆が立っている、私快くねえ、名残惜くつて皆が昨宵ゆうべから止められるのでね、誠に立度たちたくござえませんよ、何卒どうぞお前まへが差さしずして帰しておくんなさいましよ」

作「はい、それじゃア皆みんなな是これにてお別れとしまししょうよ、え、

送れば送られる程御新造は心持い悪いてえからよう」

村方の者「左様ならまア随分お大事に」

村方の者「左様ならハアお大事でえじに」

村方の者「左様ならお大事でえじに、早くお帰りなさいましょ」

作「何卒どうぞ早くお帰りけえをお待ち申しますよ」

母「さアよ多助どうしたもんだ、汝われこゝ其所ゝに立っているから皆立みんな

つていべえじやアねえか、汝さから先けえき帰ろというに」

多「おれだけは戸頭まで送る」

母「送らねえでも宜ええてえに」

多「送らねえでも宜ええたつて、村もんの者と己とは違う、己はあん

た十四の時から側どこにいるので、何所もまで送つても村ものの者は兎や角

云う氣遣ねえから送り申しますよ」

母「あゝ、いう馬鹿野郎だもの、汝われが送ると云えば皆みんなが送ると云うから汝けえ帰れてえに、昨宵ゆうべいったこと分らなえか」

多「へエ、じゃア御機嫌よく行つておいでなせえ、惣吉様道中つかさまでお母様に世話やかしてはいけませんよ、今までは草臥くたびれゝば多助おぶが負つて上げたが、もう負つて上げる者もんはねえよ、エ、氣の毒でもあんた歩いてまいらなえばならんだ、永旅だから我儘でえじしてお母様に心しんぺえ配かけてはなりませんよ、大事でえじに行つておいでなさいましよ」

惣「うーん、大丈夫だよ、多助も丈夫で」

多「こんな別れの辛い事ことア今迄ねえね」

母「別れ工辛つれえたツておつ死ちぬじやアなし、関取がに逢つて敵  
 い討ぶつて目出度けえく帰つて来たら宜ええじやアねえか」

多「それたのしまア楽たのしみにするだが、あんた昨宵ゆうべも人間は老ろうし少しょう不ふ  
 定ようだなんていわれると心持よくねえからね」

母「これで別れましようよ」

多「左様なら氣い付けてね、初めから余あんまりたんと歩かねえよう

にしてねえ、早く泊る様にしなければなんねえ、寒い時分だから  
 遅く立つて早く宿へ着かなければいけませんぞ：ア、押おさねえでも  
 宜ええ危あぶねえだ、前めえは川じやアねえか、此こゝ処へ打ぶち箆はまつたらどうする  
 ：何卒どうぞ大事でえいに行つて来てお呉あんなせえましよう：なに笑うだ、名残  
 い惜いから声かけるになんだ馬鹿野郎、情じょう合ええのねえ奴だ、笑やア

がつて……あれまア肥料桶こいたごかた担かたげ出しやアがつた、桶たごをかたせ、ア  
 桶おろを下して挨拶あいさつしているが……あゝ兼しんだ新しん田でんの兼しんだ、御ご厄やく  
 介いになつた男おとこだからなア、あの男も……惣ちつ吉きち様さま小ちつせえだけんど  
 も怜り憫こうだから矢や張つぱり名な残のこい惜あはがつて、昨ゆうべ宵べも己おひらは行くのは厭いやだ  
 けんども母か様さまが行くから仕方しほうがねえ行くだつて得心うししたが、後うしろ  
 を振ふり返かえりく行く……見ろよ……あゝ誰たれか大でえ馬うまア引出ひきだ  
 しやアがつて、馬うまの蔭かげで見えなくなつた、馬うまを田くろの畦わへ押お付つけろ  
 や……あれまア大こえ庚こう申しん塚づかが建たつたな、彼あれあ昔むかしからある石いしだが、  
 あんなもの建たてなけりやアいゝに、庚こう申しん塚づかが有あつて見みえやアしね  
 え、庚こう申しん塚づか取と除ぞせ」

村方むらたの者「そんなことが出来よかえ」



と伸のび上りあがりく見送いつて暇とまを告つげる者はどろく帰こる。此方こちらは後あとに心こころが引ひかさされるから振返かえりく、漸よう々のことことで渡わたを越こして水街道みづかいだうから戸頭とがしらへさして行ゆきます。すると其そのの翌年あしたねんになりまして花車重吉はなぐるまぢゆうきちという関取ゆきちがは行違ゆきちがいになりましたことことで、毎まい年ねん春はるになると年始としはじめに参まゐりますが、惣次郎そうじらうの墓詣はかまいりをしたしいと出でて来きましたたが、取急とくきゅうぎ水街道みづかいだうの麴屋もちやへも寄よらず、直すぐに菩提所ぼだいじよへ参まゐりまして和尚わしやう様に逢あうと、是これくといいい、つつい話はなも長ながくなりましたが、墓はか場に香花かうかを沢山さわやまあげて、

花車はなぐるま「あゝお隅様すみさま情なさけない事ことになつた、敵かたきを打うつなれば私わしに一ひと言こと話はなをして呉くれ、ばお前様まへさまにこんな難儀なんぎもさせまいに、今いまいうは愚痴おこだが、だだが能あたくお前まへが死しんで呉くれた許ばかりで敵かたきは安田一角やすだいちかくと

いう事が分りましたから、惣吉様に助太刀して屹度花車がお前様の恨を晴します、ア、入違いになり上総の東金へ行きなすつたか、  
うらみ  
さぞ無情ない事だと思いなすつたろうが、私はこれから跡追掛てお目に掛り、何処どこに隠れ住うとも草を分けても引摺り出して屹度敵を討たせますから」

と活いきている者に物をいう様に分らぬ事を繰返し大きに遅れたと帰ろうとすると、ばら／＼降出して来て、他ほかに行く処もないから水街道の麴屋へ行ゆこうとすると、和尚様は

「少し破れてはいるがこれをさして、穿きにくかろうがこの下駄を」

というので下駄と傘を借りて、これから近道を杉山の間の処か

らなだれを通つて、田を廻つてこう東の方へ付いて行くと、大きな庚申塚が建て、在あつて、うしろには赤松がこう四五本ありまして、前には沼があり其の辺ほとりに枯れ蘆あしが生えております、ずうツと見渡すばかりの田畑、淋しい処へばらく降つかけて来る中をのそりくやつて来ると、突然だしぬけに茂みからばらくと出た武士さむらいが、皆面部を包み、端折はしおりを高くして小長こながい大小を落し差しにしてつかくと来て物をもいわず花車の片かた方かたの手を一人が押える、一人は前から胸倉を押えた、一人は背後うしろから羽交責はがいぜめに組付こうとしたが、関取は下駄どころを穿はいており、大きな形なりで下駄穿げたばきだから羽交責はがいぜめ処どころではない、漸ようやく腰の処へ小さい武士ぶしが組付きました。

## 八十

花車は恟りびつくしたが、左の手に傘を持って居り、右の手は明いて居りましたが、おさえ付けられ困りました。

花車「なんだい、何をなさる」

武士「我々は浪人者で食くい方かたに困る、天下の力士と見かけてお頼み申すが、路銀を拝借したい」

花「路銀だつて、あんた、私わしはお前さん角力取で金も何もありませんが、困りますよ、そんなことして金持と見たは眼違いで、金も何もない、角力取だよ」

武「金がなければ気の毒だが帯さして居る胴どう金がねから煙草入から

身ぐるみ脱いで行つて貰い度い」

花「そんなこといって困りますよ、身幅みはらの広いこんな着物を持つて行つたつて役に立ちはしません、煙草入だつて、こんな大きな物持つて行つたつて提げられやあせん、売つたつて錢にもならぬに困りますよ、然そう胴突どうついては困るよ〜」

といいながら段々花車は後あとへ下さがると、後うしろの見上げる様な庚申塚の処へこう寄り掛りました。前の奴は二人で、一人は右の腕うでを押え、一人は胸倉を取つて押える、後うしろの奴はせつない、庚申塚と関取の間にはさまれ、

「もつと前に」

といつても同類の名をいうことが出来ない。此の三人は安田一

角の廻し者、花車を素つぽだかにしてなぶり殺しに致すようにすれば、是れだけの手当を遣るということに疾うより頼まれて居る処、出会つて丁度幸い、いゝ正月をしようという強慾非道の武士三人、漸と捕まいたが、花車は伶俐ものだから、此奴らは悪くしたら廻し者だろうと思ひ、

花「まあそんなに押えられては困りますね、待ちなさい上げますよ、達つてと云えば上げますよ〜」

武「呉れぬといえは許さぬ、浪人の身の上切取強盗は武士の習い、云い出しては後へ引かぬからお気の毒ながら切り刻んでもお前の物は残らず剥ぐぜ、遁れぬ事と諦めて出しな、裸体はお前の商売だ、裸体で行くのは何でもないわ」

花「だから上げるけれども、待ちなさいよ」

と左の手に持つて居た傘をぽんと投出し前から胸倉を取つて押えて居る一人の帯を押えて、

花「お前さん、そう胸倉を押し立てては私わしは着物を脱ぐことが出来ぬから、胸倉を緩ゆるめて、裸はだか体になりますよ、私も災難じゃア、寒くはないから、私に裸体になれてえばなりますから、胸倉を押えていては脱げませんから緩めて」

前の奴のうっかり緩める処を見て、

花「なにをなさる」

といいながら一人の奴の帯を取つてぽんと投げると、庚申塚を飛越して、後うしろの沼の中へ、ぽかんと薄うす氷こおりの張つた泥の中へ這

入った。すると右の手を押えた奴は驚きバラ／＼逃げ出した。

花「悪い奴じゃ、こんな村境むらさかいの処へ出やアがつて追剥おいはぎを

しやアがつて悪い奴じゃ、今度此辺こんだこゝらアうろ／＼しやアがると打ぶちこ

殺ころすぞ、いや後うしろに誰たれか居やアがるな、此奴組こいつくみ付て居やアが

ったか」

武「誠にどうも恐入った」

花「誠にも糞もいらん、これ汝てまえの様な奴が出ると村の者が難儀

するから此のちしの後のちし為ならないか」

武「為する処どころではござらぬ、誠にどうも」

花「悪いことするな、是からは為ならないかどうだ此の野郎」

と押付けると、



武「うーん」

と息が止った。

花「野郎死にやアがったか、くたばったか、野郎死だか、ア、死にやアがった、馬鹿な奴だ」

と捻<sup>ひね</sup>り倒すと、尾籠<sup>びろう</sup>のお話だが鼻血が出ました。

花「みつともねえ面<sup>つら</sup>だなア、此奴<sup>こいつ</sup>も投込んで遣れ」

と襟<sup>えりがみ</sup>髪を取って沼へ投<sup>ほう</sup>り込み、傘を持つてのそりく水街道

の麴屋へ帰るといふ、角力取という者はおおまかなもので。扱<sup>さて</sup>お

話は二つに分れて此方<sup>こちら</sup>は惣吉の手を引き、漸<sup>よう</sup>々のことで宿屋へ

着きましたなれども、心配を致しました揚句<sup>あげく</sup>で、母親がきりく

癩<sup>しやく</sup>が起りまして、寸白<sup>すばく</sup>の様で、宿屋を頼んでも近辺に良い医者も

ございませんから、思う様に癒なほりません、マア癒るまではこの  
 ので、とうりゆう 留致して居りました。其の内に追々と病氣も癒る様  
 子なれども、時々きやく痛み、固い物は食われませんから、お  
かゆこしら 粥を拵えてこれを食い、其のうち年も果て正月となり、丁度元日  
 で、元日に寝ていては年の始め縁起が悪いと、田舎の人は縁起を  
 祝ったもので、身体が悪いくせに我慢して惣吉の手を引いて出立  
 致し、小金こがねがはらケ原へ掛り、塚前村の知己しるべの処へ寄つて病氣の間厄介  
 になろうと、小金の原から三里許ほかり参ると、大きな観音堂がござ  
 います、みぞれ 龕がばらく降出して来て、子供に婆ばあさま様で道は抄取はかど  
 りません、とつぷり日は暮れる、すると頻しきりに痛くなりました。

惣吉「母か、さま様また痛いかえ」

母「ア、痛い、あゝあのお医者様から貰ったお薬は小さえ手包の中へ入れて置いたが、彼<sup>あすけ</sup>処え上げて置いたが、あれ<sup>われ</sup>汝持つて来たか」

惣「あれ己<sup>おれ</sup>置いて来た」

母「困るなア、子供<sup>あんべ</sup>だア、母様塩梅<sup>あめ</sup>悪いだから、薬<sup>でいじ</sup>大事だからてえ<sup>かんげ</sup>考<sup>かんげ</sup>えもなえで」

惣「だって、己<sup>おれ</sup>もう宜<sup>い</sup>いてえから、よかんべえと思つて何も持つて来<sup>き</sup>なかつた」

母「困つたなア、あゝ痛い〜」

惣「母様雪降つて来た様だから、此<sup>こ</sup>処<sup>こ</sup>に居ると冷てえから、此<sup>こ</sup>の観音様の御堂に這入つて些<sup>ちっ</sup>と己おつペそう」

母「そうだなア、押してくれ」

惣「あい」

母「おゝ、大えでけ観音様のお堂だ、南無大慈大悲の觀世音菩薩様  
少々こゝ此処を拝借しまして、此処で少し養生致します。さア惣吉力  
一ぺえ押せよ」

惣「母様此処な処かえ」

母「もつとこつち」

惣「もつと塩梅あんべえが悪くなると困るよう、しつかりしてよう、多  
助じい爺やアを連れて来ると宜よかつた」

と可愛らしい紅葉もみじの様な手を出して母の看病をして、此処を押  
せと云われて押しても力が足りません。

母「あゝ痛いゝ、そう撫なでても駄目だから拳骨で力一ぺえおつ  
 ぺせよ、拳骨でよ、あゝ痛いゝ」

## 八十一

女「何なんだか大層うな呻る声が聞えるが……貴方かえ」

母「へえ、旅もんの者でござえますが、道中で塩梅あんべえが悪くなりまし  
 てね、快くなえうち歩いて来ましたから、原中なげえ掛つて寸白が起  
 つて痛いとうござえますから、観音様のお堂をお借り申しました」

女「それはお困りだろう、お待ち、どれゝ此方こつちへ這入りなさい」

と観音堂の木連格子きつれごうしを明けると、畳が四畳敷いてございます。

其の奥は板の間になつて居ります、年の頃五十八九にもなりましよう、色白のでつぷりした尼様、鼠木綿の無地の衣を着て、

尼「さア此方こちらへお這入りさアく擦さすつて上げましよう憫然かわいそうに、

此の子が小さい手で押しても、擦つても利きはしない、おゝ酷ひどく差込んで来る様だ」

母「有難うござえます、痛くつて堪たまらねえでね、宿屋へ一寸泊りましたが癒なごらねえで」

尼「こう苦くるむに子供を連れて何処どこまで……なに塚前まで、是から三里ばかりで近くはない、薬はお持ちかえ」

母「はい、薬は有つたが惣吉これがにいい付けて置いたら、慌あわてゝ、

包の中へ入れて置いて置いたのを置いて参りまして」

尼「薬がなくなつては困つたもの、斯ういう時は苦い物でなければいけない、だらすけが宜いが、今此の先にねえ、あの榎の出居る家が有る、あれから左の方へ構わず曲つて行くと、家が五六軒ある、其処の前に丸太が立つて、家根の上に葎簀が掛つて居て、其処に看板が出てあつたよ、癩だの寸白疝気なぞに利く何とか云う丸薬で、\*黒丸子の様なもので苦い薬で、だらすけみたいなもの、癩には能く利くよ、お前ねえ、知れまいかねえ、行つて買つて来ないか、安い薬だが利く薬だが、先刻通つた時榎があつて、一寸休む処が有つて、掛茶屋ではないが、あれから曲つて一町ばかり行くと四五軒家があるが、何うか行つて買つて来て、

私が行つて上げたいが手が放されないから」

\* 「漢方医の調剤する腹痛の丸薬。こくがんし」

惣 「有難う」

尼 「茲こゝにお銭あしがあるから是を持つて行つておいで、心配せずに」

惣 「じゃア母様かゝさまわし私が薬買つて来るから」

母 「よくお聞き申して早く行つて来こうよ」

惣 「はい、御出家様お願ねげえ申しますよ」

尼 「あいよ心配せずに行つておいで、憫然かわいそうに年もいかぬに旅だからおろくくして涙ぐんで、いゝかえ知れたかえ、先刻さつき通つた四

五町先の榎から左に曲るのだよ」

惣 「あい」



とおろ／＼しながら、惣吉は年は十とおだが親孝心で発明な性うまれつ質き、急いで降る中を四五町先を見当みあてにして参りました。先刻通りました処は覚えて居りまして、榎の所から曲ると成程四五軒家うちがある、其処そこへ来て、

惣「此辺こゝらに癩いに利く薬でだらすけという様な薬は何処どこで売って居おりますか」

と聞くと、

男「此辺に薬を売る処はない、小金こがねまで行かなければない」

惣「小金と云うのは」

男「小金までは子供で是とてからは逆さかも行かれない、其の中うちには暗くらくなって原中で犬でも出れば何どうする、早くお帰り」

と云われ心細いから惣吉は歸つて観音堂へ駈上かけあがつて見ると情  
ないかな母親は、咽喉のどを二ふた巻程丸ぐけで括くられて、虚空を掴ん  
で死んで居る。脊負せおつた物も亦母またが持つて居た多分の金も引浚ひきさら  
つて彼の尼かが逃げました。

惣「ア、お母様つかさま、何うして絞殺しめころされたかねえ」

と頸くびに縛り付けてある丸ぐけを慄ふるえながら解いて居る処へ、通  
り掛つた者は、藤心村ふじごころむらの観音寺の和尚道恩どうおんと申しまして年  
とつて居りますが、村方では用いられる和尚様、隣村に法事があ  
つて男を一人連れて歸りがけ、

和尚「急がんじゃないかん」

男「何なんだかヒイ〜という声が聞える様に思うだ」

和「ヒイ〜と」

男「怖おっかねえと思つて、此こゝ処はね化物が出るとこ処だからねえ」

和「化物なぞは出やせん」

男「けれども原中でヒイ〜という声おかが訝しかんべえ」

和「何も出やアしない」

男「あれ冗談じゃアねえ、だん〜、あれ〜」

和「彼あれは観音様のお堂だ、彼あそこ処に人が居るのではないか、暗

くつて見えはせん 提ちようちん灯 出しな」

と提灯を引つたくつて和尚様が来て見ると、縊くびり殺された母に

縊すがり付いて泣いて居る。

和「どういふ訳か」

と聞くと泣いてばかり居て頓とんと分りません。漸ようやくだまして聞くと是れくくという。

和「飛んだ事だ」

と直すぐに供の男を走らして村方へ知らせますと、百姓が二三人来て死骸と共に惣吉を藤心村の観音寺へ連れて来て、段々聞くと、便たよる処もない実に哀れの身の上でありますから、

和「誠に因縁の悪いので、親の菩提わしの為、私が丹精して遣るから、仇かたきを討つなぞということは思わぬが宜いい、私の弟子になつて、母親あにや兄あにさんの為に追善供養を吊うが宜い」

と此の和尚が丹精ようやして漸く弟子となり、頭そを剃りこぼち、惣吉が宗そうかん觀と名を替えて観音寺に居る処から、はからずも敵かたきの様子

が知れると云うお長いお話。一寸一息吐きまして。

## 八十二

扱さて一席申上げます、久しく休み居りました累ヶ淵のお話は、私わたくしも昨さくふゆ冬より咽喉加答いんこうかたる児でさっぱり音声が出ませんから、寄席せきを休む様な訳で、なれども此の程は大分咽喉加答いんこうかたる児の方は宜ようございます、また風を引き風かぜこえ声になりました、風声と咽喉加答いんこうかたる児とが掛持かけもちを致して居りますると云う訳でもござりませんが、何時いつまでもお話を致さずにも居おられませんか、此の程は漸ようやく少々よろしゅうございますから、申し残りの処を一席お聞きに入れま

す。さてお話が二つに分れまして、ちようど時は享和きやうわの二年七月廿一日の事でございます。下総まつどの松戸わきの傍に、戸ヶ崎村と申す処そこがございまして、其処そこに小僧弁天というのがあります。が、何どういう訳で小僧弁天と申しますか、敢あえて弁天様が小さいという訳でもなし、弁天様が使いに往いく訳でもないが、小僧弁天と申します。境内は樹木が繁茂致しまして、頓とんと掃除などを致したことはなく、破やれ切れた弁天堂の縁えんは朽ちて、間から草が生えて居り、堂わきの傍には落葉おちばで埋うずもれた古井があり、手水鉢ちようずばちの屋根は打ぶつ壊これて、向うの方に飛んで居ります。石塚は苔の花が咲いて横よこ倒おしになつて居ります程の処、其の少し手前に葎よしず簧ぱり張はりがあつて、住すまいではありません、店の端には駄菓子だかしの箱があります、

中にはお市いち、微塵棒みじんぼう、達磨だるまに玉たまうさぎ、兎うに狸くその糞くそなどという汚きたな  
 い菓子に塩煎餅しんせんがありまするが、田舎いんやのは塩しんを入いれまするから、  
 見た処ところでは色いろが白しろくて旨旨そうだが、矢張やはりこつくり黒くろい焼方やきかたの方が  
 旨旨いようです。田舎いんやの塩煎餅しんせんは薄うすつぺらで軽かろくてべらくくして居  
 りまする、大きな煎餅壺せんぺんかに一杯いっぱい這入はいつて居ゐりまする、それから鳥  
 でも追おう為ためか、渋しぶ団扇うちわが吊ぶら下さり、風かぜを受うけてフラあく煽あおつて  
 居ゐりまする、これは蠅はえ除よけであると申ます事ことで。袖そで無なしを着きた婆ばア  
 さまが塵埃除ほこりよけの為ために頭あたまへ手拭てぬぐいを巻まき附つけ、土ど竈べつの下したを焚たき  
 附つけて居ゐりまする。破やぶれた葎わら簀すいの衝つ立たてが立たつてあり、看板かんばんを見  
 ると御おん休やすみ所ところ煮染酒にしめと書かいてありまするのは、いかさま一膳いっぜん  
 飯いひぐらいは売うるのでござりまする。丁度な其そのの日ひの申刻まじ下さり、日ひは

もう西へ傾いた頃、此の茶見世へ来て休んでいる武士は、廻し合さむらい羽つばを着て、柄袋の掛った大小を差し、半股引の少し破れたのを穿やいて、盲めくらじま縞まの山なしの脚半きやはんに丁寧ていねいに刺した紺足袋かきぞうり、切緒きれおの草鞋わらじを穿き、傍かたわらに振り分け荷を置き、菅すげの雪ゆき下おろしの三度笠さんどがさを深く冠かぶり、煙草をパクリ／＼呑んで居りますると、門口から這入つなつて参りました馬方は馬を軒の傍へ繋いで這入つなつて来ながら、

馬ば「婆ばあさま、お茶ア一杯いっぺえくんねえ、今の、お客を一人新高しんこう野やまで乗のっけて来た」

婆「おめえさまは何時いつもよい機嫌だのう」

馬「いゝ機嫌だつて、機嫌悪くしたつて銭の儲かる訳でもねえから仕ようがねえのよ」



といいながら彼の縁台に腰を掛けていたる客人を見て、

馬「お客さん御免なせえ、あんた何方どちらへおいで、ごぜえやすねえ、もうハア日イ暮れ掛つて来やしたから、お泊とまりは流山か松戸泊が近くつてようござえましよう、川を越してのお泊とまりは御難で渋けえようだが、今夜は何処どこへお泊りか知りやせんが、廉やすくやんべえかな」

士「馬は欲しくない」

馬「どうせ帰り馬けえでござえやす、今ね新高野までお客ウ二人案内してね、また是むこうから向むこうへ往いくのでござえやすが、手間がとれるから、鰭ヶ崎とうふくじの東福寺泊とまりと云うのだが、幾らでもいゝから廉く遣るべえじゃアねえか」

士「馬は欲しくないよ」

馬「欲しくねえたつて廉かつたら宜<sup>え</sup>えじやアねえか」

士「廉くつても乗り度<sup>た</sup>くないというのに」

馬「そんな事を云わずに我慢して乗つてツて下せえな」

士「うるさい、乗り度くないから乗らんというのだ」

馬「乗り度くねえたつて乗つてお呉んなせえな、馬にも旨<sup>うめ</sup>え物を喰わして遣りてえさ、立派な旦那様、や、貴方<sup>あんた</sup>ア安田さまじや

ありやせんか」

士「誰だ」

馬「おゝ先生かえ、誠に久しく会わねえ、まア本当に思えがけねえ、横曾根村にいた安田先生だね」

士「大きな声をするな、己は少々仔細有つて隠れている身の上

だが、突然だしぬけに姓名をいわれては困る、貴様は誰だ」

馬「誰だつて先生、一つ処とこにいた作藏でござえやすわね」

士「なに作藏だと、おゝ然そうく」

作「え、誠にお久しくお目に懸りやせんが、何時いつもお達者わけで若

えねえ、最早もうち慥か四十五六になつたかえ」

士「汝てめえも何時も若いな」

作「己おらもう仕様がねえ、貴方あんた実はね私わしも先刻さつきから見た様な人

だと思つてたが、安田一角先生とは気が附かなかつたよ」

士「己の名を云つてくれるなというに」

作「だつて、知んねえだから氣イ附かずに云つたのさ、併しかし何ど

うも一角先生に似て居ると思つたよ」

安「これ名を云うなよ」

作「成程善々よくく視れば先生だ、何でも隠し事は出来ねえねえ、

笠かぶ了冠かぶっているから知れなかつたが安田先生だつた」

安「これく困るな、名を云うなと云うに」

作「つい惘然うっかりいうだが、もう云わねえ様にしやしよう、実に

思え掛けねえ、貴方あんた今何処どこにいるだ」

安「少し仔細あつて此の近辺に身を隠しているが、汝てめを何うして

彼方あつちを出て来た」

作「仕様がねえだ、己おらアこんなむかつ腹を立てる氣象だが、詰

らねえ事で人に難癖え附けられたから、此こゝ所ばかり日は照らねえ  
と思つて出て来たのさ」

安 「汝は慥か森藏の宅に厄介になつていたじやアねえか」

作 「はい、森藏といつちやア彼処では少しは賭博打の仲間じ

やア好い親分だが、何てつてももう年い取つてしまつて、親分は

もうろく 耄碌していやすから、若え奴等もいけえこといやすから、私も

やつけえ 厄介になつてると、金松と云う奴がいて、其奴か毀れた碌で

もねえ行李を持つていて、自分の物は犢鼻褌でも古手拭でも皆其

ん中え置くだ、或時己が其の行李を棚から下してね、明けて見る

と、財布が這入つて、金が一分二朱と六百あつたから出して使つ

てしまつと、其奴がいうには、此の行李の中へ入れて置いた財布

の金が無え、手前取つたらうというから、己ア取りやアしねえが

只黙つて使つたのだという、此の泥坊野郎と云うから私が合

点しねえ、泥坊とは何んだ、何ういう理窟で人の事を泥坊と云うのだ、只汝が金え出して使つたばかりで、黙つて人の物を出して使つたつて泥坊と云う理合が何処に在るか、喧嘩をおつ始めたというわけさ」

安「矢張泥坊の様だな」

## 八十三

馬「親分のいうには、泥坊に違えねえとツて己の頭ア打擲つて、汝の様な解らねえものアねえと、親分まで共に己に泥坊の名を附けただが、盗んだじゃアねえ只無断で使つたものを泥坊なんぞと

いう様な氣の利かねえ親分じや仕様がねえと思つて、おッ奔ばしつて  
 了しまつたが仕様がねえから今じやア馬小屋見てえな家うちを持つて、こ  
 う遣つて、馬子になつて僅わずかな飲のみ代しろを取つて歩いてるんだが、ほ  
 んの命を繋つないでるばかりで仕様がねえのさ、賭博打の仲間へ這入  
 る事も出来ねえから、只もう馬と首くび引びきだ、馬ばかり引いてる  
 から脊骨へないらが起おこるかと思つてるよ、昔馴染こづに、小遣けえを少  
 ばかりおくんなさえな」

安「そんなら汝てまえは風来で遊あそびんでるのか」

作「遊あそび人にんという訳でもねえが、馬を引いてるから、賭博を  
 打ぶつて歩く事も出来ねえのさ」

安「少し汝てまえに話があるから婆アを烟草でも買いに遣つてくれね

えか」

作「はア宜うごぜえやす、婆さまばア、旦那さま烟草買つてくんと仰しやるから買つて来て上げなよ、此の旦那は好んでなけりやア氣に入るめえ、唯の方ではねえ安田一角先生てえ」

安「これ〜」

作「はア宜うごぜえやす、立派な先生だから悪い烟草なんぞア吞まねえから、大急ぎで好のを買つて来なせえ……あんた錢有りますかえ」

安「さ、これを」

作「サ婆さま是で買つて来て上げな」

安「使い賃は遣るよ」



婆「はいかしこま畏りました、直じきにいつて参まりまする」

と婆ばあさんは使賃しちんという事を聞いて悦んで、烟草を買いに出て参りました。後あとは兩人差さしむかい向で、

安「汝馬てまえを引いてるのが幸いだ、己きは木卸きおろしへ上あがる五助街道の間道に、藤ヶ谷ふしがやという処でつけの明神山みようじんやまに当時隠れているんだ」

作「へー、あの巨大でつけえ森のある明神さまの、彼処あそこに隠れているのかえ、人の往おう来れもねえ位くればとこの処だから定めて不自由だんべえ、彼処なまかいどうは生街道なまかいどうでえので、松戸へ通つン抜けるに余程ちげ近ちかえから、夏になると魚ア車ぶつに打積ぶつんで少しは人も通るが何なんだつてあんな処ちに居るんだえ」

安「それには少し訳があるのだ、己も横會根よこえねにいられんで当地

へ出たのだ」

馬「何だか名主の惣次郎を先生が打斬たてえ噂があるが、え、先生の事だから随分やり兼ねえ、殺つたんべえ此の横着もの奴、そんな噂がたつて居難くなつたもんだからおつ走つて来たんだらう」

安「そんな事はねえが武士の果は外に致方もなく、旨い酒も飲めないから、どうせ永い浮世に短い命、斬り取り強盜は武士の習だ、今じゃア十四五人も手下が出来て、生街道に隠れていて追剥をしているのだ」

作「え、追剥を、えれえウーン怖ねえウーン、おれ剥ぐなよ」  
安「汝なぞを剥いでも仕様がないうが、汝は馬を引いてるんだか

ら、偶たまには随分多分の金を持つてるよい旅人りよじんが、佐原さはらや潮来いああたり辺  
 から出て来るから、汝其の金のありそうな客を見たら、なりたけ  
 駄賃やすを安くして馬に乗せ、此処こゝは近道でございますと旨く騙だまかし  
 て生街道へ引張り込み、藤ヶ谷の明神山の処まで連れて来てくれ、  
 併しかし薄暗くならなくつちやア仕事が出来ねえから、宜いい加減どに何  
 処こかで時を移すか、のさく歩けば自然と時が遅れるから、そう  
 して連れて来て呉れ、ば、多おおぜい勢せいで取巻いて金を出せといえは驚  
 いてしまう、汝は馬おきを置おきつ放ばなしてなり引張つてなり逃げてしま  
 ねえ、そうして百両金があつたら其の内一割とか二割とか汝に礼  
 をしようから、おれの仲間にならねえか」

作「そんなら礼が二割といえは百両ありやア二十両己にくれる

のか」

安「そうよ」

作「うめえなア、只馬を引張つて百五十文ばかりの駄賃を取つて、酒が二合に鯨にしんの二本も喰えば、後あとに銭が残らねえ様な事をするより宜いいが、同類になつて、若もし知れた時は首ぶつぎらを打斬れるのかよ」

安「そうよ」

作「ウーン、それだけだな、己はもうこれで五十を越してるんだから百両で二十両になるのなら、こんな首は打斬られても惜くもねえから行やるべえか」

安「汝馬てまえを引いておれの隠家かくれがまで来い、あの明神山の五本杉

の中に一本大きな楠くすのきがある、其の裏の小山がある処に、少しばかり同類を集めているんだ」

馬「じゃア彼あのもと三峰山みつみねさんのお堂のあつた処だね、よくまア彼様あんな処あすこにいるねえ、彼処あすこは狼うわばみや蟒とこが出た処とこなんだから、尤もつとも泥坊もつとになれば狼や蟒を怖おそがつていちやア出来ねえが、そうかえ」

一角は懐から金を取り出し作藏に渡しながら、

安「これは汝てまえが同類になつた証拠しるしの為、少しだが小遣錢こづかいに遣るから取つて置け」

作「え、有ありがて難がたえ、これは五両だね、今日は本当に思おもえ掛かけねえで五両二分になつた」

安「なぜ」

作「不思議な事もあるものだ、今日はね、あのもさの三藏に逢ったよ、羽生村の質屋で金かした婆ばア様が死んだつて、其の白骨を高野へ納めるてえ来たが、今日は廿一日だから新高野山へお参めえりをするてえので、與助を供つに伴れて、己さつきが先刻東福寺まで送つてツたが、昔馴染だから二分くれるツて云つたが、有難うござえやす、実に今日は思え掛けねえ金儲けが出来た」

安「其の五両を取つて見ると、もう同類だから是切り藤ヶ谷へ来ずもにいて、若てまえし汝の口から己の悪事を訴人しても汝は矢張やっぱり同罪だ、仮令たとえ五両でも貰つて見れば同類だから然そう思え」

作「己も覚悟を極めて行やるからには屹度きつと遣りやすよ、それは宜いいが、あすぐんた直すぐに独いりで往いくか、馬に乗つて往かないか、歩いて

往く、そうか、左様なら……あゝ其方そつちへ往つてア損だから、其の  
 土橋どばしを渡つて真直まっすぐにおいでなせえ、道い悪いから氣い付けて往  
 きなさせ、なア安田先生も劍術遣いだから、どうして劍術遣いじ  
 やア飯まんまア喰えねえ、あの人は旧時もとから随分盜賊どろぼうぐれえ遣やつたかも  
 知んねえ、今己がに五両呉れたは宜いが、是を取つて見れば同類  
 に落すといつたが、困つたな、あゝもう往つてしまつたか、立派  
 な男だ、婆アさまは何処どこまで烟草を買けえに往つたんだらう尤も要  
 らないのだ、人ひと払はえの為ために買かえに遣つたんだが余あんなり長ながえなア」  
 と独ひとりごと言ことをいっている後うしろから、

男「おい作」

作「え、誰だえ己を呼ばるのア誰だ」

男「お、己だ、久しく逢わねえのう」

## 八十四

作「誰だ、人が何処どこにいるのだ」

と云いながら、方々見廻し、振返つて見ると、二枚折にまいおりの葎よしの  
屏風びやうぶの蔭かげに、蛇形じやがたの単物ひとえものに紺献上こんけんじやうの帯おビを神田かんだに結び、結ゆうぎ  
城平ひらの半合羽はんがはを着、傍わきの方に振分ふりわけの小包こぶちを置き、年頃としがら三十ば  
かりの男で、色はくつきりと白く眼のぱつちりとした、鼻筋はなすぢの通  
つた、口元の締いつた美しい男で、其の側に居るのは女房にようばうと見え、二  
十七八じゅうしちはちの女で、頭髪あたまは達磨返だまらまへしに結び、鳴海なるみの単衣ひとえに黒繻子くろすずこの帯



をひっかけに締め、一杯飲んで居る夫婦連づれの旅人りよじんで、

男「作や、此方こつちへ這入へえんねえ」

といいながら、葭屏風よしびょうぶを明けて出て来た男の顔を見て、

作「イヤア兄どいか、何うした新吉さん珍めづらしいなあ、久し振りだ、これは何うも珍めづらしい、実に思え掛けねえ」

新てめえ「汝、大きな声で嘍鳴どなつて居たが相変あひらずだなア」

作「おやお賤さん、誠にお久し振でござえやした」

賤「おや作藏さんお前の噂は時々していたが、相変あひらず宜い機嫌きげんだね」

作「本当にお賤さん、見違える様になつた、少しふけたね、旅をしたもんだから色が黒くなつたが、思え思つた新吉さんとう

く夫婦になつて彼処あそこをおツ走ばしつたのかえ、今いまア何処どこにいるだ  
え」

新あちこち「彼方あちこち此方こちと身の置き処どころのねえ風来人間で仕方がねえが、是  
も皆人みんなに難儀を掛け、悪い事をした報むくいと思つて諦めてゐるが、何  
商売を仕度したくも資本もとでがないのだ、汝てめえまぶな仕事を安田と相談して  
いたが、己も半口載せねえか」

作めえ「お前めえあの事を聞いたか、是ハア困つたなア、実は銭がねえ  
で困るから這入へえる真似まねしたただア、だが余り這入へえり度たくはねえんだ」  
新「旨めいくいつてるぜ、併しかし三藏は何処どこへ往つたんだ」

作「三藏かえ、彼あれはね婆ばアさまが死んだから其の白骨を本当の紀  
州の高野へ納めに往くつて、祠堂しどうきん金も沢山持つてる様子だ、お

累さんもあゝいう死し様ようをしたのも矢張やっぱりお前めえら二人でした様なも  
のだけ」

新てめえ「汝是てめえから新高野へ馬を引いて往くのなら矢張やっぱり歸けえりは此処こゝ  
を通るだろう」

作「鱒ヶ崎の方へ廻るのだが此方こつちへ来ても宜いい」

新「そうか、おい作」

作「え何なんだ」

新「一寸耳を貸せ」

作「ふーん、怖い事だな」

新てめえ「汝馬てめえを引いて先方むこうへ往つて、三藏さんざうを此処こゝ迄い乗せて連れて来  
たら、何か急に用が出来たと云つて、馬おきを置おきつ放ばなして逃げてしま

つてくれねえか、併し馬しかを置いて往かれちやア三藏に逢つて仕事を  
 する邪魔になるから、引いてつてくれ、其の代り金を三十両や  
 らア」

作「え、三十両本当に己ア金運かねうんが向いて来た、じゃア金をく  
 んろえ、してどういう理窟だ」

新「三藏とは一旦兄弟とまでなつたが、お累が死んでからは、  
 互たげえに敵同志かたきの様になつたのだ」

作「敵同志だつて汝おめえが三藏を怨むのアそりやア兄ちい些と無理だ  
 んべえ、成程お賤さんの前めえもあるから、そういうか知んねえが、  
 三藏を敵おめと思えば無理だぞ、お前めえが養子に往つても男振が宜いいも  
 んだから、お賤さんに見染められ、互たげえに死ぬいきの生るのと騒さわぎ合

い、お累さんを振捨て、お賤さんとかういう事になったから、お累さんも上のほせて顔が彼あんな様に腫れ出して死んで了しまったのだから、却かえつて三藏の方でお前を怨うらんでいるだろうが、何もお前の方で三藏を悪にくみ返すという理り合あいはあんめえぜ」

新「汝てめえは深い事を知らねえからそんな事をいうんだが、何なんでも構わねえ、己が三藏に逢つて、百両でも二百両でも無心をいつて見ようと思うのだ」

作「三藏さんざん殿がお前めえに金を貸す縁があるかえ」

新「貸しても宜いい訳があるのだよ」

作「三十両くれ呉るなら遣やつ附けやしよう」

新「若もし與助の野郎が邪魔でもしたら、汝てめえ打えん擲なくつてくれなくつ

ちやアいけねえぜ」

作「與助おやし爺なんざアヒヨロ／＼してるから川の中へ投ほつぽり込  
でしまうがそれも矢やっぱり張金づくだがね」

新「強請ねだりごと事をいわずに遣つて呉れ、其の代り首尾よく遣つて  
利を見た上で汝おめえに又礼をしよう」

作「それじゃア三藏に貸してくれといつても貸さねえといえ  
ば礼はねえか、困つたな、じゃア後あとの礼の処は当あてにはならねえな」

新「まア其そん様なものだが、多分旨く往ゆくに違ちがえねえ、若もしぐず  
／＼して貸さねえなんどゝいつたら、三藏與助の二人を殴たたつ殺し  
て川の中へ投ほうり込んでしまふ積りだ、己も安田の提灯持位ぐれえは遣  
る了簡だ」

作「お賤さん新吉さんが彼様な事を云うぜ」

賤「お前度胸をお据え仕方がないよ、私も板の間稼ぎぐらいは遣るよ」

作「アレマア彼様な綺麗な顔をしていながら、あんな事をいうのも皆新吉さんが教えたんだろう、己はどうせ安田の同類にされたから、知れゝば首は打斬れる様になつてるんだから仕方がねえ、やるべえく、おゝ婆アが歸つて来やアがつた」

新「それじゃア手前馬を引いて早く往け」

作「ハイ、そんなら直に馬ア引いて新高野へ三藏を迎えに参りやしよう」

と出て行きました。これから新吉お賤も茶代を払つて其処を立

出ちいでました。其の内もう日はとつぷりと暮れましたが、葎よし簧張よしずツぱりもしまい川端の葦よしの繁よしつた中へ新吉お賤は身を隠して待つて居ると、向むこうから三藏が作藏の馬に乗つて参りました。

作「與助さん貴方あんたもう何歳いくつになるねえ、まだ若わけえのう、長く奉公してゐるが五十を一つ二つも越したかえ」

與「そうでねえ、もう六十に近くなつたから滅めつきり切年を取つて仕舞つた」

作「羽生村の旦那ちよつくら下りてお呉んなせえ」

三「なんだ」

作「なんでも宜いいから」

三「坂を上あがつたり下りたりするので己も余程草臥くたびれたが、馬へ



乗つて少し息を吐いたが、馬へ乗ると又矢張腰が痛いとう

作「旦那誠に御無心だが、私はね、少し用があるのを忘れて居たが、実は此の先へ往つて炭俵を六俵積んで来て呉れと頼まれてるんだが、どうしても積んで往かねばなんねえ事があるだ、誠にお気の毒だが此処で下りて下せえな、もう此処から先は平な道だから歩いてても造作ねえんですが」

三「それじゃア何でもいゝ汝が困るなら下りて歩いて往こう」と云いながら馬から下りる。

作「私は少し急ぎますから御免なせえ」

と大急ぎで横道の林の蔭へ馬を引込みました。

## 八十五

日はどつぷりと暮れ、往来も止りますと、戸ヶ崎の小僧弁天堂の裏手の草の茂みからごそくと葦を分けながら出て来た新吉は、ものをもいわず突然與助の腰を突きましたから堪りません、與助は翻筋斗を打って、利根の枝川へどぶんと水音高く逆とんぼうを打って投げ込まれましたから、アツと行って三藏が驚いている後から、新吉が胴金を引抜いて突然に三藏の脇腹へ突込みました、アツと行って倒れる処へ乗掛り、胸先を抉りましたが、一刀や二刀では容易に死ねません、死物狂い一生懸命に三藏は起上り、新吉の髻をとって引き倒す、其の内與助は年こそ取って居ります

が、田舎漢いなかももので小力こぢからもあるものでございますから、川中から這あがい上つて参りながら、短いのを引き抜き、

與「此の野郎なにをしやアがる」

と斬つて掛る様子を見るよりお賤は驚き、新吉に怪我をさせまいと思ひ、窃そつと後から出て参り、與助の髻を取つて後の方へ引倒すと、何をしやアがるかといひながら、手に障つた石だか土の塊かたまりだか分りません、それを取つて突いきなり然お賤の顔を打ちました。お賤は顔から火が出た様に思ひ「アツ」といつて倒れると、乗のし掛り斬ろうとする処へ、馬子の作藏が與助の傍わきから飛び出して、突いきなり然足を上げて與助を蹴りましたから堪たまりません、與助はウンといつて倒れました。新吉は刀を取直して又また一い刀三藏の脇腹をこ

じりましたから、三藏も遂ついにに其の儘息が絶えました。すると手早く三藏の懐へ手を入れ、胴巻の金を抜き取つて死骸を川の中へ投げ込んで仕舞い、

新「お賤く」

賤「アイ、ア、痛い、どうも酷ひどい事をしやアがった、石か何か取つて、いやという程私の顔を打ちやアがった」

新「手出しをするからだ、黙つて見ていればいゝに」

賤「見て居いればお前が殺されて仕舞つたのだよ、與助の野郎がお前の後うしろから斬りに掛つたから、私が一生懸命に手伝つたのだが、もう少しでお前斬られる処だつたよ」

新「そうか、夢中でいたから、ちつとも知らなかつた」

賤「與助をよく蹴倒したのう」

作「え、なに己だ、林の蔭に隠れていたが、危ねえ様子だから

飛び出して来て、與助野郎の肋骨あばらを蹴折って仕舞った、兄い無心  
処どころじやねえ突いきなり然やに行つたんだな」

新「汝てめえはもう歸けえつたのかと思つた」

作「林の蔭に隠れていて、何どうだか様子を見ていたのよ」

新「誰か人は来やアしねえか、汝てめえ氣を附けて呉れ」

作「大丈夫だ、誰も来る氣遣きづけえはねえが、割わりえゝ合もれを貰てえ度えな

ア」

新「汝てめえはよく嘘を吐く奴だな、三藏が高野へ納める祠堂金を持

つてるといふから、懐を探して見たが、金なんぞ持つていやアし

ねえ、漸く紙入の中に二両か三両しかありやアしねえ」

作「冗談じやアねえぜ、そんな事があるもんか」

新「だって汝嘘を吐いたんだ」

作「なに己が嘘なんぞ吐くものか、此の野郎殺して置いて其の金を取って仕舞つたに違えねえ、そんな事をいつても駄目だ」

新「なに本当だよ」

作「死骸はどうした」

新「川の中へ投り込んでしまった」

作「嘘をいえ、戯けずに早くよこせよ、戯けるなよ」

新「なに戯けやアしねえ」

といわれ、作藏は少し怒気を含み、訛声を張上げ、

作「手前てめえの懐を改めて見よう、己だつて手伝つて、姐あねさんを斬ろうとする與助を己が蹴殺して、罪を造っているんだ、裸体はだかになつて見せろやい、出せつてばやい」

といいながら新吉に取とりすが継がる。

新「遣るよ、遣るから待てというに、戯けるな、放せ」

作「なんだ、人を欺だまして、金え出せよう」

新「遣るから待てよ、遣るというに、お賤、その柳行李やなぎごりの中に少し許ばかり金へえが這入へえつてるから出して作藏に遣んな、三藏の懐には無ねえんだから沢山たんとは遣れねえ、十両ばかり遣ろう」

と気休めをいいながら隙すきを覗ねらつてどんと作藏の腰を突くと、どぶりと用水へ落ちましたが、がば／＼と直すぐに上あがつて参ります

処を見て、ずーんと脳を割わり附けると、アツ、と行ってがば／＼と沈みましたが、又這上りながら、

作「斬りやアがったなア此の野郎」

と云う声がりーんとこだまがして川に響きました。尚なおも這上ろうとする処を、また一つ突きましたから、仰むけにひつくりかえりましたが、又這上つて来るのを無むやみ暗に斬り附けましたから、馬方の作藏は是迄の悪事の報いにや遂ついに息が止つたと見え、其の儘土手の草を攫つかんだなり川の中へのめり込んで仕舞いました。

賤「お前まア恐ろしい酷ひどい事をするねえ」

新「此の野郎はお饒舌しゃべりをする奴だから、罪な様だが五両でも八両でも金を遣るのは費ついでだから切殺して仕舞つたが、もう此こゝ処ゝにぐ



ずくしてはいられねえ」

賤「私はどうも殴れた処が痛くつて堪らないよ」

新「何んだか暗くつて判然分らねえ」

といいながら透して見ると、石だか土塊だか分りませんが、機

みとはいいながら打たれた痣は半面紫色に黒み掛り、腫れ上つて

いましたから、新吉がぞつとしたと申すは、丁度七年後の七月廿

一日の夜、お累が己を怨み、鎌で自殺をした彼の時に、蚊帳の傍

へ坐つて己の顔を怨めしそうに睨めた貌が、実に此の通りの貌だ

が、今お賤が思い掛ない怪我をして、半面変相になるといふの

も、飽までお累が己の身体に附纏つて祟をなす事ではないかと、

流石の悪党も怖気立ち、ものをも言わず暫くは茫然と立つて居

りましたが、お賤は気が付きませんから、

賤「お前早く人の来ない中うちに何処どこかへ往つて泊らなくつちやア  
いけない」

といわれ、漸よう々心付き、これからお賤の手を取つて松戸へ出  
まして、松新まつしんという宿屋へ泊り、翌日雨の降る中を立出たちいでて本  
郷山んごうやまを越し、塚前村にかゝり、観音堂に参詣を致し、凶はからずお  
賤が、実の母に出逢いまするお話は一息つきまして。

## 八十六

申続きました新吉お賤は、実に仏説で申しまする因縁で、それ

程の悪人でもございませんでしたが、為<sup>す</sup>る事<sup>な</sup>為<sup>す</sup>事に皆悪念が起り、人を害す様な事も度々<sup>たびく</sup>になります。扱<sup>さて</sup>二人は松戸へ泊り、翌廿二日の朝立とうと致しますると、秋の空の変わり易<sup>やす</sup>く、朝からどんどど抜ける程降りますから立つ事が出来ませんで、ぐず／＼として晴れ間を待つている中<sup>うち</sup>に丁度<sup>ひるすぎ</sup>午刻過<sup>ひるすぎ</sup>になつて雨が上りましたから、昼<sup>ひるはん</sup>飯<sup>はん</sup>を食べて其処<sup>そこ</sup>を立ちましたなれども、本街道を通るのも疵<sup>きず</sup>持<sup>も</sup>つ脛<sup>すね</sup>でございますから、却<sup>かえ</sup>つて人通りのない処<sup>ところ</sup>がよいといふので、是から本郷山を抜け、塚前村へ掛りました時分は、もう日が暮れかゝり、又吹掛<sup>ふつか</sup>け降<sup>ぶり</sup>に雨がざア／＼と降つて来ましたから、

新「ア、困つたもんだ」

と云いつゝ二三町参りますと傍かたわらの林の処ところに小さい門もんがまえ構かまの家うちに、ちらりと燈火あかりが見えましたから、

新「兎も角も彼処あそこへ往つて雨止あまやみをしよう」

といいながら門の中へ這入つて見ると、木連格子きつれごうしに成つてい  
 庵室あんしつで、村方の者が奉納したもののか、丹たんで塗つた提灯ていとうが幾つも掛  
 けてあります。正面しょうめんには正觀しょうくわん世音ぜおんと書いた額がくが掛けてありま  
 す。

新「お賤」

賤「あい」

新「こんな処ところに宿屋はなし、仕方がないから此こゝの御堂おどうで少し休  
 んで往いこう、お賽銭さいせんを上げたならよかろう、坊ぼうさんがいるだろう」

といいなながら格子の間からのぞく見て見ると、向むこうに本尊が飾つて有ります。正觀世音の像を小さいお厨ずし子の中へ入れてあるのですが、余り良い作ではありません、田舎仏師の拵こしらえたものでございましょう、なれ共金箔を置き直したと見え、ぴか／＼と光つて居ります。其の前に供えた三みつ具足は此の頃納まったものか、まだ新しく村名むらなが鏤ほり附けてあり、坊さんが畠から切つて来たものかきぎく黄菊に草花あがが上つて居ります、すると鼠ひとえものの単物ひとえものを着、腰こしごころも衣しごころもを着けた六十近い尼おとうみようが御燈明つを点けに参りましたから、新「少々お願いがございしますが、私わたくしども共ともは旅あまやみのもので此の通りの雨で難渋致しますが、どうか少々の間雨止あまやみを仕度したいと存じますが、お邪魔でも此の軒下を拝借願たい度いものでございしまする」

尼「はい、御参詣のお方でございますかえ」

新「いえ通り掛りの者ですが、此の雨に降りこめられました、  
 もっとあらたか  
 尤も有 駈な観音様だと聞いておりますからお参りもする積りで  
 ございまする」

尼「吹掛ふっかけ降ぶりですから其処そこに立つてお出でゞは嘸さぞお困りでござ  
 いますし、すぐ前に井戸もありますから足を洗つて此方こちらへ  
 上あがつて、お茶でも飲みながら雨止をなすつていらつしやいまし」

新「有難う存じます、えお賤、金か何か遣れば宜いいから上あがんね  
 え、じゃア御免なさい、誠に有難う存じます」

尼「其処そこに盥たらいもありますから、小さい方を持って往つて足を洗  
 つてお出でなさい」

新「へえ」

と是これから足を洗い、

新「誠に御蔭様で有難うございます」

と上りましたが、新吉もお賤もあつかましいから、いろり囲炉裡の側へ参り、

新「御蔭様で助かりました」

賤「誠にどうもとんだ御厄介さままでございました」

尼「おやく／＼御夫婦連づれで旅をなさいますの、藤心村まで出るとお茶漬屋ぐらいはありますが、此の辺には宿屋がございませんから定めてお困りでしょう、遠慮なしにもっと囲炉裡の側へお寄んなさい」

新吉は何程か金子を紙に包んで尼の前へ差出し、

新「是は誠に少し許りばかでございませうが、お蔭で助かりましたから、お茶代ではありませんが、どうかこれで観音様へお経でもお上げなすつて下さいまし」

尼「いえ〜それは決して戴きません、先刻さつき貴方は本堂へお賽銭をお上げなすつたから、それでもう沢山でございませう、御参詣の方は皆お馴染になつて、他村たそんのお方が来ても上り込あがんで、私のような婆ばあでも久しく話をして入らつしやいますのですから御心配なゆつくく寛りとお休みなすつて入らつしやいませう」

と云われ、新吉はお賤の顔を見ながら小声にて、

新「だって、きまりが悪わりいな、これはほんの私の心許りでご



ございますから、貴方あと後でお茶請ちやうけでも買つて下さいまし」

尼「いえ私は喰物たべものは少しも欲しくはありませんお賽銭あげを上たからもうお金などは宜ようございますよ」

新「そんな事をいわずに何卒どうか取つて置いて下さいまし」

尼「そうでございませうか、又氣になすつては悪いし、折角おの思お召ぼしめしですから戴おいて置おきましよう、日が暮くれると雨の降ふる時は

寒ひやうございませう、直じきに本郷山ほんきやうざんが側わきですから山やま冷やまびえがしますから、もつと其そのの麁そだ朶たをお焚くべなさいまし」

新「へい有難ありがたう存ぞんじます」

といいながら松葉まつばや麁朶そだたを焚くべ、ちよろ／＼と火が移うつり、燃もえ上ありました光ひかりで、お賤しんが尼にの顔かほを熟つく々／＼見ていました、

賤「おやお前はお母つかアじやないか」

## 八十七

尼「はい、どなたえ」

賤「あれまア何どうもお母アだよ、まア何うしてお前尼におなり  
だか知らないが、本当に見違えて仕舞つたよ、十三年あと後に深川の  
櫓下の花屋へ置おきざり去いにして往いかれた娘のお賤だよ」

と云われて尼は恟びつくりし、

尼「えゝ、まアどうも、誠に面目次第もない、私も先刻さつきから見  
た様な人だと思つてたが、  
顔かお貌かたちが違つたから黙つてたが、ど

うも実に私は親子と名乗ってお前に逢われた義理じゃありませんが、頭髪あたまを剃すって斯こんな身の上になつたから逢われますものゝ、定めて不実の親だと腹も立ちましようが、どうぞ堪忍して下さいあやまります」

賤「それでも能く後悔してね」

尼「此の通りの姿になつて、まア此の庵室に這入つて、今では毎日お経を上げた後あとでは観音様へ向つて、若い時分の悪事を懺悔してお詫び申していただけますけれども、中々罪は消えませんが、頭髪あたまを剃すって衣を着たお蔭で、村の衆しゆがお比丘びく様とか尼様とか云つて、種々いろく喰たべ物ものを持つて来て呉れるので、何どうやら斯こうやら命つなを繫ないでいるというだけのこと、此の頃は漸々ようく心附いて、十六の

時置去にしたお賤はどうしたかと案じていても、親子で有ありながら訪ねる事も出来ないというのは皆罰みんなばちと思つて後悔しているのだよ」

賤「どうもね本当に、それでも能くまア法衣ころもを着るころも了簡になつたね」

といいながら、新吉に向い、

賤「お前さんにも話をした深川櫓下の花屋の、それね……お前さんの様な親子の情じょうあい合あひのない人はないけれ共能くまア後悔してお比丘におなりだね」

尼「比丘なんぞになり度たい事はないが、是も皆私みんなの作つた悪事の罰ばちで、世話のして呉れ人てもなくなり、段々老る年とで病み煩いでもした時に看病人もない始末、あゝ何どうしたら宜よかろう、あゝ是

も皆罰みんなではないかと身体みんのきかない時には、真ほんに其の後悔ごんというものが出て来るものでのお賤おつれあい、して此のお方はお前の良おつれあい人あかえ」

賤「あゝ」

新「いつでも此女これから話は聞いていました、一人お母様つかさんがあるけれ共生いきしに死しにが分らない、併しかし丈夫な人で、若い氣象だったから達者たつでいるかとお噂は能くしますが、私は新吉と云う不調法ものでございますが、今から何分幾久しゅう願います」

尼「此のお賤は私の方では娘とも云えませんが、又親とは思いません、又親とは思いません、憎くつてねえ、あゝ実にお前に会うのも皆神みんな仏なのお叱りだと思つと、身を切られる程つらいと云う事を此の頃始めて

覚えました、云わない事は解りますまいが、私は此の頃は誰が来ても身の懺悔をして若い時の悪事の話を致しますと、遊びに来る老爺おじいさんや老婆おばあさんも、おゝゝそうだのう、悪い事は出来ないものだ云つて、又其の人達が若い時分の罪を懺悔して後悔なさる事があるから、私が懺悔をしますと人さまもそれに就つて後悔して下されば私の身の為にもなろうと思つて、逢う人毎ごとに私の若い時分の悪事を懺悔してお話を致します、私も若い時分の放蕩と云うものは、お賤は知りませんが中々一通りじゃありませんでしたよ」

新「お母つかさん、なんですか、お前さんは元もと何処どこの出のお方でございます、多分江戸子えどっこでしょう」

尼「いえ私の産れは下総こがの古河こがの土井さまの藩中の娘で、親父おやじ  
 は百二十石の高たかを戴たかいた柴田しばた勘六かんろくと申して、少々ばかりは宜よい  
 役を勤めた事もある身分でございましたからお嬢様育ちで居たの  
 ですが、身性みじょうが悪うございまして、私が十六の時家来うだきんの宇田金  
ごころう五郎という者と若気の至りで私通いたずらをし、金五郎に連れられて実  
 家を逃出し江戸へ参り、本郷菊坂に世帯しよたいを持つて居りましたが  
 丁度うまどしあの午年の大火事のあつた時、宝曆ほうれき十二年でございまし  
 たかね、其の時私は十七で子供を産んだのですが、十七や十八で  
こころしら児を拵こころしらえる位だから碌なものではありません、其の翌年金五郎は  
しょうかん傷寒しょうかんを煩わずらつて遂ついに亡なくくなりましたが、年端としはもゆかぬに亭主に  
 は死別しにわかれ、子持ではどうする事も出来ませんのさ、其の子供に

は名を甚藏と附けましたが、何なんに肖あやかつたのか肩の処に黒い毛が生えて、気味の悪い痣あざがあつて、私も若い時分の事だから気色が悪く、殊ことに亭主に死なれて喰い方にも困るから、菊坂下の豆腐屋の水船みずぶねの上へ捨兎すてこにして、私は直すぐ上総の東金へ往つて料理茶屋の働き女に雇われて居る内に、船頭の長八ちようはちという者とい、交情なかとなつて、また其処そこをかけ出して出るような事に成つて、深川相川町あいかわちようの島屋しまやと云う船宿を頼み、亭主は船頭をし、私は客の相手をして僅わずかな御祝儀を貰つて何どうやら斯こうやらやつて居る中に、私は亭主運がないと見え、長八がまた不ふ煩といついたのが原因もとで、是も又死別れ、どうする事も出事ないから心配して居ると、島屋の姐ねえさんのいうには、迎とてもお前には辛抱は出事まいが、



思ひ切つて堅氣にならないかと云われ、小日向の方のお旗下の奥様がお塩梅が悪いので、なかばたらき中な働らに住み込んだ処が、これでも若い時分は此こ様な汚んない婆ばアでもなかつたから、殿様のお手が附ついて、わずかうち僅わな中ちに出来たのは此のお賤せん」

## 八十八

尼こ「此こ娘れも世が世ならばお旗下のお嬢さまといわれる身の上だが、運の悪いというものは仕方がないもので、此のお賤せんが二歳ふたつの時、其のお屋敷が直しきに改易しきに成つてしまい、仕様がなから深川櫓下の花屋へ此の娘こを頼たのんで芸げい妓しやに出して、私の喰い物にしよ

うと云う了簡でしたが、又私が網打場の船頭の喜太郎きたろうという者といたずら私通をして、船で房州ぼうしゅうの天津へ逃げましたがね、それからというものは悪い事だらけき、手こそ下おろして殺さないでも口先で人を殺すような事が度々たびぐで、私の為に身を投げたり首を縊くつて死んだ男も二三人あるから、皆其の罰みんな ばちで今斯う遣つて居るのも、彼の時に斯ういう事をしたから其の報いだと諦め、漸々ようよく改心をしましたのき、仕方がないから頭髮あたまを剃そりこかし破れ衣を古着屋で買ってね、方々托鉢して歩いて居る中うち、此の観音様のお堂には留守居がないからお比丘さん這入つて居ないかと村の衆に頼まれるから、仮名附のお経を買つて心経しんぎょうから始め、どうやら斯うやら今では観音経ぐらいは読めるように成つたが、此の節は若い時分

の罪滅つみほろぼしと思ひ、自分に余計な物でもあると困る人にやつて  
 仕舞うくらいだから、何も物は欲しくありません、村の衆が時々  
 畠の物なぞを提げて来てくれるから、もう別にうまい物を喰たべ度い  
 という気もなし、只観音様へ向つてお詫事をして居るせえか、胸  
 中の雲霧うちくもぎりが晴れて善おもむに赴いたものだから、皆さんがお比丘様  
 くと云つて呉れ、此の観音様も段々繁昌して参り、お比丘さん  
 にお灸きゆうすを据えて貰まじないのお呪ないをして貰たいい度たいのといつて頼みに来るか  
 ら、私も何も知らないが、若い時分から疝せんき気きなら何処どこが能いいとか  
 齒の痛いには此処こゝが能よいとか聞きいてるから据まえて遣むると、向むかか  
 ら名を附つけて観音様の御夢想ごむそうだなぞと云つて、今ではお前さん何  
 不足ふそくなく斯こう遣まつて居ますが今日けふ図はからずお前達まへたちに逢あつて、私は尚な

お、観音様の持つて入らつしやる蓮はすの蕾つぼみで脊中を打たれる様に思  
 いますよ、まだ二人とも若い身の上だから、是から先さき悪い事は  
 なさらないように何卒どうぞ気をお付けなさい、年を老とると屹度きつとむく報つて  
 参ります、輪回りんね応おう報ほうという事はないではありませんよ」

と云われ新吉は打うち萎しれ溜息おを吐つきながらお賤に向い、

新「何どうだえお賤」

賤「私も始めて聞いたよ、そんならお母つかさんお前がお屋敷へ奉  
 公あがに上つたら、殿様のお手が附いて私が出来たといえ、其のお  
 屋敷が改易にさえならなければ私はお嬢様、お前は愛妾めかけとか何なん  
 とか云われて居るのだね」

尼「お前はお嬢様に違いないが、私は追出されてでも仕舞う位

の訝おかしな訳でね」

新「へい其の小日向の旗下とは何処どこだえ」

尼「はい、服部坂上の深見新左衛門様というお旗下でございま  
す」

といわれて新吉は恟びつくりし、

新「エ、そんなら此のお賤は其の新左衛門と云う人の胤たねだね」

尼「左様」

新「そうか」

と口ではいえど慄ぞつと身の毛がよだつ程恐ろしく思いましたは、

八年前ぜん門番の勘藏いまわが死まわ際に、我が身の上の物語を聞けば、己は深

見新左衛門の次男にて、深見家改易まえの前に妾まへが這入り、間もなく、

其の妾のお熊というものゝ腹へ孕やどしたは女の子それを産落すとまもなく家が改易に成つたと聞いて居たが、して見ればお賤は腹違いの兄弟であつたか、今迄知らずに夫婦に成つて、もう今年で足掛七年、あゝ飛んだ事をしたと身体に油の如き汗を流し、殊ことには又其の本郷菊坂下へ捨児すてごにしたというのは、七年以前、お賤が鉄砲にて殺した土手の甚藏に違いない、右の二の腕あぎに痣があり、それにべつたり黒い毛が生えて居たるを問ひし時、我は本郷菊坂へ捨児にされたものである、と私への話し、さては聖天山へ連れ出して殺した甚藏は矢張やつぱりお賤の為には血統ちすじの兄であつたか、実に因縁の深い事、ア、お累れいが自害のちの後此のお賤が又斯こう云う変相たうりになるといふのも、九ヶ年前ぜん狂死きやうじなしたる豊志賀たけしげの崇たかなるか、成程

悪い事は出来ぬもの、己は畜生ちくしやう同様兄弟同志で夫婦に成り、此の年としつき月互に連れ添つて居たは、あさましい事だと思ふと総毛立ちましたから、新吉は物をも云わず小さくかたまつて坐り、只ポロ／＼涙を落して居りました。

## 八十九

尼「とんだ面白くもない話をお聞かせ申したが、まアゆっ緩くりお休みなさい」

新「実に貴方の話を聞いて、私わっちも若い時分にした悪事を考えますと身の毛がよだちますよ」

尼「お前さん何をいうのです、若い時分などと云つてまだ若い盛りじやアないか、是から罪を作らん様にするのだ」

新「お母様つかさんわたしししもつ、私は真しんもつ以て改心して見ると生きては居られない程辛いから、私を貴方の弟子にして下さいな、外ほかに往どこき処ところもないから、お前様さんの側へ置いて下されば、本堂や墓場の掃除でもして罪滅しをして一生を送り度たいので、段々のお話で私わたしは悉すつかりたましい皆精神しんを洗い、誠の人になりましたから、どうか私をお弟子にして下さいまし」

尼「よくね、私の懺悔話を聞いて、一いち凶ちがずにア、悪い事をしたと云つて、お前さんのような事を仰しやるお方も有りますが、其の心持が永く続かないものですから、そんな事を云わなくつても、



只ア、悪い事をしたと思えば、其所そこが善いので」

新「お賤、お前とは不思議の悪縁と知らず、是まで夫婦になつて居たけれ共、表向盃をしたという訳でもないから、夫婦の縁も今日限りとし、己は頭髪あたまを剃すつて、お前のお母つかさんだが、己はお母さんとは思わない、己を改心させてくれた導きの師匠と思ひ、此のお比丘さんに事つかえて、生涯出家を遂とげる心に成つたから、もう己を亭主と思つて呉れるな、己もまたお前を女房とは思わねえから、何卒どうかそう思つて呉れ」

賤「おい何をいうんだ、極りを云つてるよ、話を聞いた時には一凶に悪い事をしたと思うが、少し経たつと直じきに忘れて仕舞うもの、一寸精進をしても、七日仕ようと思つても三日も経つともう宜か

ろうと喰<sup>た</sup>べるのが当<sup>あたりまえ</sup>前<sup>まえ</sup>じゃアないか」

新「今迄の魂の汚<sup>よご</sup>れたのを悉<sup>すつかり</sup>皆洗<sup>すす</sup>つて本心になつたのだから、もう己の傍<sup>そば</sup>へ寄<sup>よ</sup>つて呉<sup>く</sup>れるな」

賤「おや新吉さん何をいうのだよお前どうしたんだえ」

新「お前<sup>まえ</sup>はまア本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>に………どうして羽<sup>は</sup>生<sup>せい</sup>村<sup>むら</sup>なんぞへ来<sup>き</sup>たんだ  
なア」

賤「新吉さん、お前<sup>まえ</sup>何をいうのだ、来<sup>き</sup>たつて、あゝいう訳<sup>わけ</sup>で来<sup>き</sup>たんじゃアないか、それが何<sup>なに</sup>うしたんだえ」

新「お前<sup>まえ</sup>は何<sup>なに</sup>も解<sup>と</sup>らねえのだ、ア、厭<sup>いや</sup>だ、ふつゝ厭<sup>いや</sup>だ、どうぞ後<sup>あと</sup>生<sup>せい</sup>だから己<sup>おれ</sup>の側<sup>そば</sup>へ寄<sup>よ</sup>つてくんなさんな」

といわれてお賤<sup>せん</sup>は少しムツとした顔<sup>かほ</sup>付<sup>つ</sup>になり、

賤「あゝ厭ならおよしなさい、だが私もね、お前と二人で悪い事を仕度したくもないが、喰い方に困るものだから一緒にしたが、昨きのう日私が斯こんな怪我をして、恐ろしい顔になつたもんだから、他の女と乗り替える了簡で、旨くごまかして、私を此寺こゝへ押附おっつけ、お前はそんな事をいつて逃げる心だろう」

新「決してそういう訳じゃアないが、お前まえどうして女に生れたんだなア」

賤「何を無理な事をいうの、女に生れたつて、氣違じみ切つて居るよ」

新「お前に口を利かれても総毛立つよ」

尼「喧嘩をしてはいけません、私もお賤の為には親だから死しにみ

ず  
水を取つて貰い度たいが親子でありながらそうも云われず、又お  
賤も私の死水を取る気はありますまい」

新「まだ此のお賤は色気がある、此こんちきしょうめ畜生奴、本当にお前や  
己は、尻尾しっぽが生えて四つん這になつて腕わんの中へ面つっこア突込んで、肴さかな  
の骨でもかじる様な因果に二人とも生れたのだから、お賤てめえ手前も  
本当にお経でも覚えて、観音さまへ其の身の罪を詫る為に尼に成  
り、衣を着て、一文ずつ貰つて歩く気になんな、今更外に仕方が  
ないからよ」

賤「なんだね厭だよ、そんな事が出来るものか」

新「そう側へ寄つて呉れるなよ、どうか私の頭髪あたまを剃すつて下さ

い」

尼「まあ、三四日此寺こゝに泊っておいでなさい、又心の変るものだから、互に喧嘩をしないで、私はお経をあげに往つてくるから、少し待つておいでなさい」

新「私も一緒に参りましょう」

賤「おい新吉さんお前本当にどうしたんだえ、私は何うしてもお前の傍そばは離れないよ」

新吉はもう誠に仏ぶつ心しんと成りまして、

新「お前はまだ色氣の有る人間だ、己しんは真しんに改心する氣に成つた」

賤「本当にお前どうしたんだよ」

と云いながら取り纏すがるのを、新吉は突つき放はなし、

新「此ん畜生奴、己の側へ来ると蹴飛すぞ」

といわれお賤は腹の中にて、私の顔かおかたち貌かたちが斯んなに成つたも

のだから捨て、逃げるのだと思うから油断を致しませんで、此寺こゝ

に四五日居ります中に、因果のむくいうちは恐ろしいもので、惣右

衛門の倅惣吉が此の庵室を尋ねて参るといふ処から、新吉はもう

耐え兼ねて、草苜鎌を以て自殺致しますといふ、新吉改心の端いとぐ

緒ちでございませす。

## 九十

偕さて申し続きました深見新吉は、お賤を連れて足かけ五年間の

旅たびちゆう中の悪あくぎよう行ぎやうでございまする、不ふ凶と下した総そうの塚つか前まへ村むらと申しま  
 する処ところの、観くわん音いん堂だうの庵あん室しつに足あしを留とめる事ことに成なりました。是こゝは藤ふじ心しん村むら  
 の観くわん音いん寺じといいう真しん言ごん寺でらもち持ぢでございまして、一切いっけつの事ことは観くわん音いん寺じで  
 引ひ受うけて致いたします。村むらの取とり附つきにある観くわん音いん堂だうで、靈れい驗げん頭あたらたか著か  
 といいうので信しん心しんを致いたします者があつて種いろく々くの物ものを納なめまする  
 が、堂どう守もりを置おくと種いろく々くの悪あくい事ことをしていなくなり、村むら方かたのもの  
 も困こまつて居ゐる処ところで、通とほり掛かつた尼には身み性じやうも善よいといいう処ところから、  
 これを堂だう守もりに頼たのんで置おきました。是こゝへ新しん吉きちお賤せんが泊とりましたので、  
 比ひ丘きよ尼には前ぜん名みやうを熊くまと申まをす女にに似に気げない放はう蕩たう無む頼らんを致いたしました  
 悪あく婆ばでございまするが、今いまはもう改か心しん致いたしまして、頭あたま髪かみを剃そり落お  
 し、鼠ねずみの着き物ものに腰こし衣いを着きけ、観くわん音いん様さまのお堂だう守もりをして居ゐる程ほどの善ぜん心しん

に成りまして、新吉お賤に向つて、昔の懺悔話をして聴かせると、新吉が身の毛のよだつ程驚きましたは、門番の勘藏の遺言に、お前は小日向服部坂上の深見新左衛門という御旗下の次男だが、生れると間もなくお家改易になったから、私が抱いて下谷大門町へ立退いて育てたのだが、お家改易の時お熊という妾があつて、其の腹へ出来たは女という事を物語つたが、そんなら七ヶ年このかた以来夫婦の如く暮して来たお賤は、我が為にははらちがい異腹いもとの妹であつたかと、そうしん総身つめたから冷たい汗を流して、新吉が、あゝ悪い事をしたと真しむつ以て改心致しました。人は三十歳位に成りませんければ、身の立たないものでございます。お賤は二十八、新吉は三十になり、悪い事はこと悉く仕尽した奴だけあつて、善にも早く立帰りまして、



出家を遂げ、尼さまの弟子と思つて下さい、夫婦の縁は是限りと思つて呉れお賤てめえ汝も能く考えて見ろ、今までの悪業あくごうの罪障消滅つみほろぼしの為に頭を剃りこぼつて、何どの様な辛苦修行でもし、カン／＼坊主に成つて今迄の罪を滅ほろぼさなくつちやア往いく処へも往かれねえから、己の事は諦めて呉れとはいいましたが、汝は己の真実の妹だとはいい兼て居り、尼が本堂へ往けば、お熊比丘尼あつとの後に附いて参り、墓場へ往けば墓場へ附いて往く、齋ときが有ればお供を致しませうと出て参り、兎角にお賤そぼの傍へ寄るを嫌いますから、お賤は腹の中にて、思いがけない怪我をして半面変相になり、斯こんな恐ろしい貌かおに成つたから、新吉さんは私を嫌い、大方母おふくろ親が此の庵主に成つているから、私を此こゝ処へ置去りにして逃げる心で

はないかと、まだ色気がありますから愚痴許りぼかいって苦情が絶え  
ません。新吉の能く働きます事というものは、朝は暗い内から  
起きて、墓場の掃除をしたり、門前を掃いたり、畠へ往つて花を  
切つて参つて供えたり、遠い処まで餅菓子を買いに往つて本堂へ  
供えたり、お齋が有るとお比丘さんの供をして参り、仮名振の心  
経や観音経を買つて来て覚えようとして居りますのを見て、

尼「誠に新吉さんは感心な事では有るが、一時いちじに思い詰めた心  
はまた解ほれるもの、まあく気永ほにしているが宜よい、只悪い事を  
したと思えばまだお前なんぞは若いから罪滅しは幾らも出来まし  
よう」

と優しくいわれるだけ身に応えます。ちようど七月二十一日

の事でございませう、新吉は表の草を刈つて居り、お賤は台所で働いて居りまする処へ這入つて参りましたのは、十二三になる可愛らしい白色いろじろなお小僧さんで、名を宗観と申して観音寺に居りまする、此の小坊主を案内して来ましたは音助おとすけという寺男で、二人連づれで這入つて参り、

音「御免なせえ」

新「おいでなさい、観音寺様でございませうか」

音「上かみの繁右衛門殿の宅で二十三回忌の法事があるんで、己おらア旦那様も往くんだが、何どうか尼さんにもというので迎むけえに参めえつたのだ」

新「今尼さんは他わきのお齋よに招よばれて往つたから、帰つたらそう

云いましょう」

音「能く掃除仕やすねえ、墓の間の草ア取つて、まで跨えで向うへ出ようとする時にやアよくむこうずね向脛むを打ぶツつけ、とび飛つ返けえるようにいて痛えもんだが、わけ若えに能く掃除しなさるのう」

新「お小僧さんはお小さいに能く出家を成さいましたね、お幾くつ歳でございまする」

宗「はい十二に成ります」

## 九十一

新「十二に、善いお小僧さんだね、十一二位からあたま頭髪をす剃つて

出家になるのも仏の結縁けちえんが深いので、誠に善い御因縁で、通常なみの人間で居ると悪い事許りばかするのだが、斯う遣つて小さい内から寺へ這入つてれば、悪い事をしても高が知れてるが、お父様やお母つかさんも御承知で出家なすつたのですか」

宗「そうじゃありません、抛よんどころなく坊さんに成りました」

新「抛うちなく、それじゃアお父とつさんもお母さんも、お前さんの小さい中に死んで仕舞つて、身寄頼りもなく、世話の仕手もないのでお寺へ這入つたという事もありまするが、そうですか」

音「なにそういう訳じゃアなえが、此のまア宗観様ぐらえ憫かわえ然そうな人はねえだ」

新「じゃアお父さんやお母さんは無いのでございますか」

宗「はい、親父は七年前に死にました」

といいながらメソ／＼泣出しました。

音「泣かねえが宜えと云うに、いつでも父様や母様の事を聞かれると宗観様は直に泣き出すだ、親孝行な事だが、出家になるのは其処を諦める為だから泣くなど和尚様がよくいわっしやるが、矢張り直に泣くだが、併し泣くも無理はねえだ」

新「へえ、それは何ういう因縁に成つて居りますのです」

音「ねえ宗観様、お前の父様は早く死んだっけ」

宗「七年前の八月死にました」

音「それから此の人の兄様が跡をとつて村の名主役を勤めて居ると、其処へ嫁子が這入つて何んともハヤ云い様のなえ程心も

器量も善い嫁子だったそうだが、其所に安田八角か、え、一角と  
 か云う剣術遣が居て其の嫁子に惚れた処が、思う様にならねえも  
 んだから、剣術遣の一角が恋の遺恨でもってからに此の人の兄さ  
 んをぶつ斬つて逃げたとよ、其奴に同類が一人有つて、何んとか  
 云つたのう、ウン富五郎か、其の野郎が共謀になつて、殺したの  
 だ、すると此の人の宅の嫁子が假令何んでも亭主の敵い討たねえ  
 では置かねえつて、お武家さんの娘だけにきかねえ、なんでも  
 仇討ちをするつて心にもねえ愛想づかしをして、羽生村から離  
 縁状を取り、縁切に成つて出て、敵の富五郎を欺して同類の様子  
 を聴いたら、一角は横堀の阿弥陀堂の後の林の中へ来ているとい  
 うから、亭主の仇を討ちぶつ切るべえと思つて林の中へ這入つた

が、先方むこうは何なんてツても劍術の先生だ女ぐれえに切られる事はね  
 えから、憫然かわいそうに其の劍術遣えが、此の人の姉様あねさまをひどくぶつ切つ  
 て逃げたとよ、だから口惜しくつてなんねえ、子心にも兄さんや  
 姉さんあねの敵が討ぶちてえツて心易い相撲取が有るんだ：風車か：え  
 ：花車、そうかそれが、力量ちからアえれえから其の相撲取をたのむよ  
 り仕様がねえと、母親おふくろは年い老とつてるが、此の人をつれて江戸  
 へ往いくべえと出て来る途みちで、小金原こがねつばらの観音堂で以てからに塩あんべ  
 梅えが悪いくなったから、種々いろいろ介抱けえほうして、此の人が薬けい買いえに  
 往あつた後あとで母親おふくろさんを泥坊くびが縊くり殺し、路銀とを奪とつて逃げた跡へ、  
 此の人が帰けつてみると、母様かさまは喉のどを締められておつ死ちんでいた  
 もんだから、ワア〜泣なえてる処おへ己おア旦那あが通り掛り、飛んだこ



とだが、皆みんな因縁だ、泣くなと、兄あにさんと云い姉あねさんと云い母かゝさままでもそういう死しにざまをするというのは約束事だから、敵かたきうち討うちなぞを仕様といわねえで兎も角おちも己おちア弟子に成つて父とつさまや母さまや兄さん姉さまの追善供養を弔ともらつたが宜よかろうと勧めて、坊主になれといつてもならねえだから、和尚様も段々可愛がつて、氣永に遣つたもんだから、遂ついにには坊様になるべえとツつて漸ようやく去年の二月頭をおつ剃つつたのさ」

新「へエ、そうでございますか、何なんですか、此のお小僧さんのお宅うちは何方どちらでございますと」

音「え岡田郡ごおりか……岡田郡羽生村という処とこだ」

新「え、羽生村、へえ其の羽生村で父とつさんは何なんというお方でご

ございます」

音「羽生村の名主役をした惣右衛門と云う人の子の、惣吉さま  
というのだ」

と云われ新吉は大きに驚いた様子にて、

新「えゝ、そうでございますか、是はどうも思い掛けねえ事で」  
音「なんだ、お前さんめえ知ってるのか」

## 九十二

新「なに知って居やア仕ませんがね、私も方々旅をしたものだ  
から、何処どこの村方には何なんという名主があるかぐらいは知って居ま

す、惣右衛門さんには、水街道辺で一二度お目に掛った事がございますが、それはまあおいとしい事でございましたな」

というものゝ、音助の話たびを聞く度に新吉が身の毛のよだつ程辛いのは、丁度今年で七年前、忘れもしねえ八月廿一日の雨よの夜に、お賤あまつさが此の人の親惣右衛門の妾ていに成つて居たのを、己と密通し、剩あまつさえ病中に縊くびり殺し、病死の体で葬りはしたなれ共、様子をけどつた甚藏め奴は捨てゝは置かれねえとお賤あまつさが鉄砲うちころで打殺したのだが土手の甚藏は三十四年以前にお熊くまが捨児にした総領の甚藏でお賤が為には胤たねちが違ちがいの現在の兄を、女の身として鉄砲で打殺すとは、敵同士の寄合しらは、これも皆因縁だ、此の惣吉殿なまのいう事を聞けば聞く程脊筋しらはへ白刃しらばを当てられるより尚辛なまい、ア、悪い事は出来ない

ものだと、再び油の様な汗を流して、暫くは草刈鎌を手に持った  
なりもくねん黙然として居りました。

音「あんた、どうしたアだ、塩梅あんべえでも悪いわりか、酷ひどく顔色が善よく  
ねえぜ」

新「へエ、なアに私はまだ種いろく々罪があつて出家を遂とげ度たいと  
思つて、此の庵室に参つて居りまするが、此のお小僧さんの様に  
年もいかないで出家をなさるお方を見ると、本当に羨ましくなつ  
て成りませんから、私も早く出家になろうと思つて、尼さんに頼  
んでも、まだ罪障つみが有ると見えて出家にさせて呉れませんから、  
斯こう遣つて毎日無縁の墓を掃除すると功德になると思つて居りま  
するが、今日は陽氣の為か苦患くげんでございまして、酷く気色が悪い

ようで」

音「お前さんの鎌は甚く錆びて居やすね、研げねえのかえ」

新「まだ研ぎようを本当に知りませんが、此間お百姓が来た時聞いて教わったばかりでまだ研がないので」

音「己ア一つ鎌をもうけたが、是を見な、古い鎌だが鍛が宜いと見えて、研げば研ぐ程よく切れるだ、全体此の鎌はね惣吉どのの村に三藏という質屋があるとよ、其家が死絶えて仕舞ったから、家は取毀して仕舞ったのだ、すると己ア友達が羽生村に居て、此方へ来たときに貰っただが、汝使つて見ねえか宜く切るだが」

と云いながら差出す。

新「成程是は宜い、切れそうだが大層古い鎌ですね」

と云いながら取り上げて見ると、柄えの処えに山形に三の字の焼印  
がありますから驚いて、

新「これは羽生村から出たのですと」

音「そうさ羽生村の三藏と云う人が持つて居た鎌だ」

と云われた時、新吉は肝きもに応おえて恟びつくり致し、草刈鎌を握り詰め、

あゝ丁度今年で九ヶ年以前、累ヶ淵でおひさを此の鎌で殺し、続つゞい

てお累は此の鎌で自殺し、廻り廻つて今また我手へ此の鎌が来る

とは、あゝ神かみほとけ 仏わしが私の様な悪人をなに助けて置こうぞ、此の

鎌で自殺しろと云わぬばかりの懲こらしめかあゝ恐ろしい事だと思ひ詰

めて居りましたが、

新「お賤一寸来ねえ、お賤一寸来ねえ」

賤「あい、何んだよ、今往くよ」

と此の頃疎々しくされて居た新吉に呼ばれた事でございますから、心嬉しくずか〜と出て来ました。

新「お賤、此処においでなさるお小僧さんの顔を汝見覚えて居るか」

と云われお賤はげんな顔をしながら、

賤「そう云われて見ると此のお小僧さんは見た様だが何んだかさ張解らない」

新「羽生村の惣右衛門様のお子で、惣吉様といつて七歳か八歳だったろう」

賤「おやあの惣吉様ささま」

新「此の鎌は三藏どんから出たのだが、汝てめえのめくと知らずに居やアがる」

と云いながら突いきなり然お賤の髻たぶさを捉とつて引倒す。

賤「あれー、お前何をするんだ」

というも構わず手元へ引寄せ、お賤の咽喉のどぶえへ鎌を当てプツリと刺し貫きましたから堪たまりません、お賤は悲鳴を揚げて七顛八倒の苦しみ、宗觀と音助は恟びつくりし、

音「お前めえ気でも違つたのか、怖おっかねえ人だ、誰か来て呉れやー」と騒いで居る処へお熊比丘尼が帰つて参り、此の体ていを見て同じく驚きまして、



尼「お前は此間こないだから様子が訝おかしいと思つてた、変な事ばかりい  
つて、少したじれた様子だが、何なんだつて科とがもないお賤を此の鎌  
で殺すと云う了簡りょうかんになつたのだねえ、確しつかりしないじやいけない  
よ」

## 九十三

新「いえく、決して気は違ひません、正気でございますが、お  
比丘さん、お賤てめえも私わっちも斯こう遣つて居られない訳があるのでござい  
ます、お賤てめえは己を本当の亭主と思つてるが、汝は定めて口惜し  
いと思うだろうが、汝一人は殺さねえ、汝を殺して置き、己も死

なねばならぬ訳があるんだ、汝は知るめえが、あゝ悪い事は出来ねえものだ、此の庵室へ来た時にはお前さんの懺悔話を聞くと若え時に小日向服部坂上の深見という旗下へ奉公して、殿の手がついて出来たのがお賤だと仰しやったが、私も其の深見新左衛門の次男に生れ、小さい時に家は改易と成ったので町家で育ったもの、腹は違えど胤は一つ、自分の妹とも知らないで七年跡から互に深く成った畜生同様の兩人、此の宗観様のお父様は羽生村の名主役で惣右衛門というお方でしたが、お賤を深川から見受けして別に家を持たせ樂に暮させてお置きなすったものを私は悪い事をするのみならず、申すも恐ろしい事だが、惣右衛門様をお賤と私とで縊り殺したのでございます、さ、斯う申したら嘸お驚きでござ

ございましたよう、誰も知った者はありません、病死の積りで葬つて  
 仕舞つたが、人は知らずとも此の新吉とお賤の心には能く知つて  
 居りまする、畜生のような兄弟が斯うやつて罪滅しの為夫婦の縁  
 を切つて、出家を遂げようと思ひました処へ宗觀様がおいでなす  
 つて、これくと話を聞いて見れば迎も生きては居られません、  
 此の鎌は女房のお累が自害をし、私が人を殺めた草苺鎌だが、廻  
 り廻つて私の手へ来たのは此の鎌で死ぬといふ神 仏の懲めで  
 ございまするから、其のいましめを背かないで自害致しまする、  
 わたくしども  
 私 共 夫婦のものは、あなたの親の敵でございます、無悪い奴  
 と思 召ましようから何卒此の鎌でズタ／＼に斬つて下さいま  
 し、お詫びの為め一言申し上げますが、お前さんの兄さん姉さ

んの敵と尋ねる劍術遣の安田一角は、五助街道の藤ヶ谷の明神山に隠れて居るといふ事は、妙な訳で戸ヶ崎の葎よしずつぱり簧張で聞いたのですが、敵を討ちたければ、其の相撲取を頼み、其処そこへ往つて敵をお討ちなさい、安田一角が他の者へ話しているのを私わっちが傍で聴いて居たから事実たねを知つてるのでございます、お賤てまえ、汝と己が兄弟といふことを知らないで畜生同様夫婦に成つて、永い間悪い事をしたが、もう命の納め時だ、己も今直すぐに後あとから往くよ、お賤宗さん観様にお詫を申し上げな

賤「あい〜」

と血に染つたお賤は聴く毎ごとにそうであつたかと善に歸つて、よう〜と血だらけの手を合せ、苦しき息の下から、

賤「惣吉様さん誠に濟まない事をしました、堪忍して下さいまし、新吉さん早く惣吉さんの手に掛つて死度しにたい、あゝ、お母さんつか堪忍して下さい」

と苦しいから早く自殺しようと思つて、鎌の柄に取り纏すがるを新吉は振り払つて、鎌を取直し、我左の腹へグツと突き立て、柄つかを引いて腹を搔切かききり、夫婦とも息は絶たえ々々に成りました時に、宗觀は、宗「あゝ、お父さんとつを殺したのはお前たち二人とは知らなかつたが、思い掛けなくお父さんの敵が知れると云うのは不思議な事、また兄さんあにや姉さんあねを殺した安田一角の隠れ家を知らせて下され、斯こんな嬉しい事はありませんから決して悪いにくとは思いません、早く苦痛のないようにして上げ度たい」

と云いながら後うしろをふりかえると、音助はブル／＼して腰も立たないように成つて居ました。

宗「お父とつさんや兄さん姉さんの敵は知れたが、小金原の観音堂でお母つかさんを殺した敵はいまだに分らないが、悪い事をする奴の末始終は皆斯こういう事に成りましょう」

というのを最前から聞いていましたお熊比丘は、袖もて涙ぬぐを拭いながら宗觀の前へ来て、

尼「誠に思い掛けない、宗觀様さんお前まいさんかえ」

宗「へえ」

尼「忘れもしない三年跡の七月小金原の観音堂でお前まいさんのお母さんを縊くびり殺し、百二十両と云う金を取ったは此のお熊比丘尼

でございませすよ」

宗「エ、これは」

と宗観も音助も恟びつくり致しました。絶え／＼に成つていました新吉は血のりに染つた手を突き、耳を敬たつて聞いております。

尼「私も種々いろく悪い事をした揚句、一度出家はしたが路銀に困つている処へ通り合せた親子連の旅人りよじん小金原の観音堂で病に苦しんで居る様子だから、此の宗観様をだまして薬を買いに遣つた跡で、お母様を縊ふくろさんくびりころ殺したは此のお熊、私はお前様のお母様の敵だから私の首を斬つて下さい」

と新吉が持つていました鎌を取つて、お熊比丘尼は喉を搔切つて相果てました。其の内村の者も参り、観音寺の和尚様も来て、

何しろ捨<sup>すて</sup>ては置かれないと早速此の由<sup>よし</sup>を名主から代官へ訴え検死  
 済の上、三人の死骸は観音堂の傍<sup>わき</sup>へ穴を掘つて埋め、大きな墓<sup>はかじ</sup>  
 標<sup>るし</sup>を立てました。是が今世に残つております因果塚で、此の  
 血に染つた鎌は藤心村の観音寺に納まりました。扱<sup>さて</sup>宗観は敵の行  
 方が知れた処から、還<sup>げんぞく</sup>俗して花車を頼み、敵討が仕度いと和尚  
 に無理頼みをして観音寺を出立するといふ、是から敵討に成りま  
 す。

## 九十四

塚前村観音堂へ因果塚を建立致し、観音寺の和尚<sup>どうおん</sup>道恩<sup>ことく</sup>が尽く



此の因縁を説いて回向を致しましたから、村方の者が寄集まつて餅を搗き、大した施餓鬼せがきが納まりました。斯くて八月十八日施餓鬼祭まつりを致しますと、観音寺の弟子宗観が方丈の前へ参りまして、

宗 「旦那様」

道 「いや宗観か、なんじゃ」

宗 「私はお願いがありますが、旦那さまには永々ながく御厄介に相成りましたが、私は羽生村へ帰り度うとございます」

道 「ウン、どうも貴様は剃髮ていはつする時も厭がったが、出家になる因縁が無いと見える、何故羽生村へ帰り度たいか、帰った処が親も兄弟もないし、別に知るものもない哀れな身の上じゃないか、よし帰った処ひやくしやうが農夫ひやくしやうになるだけの事、実何じつどうしても出家は遂と

げられんか」

宗「はい私は兄と姉の敵が討ちとうございます」

道「これ、此間こないだもちらりと其の事も聞いたから、音助にも宜よう

宗観にいうてくれと言附けて置いたが、敵討という心は悪い心じや、其の念を断きらんければいかん、執念して飽くまでも向むこうを怨む

には及ばん、貴様の親父を殺した新吉夫婦と母おふくろ親を殺したお熊

比丘尼は永らく出家を遂げて改心したが、人を殺した悪事の報い

は自滅するから討つがものは無い、己おのれと死ぬものじやから其の念

を断つ処が出家の修行で、飽く迄も怨む執念を断きらんければいか

ん、それに貴様は幾歳いくつじや、十二や十三の小坊主が、敵手あいては剣術

遣じやないか、みすく返り討になるは知れてある、出家を遂げ

れば其の返り討になる因縁を免れて、亡なられた両親やまた兄嫂あによめの菩提を吊うが死なれた人の為じや、え」

宗「ハイ毎度方丈様さんから御意見を伺っておりますが、此の頃は毎晩く兄さんあにや姉さんあねの夢ばかり見ております、昨夜も兄さんと姉さんが私の枕元へ来まして、新吉が敵の隠家かくれがを教えて知つているに、お前が斯う遣つてべん／＼と寺にいてはならん、兄さん姉さんも草葉の蔭で成仏する事が出来ないから敵を討つて浮ばして呉れると、ありくと枕元へ来て申しました、実に夢とは思われません、してみると兄様あにさんや姉様あねさんも迷つていと思ひますから、敵を討つて罪作りを致しますようでございますけれども、どうかふたり両人の怨みを晴して遣り度うございます」

道「それがいかん、それは貴様の念が断きれんからじや、平常敵ふだんを討ち度たい、兄さんは怨んではせんか、姉さんも怨んではせんか、と思う念が重なるに依つて夢に見るのじや、それを仏書に睡眠と説いて有る、睡うつつは現眠うつつはねむる汝てまいは睡ねむつてばかり居るから夢に見るのじや、敵討の事ばかり思うているから、迷いの眠りじや、それを避ける処が仏の説かれた予かねていう教えじや、元は何も有りはせんものじや、真言の阿字を考えたら宜よかろう、此の寺に居て其の位な事を知らん筈は無ないから諦めえ」

宗「ハイ、何どうしても諦められませんが、永らく御厄介に成りまして誠に相済みません、敵討を致した上は出家に成りませんが、屹きつと度御恩報じを致しますから、どうかお遣まんなすつて下さいまし、

強<sup>た</sup>つて遣<sup>た</sup>つて下さいませんければお寺を逃出し黙<sup>もく</sup>つて羽生村へ歸<sup>かへ</sup>ります」

道「いや／＼そんならば無理に止めやせん、皆因縁じゃからそれも宜<sup>よろ</sup>かろう、やるが宜<sup>よろ</sup>かろうが、確<sup>しつ</sup>かりした助太刀を頼<sup>たの</sup>むが宜<sup>よろ</sup>い、先<sup>さき</sup>方は立派な劍術遣<sup>た</sup>い、殊<sup>こと</sup>に同類も有<sup>あ</sup>ろうから」

宗「はい親父の時に奉公をしたもので、今江戸で花車という強<sup>た</sup>いお相撲さんが有<sup>あ</sup>りますから。其の人を頼<sup>たの</sup>みます積<sup>た</sup>りで」

道「若<sup>も</sup>し其の花車が死<sup>し</sup>んでいたら何<sup>ど</sup>うする、人間は老<sup>ろう</sup>少<sup>しょう</sup>不<sup>ふ</sup>定<sup>てい</sup>じゃから、昨<sup>きのう</sup>日死<sup>し</sup>にましたといわれたら何<sup>ど</sup>うする、人間の命<sup>いのち</sup>は果<sup>は</sup>敢<sup>か</sup>ないものじゃが、あゝ仕<sup>し</sup>方がない、往<sup>い</sup>くなら往<sup>い</sup>けじゃが、首尾好<sup>すべ</sup>く本懐<sup>ほんくわい</sup>を遂<sup>す</sup>げて念<sup>ねん</sup>が断<sup>き</sup>れたらまた会<sup>あ</sup>いに來<sup>き</sup>てくれ」

と実子のような心持で親切に申します。

宗「これがお別れとなるかも知れませんが、誠にお言葉を背きまして相済みません」

道「いや／＼念が断れんと却つて罪障になる、これは小遣に遣るから持つて往け」

と、三年此の方世話をしたもののゆえ実子のように思いまして、和尚は遣りともながるのを、強つてというので、音助に言付け万事出立の用意が整いましたから立たせて遣り、漸く五日目に羽生村へ着致しましたが、聞けば家宅は空屋に成つてしまい、作右衛門という老人が名主役を勤めており、多助は北阪の村はずれの堤下に独身活計をしているというから遣つて参り、

宗「多助さんく、多助爺じいやア」

多「あい、なんだ坊様か、今日は些ちとべえ志が有るから、銭い呉れるから此方こっちへ這入へえんな」

宗「修行に來たんじゃアない、お前は何時いつも達者で誠に嬉しいね」

多「誰だく」

宗「はいお前忘れたかえ、私わしは惣吉だアね、お前の世話に成つた惣右衛門の忪の惣吉だよ」

## 九十五

多「おい成程えかくなつたねえ、まア、坊様に成つたアもんだから些ちつとも知んねえだ、能くまア来たあねえ」

と嬉し涙に泣き沈み漸ようく々涙を拭いながら、

多「あゝ三年前にお前さまが宅うちを出て行く時はせつなかつたが、敵討だというから仕方がねえと思つて出して上げたが後あとで思え出しては泣いてばかりいたが、作右衛門様の世話でもつて、何どうやら斯こうやら取附いて此こ処ちにいやすが、お前様を訪ねてえつても訪ねられねえだが、お母様ふくろさんは小金原で殺されてからお前様が坊様に成つたという事ア聞いたから、チョツクラ往きてえと思つても出られねえので無沙汰アしやしたが、能くまア来て下せえやした、本で当かに見違えるような大でく成つたね」



惣「爺じいやア、私は和尚様に願ひ無理に暇ひまを戴いて、兄さんや姉さんの敵が討ちたくつて来たが、お父様とっさんお母様つかさんの敵は知れました」

とお熊比丘尼の懺悔をば新吉夫婦が細こまやかに聞き、遂に三人共自殺した処から、村方の者が寄集まつて因果塚を建立した事までを話すと、多助も不思議の思いをなして、是から作右衛門にも相談の上敵討に出ましたが、そういう処に隠れて泥坊をしているからには同類も有ろうから、私とお前さんと江戸へ往つて、花車たよ関を頼もうと頓やがて多助と惣吉は江戸へ遣つて参り、花車をたよ使ひて此の話を致して頼みました。此の花車という人は追々おいく出世をして今では二段目の中央ななかばまで来ているから、師匠の源氏山も出したがりませんのを、義よつに依てお暇いとまを下さいまし、前に私が奉公をした

主人の惣右衛門様の敵討をするのでございますからと、義に依つての頼みに、源氏山も得心して芽出度出立いたし、日を経て彼の五助街道へ掛りましたのが十月中旬過ぎた頃もう日暮れ近く空そらあ合いはドンヨリと曇っております。三人はトツトと急いで藤ヶ谷の明神山を段々なだれに登つて参りますると、樹本生おいしげ茂り、昼でさえ薄暗い処殊ことには曇っておりますから漸ようく々足元が見えるくらい、落葉おちばの堆うずれずもている上をザク／＼踏みながら花車が先へ立つて向むこうを見ると、破やれ果てたる社殿が有つてズーツと石の玉垣が見え、五六本の高い樹きの有る処でポツポと焚火たきびをしている様子ゆえ、彼処あそこらが隠れ家ではないかと思ひながら傍わきの方を見ると、白いものが動いておりますが、なんだか遠くで確しかと解りません。

花「多助さん確かりしなせえ」

多「もう参つたかねえ、私はね劍術も何にも知んねえが此の坊様に怪我アさせ度くねえと思うから一生懸命に遣るが、あんたア確かり遣つて下せえ」

花「私イ神明様や明神様に誓を立てゝるから、私が殺されても構わねえが、坊様に怪我アさせ度ねえ心持だから、お前度胸を据えなければいかんぜ」

多「度胸据えてる心持だアけんども、ひとりでに足がブルブル顫えるよ」

花「気を沈着けたが好え」

多「氣イ沈着ける心持で力ア入れて踏張れば踏張る程足イ顫え

るが、何どういうもんだろう、私わしイ斯こんなに身体顫ふるつた事アねえ、  
 四年前おこりに瘡かさイふるつた事が有あつたがね、其の時は幾いくら上から布団  
 をかけても顫ふるつたが、丁度其の時のように身体が動くだ」

花「ハテナ、白い物が此方こつちへころがつて来るようだが何なんだろう、  
 多助さん先へ立つて往いきなよ」

多「冗談冗談いっちゃアいけねえ、あの林とこの処とこに悪漢わるものが隠かくれてい  
 るかも知れねえから、お前めえさん先へ往いつてくんねえ」

と云いながら、やがて三人が彼かの白い物の処とこへ近ちか附ついて見ると、  
 大杉おおいの根元とこの処とこに一人の僧そうが素裸すつぱだか体かにされて縛しばられていまして、  
 傍わきの方に笠かさが投げ出して有あります。

## 九十六

花「おい多助さん」

多「え」

花「かわいそう憫然に、坊様だが泥坊に縛られて災難に逢しあわやツたと見え素裸体だ」

多「なにしても足がふるえて困る」

花「そう顫えてはいけねえ」

と云いながら彼かの僧に近づき、

花「お前さんく泥坊のために素裸体にされたのですか」

僧「はい、災難に逢いました、木きおろし風まで参りまする途中でも

つて馬方が此道こゝが近いからと云うて此処こゝを抜けて参りますと、悪わる  
るもの漢まが出ましたものじゃから、馬方は馬を放り出した儘逃しまげて了  
 うと、私は大勢おほいに取巻かれて衣服きものを剥はがれ、直すぐ逃がして遣ると  
こつち此方の勝手が悪い、己おひら達が逃げる間此処こゝに辛抱しんぱうしていろと申し  
 て、私は此の木の根方へ縛り附けられ、何どうも斯こうも寒くつて成  
 りません、お前まへさんたちも先へ往くと大勢で剥はがれるから、後あとへ  
 お返りなさい」

花「なにしろ縄を解いて上げましょう、貴僧あなたは何処どこの人だえ」  
 僧「有難うございます、私は藤心村の観音寺の道恩というもの  
 です」

と聞くより惣吉は打驚き駈けて参り、

惣「え、旦那様か、飛んだ目にお逢いなされました」

道「おゝゝ宗観か、お前此の山へ敵討に来たか」

惣「はいお言葉に背いて参りました、多助や、私が御恩に成つた観音寺の方丈様だよ」

多「え、それはマア飛んだ目にお逢いなせえやしたね」

道「酷ひどい事をする、人の手は折れようと儘、酷く縛つて、あゝ痛い」

と両腕を摩さすりながら、

道「中々同類が多おおせい勢居いる様子じゃから帰るが宜よい」

花「なにしても風を引くといけないから、それじゃア斯こうと、

私の合羽に多助様さんお前の羽織を和尚様さまにお貸し申そう、さア和尚

様、これをお着なさい、それから多助様さんこゝ此処こゝを下りて人家のある  
処まで和尚様さんを送つてお上げなさい」

多「己此処まで惣吉様の供をして、今坊様さまを連れて山を下りて  
は四年五年心しんぺえぶ配打つた甲斐けえがねえ」

花「惣吉様さまが永らく御厄介に成つた方丈様だから連れてつて上  
げなさいな」

多「敵も討ぶたねえで、己山を下りるといふ理りえい合はねえから己おらア  
往かねえ、坊様に怪我アさせてはなんねえから」

花「そんな事をいわずに往つておくんなせえ」

惣「爺じいやア、どうか和尚様をお送り申してお呉れ、お前が往か  
なけりやア私が送り申さなければならぬのだから、往つておく



れな」

多「じやア何うしても往くか、己此処まで来て敵も討たずに後へ引返すのか、なんだッて此の坊様はおつ縛られて居たんだナア」とブツ／＼いいながら道恩和尚の手を引いて段々山を下り、影が見えなくなると樹立の間から二人の悪漢が出て参り、

甲「手前たちは何だ」

花「はい私共は安田一角先生が此方にお出なさると聞きまして、お目にかゝり度く出ましたもので」

乙「一角先生などという方はおいではないワ」

花「私共はおいでの事を知って参りましたものですが、一寸お目にかゝり度うございます」

乙「少し控えて居ろ」

と二人の悪漢は、互に顔を見合せ耳こすりして、林の中へ這入つて、一角に此の由を告げると、一角は心の中にて、己の名を知っているのは何奴か、事に依つたら、花車が来たかも知れないと思うから、油断は致しませんで、大刀の目釘を霑し、遠くに様子を伺つて居りますと、子分がそれへ出て、

甲「やい手前は何者だ」

## 九十七

花「いえ私は花車重吉という相撲取でございしますが、先生

は立派なお侍さんだから、逃げ隠れはなさるまい、慥たしかに此こゝ処ところに  
 いなさる事を聞いて来たんだから、尋常じんじょうに此こゝの惣あに吉きち様の兄あにさんの  
 敵てきと名のつて下くだせいで、討うつ人は十二三じふにさんの小坊せうぼう主しゅ様さんだ、私は義ぎに依よ  
 って助すけ太た刀とうをしに参まつたものだから、何なに十じゅう人にんでも相あ手てになるから  
 出いてお呉くれんなせいで

といわれ、悪わる漢ものどもは、あゝ予かねて先生せんせいから話わのあつた相あ撲う取と  
 は此こゝ奴やつだなど思おもいましたから、直すぐに一角いっかくの前まへへ行いきまして此こゝの事こと  
 を告つげました。一角いっかくも最さい早そう観く念ねんいたしておられますから、

安やす「そうか、よいゝ、手前てまへ達たち先まへへ出いて腕うで前まへを見みせてやれ」

といわれ、悪わる漢ものどもも相あ撲う取とだから力ちからは強ちやうかろうが、劍けん術じゆつは知し  
 るめえから引ひ包つんで餓う鬼き諸しよ共ども打うつてしまえ、とままず四よ人にんばかり

其処へ出ましたが、怖いと見えまして、

甲「尊公先へ出る」

乙「尊公から先へ」

丙「相撲取だから無闇にそういう訳にもいかない、中々油断がならない、尊公から先へ」

丁「じゃア四人一緒に出よう」

と四人均しく刀を抜きつれ切つてかゝる、花車は傍に在つた手頃の杉の樹を抱えて、総身に力を入れ、ウーンと揺りました、人間が一生懸命になる時は鉄門でも破ると申すことがございます。花車は手頃の杉の樹をモリくくくと拗り切つて取直し、満面朱を灌ぎ、搦み殺さんず勢いにて、

花「此の野郎ども」

といいながら杉の幹を振上げた勇氣に恐れ、皆近寄る事が出来ません。花車は力にまかせ杉の幹をビュウ／＼振廻し、二人を叩き倒す、一人が逃げにかゝる処を飛込んで打倒し、一人が急いで林の中へ逃げ込みますから、跡を追って参ると、安田一角が野袴ぼかまを穿き、長い大小を差し、長髪に撫で付け、片手に種ヶ島の短銃たんづゝに火繩を巻き附けたのを持つて、

安「近寄れば撃つてしまふぞ、速すみかに刀を投出して恐れ入るか、手前てめえは力が強くても此れでは仕方があるめえ」

と鼻の先へ飛道具を突き附けられ、花車はギョツとしたが、惣吉うしろを後へ囲んで前へ彼の杉の幹を立てたなりで、

花「卑怯だく」

と相撲取が一生懸命に呶鳴る声だから木霊致してピーンと山こだま「  
やまあ  
間に響きました。」

花「手前てめえも立派な侍じゃアねえか、斬り合うとも打合うともせえ、飛道具を持つとは卑怯だ、飛道具を置いて斬合うとも打合うともせえ」

一角もうっかり引金を引く事が出来ませんから威おどしの為に花車の鼻の先へねら覗いを付けておりますから、何程力があつても仕様がありません、進むも退ひくも出来ず、進退谷きわまつて花車は只ウーンくと呻うなっております。多助は彼の道恩を送つていきせき帰つて来ましたが、此の体ていを見て驚きましてブルブル顫えております。

すると天の助たすけでございますか、時雨空しぐれぞらの癖くせとして、今まで霽はれていたのが俄にわかにドツトと車軸を流すばかりの雨に成りました。そう致しますと生おいしげ茂もった木葉このはに溜ためった雨水が固かたまつてダラくと落おちて参まつて、一角の持もつていた火繩かじに当あつて火が消えたから、一角は驚おどいて逃げにかゝる処ところを、花車は火が消えればもう百人力と、飛び込んで無茶苦茶に安田一角を打据うちすえました、これを見た悪わるもの漢かんどもは「それ先生が」と駈出かけだして来きましたが側わきへ進すすみません、花車は傍かたえを見向みむかき、

花「此の野郎共傍そばへ来きやアがると捻ひねり潰つぶすぞ」

という勢いきほいに驚おどいて樹立こたちの間へ逃げ込んで仕舞しまいました。

花「サア惣吉様さん遣やつてお仕舞しまいなせえ、多助様さん、お前助太刀まへすけじ

やアねえか確りしなせえ」

惣吉は走り寄り、

惣「関取誠に有難う、此の安田一角め兄さん姉さんの敵思い知つたか」

多「此の野郎助太刀だぞ」

と惣吉と兩人ふたりで無茶苦茶に突くばかり、其のうち一角の息が止ると、二人共がつかりしてペタ／＼と坐つて暫らくは口が利けません。花車は安田一角の髻たぶさを取り、拳を固めてポカ／＼打ち、

花「よくも汝われは恩人の旦那様を斬りやアがった、お隅様さんを返かえり討うちにしやアがったな此の野郎」

といいながら鬢びんの毛を引抜きました。同類は皆ちり／＼に逃



げてしまったから、其の村方の名主へ訴え、名主からまたそれ／＼へ訴え、だん／＼取調べになると、全く兄姉あにあねかたきうちの仇討に相違ないことが分り、花車は再び江戸へ引返し、惣吉は十六歳の時に名主役となり、惣右衛門の名を相続いたし、多助を後見といたしました。花車が手玉にいたしました石へ花車と彫り付け、之を花車石と申しまして今に下総の法恩寺中ちゆうに残りおります。是で先まずお芽出度めでたく累ヶ淵のお話は終りました。

(塙小相英太郎速記)



## 青空文庫情報

底本：「定本 圓朝全集 卷の一」近代文芸・資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年6月10日発行

底本の親本：「圓朝全集卷の一」春陽堂

1926（大正15）年9月3日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返し記号は原則としてそのまま用いました。同の字点「々」と同様

に用いられている二の字点（漢数字の「二」を一筆書きにしたよ  
うな形の繰り返し記号）は、「々」にかえました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此  
の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ  
「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落を  
あらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にか  
えました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-  
86）を、大振りにつくっています。

※「\*」は注釈記号です。その内容は底本では上部欄外に書かれています。

※表題は底本では、「真景《しんけい》累《かさね》ケ一淵《ふち》」となっています。

入力：小林繁雄

校正：かとうかおり

2000年4月18日公開

2016年4月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 真景累ヶ淵

三遊亭圓朝

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 鈴木行三校訂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>